

椰子樹 150号記念号

1977



コロニア歌人の宮中歌会始入选歌

一九六九年以降

題 「星」 佳作 小林憲市

聖ジオンの祭の炎しづまりて

灯風船（バロン）のかげに十字星見ゆ

一九六九年

題 「家」 佳作 瀬古義信

日本に留学せし娘がふるさとの

生家うつして便りくれけり

一九七一年

題 「山」 入選 遠山実

燃えつづく山にはひりて黒人と

声合せつつ火止め切りゆく

一九七二年

題 「山」 佳作 堀田 栄

ふるさとの山の名つけて住み古りぬ

コーヒー樹海の中の小山に

一九七二年

題 「子ども」 佳作 森谷信夫

小鳥罾（アラプーカ）かけゐる子らに声かけて

かつては住みし村に入りゆく

一九七三年

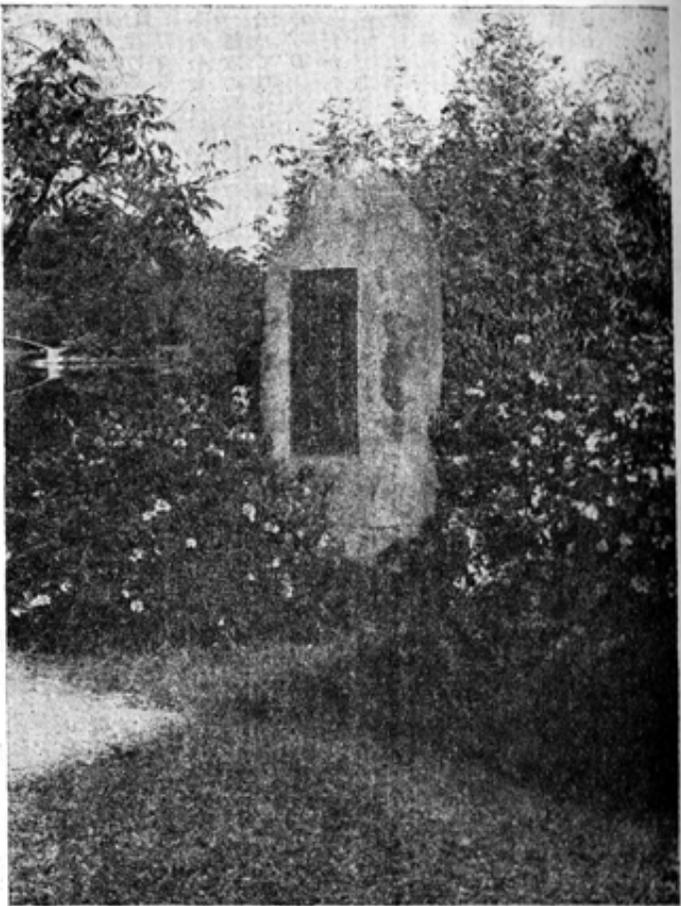
題 「朝」 佳作 瀬古義信

日本へ多量に輸出するといふ

大豆蒔きゆく朝もやの中

一九七四年

発刊の辞……………徳尾溪舟……………	6
椰子樹の思い出……………瀬崎涛声……………	9
コロニア短歌界展望……………武本由夫……………	12
記念号作品集……………	33
女性時代への移向……………井本惇……………	81
椰子樹概史……………米沢幹夫・中江克己……………	98
「椰子樹」の相聞歌考……………洒井繁一……………	139
物故歌人作品集……………川原比露思……………	158
記念号に寄せる随想集……………	173
開沼貴代 森谷風男 西田季子 本庄研一 安部栄子 中井益 代 水本すみ子 植村かず	
岩波菊治賞作品……………陣内しのぶ……………	201
コロニア女流歌人の動向……………安良田済……………	221
コロニアの男性短歌……………弘中千賀子……………	237
全伯短歌大会の歩み……………全伯地方短歌大会……………梅崎嘉明 247	
新聞歌壇が辿った跡(補遺)……………清谷益次	266
詩・現代風相聞歌……………大浦文雄……………	284
コロニア歌人歌集抄……………小笠原富枝……………	285
地方歌会の動静……………	296
八卷耕土、佐藤一英、遠藤浩	
加藤操、森谷風男、高橋よしみ	
明治記念総合歌会入選歌……………大場時夫	320
椰子樹を動かした人々……………中江克己……………	344
あとがき……………米沢幹夫	359
表紙……………富岡清治	



こふるさとの信濃のくにのやま川は
こころにしみてとはにおもはむ

菊
治

サンパウロ市イピラブエラ公園内
日本館の池畔にたつ岩波菊治歌碑

ふるさとの信濃のくにのやま川は

こころにしみてとはにおもはむ

菊治

椰子樹百五十号記念号発刊の辞

穂尾 溪舟

—やまと歌は人の心を種として、よろずの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思う事を、見るもの聞くものにつけていい出せるなり。花に啼く鶯、水に住むかわずの声聞けば、生とし生けるもの、いずれか歌をよまざりける。

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあわれと思わせ、男、女の中をもやわらげ、猛きもののふの心をも慰むるは歌なり—古今集より

短歌の原始型、やまと歌は日本の創世記「古事記」の神代時代から見え、それ以前にもあつた事と思われる。

云つて見れば、短歌は日本人発生と共に、その胎内に宿り、止むに止まれぬ感情の発露の叫びとして今日迄幾千年、日本人の行く所、歌われ続けた詩である、と云えよう。

だから我々がブラジルに移民して七十年、大森林の樹海を切り倒し、苦難の労働、病魔と闘い、幾多の犠牲を払い、非文化的な環境の中でのサペー小屋暮らしの厳しい開拓生活の明け暮れの中でも、常に短歌は歌われ続けて来た。

それは、移り来て直面する植民地の厳しい現実、満たされぬ不満な生活と孤独感又限り無い郷愁等、そうした事に対する止むに止まれぬ心の叫びとして歌われ、或は慟哭し、或は勇躍しつつ、日本移民は開拓の芹をふるい続けて来た。

コロエア歌壇には所謂インテリと呼ばれる様な歌人は割合少なく、次第に老い行く老移民、小学教育も満足に終らず移民した準二世、ブラジルの寺小屋式の日本語教育しか受けなかった純二世、そうした層の人達に依り、コロニア短歌の灯りは、あのひどかった、第二次世界大戦中の日系コロニア暗黒時代にも消える事なく灯し続けられて来た。

勿論その間幾多の危機はあったがコロニア歌人達は良くそれを克服して来た。そして現在日系コロニアの安定と共に、コロニア短歌も燎乱とした繁栄を示して居る。

比の時、我等の椰子樹誌はその第百五十号を刻み、別冊百五十号記念号を発行出来る事は、お互い同慶の至りである。

本誌が「短歌の流派巧拙を問わず短歌研究の場」を目的として発刊が企画され、その第一号を刻んだのは一九三八年十月である。思えば丁度四十年昔の事である。此の永い年月の間に、本誌もまたコロエア短歌と同じ様に、経済的、時局的理由等で、何回もその発行の危機に遭遇して居る。

此の間歌壇から逸脱して行った同好者又物故した歌人達も沢山あった。一番の危機は矢張り、邦字紙当たりが相次いで廃刊して行った、第二次世界大戦勃発前後のあの厳しい日本語取締まり時代と思われる。椰子樹も当然休刊して、またの好い日を待つ事となり、その最終刊数十冊を奥地誌友に発送す可く、聖市中央郵便局に抱えて行き、郵便箱に放り込むと共に、誰かに尾行されて居るか、行動を注目されて居る様な恐怖感に馳られ、何回も後を振り返り振り返り足早に立去り乍らも、或る大事を成し遂げた、と

云う様な悲壮感と感激を持った事を私は今でも懐かしく思い出す。

又戦時中はコロニア各地の歌会が殆んど逼塞して居た時、聖市近郊モジ・ダス・クルーゼスに居住して居た、武本由夫君や則近正義君等が付近の同志に呼びかけ、歌会を持つと共に、細々乍ら発行して居た歌誌「林泉」が終戦後椰子樹再刊につながった事も思い出される。

椰子樹発行栄枯盛衰の四十年の年輪の跡を辿って見れば、お互い感慨無量の思いは尽きないが、それにしても好くぞ此処迄持ちこたえ、戦前以上のコロニア短歌隆昌時代を迎えつつ、椰子樹百五十号記念特集号発刊の機運を得た事をお互い祝福し度い。

それにしても此の際我々が特筆銘記す可き事は、椰子樹はその初号から現在の百五十号迄の四十年間、その編集発行が常に中央一部篤志家達の犠牲的無報酬奉仕に依って為されて来、今後もまたそうした人達の厚意的サービスに依存しつつ椰子樹は号を刻んで行くであろう事である。

本当に感謝す可き有難い事である。そうした人達の協力が無かったら、本誌は到底今日迄発行を続け得られなかつたであろうと考えられるからである。勿論、これには椰子樹誌友全部が、何時の時でもそうした人達を全面的に信賴支持し、アポイアして来たからだ、と云う事も忘れられない事である。

今此の椰子樹百五十号記念特集号発刊に当たり、自分の仕事を持ち乍ら、今も尚黙々として椰子樹発行に奉仕される諸氏に椰子樹誌友諸氏と共に深甚なる謝意と敬意を表し度い。

又此の四十年の間に先没され、今日の此の喜びを共にする事の

出来ない、本誌創刊に功労のあった、坂根嗟蛾元総領事、岩波菊治先生その他の物故歌友の冥福を心から祈り、併せて「椰子樹」と「コロニア歌壇」が今後ますます発展して行く事を信じつつ、椰子樹百五十号記念特集号、発刊の辞とする。

椰子樹の思い出

―百五十号記念号によせて―

瀬崎涛聲

「椰子樹」は、この六月号を以て百五十号に達する。年月にすれば四十年に近く、古い同行の友の多くが亡くなっており、さびしい今日であるが、「椰子樹」が四十年近くも生きのびたことは、まことに芽出たいことである。

私と「椰子樹」とのつながりは創刊号からである。私が三角ミナスのアンテノル・ドワルテ耕地で、米作をしていた昭和十三年の某月ブラジル時報短歌欄の選者であった徳尾溪舟氏から突然封書が届いて、このたび坂根総領事、椎木文也（正金銀行リオ支店長）両氏の肝入りで、全伯の同好者を糾合して、短歌雑誌を発行することになったから君を同人に推輓する、承諾せよとのことであつた。一面識もない徳尾氏による同人推薦のことは一寸わけが

あった。それは―私は昭和八年に渡伯したが、その数年前から前田夕暮を源流とする短歌誌「詩歌」の会員で、渡伯後も作歌をつづけ、ブラジル時報の短歌欄に投稿していたからである。

「椰子樹」は、昭和十三年十月創刊された。いまそれを取り出してみると、誌名は「椰子樹」で毛筆書（坂根氏の筆）で裏紙の左側上あがりにどっしりと位置している。

別にきわだったスローガンはなく、『流派巧拙をとわずガツチリ手を組んで勉強しあおう』と言うことになっている。「椰子樹」は選歌制で、その選者には岩波菊治、阿部青杜の両氏あたり、編集著は武本由夫氏になっている。作品は、岩波菊治氏のものが巻頭で、椎本文也、花瀬群濤（坂根氏）阿部青杜氏の順で各十首ずつ並んでいる。

私の作品は、選者の手を経たもので、阿部青杜氏の推薦で「抽雲集」の集頭にあり、丘の枯木という題名で、

来かかりし丘の枯木に啄木鳥のほとほと音を立ててゐる朝

外十三首収載されている。十三首の中に、「風寒き烟曇りのひるさがりおどろおどろと雷の鳴る」というのがあるが（烟曇り）と誤植されていて実にかんである。

この「抽雲集」には、行方正治郎、池田重二、武本由夫、徳尾溪舟、葛西妙子、開沼貴代、樋田美沙子、坪内広代、木村茅里、不二山南歩氏らの作品がずらりと並んでいて懐しい。

この時分は、大げさに言えば、ブラジル短歌の草創時代で、確

固たる作歌理念をもっていて作歌する人は少なく、月々発表する私の歌などを模倣する人らもおったのである。

こうして発足をした「椰子樹」は、年を逐って会員も増え、作品も向上しつつ太平洋戦争を迎えたのであったが、戦争の初頭であったか記憶がはっきりしないが、ブラジル国も联合国側について参戦、その為に坂根総領事も梶木文也氏も日本へ引揚げられ、又選者の阿部青杜氏も帰国されることになり、次第にさびしくなったのであった。

坂根総領事の送別歌会はサンパウロ市で盛大に催されたが、私もカンピナス（転耕していた）から出聖して参加した。坂根氏に面接しお話をしたのはその時が初めてで、今となっては一期一会のえにしであった。また、ブラジル版与謝野晶子と云われていた葛西妙子氏に会ったのもそのときであった。

戦争が苛烈になるに従って日系人に対する当局の取締りは酷しく、印刷事情もますます窮屈になって一九四〇年ごろであったが「椰子樹」は休刊の止むなきにいたった。復刊は一九四八年であったと思うが、私は、帰国された阿部氏のあとに押されて選者となり、岩波氏を助けていたが、岩波氏は一九五二年急逝された。

私は岩波氏とは家庭的なつきあいもあり、親しくしていたので氏の長逝は私を落胆させたのであった。

私が選者をつとめたのは三、四年間だったかと思うが、それが「椰子樹」のためにプラスであったか如何か、今思い出しても心もとない。

私は、選者辞退後も熱心に作歌して投稿していたが、次第にあ

らわになってゆく椰子樹調とでも云った歌の性格になじめず、投稿も間歇的になったが遂に中止して今日にいたっている。しかし、「椰子樹」をいつくしみ、長生を歡ぶ心情においては人後におちない心算である。資料をさがし出せず、杜撰雑駁なものになったがこれを以て記念号刊行の祝詞としたい。

(一九七七・六・一八)

コロニアの短歌界展望

（一九六八年から一九七七年まで）

武本由夫

「椰子樹」発行、一五〇回を記念する「別冊記念号」所載原稿として、私に割りあてられたのは、「コロニアの短歌界展望」というのである。第一〇二号から第一五〇号まで、約一〇年間にわたるコロニア短歌界の推移の様態を述べよ、ということであろう。資料不足と、注意不足からの捕捉洩れもあるうが、それは、後でおぎなうとして、できるだけ、編集部の意に添うよう努力したいと思う。

(一) 一応見渡したところ

過去一〇年間の推移を、概括的に、鳥瞰的に観ると、大体次のようなことが言えるように思う。コロニア短歌の消長は、即ち、「椰子樹」の消長でもあろう。「椰子樹」に焦点をあわせその周辺に触れば、責を埋め得るのではないか、このように考えられる。

「椰子樹」は、戦後の復興期（一九四七年～一九五二年）を経て、しばらく低迷期（一九五三年～一九五八年）に入った。

そして次に飛躍期（一九六〇年～一九六八年）をむかえた。この時代、自然主義的作品、写実主義的作品、前衛傾向（超現実抽象）作品が、入り乱れて奸を競った。「別冊第一〇〇号記念号」載の「椰子樹三〇年の歩み」の後章に掲げてある作品群を読みかえすと、その多彩ぶりをうかがうことができる。

この活気にみちた試行錯誤を含んだ時代につながる、第一〇一号（一九六八年）以降、どのような経過をたどったか、「椰子樹」作品と、「全伯短歌大会」高位入選作品などを裏づけとして、私なりの感想、感触を、概括的に述べると、次のような事が言いたい。作歌技術の面では、その進歩にいちじるしいものが見える。

だが、歌境の深化という面では、幾人かを除き、一般的には、それ程の進境は見られなかったと言えるようである。

一九六〇年代に入って、現われはじめた前衛傾向の作品に対する、かなり激しい反発と抵抗があった。それは、七〇年代に入つて、一応の沈静はみたが、“許容”と“不許容”とは、各作者の資質と器量とによって、決定されていったようである。

前衛傾向に対して、“不許容”な態度を執った人々は、自然主義的作風への傾斜の度を強めていったように見える。また、“許

容”の姿勢を執った人々は、新写実、超現実、抽象への傾向へ移行したり、写実に止まったりしているように見える。

そして現在、いずれの傾向色ある作品も、一応それなりに、形式と内容を定着させてきていると思われる。第一〇〇号あたりを頂点として、写実主義的な色あいは薄くなり、自然主義の色調が、だんだん色濃くなった。つまり、一般的に現象的ことだけに密着した主題を、巧緻な技術に托して詠む、という傾向をたどってきた、と言えるようである。勿論、幾人かの作者はそうした日常的、現象的なことわけに対する情感の世界から脱出して、人間(自己)追求の手をゆるめることなく、個性的な作品を詠もうとしている、ということとは、ことわるまでもない。

「椰子樹」第一〇一号(六八年九月発行)から約二か年、第一〇号あたりまでは革新的な気魂を蔵する作品が目につく。

その後は、少しく意欲の後退がみられる。そして、第一三〇号あたりから、少しずつ盛り返し、第一四〇号以後、質の高低はしばらく措くとしても、安定感のある、コロニア的精神風土によく馴染んだ作風となり、現在に至っているようである。

次に、過去一〇年間の推移について、少しく詳述してみたいと思う。

(二) 余映なおあり

「椰子樹」は、一九六八年に第一〇一号と第一〇二号が発行されている。所載論文にはまだ、前衛傾向作品に対する反発を含む疑問とか、その解明志向とかを、論議したものがあつた。そして「コ

ロニアの独自性”を打ち出したという底籠る意志が作品のうえにうかがえる。その”意志”が、作品に活気を与えているとも見られる。

「椰子樹」第一〇一号、第一〇二号を見ると、戦後台頭したコロニア一級女流にまじって、他のベテランと共に徳尾溪舟（第一〇一号）、秋永三郎（第一〇二号）などが出詠している。

こういう戦前からの著名作者が、顔を出していることにも、この六八年〜七〇年前後は、まだまだ革新的気分の失われていないことがわかるのである。

一九六八年当時の邦字紙を見ると、一月二日付パ紙に「歌会始」の記事がある。“川”というお題で、皇太子、美智子妃が揃ってアマゾンに因んだ作品を発表している。

◇皇太子・作

この水の流るる先はアマゾン河口手をひたしみるにほのひややけし

◇美智子妃・作

赤色土（テーラ・ロツシヤ）つづける果ての愛しもよアマゾンは流れ同胞（はらから）の棲む

この短歌は、一九六七年五月、南米三か国御訪問の時の感懐をお詠みになったものである。こうした事も、短歌界に微妙な影響を与えていると思われる。

「椰子樹」は、順調に発行され、全伯短歌大会も、欠けるなく毎年一回が開催された。

第二〇回大会（六八年九月一五日）は、文化センター大サロンで催され、一〇〇名が参加した。代表選、一般選共に森重扶美が、一位を獲得した。森重は、当時最も作歌に油が乗っていて、バストス記念短歌大会でも、総得点一位となっている。

第二一回大会（六九年九月一四日）は、こけし食堂で開催、出席九二名。代表選一位、一般選一位、ともに八巻耕土が獲得した。スザノ歌会のホープとしておどり出た八巻の一家は、いうなれば“短歌家族”で、戦前の中井小鴨一家に似ている。家長耕土、夫人たけ子、耕土の弟たちの汀石、培夫、梅夫、みな水準をぬく短歌人である。耕土は、スザノ短歌会運営の中心人物でもあって、以後コロナ短歌界に対する発言力を強めている。

第二二回大会（七〇年九月六日）は、蘇州飯店で開催、出席七六名、今回は、代表選がなく、一般選だけ、一位は栗沢朋子であった。栗沢は、スザノ歌会所属であるが、サンパウロ歌会所属水本すみ子の実妹で、その秀れた歌才を肯うことができる。

なお、全伯短歌大会は、第二〇回を最後として、以後主催がパ紙社より椰子樹社に移っている。第二一回以後の、出席者漸減は、その為ではなく、やはり志気の停滞によることは、その後の歌界動向が示している。

一九六八年、これまでの新人賞「椰子樹賞」の後を受けて「岩波菊治賞」が設定され、第一回受賞は木村正和である。その作品は、当時の革新気分を象徴するような前衛傾向のもので、新

鮮な感銘を与えた。こうした作歌熱上昇気運に乗り、この年「コロナ短歌賞」が設定され、その第一回受賞は小笠原富枝である。小笠原は新境地を開拓し、つとに知名であり、当時抜群の作歌力を示していた。もともと、その後も衰えを見せず、現在も第一線で活動している。

第二回「岩波菊治賞」（六九年）は、当時在サントスの岩淵史津が受賞、岩淵は戦後渡伯の俊英で、渡伯後日ならずして、サントス歌会に所属、早くも頭角を現わした。同年の「コロナ短歌賞」は該当者なし。候補として、陣内しのぶ、弘中千賀子が有力であった。推薦委員一四名中、六名の推薦放棄があったりして、同賞設定に対する再検討が要請された。そして後日同賞は廃止となった。

第三回「岩波菊治賞」（七〇年）は、内田笑子が受賞した。

内田は当時急速な歌境の進歩をみせ、注目されていた。以後活発な活動を見せたが、近年少しく作歌力に減退の色を見せている。意気の高揚を希みたい。

この年、前年廃止した「コロナ短歌賞」に代るものとして「代表選誌上コンクール」が設定された。一人一首応募、代表選者は、全伯大会代表選者に準じ、三二名が挙げられた。第一回応募四七首、一位森重扶美であった。第二回応募二五首、一位若生五十路、第二回目は、応募者数が、第一回の約半数に落ち、この企画も継続性が失われた。

この期間での地方歌会の動きとしては、まず、六八年二月、グワイラ短歌会創立四周年記念大会を挙げる。サンパウロ、モジ、スザノ方面からの参加がありさかんな交流が行なわれた。

同地は、戦後短歌の処女地であって、加藤操、八幡与三など、熱心な中心人物が在住し、六九年にも、短歌会創立五周年、年刊歌集刊行、杉本千代歌集「緑葉」出版などを兼ねて、祝賀記念短歌大会を開催した。

次に、当時の新聞歌壇の状況に目を転じてみよう。パ紙(担当・行方正治郎)、主なる投稿者、南条由喜夫、吉岡敏子、梅崎嘉明、川田幸子、森元三山、広瀬滄州、土屋風春、小野寺郁子、壇政治など。サ紙(担当・井本惇)主要投稿者、新納潤魚、北上川太郎、南条由喜夫、●藤勝子、水島三千也、須沢志げ子、縄手敏夫、永野青蛾など。日毎紙(担当・弘中千賀子)主要投稿者、南条由喜夫、知花清、佐藤博三、清水そとえ、金井治郎、高崎進、割鞘タケ、土屋風春など。これら投稿者中、二紙に投稿というのは幾人かあるが、三紙投稿は、南条由喜夫だけであって、その作歌熱心は特筆に価する。

一方、各地方歌会の活動状況は、その頃(六八年〜七〇年)どうであったか。ロンドリーナ(一八〜二五名)、サントス(七〜九名)、オ・クルース(六〜八名)、サンパウロ(一八〜二五名)、スザノ(一六〜二〇名)、カ・ポニート(五〜七名)、バストス(五〜一〇名)、グワイラ(七〜一三名)、カンポス(六〜一二名)、アサイ(六〜一〇名)など、この状態がしばらく続き、相当にさかんであったが、七〇年以後、カ・ポニート、アサイは消え、バストス、カンポスは、紙上発表が少なくなった。スザノとグワイラは、益々さかえ、会員も増加して、現在に至っている。

今度は、この期間に刊行、出版された歌集を挙げてみよう。

この期間は、どういふわけか、歌集の出版が相継ぎ、その紹介が「椰子樹」誌上に、新聞紙上に多く発表された。

六八年に、まず、先年（六七年）死去した東野暁風の遺歌集「憩の灯」が刊行されたが、それには故人の親友岩佐一步の奔走が大いに与っていると聞いている。「椰子樹」第一〇八号に同歌集研究を、大場時夫、弘中千賀子、八巻耕土、高橋よしみが行ない、故人追憶を森重羊鈴が書いている。パ紙五月九日版に米沢幹夫、サ紙五月一六日版に大場時夫が紹介している。また、この頃、高橋よしみが教年以前に逝去した令兄正木思水の遺歌集を刊行、パ紙六八年五月二七日版に佐藤一英が紹介している。

次に六九年、杉本千代第一歌集「緑葉」が酒井繁一の尽力によって出版された。同書の紹介は、サ紙六九年六月一二日版に在日本の牧浦治子、同紙七〇年三月二〇日版に加藤操、パ紙六九年九月二五日版に細川末葉が紹介している。

六八年、瀬崎涛声第一歌集「白き州道」が領布された。「椰子樹」第一〇九号に、その研究が、井本博、武本由夫、開沼貴代によって行なわれた（武本のもは第一一一号に続く）。

又第一二二号には、瀬崎涛声の第二歌集「生きの日」を、清谷益次が紹介、第一一五号に井本惇が、同歌集の感想を述べている。その他、同歌集については、日毎紙七〇年一月一二日版に武本由夫、パ紙七一年二月四日版に牛草茂、同紙二月二日版に梅崎嘉明、同紙三月四日版に永田泰三が、それぞれ紹介している。

この頃頒布された大場時夫の第一歌集「岩霧草」も広く統まれ、「椰子樹」第一一〇号に、その研究を酒井繁一、森谷風男、吉本青

夢が執筆している。又大場時夫第二歌集「岩叢」が頒布されたのも七〇年頃で「椰子樹」第一一四号に、清谷益次が紹介、第一一六号に酒井繁一が感想発表、日毎紙七一年二月二〇日版に勝山呉泉、同紙三月五日版に堀田栄光花、パ紙七一年二月二五日版に米沢幹夫、同紙五月二七日版に瀬古義信などが、紹介鑑賞の文章を寄せている。小竹清子歌集「波の跡」が出版されたのは六四年であつたが「椰子樹」第一二三号（七一年一月発行）に、新納潤魚、吉本青夢が取りあげている。

酒井繁一第五歌集「産土」は、「椰子樹」第一一五号（七一年五月発行）に清谷益次が紹介、第一一七号に森谷風男が感想発表、パ紙七〇年三月一二日版以後四回に亘つて、森重扶菜、同紙九月三〇日版に横田恭平が、紹介のペシを執っている。

六八年には、先年日本に帰国した細江仙子が再渡伯、「異質の季」に次ぐ新著「二世」を携えて来た。これに対する所感をパ紙八月八日版に大場時夫が寄せている。

バストス短歌会が、創立二〇周年を記念して合同歌集を刊行したのも、アサイ短歌会が、その中心山室新太郎のレジストロ移転、歌会締めくくりとして「朝日短歌（合同歌集）」を出版したのも、七〇年頃であつたと思う。

「椰子樹」第一一一号、第一一二号に、吉本青夢が「追善雜記」と題して、奥田葉吉、上野紅陽、仲真美登里、池田重一、村上樞二、吹本菊子、六名の亡歌友の思い出を書いている。その吉本が、同年六月二八日急逝しているのであるから、人間の運命は不可解である。

六九年一〇月、モジ市日本移民入植五〇周年記念事業の一つとして、同市公園に、瀬崎涛声歌碑「いくとせを親しみてきしイタペチか故国の山をおもかげとして」が建立されたことも記憶に止めておきたい。

なお、この期間に逝去した作歌者としては葛西妙子と、上村登志行がある。葛西は、六七年一二月三十一日逝去、翌七八年一月一日埋葬された。彼女の思い出は、「椰子樹」に徳尾溪舟、開沼貴代、西田孝子が執筆、パ紙一月二五日版に坪内広代、日毎紙二月一六日版に武本由夫が執筆している。上村の死去は二月二三日、その思い出は「椰子樹」に八巻耕土が書いている。

以上、大体一九六八年〜一九七〇年までの主要事件を挙げ、短歌界の動きを見てきた。

この時代は、本記小見出しの示すように、“余映なおあり”で、六〇年以後の革新期の名残りあり、新人の台頭もあり、相次いで歌集が出版された。又バストス、グワイラ、スザノなどの歌会もよく活動した。だが、「コロナ短歌賞」「代表選誌上コンクール」などは、伸展を見なかった。歌会活動の活発であったことも、一種の陽動であって、実質の伴うものであったかどうか、次の七一年以後を展望してみよう。

(三) だく足前進

ここでは、一一九七一年〜七三年、「椰子樹」では、第一一三号〜第一三〇号の期間を取りだして眺めよう。ひと通り資料を調べたの結論を言うと、この期間は、俊足的歌境高揚期とは言えない。

革新期の残した余映は消え去っており、渋滞をやつとまぬがれて
“だく足”で前進した期間という外はない。

「椰子樹」出泳者の動向は、前期と余り変わりはない。少々ベテラン作者の脱落が見える程度、ずば抜けた新人の台頭が見られない、その程度の状態である。これを、もつと具体的に、単的に観る為、“特選欄（推薦欄人集）”を取りあげよう。七一年〜七三年、一八回発行中、一回だけ推薦無しなので、一七回登場者三九名（ベテラン及び受賞者を除く）その中一〇回中井益代、七回遠藤捨、篠田真佐子、五回北谷まがた、富岡清治、簗藤勝子、森谷春男、大境俊子、四回八巻たけ子、加藤操、三回七名、一回八名、一回一四名となっている。

三年間に一〇回特選欄に推された中井益代の精進ぶりは特筆に価する。中井は、戦前からの作者で、既にベテランである。

詠み口が地味であり、人柄が控え目なため、目立たないのである。作品に逞しさはないが、その品格の高さは類稀であろう。

その他前掲の人々は、この期間最も熱心、よく勉強をしたといえよう。

第四回「岩波菊治賞」（七一年）は、入選該当作品なし、佳作篠田真佐子、遠藤浩、安部栄子となった。第五回（七二年）も、該当作品なし、佳作清谷勝馬、清水そとえ、遠藤浩となった。第六回（七三年）もまた、該当作品なし、佳作八巻耕土、石橋テル子となった。応募が段々減少するわけではなく、作品価が平均して来ており、推すに足る秀抜作品が見当たらない、ということであろう。

第三回「代表選誌上コンクール」は応募一八首で、いよいよ減少、下火になったためであろう。選考発表も行なわれなかった。

第二三回全伯短歌大会（七一年九月二六日）は、こけし食堂で開催、出席八〇名、代表選一位陣内しのぶ、一般選一位吉木青夢であった。陣内は既に知名、吉本は同年六月に逝去しており、遺詠入選ということ、目立つ新人の進出は見られなかった。第二四回（七二年九月三日）も、こけし食堂で（大会々場は”こけし”に定着したようである）開催、出席九二名、昨年より参加は上回った。代襲選一位小笠原富枝、一般選一位川原比露思、兩人ともベテラン中のベテラン。最高入選にこそ新味はないが、応募者、出席者に新顔が見え、何となく明るい感じであった。

第二五回（七三年九月二日）こけし食堂、出席者九二名、前年と同数とは珍らしい。代表選一位弘中千賀子、一般週一位梅崎嘉明であった。同人とも既に知名であって、新味は感じられなかった。しかし、三回（三年）女流トリオ（陣内、小笠原、弘中）がトップ獲得という大会現象は、偶然ながら妙である。

次に、各新聞歌壇を見よう。この期間は、どの歌壇も量質共に低調であった。サ紙歌壇（担当・井本惇）は、一九六九年二月以後姿を消した。しかし七三年に入り、担当・編集部文化部で復活し、少しずつ形を整えていった。日毎歌壇（担当・弘中千賀子）も、七三年頃は、殆ど無くなり、只「少年少女短歌教室」だけが存続した。パ紙歌壇（担当・行方正治郎）は、マンネリながら継続、七二年頃行方は辞任、気鋭の米沢幹夫が担当した。彼の熱意と社当局の肩入れとで、行方の時とは打って変り、ベテラン、初心者

投稿がふえ断然活気を坂りもどした。

なお、このほか、地方紙歌壇として、バストス週報（担当・森重扶美）アサイ週報（担当・山室新太郎）パラナ新聞（担当・大場時夫）など、各歌壇の存在が伝えられたが、手許の資料が不足する為、つまびらかにしない。アサイ短歌会の会誌「アサイ短歌」は、山室同地を転出後、穂島千代が受けつぎ「ゆりかご」と題して、おもに少年少女短歌指導の役割りを果たしていると開いた。

各地方短歌会の活動も、七〇年頃以後下火となった。カ・ボニート短歌会、オ・クルース短歌会など、その消息を聞かなくなった。カンポス、バストスなども、歌会報をあまり中央紙に発表しなくなったので、少々心もとなく感じられた。サンパウロ、サントスは、この期間余り異動はなかった。スザノ、ロンドリーナ、グワイラは、むしろ盛大を告げ、中心をなす人々の努力が大きく評価された。

又、日本の各歌誌に所属して活躍している人々も少しずつは殖えており、新年詠進歌、明治記念総合歌会などに応募する人も段々多くなっている。時にコロニア作歌者の入選、佳作が紙上に報道される。七〇年の明治記念春の大祭歌会で、入選一〇人の中に、久米光春が人選している。また七二年、詠進歌入選老中に、マリリアの俳人遠山実（颯子）が入選、その栄誉が大きく報じられた。七三年には、靖国神社創立記念献詠歌に、八巻たけ子が二位入選、賞賛を博した。

地方の短歌大会としては、スザノ邦人入植五〇周年記念短歌大会（七一年一〇月一〇日）が催され、約四〇名参加、高点一位八

巻たけ子、総得点一位八巻耕土と、最高賞を夫婦で獲得している。

また「椰子樹社」企画の、全伯地方短歌大会は、第一回（七二年四月九日）サントスで開催、参加四八名、代表選一位陣内しのぶ、一般選一位小笠原富妓となっている。

第二回（七三年三月一日）ロンドリーナで開催、参加一〇四名で、空前の盛会であった。高点一位八巻汀石、総得点一位野中みや、特に高齢野中への入賞は、各方面の賛辞を集めた。

七三年には、スザノ花祭り短歌大会（一〇月二一日）が催され、参加四〇名で賑わったという。

短歌関係刊行物では、毎年一回カンポス歌会が合同歌集「やまなみ」を刊行、七三年には、第一五号を刊行している。又同年、アサイ短歌会は「朝日短歌」一〇〇号記念号（活字印刷）を刊行、各方面に頒布した。

歌集では、七三年、孤老桜井健三が「つぶやき」を出版。この歌集が機縁となって、出身の富山県から招待され、母県で再版、県下に配布された。同歌集については、パ紙七四年二月二三日版に米沢幹夫、日毎紙二月二八日版に弘中千賀子、サ紙二月二八日版に武本由夫が紹介のペンを執っている。なお、七三年には、杉本千代第二歌集「白房」が出版されたが、その時杉本既に亡く、遺歌集となった。パ紙七四年一月二日版に加藤操が紹介している。

七一年〜七三年に死亡した作歌者も、幾人かあるが、大きく心底に残っているのは、吉本青夢の死であった。モジ文協書記長として勤務していたが七一年六月二八日、その偶居で急死した。「椰子樹」は第一一七号（七一年九月発行）を「追悼号」とした。

吉本を語る座談会記事、井本惇、江尻潤の追悼記などが載せてある。新聞では、日毎紙七月一四日版に堀田栄光花同紙七月二一日版に渡部南仙子、同紙九月一日版から三回にわたり徳尾溪舟、同紙七二年六月二七日版から二回、大原友重、パ紙七一年七月二九日版に米沢幹夫、八月四日版にレジストロの野球狂、同紙八月二六日版に大場時夫、同紙九月二日版から二回中江克己が、それぞれ吉本の“人と短歌”を語っている。

その他、七一年七月九日、戦前日伯紙社長夫人三浦朝子が七三才で逝去。パ紙に河野銀生が追悼文を寄せている。又、七二年一月二〇日三好案山子（綱一）が八五才で死去、「椰子樹」第一二〇号に徳尾溪舟、サ紙七二年三月八日版から二回田中正実、なお死後、酒井繫一編の歌集「案山子の歌」が刊行された。この期間の死亡者は、まだあると思うが、思い浮かばず、資料もないので、補遺としたい。

この期間には、連続「岩波賞」授賞該当者なしであり、二邦字紙歌壇の衰微などが示すように、あまり発展への志向は見えなかった。しかし、全伯地方大会が催されて、人的交流と結束が見え、伸展へのきざしを含む陽動とも受けとれた。

（四）坂はいよいよ登り道

ここで展望を試みるのは、一九七四年～一九七七年現在である。「椰子樹」第一三二号～第一五〇号の期間である。その間コロナ短歌界は、どのような様相を示したか、少しく触れてみる。

「椰子樹」出詠著の動きは、前期と大差はない。第一三二号から、編集が少し意欲的になっていることが目につく。座談会記事とか、ベテランの特別二〇首詠、その他、短歌以外のコロニア文学人の寄稿などが目新しい。又第一四一号から設定の「●」（注・印刷済み）、特別選歌欄（担当・酒井繫一）は、会員に迎えられ、次第に栄えている。

さて、この期間に、ベテランに次ぐ新人の台頭があつたかどうか、“特選欄”登場の人々を見よう。発表一九回中、一二回末吉美佐子、一〇回遠藤浩、九回中井益代、九回大城俊子、六回加藤操、五回篠田真佐子、四回中川荒記、以下三回六人、二回七人、一回一二人となっている。末吉は、日本企業の出張社員夫人で、ベテラン。七六年に帰国している。中川はグアイラ在住、その精進の跡を示している。遠藤、中井、大城、加藤、篠田も、前期に続く成績であつて、刻々牙城に迫りつつある心といった感じである。

「岩波菊治賞」第七回（七四年）は入選森谷春男、四年ぶりに賞に該当する作品があらわれたわけである。第八回（七五年）入選小野寺郁子と、好調を迎えたと思つたが、第九回（七六年）入選該当作品なし、佳作五篇となつた。第一〇回（七七年度）入選小野政子、佳作、坂光男、加藤操、多田邦治、清水さかえとなつた。椰子樹の推薦作品欄にも推される度数の多くない小野が栄冠をしとめたのは天晴れである。

第二六回全伯大会（七四年九月一日）こけし食堂、出席者八四名、代表選一位小笠原富枝、一般選一位開沼貴代、開沼の入選が目立った。第二七回（七五年九月一四日）こけし食堂、出席者八

七名、代表選一位弘中千賀子、一般選一位川原比露思であった。新人が、長く出渋っているのも、もう入選の顔ぶれも固定した感じである。第二八回（七六年九月一九日）こけし食堂、出席者約八〇名、代表選一位弘中千賀子、一般選一位米沢幹夫。弘中の連続二回代表選一位は輝やかしい。第二九回は、この稿執筆時点では未開催である。

前の期間に続く、全伯地方大会は、第三回（七四年四月二二日）をスザノ文協会館で開催、出席者六四名、代表選一位小笠原富枝、一般選一位梅崎嘉明、“特選”というのがあって、一位佐藤一英、第四回（七五年四月二七日）は、グワイラ文協会館で開催、出席五五名、代表選一位北谷まがた、一般選一位本庄研一、第五回（七七年四月三日）はロンドリーナ、イ・コンセイソン寺院サロンで開催、出席者五〇名、一般選のみ、一位中西静世、この大会も七年には行なわれなかった。開催の条件を備えた地方は、既に一巡、七七年は、二巡目ということである。

その他の大会としては、スザノ月例短歌会一〇〇回記念大会が、七六年五月一六日、同地文協会館で開催された。出席二九名、高一点位遠藤浩であった。スザノは毎年のように、大会を催し、近來意気軒昂たるものがある。

明治神宮、春秋の短歌大会には、コロニアからの応募が年々さかんになっている。佳作に入る者はかなり多いが、入選となると少ない。前期の久米に次いで、七七年春の大祭奉祝歌会で中川原発作品が、みごと入選している。

次に新聞歌壇の動きに日移そう。パ紙（担当・米沢幹夫）は、

空前の盛況を呈し、月間二〜三回の発表ペースを崩すことなく、ベテラン、新人を多く集めている。サ紙は、七三年から担当編集部文化部で再建したが、七五年一月から、担当・小笠原富枝、陣内しのぶとなり、以後月間約二回発表、しだいに栄え、新人の活躍が目立ってきた。日毎紙（担当・弘中千賀子）は、中止の状態であったが、七七年に入り、担当・弘中千賀子、武本由夫で、建て直しを計っている。この外に、援護協会発行の月刊「老壯の友」歌壇があつて、創設以来米沢幹夫が担当して、老境に在る人々に「作歌の愉しみ」を広めている。

新聞歌壇というのは、新人養成の為には、大きな役割りを担うもので、作歌道場としては、これに勝るものがない。短歌普及ということとは、ベテラン、中堅を問わず、念頭におき、その盛大に協力することが大切である。

前期間に、かなり落ち込んでいた新聞歌壇が、この期間に、やや持ちなおしつつあることはよろこばしい。

「コロナ文学会」は、コロナ韻文学界の将来を考慮し、鳥瞰的に展望し、その存続の手だてとして、韻文関係会員に、作品発表の場を開いた。七五年七月「コロナ文学」誌の付属誌的刊行物として、月刊「コロナ詩歌」を創刊、広く会員を募っている。これは、詩歌（詩、短歌、俳句、川柳）の殆ど全分野を網羅したもので、作品及び理論活動を推進し、創刊満二年を経過、現在第一二二号を発行した。短歌分野では、瀬峰、酒井、川原など超ベテラン級から開沼、小笠原、弘中、陣内その他コロナ短歌界第一級作者が、毎号出詠し、又一般投稿作品の選歌も交替で担当して、

バラニテイに富んだ誌面が構成されている。

各地方短歌会の動静については、前期間と余り変化はない。

サンパウロ短歌会は、ずっと以前から、幹事は毎年、会員の交替制であるから、幹事の如何によつて、消長があるということはない。しかし、スザノ、グワイラ、ロンドリーナ、サントスなど、その運営に中心人物の熱意の深淺が、その消長に大きな影響力を持っているように思われる。今後とも地方各歌会の中心的存在は、いよいよ心を渾くして運営に當つて貫い度いものと思う。

この期間には、短歌関係出版物というのは余り多くない。七六年、弘中千賀子が、歌集「小さき詩型」をメタ出版社から出版した。「椰子樹」第一四八号に陣内しのぶ、パ紙七七年二月二四日版に米沢幹夫、同紙三月二四日版に梅崎嘉明、日毎紙三月二日版に武本由夫、同紙三月一二日版に安良田濟、サ紙三月一〇日版に小笠原富枝が、それぞれ賞揚紹介の文章を載せている。

日本から来て長期間滞伯し、短歌紙誌に作品を発表した人はずっと以前からあつて、この期間には、末吉美佐子、丸山林子などがいる。外に、旅行者として来伯した短歌人も何人がいる。七五年八月には、「林間」主宰木村捨録一行八人の作歌人が来伯、サンパウロ、ロンドリーナで歓迎会を催した。七六年七月には、北原弥生（まひる野所属）が夫君と共に来伯、スザノで歓迎会を開いた。同年一〇月には、熊谷優利枝（歩道所属）が来伯、サンパウロで歓迎会を開いた。この外、地方歌会報告によると、陣内直樹、波田容子などの歓送迎歌会の記が見られるが、その人退伯月日をつまびらかにしない。これらは、補遺に俟つことにする。

この期間で鬼籍に入った作歌者も何人かあると思うが、知名人では、新納潤魚、南条由喜夫、小田切剣がある。新約潤魚がリオで交通事故死したのは、七四年四月一二日であった。短歌界の誇り高き一匹狼といった存在であるが、その晩年の折々に発表した作品はコロニア短歌の一級品といえよう。彼の“人と短歌”については、「椰子樹」第一三四号（七四年八月発行）に井本惇、武本由夫が、ペンを執っている。小田切剣が逝去したのは七六年八月一六日であった。コロニア有数の力量者であるが「椰子樹」を離れた所で“己が道を行く”の信念を貫ぬいた。これもまたいさぎよく、ある意味では認めたい。彼については、パ紙五月五日报に清水さかえ・（剣大人）が追悼記を書いている。南条由喜夫は、七七年一月一八日黄泉の客となった。

これまた独自の道を歩んだ“短歌の鬼”で、病床にたおれるまで短歌を作り続けた。彼については、日毎紙二月八日报に渡部南仙子、同誌二月一二日报に横山ゆきお、同紙四月二日报から三回にわたり武本由夫が執筆している。この期間に、コロニア短歌界で知名であり、しかも強烈な個性のままに、独自の道を歩んだ作歌者三人が相次いで死亡したことも心にしみるものがある。

以上、大体、七四年以後七七年現在までを見て来たが、前期と比較して、「岩波賞」受賞者の出たこと、新国歌壇の復活と活発化、「コロニア詩歌」の創刊など、コロニア短歌界は、徐々に活気を取り戻してきたといった空気が感じられる。この「椰子樹」別冊第一五〇号記念号の刊行をしおに、次の飛躍時代を迎えたいものである。

コロナの日本語による文芸衰亡説は疾より巷にささやかれた。しかし、その存続の為に、いろいろの方途が講じられ、奨励策が実施されて、今日なお命脈の尽きることなく、しかも流動的な伸展の様相さえみせていることは額もしい。詩歌人はすべて結束を強め愈々努力して、詩歌（短歌）の炬火をますます高くかかげるべく心掛けたいものと切に思うものである。

〈追〉紙数の関係から、記述の裏づけをなす“作品”を、いちいち掲げなかつたこと、敬称を省略したことを、ここにお断わりしておく。また、忽卒の間にまとめたので、不備はまぬがれないと思う。その点、識者の指摘に俟って改更補遺をおこないたい。

〈武本・識〉

作品集

(ABC順)

安部 栄子

倅せの開らくが如くアパートの窓々灯る臥して見居れば
みちのくに造られしと言う風鈴よわが病む窓に音澄みて鳴る
吊り呉れし風鈴の音りんりと心に沁みる音に鳴りつぐ
梅もどきの熟れし紅実を啄むと寄り来る小鳥窓に見て居り
山かげの陽差しは弱く苔の花あるとしもなき風に揺れ居る

秋 山 る り

葉は黄ばみ長き莢実の街路樹は秋を告ぐれど暑き此の町
かすかなる風にコスモスゆらぎいてホテルの前の朝静かなり
七十五年の星霜を経し農大の椰子の並木に青空を突く
ピシーナの冷たきに挑み吾一人泳げば冬の日波に輝く
旅三日アニヤンゲラのつきる時靄か汚染か濁れるサンパウロ

育柳房治

焦燥感おさえて重し銀行の鉄扉冷かに吾が背を押す
幾日か頭芯の痛み去らずして対き合える壁重く迫れる
この友も吾も痛みを持ち居りて会話の中にぬるき茶すする
みじめなる夜はすべてを剥ぎとりて妾の女の中にひたるか
明日に燃え夜業せし日も杳くして残務整理のペンの重たし

青柳ます

この国になじみてなおも故国よりの輸入の品の値上りを言う
疲労にてこもるベッドに帰る意のなき故里が夢に頭ちきし
経営の苦しきを言わず働きて通うものあり夫との夜道
すぐりたる一つの蕾開きたり女王のごとし菊の大輪
容姿をば気づかう娘らの帰省り来て常にドーセのたぐいを作る

土井はやし

姉もわれも斧打振りて開拓に干魚ばかり食いし明暮れ
果しなく霜やけし桑園黒々と背き一片見当らずして
霜の朝はく息白く葱を抜く双手切らるるばかりに痛し
祭日も桑苗注文絶間なく電話鳴りつぐ比の試験場
わが住居崩し建てたる稚蚕所は飼育マキナの休む間あらず

遼藤 浩

無にならぬ臆測もちて佇つ座にマモンすなおに下りて居たり
しづかなる廊下に重く響きくる松葉杖の音長く尾を引く
夏と言う象をもちし雲の群通りてすがしきひと雨のあと
貝殻のかわく音する石の上童はあまた玩具をつくる
炎天の下にて商う少年の跣足に泥の毛蟹は纏わる

遠藤 タミ子

味噌汁をあたたため待つに夜学より秋雨にぬれて子は戻りくる
干潮の激しき朝堀割の底位にあまた死せる稚魚のあり
浜桐の紅華人江に連なりて入り来る船の白き輝き
昼の月白く浮かべる冬の野に赤き穂草は風に波打つ
霧深くしずもれる朝潮の辺りの御堂にあまた灯のゆらぐ見ゆ

江藤 政太

野焼きして若草萌ゆる家の裏仔山羊が糞を落としつつ行く
腫れものにさわるが如き思いして芽吹き初めたる芋の草けずる
仲人が吾が半生を式場で語れば妻が涙ふきおり
うつむきて娘の式服を踏むまじく歩けば寺院の廊下は狭し
渡さねばならぬ吾が娘の手をとりて神の前なるきざはしのぼる

藤田朝日子

三椏の織維露わに透きて見ゆ我が故里の手漉き伊予紙
移り来て箆笥に四十年蔵いいし母の形見の伊予紙ぞこれ
山深き村里にして紙漉女手は凍えつつ漉きにけらしな
亡き母の蔵いませし故里の手漉きの伊予紙日に透かし見る
母上の形見となりし故里の伊予紙愛でつつ短冊に切る

藤田美砂子

靴はきて庭を歩めるこの朝の夫に癒えゆく兆明るし
まっすぐに転け来し孫を思いきり抱きあげたる上の碧空
曇り日の庭に木犀匂いいて老いの心の渴きを覚ゆ
木犀の小花は花器に映えねども寒き厨に香をみたり
色彩に乏しき老いの家ぬちに嫁にもらいし卓布はなやぐ

吉川信子

(亡夫を詠む)

老い夫は今宵の寝酒にほろ酔いて若きに似たるそぶり見せたり
いさかえばもの云わぬ日もありし夫老いてかたみにいたわりて
くらす

義齒はずし眠る老夫のしわ深き口もとさびし手を触れて見る
幾度も被害受けつつ生き次ぎて街路樹の幼木のび早くなり
奔放に枝を広げて太り居るかつては虐げられ居し街路樹

古山孝子

すずらん燈青くともりし東洋街夜の華やぎ装いてくる
スモッグのうすれし日かも夕茜消えゆく空に淡き星影
唯一人愛しゆかんと気負いきて屈折少きすぎきりなりし
美しきことのみにあらず母と娘も女の翳り裡に秘めもつ
心こめ二巻の写経おえし時安らぎみちて秒音ききおり

後藤静

拒絶するそのこと既に大人びて育ちゆくもの意外にしぶとし
誤算ひとつあること口惜し街路樹の影ゆれている路を急ぎぬ
故意に背を向けて佇つ人無視せんと一息に水飲めば胃に沁む
蝉が鳴いていると告げくる夫の顔久しく見ざる穏かなもの
いさぎよく剪りて約束せし友に今朝は届けん山吹一枝

花城清栄

押し寄する胸の圧迫に堪えながら生の限界を見極めんとす
静脈に落つる点滴見つめ居るわれは虚脱の中に横たう
草いきれたつ丘に来て腹這えば松の実弾く音の聞こゆる
霜柱立つ高原の丘の上に腐蝕土掘りて桜苗植ゆ
飲みほせる岩間清水の冷たさよ自ずと知れるわが胃腑の位置

春名宏文

青空に高々のびる杉の幹この直線につながる記憶
一日ひとひ木の芽ふくらむこの日頃追わるる如き吾が生活なり
生きている者が集いて華やぎを盛りあげている死者の日の墓地
宿直の夜を療院の玄関に鈴虫一つ息長く鳴く
子と語る言葉は貧し既にして異質のもの育ちゆきつつ

橋本元江

移住時同じ机で学びしを懐しみおり五十年祭に
幼なき日入植せし地を尋ぬれば吾迎うる如くパイネイラの花
半世紀過ぎれば多くの人去りてただ広々と牧場つづく
富無くて名もなく過ごせし五十年ただひたすらに農の道つぐ
移住時庭に蒔きたる草花も野草とたりし古き移住地

樋口辰男

結核にイペロツシヨが効くと聞き校庭なれど皮はがしゆく
紅のビンニョチントはつがれつつ宴の始めの辞に手を拍く
遠浅の海に來りて潮あびる全身ひたし暫し目を閉ず
降り続く雨に漸やく飽きたるに古き煉瓦の苔も青まんとす
銀行にて書類いだして年金を受けひとことも物云わず出づ

弘中千賀子

厚く濃き木々のみどりの彩にして身に添うるなき山々があり
哀しみの深まる日々の手を浸す山の湧井の水はじきつつ
充たさるるなき飢えにして日と月をかく逝かしめて黄土山肌
囚わるる心というも熄みがたし歳かさねゆく異土のみどり葉
帰りゆくひとりを容れて吾の眼に無限に遠き山川があり

穂島千代

弱き意も心純なる生徒等に支えられいる幸福思う
老醜の兆せる頬に幼な生徒が真綿の如き頬押し付ける
定刻ははるか過ぎしが生徒等にせがまれて読む百人一首
和やかに授業終わりぬお別れの合唱の声にこもる充実
生徒等と別れの言葉交しつつ連休に入る心は虚し

本庄 研一

病院の長き廊下を運ばれる白き布覆う裸体の吾は
過去すべて一場の夢医師の手にあばかれるべし醜なる部分
妍きそう菊いく鉢を奢りとし贖罪のごと病床に臥す
われの碑にきざむ一字を探しおり不要の語彙の多き辞書なり
養生がいまのすべてと海にきてかかる失意を託す一竿(いっかん)

堀石 凡生

白じらと煙り降りつぐ時雨中葡萄畠に草を刈りつぐ
探しいし友の住所は知りたれど訪う暇なく日々を過ぎゆく
進展の兆しとてなく七年の野菜作りて市に商う
珍しく霧なき暁を朝市に心はずみて車駆りゆく
大方を終えし一と生と思いつつ年毎殖えし白髪梳きおり

井川 季子

母の日も母子二人の寂けさに黄菊が匂う苑に日向ぼこ
母の日の夕餉は軽く茶漬食む亡母に習いし白菜漬甘し
余生てう衷しき思いうち消して花の種子まく昨日も今日も
まき了えし種子の芽生えを待ちわびて朝な朝なを通う畠路
亡夫の忌にかえらぬ人を憶うときサクラの枯葉音もなく散る

飯田義勝

田の広さ問えば指きす一田を五千町歩と顔澄ます地主
虹懸けて追いつ追われつ雨の脚マンチケーラの夏の夕映え
パライバの濁流何時しか澄み流れ広田に響く稲刈りの音
宛らに錦絵絵巻群鷺の稲秋長きパライバの原
健型を崩して又も群鴨の隊伍整う厳しさ持てり

池田喜城

隠れ住むとにはあらねど老い呆けて閑に今日を生きんと思ふ
茜さす夕富士映ゆる故里にしばしすごさん命のかぎり
汐騒にけぶる渚の砂浜に貝を拾わん命のかぎり
盤梯の雲をそがいに柿赤き村村を訪わん命のかぎり
産土のふるさとに鳴く鷺をきかなと思ふ命のかぎり

井本惇

とりとめもあらざる夢を覚めおりて夢より続くひとの面差し
薄明の思いにしばしたゆたえど今日のひと日に吾がなさんこと
遠くより思いを分つひとも逝きおのれとぼしき日月のこと
傷めたる己の脚をもみおりてこの世にたのむものありきや
ゆえよしもあらざる吾の暁に覚むるは死よりのがるる如し

石橋 初穂

軀に添わぬ燕尾服など着飾りて叙勲の式に妻と出でたつ
咫尺にて賜ひし陛下のみ言葉を皇居の砂利を踏みて聴きいつ
訪日の旅行疲れか幾日も眠り続ける老妻かなし
早乙女も要らぬ田植となりにけり移りゆく世の機械田植に
老いの身も忘れ夜なべに挿木せしこの苗誰の庭に繁るや

石橋 テル子

目玉ふたつ光らせて角を曲り来る帰心ひとつの小型車の波
いち早くサンタクローズに子は希う小さきツリーに手紙を置きて
ひっそりと朝を待ちいし花の位置変うるわが手に素直なを貌
母思うわたくしにまさる花なしと詩を読みて娘の告ぐる目差
(まなざし)し

切り紙のハートの稚な画に母の日を祝いて呉るる五才の吾娘は
石塚 やす

意外なる充足ひとつ庭隅に掘りいる生姜の太き凝まり
脆くなりし歯のこと寂しむ陽炎のかそかに揺らぐ日溜りに居て
カーテンの薄きににじむ昏れの色かくも黄金に光りて寂し
うすら陽に野草の穂波ひかりいて鎮まり久しき傷みを誘う
ありふれし労りさえも沁みる日に夕顔白く昏るる寂けさ

岩佐一步

マモナの実の熟れて地をうつ音ありて白き陽の照る砂深き道
早に哭き雨を憂いて重ねたる移民となりてながき年月
アイヌ語にマツカリヌプリてう故里の羊蹄蝦夷富士遠く恋いつつ
パイナーラの花季めぐり来て還らざる歳々々移民老いゆく
雨にけふるウバツバの海昏れなずみ滅びしタモヨの張声を聴く

陣内しのぶ

噴く如き火焰樹の花咲く下に仄かな昼の月を見ており
さばかりの風に葉裏を翻したる合歓若葉ひと日心を離れず
形成すことなく消えん夕雲の没り陽の中にしばし輝やく
心躍らすことさえ減りて人と行く無残に剪定されし並木路
火ともりし遙かなる日よ目瞑りて泰山木の花の香をかぐ

鹿毛正護

綿蒔の季節となりて書棚（ほんだな）の養父が残せるメモ帳を
繰る

綿を摘む娘ら暑さの中に立も汗しみる目を交わし居るなり
野生馬の群は駈けゆく高原の牧場の草は花盛りなり
乳しぼる小舎は明るくともされて仔牛に語る声の聞こゆる
農を継ぐ子とも思えばひもとかん日を想いつつ農日誌書く

開 沼 貴 代

あかあかと没る陽に雲は燃えており己が無力を沁みて知る眸に
紅バラのいく片白布に散るかたえ無雑作に置かれて光る拳銃
反駁の言葉をたたみ移す眸に澄み鎮まりて白き山茶花
光りの粒無数に積みて花重くダリア咲きいる極まる白に
さりげなく聴きし言葉が沈みいて昏れゆく道の歩みが重し

関 東 忠 吉

吾がおそき歩みもいつか椰子樹誌の一五〇号に逢える歎び
霜の禍を気にせず育つキャーボの初実り上げて祈る仏前
初冬の明けのみ空を北方へ光りて消えし流れ星見る
叫び合い亡友と山伐りする夢の醒むれば手足に痺れを覚ゆ
水浴びて気の清しさに裸足にて澄みしチエテの渚辺をゆく

唐 沢 弘 直

散り残るパイナの花のいくつかに陽はとどまりて迫るたそがれ
オリオン星座は小さくひそめり夜をこめて麻州原野を駆くる車
窓に

新しき選挙チツロを手に並ぶウルナに吾娘の大人びし顔
旱天を花芽立ちたるマンダカルに秘かな希みなよせて雨待つ
紅濃ゆく大空染めてたわわなるイツペの花に翳る冬の陽

片岡けい子

帰結なき思い抱きて来し夕べ海には海の雨そそぎいつ
父母の感傷は知らず混血の児を妊りて娘の眸明るし
怠惰なる逃避などあらず赫々と一日の果てを陽は燃えて落つ
限りなく山峡に湧き白き雲ひた流れゆく東の方に
山降る吾にまつわり流れゆく霧の行方を吾は知り得ず

加藤操

灯のともる頃を着きたる海の宿燈台の灯の点滅がある
遠く来て一夜明けたる朝床に波音折々角度が変る
いさぎよく波の砕ける荒磯に佇てば感傷の全てが消ゆる
荒波の届かぬ岩間の淀みには木屑いくつか寄せられており
荒磯に打ちつけし波砕けたる後にしばしの空しきがあり

川田幸子

霧白く流れ始めて最果ての我が住むアマゾン雨期明け近し
草分けの一員としてアマゾンに生きる限りの苦しみ多し
唐ゆきさんの出でし故里唐よりも遠きアマゾンに我は来にけり
日本を知らぬ我が子が唄う歌長崎の鐘は哀調に満つ
アマゾンに果つべき運命今はもう哀しまず赫き落日に対く

川原比露思

際だちて朝虹たてばよろこびの炎のごとく吾は生きたし
杳き記憶潮の香のごとよみがえる季の移りの翳りなかに
すずかけの一葉しばらく宙を舞いわれの虚心に触ることなし
風通る山の斜面はゆれうごく青き炎のごとく見えつつ
耐えて来し疲れしまなこ閉じてより波紋はてなく拡がりてゆく

河井美津子

水噴かぬまま赤錆びし噴水をつつむが如く落葉つもれる
原色の回転木馬停止して風に耐えているかすかな軋み
理解ある言葉聞きたき一日なり倒れし菊に支柱そえやる
静脈の浮く手の荒れは久しくて厨を出でし時にさすりつ
熟れ落ちし蜜柑黄に映ゆ拓人の汗でひらきて捨て行きし地に

川久保タミ

貧血とう医師の言葉の残り居て眠れぬ闇になでる傷あと
地の底に引き込まれゆく心地して臥す床の中冴えゆく思考
か黒き血吾が体内をめぐり居んもの皆重く暗く見ゆる日
アイシヤドウえがき若やぐ己が顔鏡に写し頬笑みて見る
踊衣粧着けて入りゆく控室友の視線のまぶしくもあるか

河村 哉 太郎

岡の上の水槽は孤高に佇ちておれ激流となる水溜めていん
冬草の香に傷痕の想いあり我が若かりき貧しかりにき
ユーカーリは葉を垂れて林となるところ貯水池ありて影を落せり
剪り急ぐ鋏の音に心和ぎ晴れざるままの冬の日昏るる
満天の星に対かえは清らなり穂先高々き柿の裸木よ

清 谷 益 次

れんげ草ほのぼのと野を染め初むる頃おいに來ぬここは正にふ
るさと

四十余年を距てて故郷訪うわれと誰か知らんやこの汽車の人ら
ふるさとはきょうも雨降る水張（みは）り田にこまやけき水輪
（みなわ）しみみたてつつ

「大雪（だいせつ）」に残れる雪を掻き掘りてふふみしを一生の
奢りといわん（大雪は北海道の大雪国立公園）

離れ来ればたちまち地図の上のみの遥かなる国ふたたびわれに

古 関 俊 枝

秋深み花卉散りたるフライボイアン直ぐなる花茎青空に立つ
菊ダリア素枯れし庭に咲き揃う紫イツペー王座占めおり
消ゆるなき吾が悔ならん和解なきままに別れし友は逝きたれり
絶間なく行交う車になぶられて異議もあるべしひれ伏す穂草
昂ぶりしを悔いいる吾にさりげなく嫁は振舞う常の如くに

小竹清子

緻弱なる機の振動の心地よし静かに流るる楽の音ききつつ
侵略のアラブ民族建てし町土壁は高しその裔ありや

ローマに見る古代闘技場の荒廃よ栄華と悲惨の跡をとどめつ
憧れのムーランルージュとリドの夜々美女に溺れて杯を傾く
ドーバーを航く船の上たわむれに吾が背を抱きし人を忘れず

上妻博彦

あるいはまた同化を阻むひとつとも時に思おゆ歌に耽けつつ
貧困に馴れきし妻が電灯のスイッチも入れず夕べ飯炊く
この国の人等蕨を食わざれば豊に萌えて妻子摘みくる
脆怯のまなこをもつにあらねども群をはなれて草を食む牛
歩をとめて我は見ており宙づりの架線作業の鉄塔のもと

熊谷優利枝

照り返す光なき湖肌寒し直なる蒲の生うる寂しさ
エルドラード湖いくばく残る夕光を沈めてしばらく保つ明るさ
音のなきいなずま走るたまゆらに広きアマゾンの川光り見ゆ
ゆくりなく朝の密林に息長き蟬の声きく宿いでて来て
十日いて通いなれたるサンパウロの街角に朝のコーヒーをのむ

久米光春

うめがたき溝の深さと諦めて紙一面に断絶と書く
共通の宿命もてば移り来し過去に触れ合う肩のぬくもり
混血の子を育てつつ妊らぬ汝は南国の陽に向きて笑む
又一つ店舗閉ざされゆく街の実感となり迫る不況感
離れ住む孫の片言聞きたくて週に一度はダイヤル廻す

国兼まさ恵

海見ゆる窓ぎわに顔吹かれて見渡す限りの夕映え紅し
旅より帰りし今宵あかあかと我が家の燈火輝きて見ゆ
遠つみね夕映え染めて冬の日の暮れ早き町灯をともしたり
月に照る夜の白雲ありありとみえつつ暗き椰子の木の立つ
今朝降りし雨晴れゆきて雲間より洩れくる光のやわらかき午後

楠木むらじ

義齒はずし床に臥せるわが顔の祖父に似たると子等ほ云いおる
付合の誹謗の座を逃がれきて相槌打たず心すがしく
潮の香の日毎に慣れて此の頃は感度のうすらぎ老いたるしるし
ものなべて響きあるべき浜晴の高きアパートすれすれの風
流れくる枯草匂う夕暮に掌をボルソに背を曲げて歩く

町田貴志

釣競争午後の二時より一時間君は一等八匹釣りて
残念賞吾は餌を取られて釣り得ぬのまま午後的一刻
釣狂の君が見つめて浮木なり午後の陽受けて湖面に白し
沈みゆく浮木引きあぐ瞬時なり魚のかかりて笑顔の君は
不注意に噛まれし指の血も忘れ吾は打ちたりタライーラの頭

三原洋樹

くろぐろと夜の山野を来し鉦車露ふくみいでするどく光る
習性のごと列なして乳ばしりし牛ら入りくる搾乳小屋に
朝市の野菜下してバンカ組む花焰樹の花ふりつぐ下に
救いなき言葉と思ひ夕かげる野を歩みくるひとりもだして
生みたての卵のぬくみ掌にありてもものいうごとし一つ一つが

蓑毛正淳

一杯の火酒に酔いたるわが影をうつす酒場の鏡は暗く
笛を吹く少年の眉幼なくて天心遠き月魄に似る
灰被ぐ燠の赤きが眼に沁みる焚火祭りの果てし夜の更け
再びの会いは難きと思う師の温き両の手離しかねつつ
地下の川行方も知らず★爰のひびき籠れる洞窟暗し

三浦久和子

たぎりたつ激動の果に成りしかと巨岩を前にあなうら熱し
一つ岩一つ山なす高どより湧きて流るる水光りつつ
風化されし岩ことごとく円にて太古のままの日に晒さるる
ひるげすと座れば岩の暖かし草すりて吹く風は鳴りつつ
身のうちの澱みことごとく澄む思い山の大气におのず溶け入る

宮西津多

移り来て幾年月も知らぬ間に生きながらえて白髪増え来し
おししのび涙のみ込みひたぶるに思う親心子が病いして
暮れそめて鸚鵡の鳴き声かしましく留守居の老いを慰めんとや
母さんの元気で暮す様を見て祈りこめしはこのままにして
何も彼も美しくあり過ぎしこと百五十号迎えて感きわめなく

宮崎多満江

朱唇より言葉こぼるる思いして仕上げし人形見つつかあかなく
亡き母に不器用な子と言われしを肯いており髪を梳きつつ
ふるさとを再び見ずに果てゆくを運命と思ひ地球儀まわす
年輪を見せて艶めく石畳踏みゆけば心にひびく靴音
燃料の値上るニュース流れて路地の樹に鳴る風は早や冬

水本 すみ子

美しき夕映なりしよ束の間の心の輝(てり)をわが愛(いつく)
しむ

慎みてわが享けとめん残照のかがやきて我のいのち染むるを
整わぬ心のままに訪いし海は無辺のいろに鎮もる
ひりひりと鞭のごとき言葉欲りぬ孵すものなき日日の続きに
漂茫とユーカリ若木の量感が澱みてながき裡吹き払う

水田 玉水

魚の目の潤むが如く汝の目に一筋の涙光りていたり
日の暮は只に疲れて家筋に幽鬼の如く帰り来たりき
作業着のみにくき我を意にとめず汝は美容院に我を伴う
十字路に今日の別れの接吻に幼き汝の面映えにけり
スバル星座認めて長きバスの旅シャバンテスを午前一時に過ぐ

森 久子

わずかなる心の和み保ちいる部屋灰色の塗料匂えり
幻想と現のもう羅の明け暮れに落日の茜は真実のもの
紫のイペーの花は咲き盛り心有るかに色彩放つ
胸底の淋しき韻をおしかくすなべて饒舌となりてゆく吾
暑き陽を受けて墓石にぬかずけば戯むれに乾きし風は身をうつ

森 重 扶 美

林間の落葉踏みゆく寂けさの身に徹るまで歩みゆくべし
葉裏しらく夕風に樹は揺らぎ立つわが去りて後夜とならん野に
吹き蘭(た)けしパイネイラの花彩淡くなりてようやく朝夕の冷え
秋空の深まりたるを仰ぎみて吾の吐息は吾のみが聞く
家遠く離れきて旅を行く秋の風物はみな寂しさ誘う

森 田 吉 久

住み慣れし家を去りゆく荷の上に穫り残されしザボン揺れおり
心病む吾が身と思ひ秋の陽にもやしの箱を積み重ねつつ
万両の色づき初めし秋の陽にコーヒーを煎(い)る香り流るる
秋深く日和の陽さしうけながら かに蘭の花鉢にこぼるる
夜を通しもやしを袋に詰めてゆく足先痛きまでに冷えつつ

森 谷 春 男

年輪のかたちとどめてひと夜さを風に吹かれし砂山の襞
傾けるテレビアンテナ見ゆる窓にくずれんとして重き冬空
みなみ風寒しとのぞく鳥小屋のとまり木にまだ茜残れる
こぼれたるパーマ搔き上げているらしき受話器に揶揄の声の明
るさ

ほし柿を盗み食いせし記憶ふと甦り来て遠き汽車の音

森谷風男

たくらみのころはあらね夕汐の嵩だつ海に入るとき怯びゆ
久々に泳げば脆く凋えはてしいのちいとおしおろかしきまで
末の娘が咲かせし淡き花の色昏深みたる底いに捉らう
墓石に蝶の屍は貼り付きて没落は汝にやさしきかたち
ひとすじの径が尽きんとするあたり木叢茜の色にかぎろう

中江克己

朝より土乾きゆく庭に居て又も追ひ居り古き断章
庭木の枝をおろして吾が心今日も整え温き日終る
虚空に茜薄るる李となりて吾家一日を音立つるなし
咲あげ地下鉄工事場唸り居て地上にミニの娘等の華やぎ
便所にも一輪飾る故里のかなしき生活にふれて来たれり

中井益代

西風(にし)に乗るバロンは流るる如くにて見るみる街の空遠退きぬ
み冬づく陽差しの中に咲きみちし蝦夷菊は貧しき庭にやさしく
濁り水冠れる畑の水かすめ蜻蛉とび居り薄照りのして

鴨頭草(つゆくさ)のはいもおれるひとところ露しとしとと
菜畑への道

辛うじて吾が子らに教え来し日本語いつまでかここに保ち得べ

中川原正子

追われている者のごとくに坂下るはずむ思いに友描きつつ
砂白くかかれる岐路の舗装路に古き標識読むと降りたつ
白銀のシーロが反す陽を浴みてこぼれ大豆を寄せいる老婆
何時よりか手荒くなりしことなどを思いつつ温き鶏を割きおり
嘘一つ吐きたるあとを背向けてコップの冷水一と息に飲む

中川原実

秋雨の冷えてつづけば工房に仕上げし卓の抽斗軋む
勘定の済みたる笑顔とぎ水に映して夜業のみ研ぎはじむ
生業を放れし無聊に彫あげし駒よ一声吾に嘶なけ
マレー産の紅のオームは故里のゆかりの色を変えず啼きつぐ
咬傷の施療の缺うごさせる若き外科医の一途なるさま

中西静世

心一つ通わせ言葉少なかりき車窓流るる灯明りの中
孤独なる思い一つをつぼに挿すドライフラワーかそけき音たつ
胸中に其の名を呼べば満たしくある思い有り君逝きて一年
満たされぬ想いに暮れし夜の卓に一輪差しの薔薇翳りもつ
汚れよどむ汀覆いて布袋草夏逝かして咲きいそぐらし

西田季子

無痛のものを集めて作りたる唇赤きピエロの人形
朝霧の淀みは探し山遠く石割る音のやさしく聞ゆ
叢に朝の虫を鳴かしめて峡空ひそかに藍を深むる
我を容るる空の拡がり無限にて点となりつつ黒き鳥舞う
若者の歌声大らかに聞え来るかく過ぎゆくか或日或時

西森覚

永病める子の蒲団をば日にいく度干場を換えて冬陽吸わする
病めるを癒すすと植えし花アロエ冬庭に朱を染めて彩どる
孫たちが去りたる庭に赤き実を木の葉に盛りて供え分けあり
同化せぬものの定めか落葉せし銀杏は土に染まず枯れゆく
鍬を曳くほかに能なきわれに宛て繁煩なポ語の書状また来ぬ

西山陽都

心うつ幾つかの歌誦しつつ遺せし人の面影偲ぶ
追憶に耽りて愉しこの日頃気負いはすれど我も老いたり
若き日の数かずの愚行生涯の染みと残りて拭う術なし
還るなき歲月とは知りながらかくありしなばと思う数かず
わが幸はこれのみにても極まれり明治大正昭和を生きる

野上とし子

塩盛けの桜の花を茶にひたし共に故国の春を語りぬ
ふる里の山に似たりといつも思うその大山のたそがれてゆく
帰り来る夫迎えんとひそやかに化粧をするも年に幾度
移り来て農一筋のわが指よようやく寒さに痛み覚えぬ
悦びも悲しみも同じ過去のもの夫のかたえの安らぎにおり

大場時夫

雨荒のしるき山道かわきつつ石の風化は白くはじまる
汐風の吹き入る胸をおのずからひらきて遠き国憶いいき
こらえきしのみかと思うひと叢の青き木賊のごとき生きざま
午後の陽の差し入る窓の明るきに羽すきやまぬ籠の小鳥ら
咲きかある花に対していたりしがたれに告げんと電話をとりし

小原睦子

折目正しくシャツにアイロン掛けて居ぬ吾の営為の日々の型に
十字架を頂く寺の尖塔のなお厳そかに夕曇る空
相共にとエバがすすめる実を喰べしアダムの心を愛しみ思う
遠く開く夕べのミサのアベマリヤ掟毎(かも)され行くとも優し
残照の淡き紅の丘の方(カタ)早や失楽の悩みはあらし

織田真弓

媚の色売ることもなくひっそりと戸口の狭き田舎屋の店
紫の小花揺るるを見ておりぬ思惟乱されぬ午後のひととき
もの足りぬ思い擡げる冬の夜琥珀色の瓶少しかたぶく
いつまでも荅のままの赤き薔薇今日は少し位置変えてみる
一台の車が門を出でゆきてもとの形に門閉ざさるる

小笠原富枝

死者の声聴きわけるまでの時経たれ瞑むればカンナの朱の列続
く

入りつ陽のかけに重なり壮年となりたる汝が鋭き限を向くる
より遠きひびきの中に安らうべく幼年期を子のいのちとしつつ
幼き日のアルバムを子の章として若者の高き血の音封ずる
日月の均せし土に昼顔の紫冴ゆる子の墓どころ

緒方新男

恥らいて床に入り来る十七の新妻が消す枕辺の灯よ
稜線に黒くうごめく人影を小さしと見つつ坂鋤き登る
たわやすく人は死ぬるか長女の廿才が永久に残すおも影
妻の云う程罪悪と思おえず他人の花をわがつみし時
はるばると求めて来る幸福もリオの美景に止まらずあれ

尾形天涯

薯を植えトマテを植えて我ここに奥津城どころとなるがに思おゆ
ぎりぎりの生活を子らに強いており農村不況の声の久しく
批判なき民族(たみ)なるか骨肉の絆裂きけり勝ち負けの争い
現世に幸うすかりし汝なりし永久に安らぎの座父は祈るも
子の幸を思い言いし事すでに古き思想とそしられて居り

大平綾子

降る如くフランボヤンの葉散る陰に嫁と語りつサツコ繕ろう
窓を通し明るく照らす満月に幸い想う湯にひたりいて
霜害にたえて稔りし珈琲が秋めく風に赤実増しゆく
友も我も眼鏡に頼る身となりて相見ん月日の長きを思う
整地終え蒔きつけを待つ農吾等何時迄続く異常セツカは

岡本喜代子

方位あらぬカヌーの蒼き影抱き夜となりゆく樹はあり
庇護されて生きる範囲の広からずリボン・フラワールの罌粟朱く

燃ゆ

地に落ちし白き椿の花びらを土色となすまでの過ぎゆき
おそかりし出逢い嘆けばアザレヤはわれを許さぬ白に輝く
さりげなく妬心を秘めてふふみたる金平糖よ角いくつ持つ

岡野 でん子

事業半ばに逝きたる夫に志を継げる子等の仕事を一目見せたり
睦まじく語る夫婦を見し夜の一人亡夫を恋いてねむれず
嬰兒を抱き乳やる仕草など未だ幼なし吾娘を見おれば
大型のトラックあやつる運転手のカーブ切る時の動作逞し
訪日果して帰る機上よりブラジルの地の見えしに安らぐ

奥野 精一

神経をすりへらしつつ一日を言葉やさしく妻は商う
売上げを追うことのみに働きて過ぎてゆきたり我の青春
眼まぐるしく店に働けば矢の如く過ぎる月日と妻の言いたり
太陽は地平線を離れつつ果てなき牧原くまなく照らす
自動車のフロントガラスに反射して燃え落ちる陽は眼にまぶし

大西 阿哲

亡き汝の墓土もちて族待つ瞼の故里にいまぞ旅発つ
歳月の流れ速きに百日紅父母のみ墓を覆いていたり
傷痕の疼きに耐えて原爆の牲（にえ）が顕ちくる跡に佇む
再会のあてなき訣れ潮風は茫漠と吾が裡を吹きゆく
再会のことには触れず芦ノ湖を一日巡りし君は今亡し

小野 政子

ひとむらのアロエに太き茎たちて燭の燃えたつ如き花持つ
盛衰は移民にしげし破産せし人歩みおり頭を垂れて
地を這いて生きる女の一人にてビニール被り草むしりいる
移住せる親が故国より持ち来しはこの古行李のみにはあらず
病む夫と言えども我の楯にして女一人の養鶏をする

小野 寺 郁子

耳さとく人待つ吾の体温を奪いて救急車のサイレンが行く
携えて野に出ることもなき吾等に広場の椅子の素気なき固さ
ひろがりて互みにふれ合う水の輪に見えぬ魚等をかなしみ想う
目を上げし時翔び立ちし鳩の足願いのさまに折り畳まれき
人も樹も没り陽に向けば鮮明に表裏二色の境を持ってり

大 城 俊 子

萌えいでし浜桐の葉のひしめきて黄葉抜け殻のごとく散りゆく
漁師らの家並みも海に沿う土手もひとつ束ねに夕やみ包む
闇ふかき沖に閉ざされいる船の瞬くに似る碇泊灯は
端正な君が面輪の崩るるを密かに待ちて酒を注ぎやる
酒をおびし吾が眸うるむと言いし人裸木の尖りが凍て空を指す

大和田 房子

水平線はるかにしるけし蒼空のもと豊かなる河のひろごり
白雲の傾き立つ際に連りて海かとまごう河の大いさ
うから住むカラジンニヨの街麦熟るる丘に囲まれ鎮りてあり
十年の逢いを思いて訪れし麦黄に熟るるカラジンニヨの街
解かれたる思いに出でし旅なるに心にかかるは孫のことども

佐伯 さと子

心外な誤解をうけてすべもなき一人ぐらしの女悲しさ
わだかまり溶けぬ心を持ちしまま友人に対えば棘ある言葉
霧雨の続く夜半ねむれなく別れ住みいる夫を恋いしむ
家出せし息子を待つは愚なりや去りしその日がめぐり来たりぬ
故里はふぐに名高く寒ぶくは又かくべつの味をもちたり

斉藤 信也

山峡の深き谷間を縫う如くクワレズマの花咲く。パラナ路をゆく
清楚にて哀歎と云うかその姿クワレズマの花に親しみをもち
朝霧は深く谷間を包みいて寄り添う妻の寝顔を覗く
決断もつかざるままに時期を待つ水の流れと云いし古人あり
ビルの上高く聳える時計塔ちぢまる思い刻きざみゆく

酒井 繁 一

幾日も体の疲れ去らずして陰翳もなき眼と思う
穩かに身は移りつつ花季ながき夾竹桃を庭に植えたり
奈落の道たどるが如く愛慾は時々にして生身に醸す
自らが身につけしものあらざれば零落などと言うこともなく
おとなしく家にこもりて諍わず殺鼠剤など買いに出でゆく

桜井 正 己

咲き満つるパイナ包める月光の陰なすあたりしきり虫鳴く
外燈に映えて茶畑の鳥威し時に鋭き光を返す
ジャラグアの汚れたる穂の幾つかを付けて棉の荷通りゆきたり
三寒四暖今日温かし鈍色の没陽は長く貨車に懸れり
郷愁の今に失せねど徒らに騒ぐ血もなし鉢に水やる

佐藤 い ち

昏れてゆく入江のやぶの中どころ声ありてカヤの屋根のみ見ゆる
ひと日の生きたしかめつつ居る如くにも夜毎丘の灯見てよりい
ねる

一陣の風おさまりて何ごともなかりし様に樹々のたいらは
きざはしに曲りくねれる影ふみて着きたるところの土白かりき
足らざれば足らざる中の充足を見いだすことも知り得て長し

佐藤 閑 人

香焚けば写真の中の君の顔笑みかけてくるも今はかなしき
コスモスの影を落して揺れいたり君の墓前にしばしたたずむ
とつとつと歌いつづけて生活の歌は尊き移民の記録
野の道をゆけばすすき穂頬にふれ君のかなしき歌を思いぬ
耳少し遠くなりたる君よりの電話の声の大きかりしが

佐藤 一 英

かけてある竹の柄杓は目にせしが清水は手にて掬い飲みたり
新年の誌上名刺交換に今年の名なき友を気遣う
歌仲間の心易さに新年の喜びも原稿用紙に認む
試みに作りし小さき温室にさすがに早しさし木の根付き
嫁ぎたる娘が訪い来しが妊りの話には触れず帰り行きたり

関 戸 香 代 子

教師と云う職業故か意外なるきびしき折に見する吾娘は
人並に負い立ち世に出てゆく子等へ裡ひそかなる吾の充足
自ずから構える如きかたちなり初対面の客に対して
ひっそりと椿の花の散る夕べ儂く逝きし友を憶いぬ
寂しきは寂しきなりに世を処するすべもいつしか身にそいてゆく

千代都

きらめきて山間に入る残照に牧牛の群のくく啼きゆく
門に立ち我が帰り待つ夫なれば老いゆきて知る夫婦の絆
限鏡かけてはじめて見ゆる丘の上小さき家に小鳥飼いたり
渚ゆく親子の写真一瞬の幼影過ぎて色褪せにけり
節高の指にはまらぬ結婚の指輪みがきつつ過ぎし日想う

瀬崎 涛 聲

しら雲のかがやき紺碧のそらの色ととしの夏もいよいよ探し
人々はさつさと此の世捨てて去る今日も二人の邦人逝けり
あり経たる八十年（やそとせ）の生何なりやあとに残らむもの
何もなし

めずらしく我の居間にもさし込めるこの晴天の無碍なるひかり
好運のその予兆とも西ぞらゆ東へなだれいるいわしぐも

柴 倉 知 余

干し広げしシーツの影の細くゆれ早も正午の刻かと思う
生れ出づる命の声のたかだかと吾に八人目の孫誕生す
夏の陽をはじき返して浜木綿の咲き香る中娘等と歩めり
愛惜の想い幾度重ねきて空気の如くなりて老いゆく
夕やけの空の彼方に望郷の心うずきし日も遠くなり

信 太 千 恵 子

三州に繋がる瀑布ふたたびを来て感動の想い鮮らし
汐風に錆の汚れも寂しくて海浜の家白く閉ざせり
まとめれば意外と嵩む釣り支度気負う夕べの冷えつのりくる
保温器の中なる孫を飽かずみる家族の一人となりてねむるを
白線を引きたるごとし飼に並ぶ雛にみほるる吾が掌休めて

椎 名 千 代 子

馴らされし一人の明け暮れ破るなく過ぎてゆくなり女の花季は
空虚にも似し清しさか白き花活けて一人の長き明け暮れ
夕もやの中悔い探し真実を告げて失う心の平安
仄かなる胸のともしび守り居て惑うにあらねすでに疲るる
愚かなる想いのまつわる日々にして心の負担増してゆくのみ

清 水 節 子

アベンカの静かにゆるる秋日和吾娘との会話つきることなし
朗かに明るき君と語りつつ吾になき良き性を羨しむ
黄の蝶の荒き川渡よぎりゆくあぶなしと見る吾にかかわりもせ
ず

吾と同じ年齢と言う女の死に脊の冷々として落着かず居り
足なえの姉と歩調を合わせつつ昼静かなる墓地を歩めり

篠田真佐子

もの言いてうつろに黙す一刻を昼の時雨はさわだもて来ぬ
深みゆく寒さに閉せる硝子窓の外に枯葉は軽々と舞う
後継者定まらぬまま老いぬれど夫は新墾にかけて生きゆく
抗いて出でてゆきたる子の部屋に激しく揺れいる首振り人形
つきつめて思うが程のこともし飯ふつくらと炊き上りたり

篠原岳州

オンサ鳴く樹海の中の一つ家に住むとは告げず父母に便りす
音もなく樹海に夕日沈む時鳴くあの鳥が今日も又鳴く
御民我れこのブラジルに果つるとも祖国し思う命あるまで
野良着きて生きのたつきの朝夕に浮かぶ思いぞ我が歌にして
生けるものの定めも淋し秋の日を残りの蟬のかそけくも鳴く

城田つたお

王者のごとおごり心よ一人見る日の出の海の金波銀波よ
豊作の取入はげむコロノ等に声かけて行く我もたのしや
平凡な過去りなるも四十年きおいはげみし事に悔なし
いやな事みなわすれんと思ひ居て大事な事もどんどんわする
平凡な過去りも又よしとして遂の日迄の日々をばげまん

滴草ひろし

今日の幸祈る気持で繰る窓に映えて輝く暁の茜は
花房は短かけれども棚に垂れ紫濃ゆく藤は咲きたり
睦みつつ囁く如く樹洩れ陽を浴びて止まれるつがいの山鳩
大輪に咲いて誇りし華麗さも一夜の雨に萎れしダリヤは
姦しくよしきり鳴いて故里の休耕田に葦は茂れり

簀戸勝子

かにらんの花房揺りて鳥たてり風寒き窓閉ざさんとして
心まさに亡くして忙しき幾日過ぎ今宵下弦の月が光れる
活けおきし花燃ゆるがにひらきおり空家の如き家に帰れば
ともかくも言わざることに思い決め向いゆく山の霧深きかな
受話器よりみどりこの泣く声聞きて本閉ざし立つ今日の終りに

末吉美佐子

ようやくに確かめ得たりと思ふ語の意味重くして己れ搏たるる
蜂の巢の銃眼も鳴りをひそめつつ白き秋の陽ばかりなる庭
風出でしを言いて硝子戸閉めに立ち言い募りたき言葉を隠す
薄陽さす波打際にたゆたいて冬の海月は水よりも透く
裏庭に置きすてられし椅子不意に倒れみずみずしき苔乱したり

鈴木里子

故里の絆も遠くはじき豆はじきしこともくぐもりて生く
湯煙りにしめれる臉拭きながらにかくこぼるる限りなき悔
わだかまる岩窪の渦おだやかにかわして河は澄みて流るる
春雷音に裂かれし三味の音耳朵に震いそのまま吾の贅がくずる
る

根強く八十路の母が物を書く心を護符とし耐えて来りぬ

須沢志げ子

吾が先祖が設計せし松本城は緩ぎなき威容を示す
復元工事中ばにして皇太子明仁親王お成りになる
緋の色も鮮かなりしカーマ掛けそのままにして娘は嫁ぎたり
あわただしき幾日過ぎし今にして娘が嫁ぎたる実感の湧く
仄かなる娘の香の残る部屋ぬちにピン止め二本落ちているなり

田所君子

崩れゆく心耐えつつ歩む野に咲きしずもれるコスモスの花
久々に達いたる友と語らいて佇つ街角のジャスマイン匂う
淀みいるひとつの言葉に眠れぬ夜離反の心闇にさまよう
頑なにひとり歩めば池の辺の紫陽花まるき影寄せ合える
諸々の想いに目覚めいる夜の窓を木枯ししきりにゆする

多 菊 ふ み

教会の階段のぼりて聞えくる聖歌の流れにしばし佇む
白壁に大きく描きし幼子の凶画を夕陽は暖めている
澱みたる川面にしばし映りいる安らかなりき夕焼けの雲
幼子を亡くせし女いつまでも夕陽の中に佇みている
乾きたる両手いだきて夕べの道踏みてしまいぬ幼の凶画を

高 原 万 里

在らぬ子の声聞くものか戸に立ちて空しきまでの心を支う
峰の雲金に輝き朱に染まりくずれて谷より夕やみせまる
年古れば墓標のクルス朽ち果てぬ縁者も遠き友が奥津城
雷一つ戒めのごとくとどろきて年の始めの祝宴終る
演奏を終えて出で来し甥の面常の少年にもどりてやさし

高 原 ま す 子

明けのセミ木立の奥に鳴き出でて露しとどなる草を分け行く
ひそかなる朝霧の中教会の聖母の像に真向いており
朝の日に真向う渚の群れカモメ時折りきらめく大き翼の
黄の小鳥群れ飛ぶあしたの白砂に吾が足形をつけて歩めり
梅雨晴れの残照浴びてアヌー一つ枯木の枝にひそと動かず

高橋 よしみ

朝より大学都市の中空も霞にあらぬ汚染雲層
首重くシプリペジューム咲き終えき都塵まみれの一月余り
純白はむしろ侘しき咲き尽きて花のおわりの変色しるき
決断に惑う六月花期過ぎて窒息したるとき幾日
韻くなく涸れし真昼の土に落つつつじ僅かに原形保つ

武本 由夫

墓所出でてバス待ちいるに疲れたる色の夕映え塀にむなしき
墓処より見おろす野地に鎮まれる寺棟は低し薄もやの中
下町の拡がるはたて工場の煙あわわ直ぐ立ち消ゆる
孤独なりし友の死思う夕日照る高圧線の鉄塔のもと
おぼろなる想い影絵となりて顕つ蒼きイタペチの峰を仰げば

滝 夕 起 緒

裏山に春立つ風も野を渡る風も父亡きあとは聴えず
腰痛を感ずる日はケブラペドラ草摘み来て茶にすすり居り
笛の音に合わせてビオリナ引きあれば手術のあとが微かにひばる
息子等に自動車とられバスで帰る日曜の別荘地はにぎやかなり
養鶏の不況に村はさびはてて四方の別荘はみな外人なり

田中朝子

母乳期の愛還り来てひとときの陶酔マンガの実垂るる下
神話ひとつ思いおりたり街灯に照らされて雨条なして降る
貝の声密かにきこゆ朝浜を奢り知らざる足裏に踏む
脆き心支えつつゆく砂浜のわが足あとはいつまでのもの
ゆかしむる悔いなどはなくもり陽に樹皮白々と装う束の間

谷佐稚子

フェリアの近づきたれは子供らの話題は浜の砂像のみなり
額に垂る汗をも拭かず砂浜に崩るる砂像競い彫りおり
砂嵐吹きくる浜の渚辺に逃げゆく蟹を子等と追いゆく
吾が生と通う小説読み了えて孤り夜更を心なぐさむ
夫子らが寝ねにし更けを着ぶくれて昨夜の続きの糸編みつぐ

千葉美夜

明日をのぞみ重労働に耐える日々山かけまわる子らたくましく
戦友の手に運ばれる汝の枢今弔砲のわかつ幽明
ほろびしもの二度とかえらず濁水の大河は昨日も今日も流るる
膨大な濁水落下の激つ音圧倒さるる白日のもと
謙讓のこころ持たんとわが思う岩床激しく打たれるときに

茅根 哲子

花咲けどわが家に閉ざす窓ありてかの時遠く還る日のなし
深き夜の風は無色の中をゆく眼底に浮かぶ湖一つあり
垣根咲くミモザは夕べ花満ちてはかなしと思ふ揺られてあれば
記念樹の若葉に五月の風わたる縄とぶ児らにわれも交りて
秋天の山のふもとを曲りゆく汽車見ゆる丘に見らと凧あぐ

徳 永悦子

華かな宴の席に友と居て吾が荒れし手に視線まばゆし
勘鈍き土人等の中の夫の声朝霧の中より厨に聞こゆ
期待して励みしジャンプも無駄となり夫と向き合う表情固し
夜の更けてタイプを叩く音聞こゆ一夜徹して末娘は習う
黒雲の中を貫くいなびかりベレンあたりは雨が降るらし

徳 尾 溪 舟

百五十号刻みし椰子樹と五十余年異国に過ぎ来し老移民我と
目下に大日輪の上る見ゆ五十年ぶりぞ日本へと飛ぶ
腰曲りし老婆に従い参り来ぬ荒れ田の中の先祖代々の墓
語り合う事も無くして妾はテレビ我はごろ寝し日曜暮るる
睦み合う家鳩見れば移民われかかる思出も無くて老い行く

富岡清治

和服着し坂根大人の面影よ歌舞伎役者と呼ぶべかりけれ
戦争とともに消えたる正金と椎本文也のその后を知らず
文教にそのころ居りし阿部青杜顔を知らねどその歌集読みし
かつて椰子樹の課題詠受持ちし稠子老中山は横浜に健在
一生を貧乏と歌とに終始せる菊治は歌碑をこの国に残す

坪田義雄

うすすみれ脂草の秀の乱れゆくはたてに冴えて冬の山見ゆ
いち日も終りと思う杯に満せる火酒の透明にして
暗黒のカンポス線を下りつつときの間高く燃ゆる野火見ゆ
物の怪のごとく静まるバナナ樹が時折月の光をかえす
自ずから虐むごとき数刻を充足として今は眠らん

土屋三五郎

久びさに注ぎ給いし慈雨の後萎えし草木も色鮮かに
雨の後寒気酷しく染みる身に愁うはただにコーヒーの上
早明けし視界もとどかぬ朝霧に吾の呼ぶ声に愛馬の嘶き
サンパウロ朝霧敷くやに浮かびいる喧噪未だし街の息吹とも
再会を約して往にし我が友の俤がつよく心に残れり

土産 哲子

なまぐさき魚売られているかたわらに咲く朝顔の放つ清しき
こだわりを海に放ちて幼らと小魚すなどる一ときの無我
干潮の水あとしるき磯岩を黒く彩どる幼マリスコ
艦影の水平線に消ゆるまで見ていつ冬陽脊に温かく
公害の語韻重たしゆくりなく見るクバトンの並立つシャミネ

内川 愛季

街灯が一つ一つと消えてゆく鎮もる街に朝焼けのして
逆光に散る一片の病葉に脆き理性の翳を負いたり
蟠かまり自ず心のしこりともコップの氷片揺れて音鋭し
花冷えの空透明にして惑う一つ行為の翳りともなう
枯れ粧う草木はなべて順応に枯淡に生きぬ一と日を終てん

上田 幸音

雑談の声はずみいて手に持ちし茶器に番茶の匂いがゆれる
ふつふつと湧くラジウム温泉に身を浸しささえ来たりし手の皺
のばす

叱られてベソをかきいし孫二人テレビの画面に屈託なく笑う
夕近き園に鳩の群なして一羽一羽が影引きて行く
いくばくの労賃なるか道路人夫は夕光背負いて土掘り返す

上原知水

避暑季節めぐり来りて朝より山のホテルに煙たちおり
沖縄より移し植えたる蘇鉄にて霜の朝を緑さやけし
身にあまる花びら背負い行く蟻の時につまずく風の吹く中
「二コント」と云う死語もなお使用して老婆はチシヤの種子を買
いたり

めぐり逢いし思いに似たり雨季明けの空に清けしオリオン星座
植村かず

陽光の揺れたり庭に頭つ影のひとつの声が耳底に鳴る
逸れ易き心支えてゆく路のジャカラダ春のいろに拡がる
街燈に佇てる娼のながき影生という語のかなしみに触る
背かれてなお耐えねばと歎かいの友の片頬にスイナンの炎え
谿径にイツペーの花びら散り敷きて悲しきまでに保つ黄のいろ

梅崎嘉明

聾となりて降りたちし空港に朝より炎えて火焰樹はたつ
リオネグロとアマゾン河の合うところ水渦なして水草うかぶ
方位感なくしつつ暫し息をのむ澄む水と濁水がしばし渦巻く
清流が濁水と合う一ところ盛り上りつつ逆波はたつ
水に浮く樹木くぐり来て大蓮の花に孤りの心通わす

牛草茂

まなことじて合掌すれば山の家に秋朝風のかそかにわたる
刈り了えて我が掃き寄する頭髮はいくばくも無し白髪まじりて
秋冷えの夜は片ずれし毛布をば直してやるも眠れる妻に
クリストの復活も奇蹟もそのままにうべのう我となりにけるかも
うつしみの君に会うがにぬかずきぬ重信河畔の望郷の歌碑

(松山)

内城花

禁じられしバロン数増す夜の空の赤き浮遊を見とれてあかず
母と子の語らい優しく匂わせてる坊主ゆるる夕暮
階の窓あければ入りくる騒音に今日の仕事の手順がきまる
戴きし羊齒鉢目につく位置におき友の訪ずれを待ちているなり
もつれつつわが前去りし蝶二つ忘れいし傷のまたもや疼く

若生五十路

今日ありしうつしみ隔つ枢なか花にしずもる君の面輪は
金縫いの黒衣を装う君にして誉めやることも今日を限りとす
十字架に戒名などを記しいて移りし果ての哀しみが来ぬ
病床に君が問いたる木蓮は霜枯れしままに出棺のとき
泌むごとに吾娘の嗚咽を聞きいたり棺を乗せし前車見つめて

渡部南仙子

地の裏に独り移りて五十年我が三世の嬰の蒙古斑
水量のいたくおとろえし滝に来て咳こぼしつつ独り描きおり
朝な来て庭のピタンガこぼし啼くつがいのサビア待つに今朝来ず
露しとどなる朝まだき轟々と働き始む大豆収穫機
孫が読む幸福論と言う外書南天の葉を葉りてありぬ

渡辺貞子

我のみの想いに耐うる一時に徐々に花開く孔雀さばてん
一歳の終りを飾る棉紅葉色きわまりて散り急ぐなり
結婚をうべなわぬ娘よ今にして自主持たざりし我と思ひぬ
かけ声をかけ合う如く懸命に獲物を運ぶ蟻の一群
今一言うべき事をためらいつコップの水を花に注ぎて

山田朴

チエテ川水は重油の漂いて魚は見えずサルト橋淋し
遥かなる聖市の上空雨模様吾が住むイツーは陽の照っている
ヨチヨチと歩く見知らぬ幼子が我を振り見て手を上げて往く
うす曇り曇ったままの日が暮れて南十字の星薄く光れる
幾年も根絶えしダリヤ今年から祝うが如くに花咲いている

八卷 耕 土

何づ方に漂泊い終てん空そ身の死語となりゆく歌を詠みつぐ
回帰なき躬をば果敢なみ訪日の友が土産の包み見ていつ
邂逅の時なく逝きし友しのび遺歌集読めばこもり来るもの
因襲に耐えぬ疼みに常夏の向日葵は陽に背き黄に炎ゆ
国境の旅に家郷をしのぶ夜の河港に響く汽笛聴きおり

八卷 た け 子

歩みしは枯野の果てと思ひし日ゆくりなく合う冬の残照
悲愁など捨てし姿に温くぬくと冬陽にあてし布団にうもる
希みうすく生きて老いゆく日に映えて極楽鳥花庭にはころぶ
装いて向う鏡に新しき眼鏡なじまず心はくもる
クリームを惜しみてつけし若き日の甦りつつ向う夜の鏡面

八卷 汀 石

かつて亡父釣りし岸边に佇めばゆるる水面に映る吾が影
鍬の柄も涙に濡れし日の還る珈琲耕地の中を旅ゆく
三本の孔雀の尾羽根投げ入れて花なき季の壺にしたしむ
カナリヤの囀り耳底に残りいて空の鳥籠吊りしままなり
吾が咀嚼せしものやりて育てしが時とし反抗の牙見せる犬

山下 降

沼に垂れる細き柳枝の若き葉をかすかにゆする今朝の風あり
対岸の嶺より峽をはい降りてマンダローブの原つつむ霧
海岸の浜桐の葉は散り果てて春待つ蕾は未だかたしも
州境の橋渡り来る牛の群角の長きは鈴ならしつ
癒え克ちて日暁せし顔のぼり来る潮ざいひびく浜桐の径

山崎 益一

七〇軒一直線のバイア街道現れては沈む地平のはては
古書物の中に出で来し領収証四十四年前の盲腸手術代
満開の珈琲園をふり向けば白花は湖水の如くまぎろう
日本よりの伯国投資頻りなり国政変革の兆しのごとく
この幸は終の日までも続くべし聞けよ亡き妻「追悼の歌」

米川 久

バナナの渋に染まりし吾が指のきたなさが見られて居りぬ署名
する時

真夏陽の光りの中にとび去りし蝶の孤独と吾の孤独と
ユーカリの秀枝のゆるることもなく静もりし朝の霧流れゆく
朝の陽に透けて浅黄にかがよえるバナナ園広し連れられて来て
いつよりか降りはじめたる春の雨椰子は黄色の花こぼしいつ

米 沢 幹 夫

わが歌の載らぬ椰子樹の幾冊を重ね灯更けし卓に調べる
停電の間も惜しみつつ蠟ともし古き椰子樹の歌かぞうなり
達筆な書体に書けれど辞書にすらなき原稿の文字に苦しむ
張りつめて暮れしひと日か校正に汚れしおゆびいたわり洗う
記念号の編集了えしわが耳朶にカテドラルの鐘鳴りて韻くよ

女性時代への移行

椰子樹百号より百五十号まで

井 本 惇

さきに、椰子樹百号記念号のときも私は五十号から百号へかけてのコロニア短歌、椰子樹作品の推移や変遷に就て触れた。

この度もまた、百号から百五十号へかけての動向について触れることになった。その間ずっと選歌をやって来ている私にとって多少の感慨めいたものがないわけではない。一号二号、いや作品の一首一首に文字通りタッチして来たわけで、そこには、実感そのものとしての一つの堆積がある。しかし、これは、一面甚だ漠然としたもので、感じとしては捉えているがいざ一つのかたちにまとめようと思つた程容易でないのに気付かざるを得ない。

それと何か言おうとすると結論のようなものばかりが頭のなかに浮んで来る。これには私自身少々うんざりしているわけであるが、そこには何かこの時代の性格のようなものが存在するのではあるまいか、と言ったような気がする。

いま、私は、百号から百五十号へかけての椰子樹を傍らにおいて、とつおいつ、読みかえしたり見たりしているわけであるが、記録的な図式的なことは何うも不得手な私のことである。

極く大ざつはなところで感想的なことになりそうであるが、まあそう間違いもすまいと思う。

ところで、私は、百号記念の特集号のなかで、五十号から百号までの期間を、比較的にふるわなかつた時代ではなかつたかと思う、と言っている。なぜそのようなように書いたのであろうか、と今考えてみると私の頭のなかには、特に戦後のある時期のことが強く作用していたのでないか、と思う。それは戦時中に抑圧されていたものが一時に噴出した特殊な一時期であった。そうした時代との比較はとも角、いまの時点においてふりかえってみると五十号から百号へかけての間もそれなりの振幅と波動をもっていたと思う。それは当時の新人賞、椰子樹賞一つを例にとってみても明らかである。当時の椰子樹賞授賞者は授賞者としての作品活動を行ない、そのうちの何人かは現在のコロニア歌壇の中心的な存在をなしている。つまり、五十号から百号へかけての時代は百号から百五十号へかけてのコロニア歌壇を形成するエネルギー源をなした、とも一応言えると思う。

ここで、私はいきおい、当時の椰子樹賞と現在の新人賞、岩波

賞との比較をしなければならぬことになる。

岩波賞はコロニア歌壇の先達、岩波菊治を記念して設定された新人賞でさきの椰子樹賞と性格的には似たりよつたり、と言うこととなる。何回かの該当者なしを含めて本年度でその第十回目を迎えようとしている。応募者と言えばそれこそ様ざままで歌歴二十年三十年と言う人たちから作歌をはじめて二、三年の言わば初心者の部類にはいる人たちまで網羅して毎回ごとにかかりの数の人たちが応募している。作品の傾向と言う面からみると作歌歴のながい人程比較的に写実的な、所謂アララギ的な写実主義の洗礼をうけた様な作品が多く、年代が下るにつれて感性的なものが多い。非レアリズムと言う程でもないが何か気分的なものが先行している、と言った様な作品傾向である。これは、コロニアの短歌が辿った作歌傾向としてみるとかなり重要な事と言える。これはかなり熱心な女性の作者の何人かによって齎されたもので、はっきり言えば椰子樹賞の、それも主として女流の何人かによつてもたらされたものと言つてよい。今ここにかりにそうした作品の幾首かを挙げておすれば、

営みはひそやかにして球根にまた純白の花期めぐり来ぬ

弘 中 千 賀 子

ジャカラランダの織き胞子が開きゆく帰結のあらぬ思いの日に

同

記憶すでに傷みを持たぬ婚約の指輪空しく夜の灯に光る

陣 内 しのぶ

節を曲げず生きたるなどと言いがたし常に冷たきわれの体温

同

たどきなき想いに佇てばウインドの宝石驕慢な光りを放つ

水本 すみ子

夕茜燃え盛る窓のブラインド深く閉して未来なき思慕

高橋 よしみ

過去の章塗りつぶしゆく行間の真実の声に刺し貫さるる

同

それぞれ、四回、五回、七回、八回の椰子樹賞受賞者の作品である。

こう言った様な作歌仰向がよかれあしかれ、コロニアにおける女歌の系譜として一般うけがしているようで岩沢賞の応募作のなかにもかなり散見出来るしまた椰子樹の投稿歌のなかにも様々なかたちで提出されて来る。これはまた、男性の作者にもかなりの浸透度をもっているようで、たとえば、

苔の花かすかに咲くと限りなく失踪する朝のわが心なり

川原 比露 思

と言った様な具合である。もつともこうした傾向は何もコロニアの新傾向ではなく、日本の総合歌誌などを開けばいくらでもあげることが出来る。いまちよつと手もとの雑誌のなかから目についたものをひろえば、

シヤベルカー夜を噛みている廃墟すぎて悪感のやうな呪解がき
たる 生方たつゑ

コロニアにおける女性作者もこうした系譜のなかのものとみる
のが至当であろう。こうした気分的な感覺的な、ともにむずかし
い漢語などをちりばめて一首を引きたてる、と言ったような作品
も、いざ作るとなると案外むずかしいものでかなり高度の作歌技
術を要するようである。

これは、先にも少し触れたように何も女性の間だけのものでは
なく、ある層の男性作者のなかにもかなり浸透している。一般的
に短歌の新らしさ、として認識されているようだ。私もこうした
作品や傾向を敢て否定しない。作品が新味を持つなめには、ある
いは新らしくなるためには何らかの方法が必要であろう。しかし、
そのことが作者の内部とどのような関り方をしているか、という
ことであろう。

こうした手法を追った作品がさらす悲惨さの方も又大きい。

それは往々にして表現上の破綻をなすと共に同時に作者の内部
的な貧しさの露呈に終わっている、と言う感じを否認ない。自らを
やたらに飾ろうと言う心理は思考的貧困につながり易い。そうし
た作品を岩波賞応募作のなかにもどれ程みて来たことか。

こうした一群の言わば新らしさ、とは逆に写実的な作品の応募
もかなりあった。

名をあげて言えば、北谷まがた、戸崎清作、女流では安部栄子、

簀戸勝子、中井益代などである。また写実詠とは幾分おもむきを異にした生活的な作品の応募者もかなりある。たとえば、加藤操、など一群の作者である。こうした作品に対しての批判は、歌境が固定している、と言う一言につきる。そうして表現そのもののためか、よく言われるのは作品が弱い、と言う批評である。表現も思考も日常身辺的であればある程感動の先どまりと言う感じを与えるのであろう。こうした評言も否定しない。——当今評判のよくない日常詠をやるからには、それだけの張りの強さ、居直りのふてぶてしさを持たねば——と言うのは、清水房雄の、現代短歌月評であるが、居直るために何が必要かでそこに作者の覚悟のよくなものが要求される。

作品は、現実をはなれて存在し得ない、と言うのが小林秀雄の文学論の根幹をなすもののようなのであるが、それはどのような傾向によって作品化をはかろうと創作行動一切についてまわるものであろう。

写実的な日常詠は日常そのものにつくことではなく、日常をどう掴むか、で背後に作者そのものの存在が求められる。短歌とは何れにせよ裸にならねばならない詩形式のようである。

岩波賞は今までに五人の授賞者と若干数の佳作入選者を世に送っている。

第一回、木村正和、第二回、岩淵静子、第三回、内田笑子、第七回、森谷春男、第八回、小野寺郁子、他、佳作秀作で目ぼしいところを拾えば、大城俊子、遠藤浩、中井益代、清谷勝馬、篠田真佐子、戸崎清作、北谷まがた、小野政子、簀戸勝子、加藤操、石

塚やす、中西静世、八巻耕土、などが何回かにわたって応募している。私が本年度のここ数号の椰子樹によってみると、以上五人の受賞者のうち現在まで引続いて作歌活動を続けているのはパナナの森谷春男くらいで、それに続いて小野寺郁子が比較的の発表回数が多い。他は現在沈黙してしまっている作者もある。

第一回の木村正和は聖市在住環境的にも不足はないし何かを持っている作者であると思うが、作者そのものの性格によるものか短歌的にもボヘミアンのようだ。作歌の条件としてよく言われたものに、持続、がある。持続することによって、この詩型式として、ややもすれば、概念的、観念的に、あるいは気分的に浮動し易い心をいかに現実引据えるか、と言うことではないか。非持続的なものから批判（批評ではない）は生れても作品の深化はあり得ないように思う。

第二回目の岩淵静子は授賞作そのものは未だしの感があったがその後の発表作には見るべきものがあつた。

つぶやきに似る鳴動を伝え来ておとがい削かれし如き岩鼻

リール捲きたぐる海の面傾きて弧り支うる重みとなれり

まばたきは許されずいるガラス戸の月は滲みて揺れうごきつつ

一種感覚のさえを感じさせる、もうながらくその作品に接していない。

第三回の内田笑子は素質的よさは感じられたがその後の作歌ぶりをみてみると基礎的な面に問題があるようだ。 第四回、第五

回、六回と該当者なし、七回目で森谷春男が登場する。この作者は、いまも言っているようにかなり旺盛な作歌活動を行なっている。ま吉に何かを掴むのではないかと思う。第八回が小野寺郁子、九回はまた該当者なしで、いま十回目の選考を控えている、と言うのが岩波賞の今までの概況である。ついでだから各授賞者の作品を授賞作の中から若干あげておこう。

木村 正和

下降音螺状をなせる階踏みて夜々吾が神のなきがらに逢う
馳けて行く少年工の長靴より油絞の虹が舗道に生るる

岩淵 静子

湾曲の背に噴く汗をはじきたり原ゴムひたと抱く港湾夫
レモンティゆるくかきませ一片の虚心に返える言葉しずめき

内田 笑子

苔岩の並び立つなか歩くとき青き気流の生るる思いに
民謡を踊りて友を送りたる湯治者君も今日は去りゆく

森谷 春男

ほし柿を盗み食いせし記憶ふと蘇り来し遠き汽車の音
執念のただそれだけに生きて来し畸型の瓜を切るひそやかに

小野 寺 郁子

明け近き風が吹き分く霧の間紫探き地平が見ゆる

次々と木をとらえ行く風ありて無人のハンモック派手に揺れい
つ

今後この人たちがどのような形でコロニア歌壇に参加して行く
のであろうか。椰子樹賞との比較に於て考えざるを得ない。続い
て私は現椰子樹の主流的な存在について触れて行かねばならない。
先ず小笠原富枝、弘中千賀子、陣内しのぶ、水本すみ子、などを
挙げざるを得ない。さらにその間、ほとんど無欠詠の大場時夫な
どが男性側から一枚加わることになる。

ところで、ここでちよつと実感的な告白をすれば、コロニア短
歌や椰子樹についてふれる場合、いつも同じ顔ぶればかりあげざ
るを得ないの一種の気はずかしさを覚える。又か、と言う感じ
をまぬがれ得ないのではないか。何とも芸のない話のようである
が現在われわれの持っているものがこの程度であつてみればいた
し方のないことであろう。

小笠原富枝は第一回目の椰子樹賞の受賞者である。それと、
たった一人のコロニア短歌賞の受賞者でもある。

椰子樹賞受賞当時の作品は写実主義そのものと言つた作品で
あつたが、それから次第に晦渋な表現に身をゆだねて行つた。

椰子樹の歌は難解だ、わかりにくい、ついでに行けない、と言わ
れ続けたものであるが、さしずめこの作者あたりが原因であろう。
そして、陣内、弘中、水本などがこれに続くことになる。また、

この椰子樹の作品が、難解だ、むずかしい、ついでに行けない、言う批判の声は、そうした作品を支持する、と言うことで私たちに對する批判でもあったようだ。しかし、私たちは、何も難解な作品を支持して来たわけではない。それぞれの作者の志向するところを尊重したにすぎない。それはまた、同時に表現としての原点につく、と言うことではなかったか。

百号から百五十号あるいはそれ以前の椰子樹を開いてみると、どの号と言わず、この作者たちの作品は掲載されている。そして一首一首に力がこめられている。それらの作品がすべて佳作秀作、とは言いかねるにしても決しておろそかには作られていないのだ。難解だ、ついでに行けない、と言われ続けながらも、この人達をぬきにして、コロニア歌壇、あるいは椰子樹は語れないが、これは、一にかかつて彼女らの、この詩型にかけた執念によるものである。

現在、小笠原、弘中、陣内、は椰子樹の作品選考委員であると共に、それぞれ新聞歌壇の選歌をやっている。

まさに八面六腑の活躍である。続いて各作者の作品を少し時代をあけてあげることにする。

小 笠 原 富 枝

旅の終りの心へまろぶ石群の索漠を照らす夏の日没

一〇〇号

穏やかに続く枯野を人通り影みずみずし吾が隔たらず

一二四号

遠景とならざり真陽をかえしつつ畦さわやかに土盛られている
一五〇号

弘 中 千 賀 子

無気味とも言わん吸引夜の海は重きうねりの光沢のなか
一〇二号

感覚の痛みがおそう遠つ代の人の住まいの跡のうつしえ
一二四号

ひとつこと終りしあとの目にありて木樨の花の白き集束
一五〇号

陣 内 し の ぶ

背打ちて忽ち消ゆる激しさに鳴りし冬の雷そのままとなる
一〇〇号

独りいて独りの言葉還元の惟い潮の如く揺れ来る
一二四号

荒々と過ぎつつ風が攫い行く青き虹尋め行かたそがれ
一五〇号

水 本 す み 子

遠ざかりゆく背がかもす旅の日の寂寥を裂きて不意なる爆風
一〇〇号

怠惰なる幾日を雨に籠りいて啓示の如き人の死がある
一二四号

花蘭けし火焰樹一本万緑のひかりの中の焦点となる

一五〇号

百号、一二四号、百五十号、の中から任意に抜いてみた。現時点においてみると、作品としての可否はともかく、それ程難解だとも思われない、只、小笠原富枝の歌はちよつと迷い出すと出口も入口もわからなくなる危険がある。

最近では、難解だ、ついて行けない、と言ったような声もあまり聴かれなくなった。コロニアの歌壇はそれだけ、全般機的に鑑賞力の水準を上げて来た、と言うことであろう。

現在の椰子樹はこれらの作品的レベルを中心に作歌活動を行なっているが更に若干数の作者をあげるとすれば、最近一途な作品発表を行なっている、西田季子。徐々ながら作歌力の水位をあげつつある中井益代。写真詠にかけている安部栄子、などがベテランとしての風格をみせている。リオの簀戸勝子、バストスの森重扶美などこのクラスであるが何うしたものか最近作品をよせていない。これに続いて希望の持てる人たちに、大城俊子、小野寺郁子、篠田真佐子、小野政子、八巻たけ子、高橋よしみ、などが思い出される。更にもう少し裾を広げると、石塚やす、河井美津子、穂島千代、石橋テル子、開沼貴代、古関俊枝、椎野トノエ、などが思いうかぶ。

男性側からは、岩波賞受賞後真摯な作品発表を行なっている森谷春男、他、北谷まがた、加藤操、志伊良二世、中川荒記、富岡

清治、山崎益一など比較的発表回数が多い人たちをあげておく。このうちから誰がのびるか、あるいはこれ以外から誰が出て来るかは今後の課題であるが、無論本人達の勉強一つであろう。

こうしてあげてみると、女性作者の方が圧倒的に多いのに気がつく。椰子樹も選歌担当などを含めてまさに、女性時代、ということになりそうである。

無論、一般投稿者には男性の数もすくなくないが作品を中心にして考えると女性側の方が多くなる。

椰子樹は、かつて、優秀な男性作者を何人か持った。現編集者の清谷益次、八巻耕土の弟の八巻培夫、ノロエステの秋永三郎、あるいはパラナの本庄研一などである。ある時期以後彼らは作歌、と言う直接行為を放棄してしまった。その原因は何か椰子樹か、短歌の世界か、あるいはこの詩形そのものか、彼らを作歌につなぎとめ得なかった理由、それは、想像出来なくもないが、それ程単純でもあるまい。とも角椰子樹あるいはコロニアの歌壇にとつて負の要素として働いていることは言うまでもない。

これを一つの欠落として現コロニア短歌は、椰子樹は現在の女性上位あるいは女性優位時代をむかえていると言える。

もつとも、こうした現象はコロニアだけのものではなく、短歌の世界そのものをおおっている現象で女性の短歌作吉が徹底的にふえている。たとえば、今年の「潮音」新春競詠の入選者二十名のうち男性作者は僅か一名で、こうした徴候は随所に散見できる。言わば時代的現象かも知れないが、椰子樹などの場合底辺そのものの浅さか、その現れ方はやや露呈的であろう。

現在椰子樹はその指導面において数字的に七十五パーセントを女性選者にゆだねていることになる。これは女性関係の歌誌か女性の主宰誌以外にはちよつとみられない現象である。

文学的なイニシアチブをどうとって行くか、と言うことでも今後の彼女らが果して行かねばならない役割は大きい。おもんばからざるを得ない以所である。

先にものべているように彼女らは椰子樹の選歌以外に新聞の歌壇にも手をそめている。実作者にとつて歌壇の選者は往々にして躓きの石になりかねない。コロニアの歌壇は彼女らにやや過重な負担を求めているのではないか。

女性作者、あるいは女性時代に少し頁数をとりすぎたが、この間着実な作歌ぶりを示しているのに現椰子樹の「かなとこ欄」を担当している酒井繫一がいる。私の記憶にあやまりがなければ、パラナの大場時夫とともに無欠詠である。それぞれ安定した作者で推移変遷とはまた別の次元であろう。

続いて、私は、最近目だちはじめた物故歌人について触れておかねばならない。

百号以後でちよつと思ひ出すだけでも次のようになる。

吉本青夢、新納潤魚、長島可山、田上みづほ、吉田幸太郎、有田市治、吹本菊子、笠原くに、杉本千代などである。

このうち吉本青夢は作品的には百号までの存在である。

新納潤魚の死は単なる死ではなく事故死である。彼がコロニア歌壇に残した足跡は予想以上に大きい。新納の作品は単に短歌としてだけではなく、コロニアが持ち得た文学として残るべき質の

ものである。何れ誰かの手によって編まれねばならない作品集である。

長島可山は物故当時椰子樹には歌は出詠していなかった。伝えきくところによると「歩道」の同人と言うことであつたが、それが本当なら何う言うことであろうか。随分歌集など日本からとりよせて勉強していたようであるが果して自分自身をどこまで掘んでいたか。作歌に関するかぎり恐ろしいまでの執念だつたように思うがその執念の本質が一体何であつたか私にはまだつかめない。

有田市治は人となりそのものが穏健だつたようであつても素直で変にはつたりめいたものがなかつた。パラナの作者の中ではのびる筈の作者だつた。いまも尚彼の笑顔を思い出す。吹本菊子なども老境にいたつて本質的なものを見せはじめていた。ようやく虚飾を捨てはじめていたのだと思う。杉本千代は二冊の歌集を世に残している。恵まれた晩年のようであつたが、渡伯後早くご主人を失なわれたようであつたが、苦闘を経てこられたようである。彼女にとって作歌は一つの救いではなかつたかと思う。

田上みづほ、吉田幸太郎などは比較的晩年になつて作歌の世界にはいった人たちの様である。技術的には未だしのものが残っていたが、しかし、何らかのかなちで表現の世界を求め続けて来た人たちのようである。

田上みづほ

岩礁に激ちよせては渦巻ける濁流執拗に吾にいどめり

新らしき年の息吹きかフイゲイラは亭々として初日をはじく

なだれの如押し流されし年月よ心の支え持たざるままに
事故車体屑鉄となりて錆びおれど積まるときに銚の匂いす
伐られたる鳳凰樹の株は胸像の如く校舎に向いて立り
アネモネの匂う芝生にしばし座し子らの仕草に眼遊ばす
初咲きのアマリリス妻はきりて来て吾にみせんと室に入り来る

吉 田 幸 太 郎

幾年に変化なかりし体重の減りいしこともわびしき一つ
撫でさするより術のなき病妻の背の切なきまで骨だちて来て
吾が顔の二つに見ゆと言いたるを最後に妻の意識みだれる
身の置処なかりし悪夢の二た夜さも朝々の陽に支えられ来し
暗き思いの影をひそめて眼裏に光弾ける朝はありがたき
破産ときめ夜更け冷たき床に入れば家具の一つ一つに頭ち来る

思い

負債故に一方的な取引きに押されてすぎし二十三年
倚りしもの皆失ないて身一つの吾にまだある払えぬ負債

こうした作品を読みかえしながら、この人たちが短歌に求めたものは一体何であったろうか、と思う。それ程目だつこともなくある時点からふつり消えて行った人たちの歌である。考えてみれば、この人たちが自分のものとしてこの世に残して行ったものはこうした作品だけではなかったのか。いつわりのない心の記録である。そしてここには何か生きる手がかりのようなものが示されている。表現とはやはり人間の生存に関わる行為である。

私はこの度、百号から百五十号へかけての椰子樹作品を読みかえしながらある感慨にうたれざるを得なかった。その都度のこれらの作品についてふれた批評や感想も読みかえしてみた。

必ずしも満足して批評はしていない。不満の言辞をよせている方が多い。しかし、それは、作品そのものの否定ではない。そこに、たとえば僅かでも作者の氣息が通つていれば作品はどこかで生き続けるものだ、と思う。この点あまり歌がうますぎる、表現に重点がおかれたものはいけないようだ。

私はようやくこの小稿を終り、第十回日の岩波賞作品の選考にかかろうとしている。

歌碑を洗う

本誌の扉に紹介した岩波菊治歌碑は、建立後二十三年、湖畔の竹林も鎮もり「苔むし」た感じ一入である。建立当時は、建碑に協力してくれた日下部氏が献身的に磨いて下さったが、その後同氏も逝き、忘れられたままになっていたところ、先日T兄が、鳥の糞や雨風に汚れている事に気付き歌碑清浄の話が起った。

建てっぱなしで日本館管理委員会に一任した形でいた我々のうかつさ、急遽椰子樹社に依つてその責を果たすことを得たがその行為の正否は別としてあの碑は一体誰の所有なのか？ 最近心から考えさせられた一事ではある。

椰子樹概史

―統計に見る―

(101号より150号まで)

米澤幹夫・中江克己

椰子樹は、創刊以来五〇号毎にこれを記念し、一つのけじめをつける意味で別冊特集号を発行してきた。すなわち、一九三八年一〇月から一九五七年一月までの五〇号を第一期、一九五七年二月から一九六八年七月までの一〇〇号を第二期一九六八年八月から一九七七年六月までの一五〇号が第三期となる。

ここでは、第三期にあたる一〇一号から一五〇号を通覧し、会員の全短歌作品の集計を目的とする。まず、総括的に見て、短歌作品の発表数は二〇七一九首、歌人二二五名、延べ人員二五二二名で、前期に比しやや下降線を辿っているとは言え遜色のない数字を示している。

この統計の中には、会員作品はすべて含めてあるが、次の転載、再録、引用、競詠、入賞、歌会、題詠、特別選歌、等は一切含まれていないことを断っておく。

次に前二期との比較対照表を掲げる。

期間的な問題として、第一期、第二期、第三期と、それぞれ大きな短縮を示しているが、これは、八六号からそれまでの季刊発行が隔月発行を実施したことによる。尚、作品数が第二期に比し

てひらきがあるのは、一〇六号までの投稿歌が一人一五首以内であつたのが、一〇七号からは一人一〇以内に限定されたことがその数字に差をつけたといえる。

椰子樹運営面の会計は、一〇一号から一三〇号を水本すみ子、一三一号から一五〇号を中江盛治(克巳)が担当し、印刷費高騰にもかかわらず、よくインフラソンの波を切り抜け、椰子樹厨房安泰である。

表紙は毎号、富岡清治をわずらわし、一〇一号から一五〇号まで一五種類にのぼる版面を提供してもらっている。また発行所は一〇一号から一〇六号までをルア・ピオ・オンゼ街二三一七。一〇七号から一三〇号までを聖市セナドル・フェジヨ街二九番五階五一六号室。二三一号から一四〇号までを聖市サン・ジョア九キン街三八一、コロニア文学編集部内。一四一号から一五〇号までを聖市セナドル・フェイジヨ街二〇番九階九〇五号室と移っている。

編集は、一〇一号から一〇六号を佐藤博三、高橋よしみ、水本すみ子、梅崎嘉明(実務、佐藤、高橋)。一〇七号から一一一号を安長田済、米沢幹夫、清谷益次(実務、清谷)。一一二号から一一七号を安良田済、津谷益次、陣内しのぶ(実務、清谷)。一一八号から一二四号を清谷益次、陣内しのぶ。一二五号から一三〇号を梅崎嘉明、陣内しのぶ。一三一号から一四〇号を水本すみ子、陣内しのぶ(実務、陣内)、一四一号から一五〇号を清谷益次、安良田済(実務、清谷)と、変動が多く必しも平坦とはいえなかった。

選者部門は(特別選歌、題詠選者を含まず)一〇一号は従前通

り酒井繁一、武本由夫、川原比露思、井本惇の四名が作品を一二に分けて担当しているが、一〇二号から武本由夫、川原比露思の選者引退に代り、小笠原富枝を起用、試みとして作品一、二を廃し、すべて作品は同列に配することとし、優秀と認められた作品に対しては、特選欄の替りに推薦欄が設けられた。酒井繁一、井本惇、小笠原富枝の三選者の担当期間はながく、一三六号に米沢幹夫を加え、各号二名の選者交替制となるが、米沢幹夫は一三八号を以って辞任した。また一四一号では酒井繁一が特別選歌欄に去り、選者は井本惇、小笠原富枝の二名となるが、一四八号から弘中千賀子、陣内しのぶが登場し各号二名選者の交替制となる。

○大場時夫	五〇	五二六
滝夕起緒	四八	三二九
○小笠原富枝	四七	四七五
○弘中千賀子	四六	四七五
○陣内しのぶ	四六	四七〇
○富岡清治	四六	四一五
○石塚やす	四六	四一二
○八巻耕土	四六	三八六
○山崎益一	四五	三五七
○洒井 繫一	四二	四二四
○北谷まがた	四〇	三八二

○開沼貴代	四〇	三四七
○遠藤浩	三八	三二〇
○関東忠吉	三八	二〇五
篠田真佐千	三七	三三七
○内田笑子	三四	三〇二
○安部栄子	三三	三一
X田上みづは	三三	二九二
○三浦久和子	三三	三五五
○森久子	三三	二四一
○井本惇	三二	三三〇
○水田玉水	三二	二四七
○大西阿哲	三一	二三九
○西田孝子	三〇	二九八
森谷春男	二九	二六七
○加藤操	二九	二六二
千葉美夜	二九	二〇九
○中井益代	二八	二七九
○久米光春	二八	二五三
○井川孝子	二八	二六五
○清水そとえ	二七	二七五
○水本すみ子	二七	二六一
○穂島千代	二六	二〇二
八巻たけ子	二五	二三三
柴倉知余	二五	一七〇

○高橋よしみ	二四	二二四
楠木むらじ	二四	一二五
○古川信子	二三	一九九
○中川荒記	二三	一八九
○志伊良二世	二三	二〇六
○小野寺郁子	二三	一九六
○佐藤いち	二三	一八四
○加藤ふじ	二〇	一二二
○木村正和	一九	二〇二
○上妻博彦	一九	二六一
須田子徳	一九	一四五
×南条由喜夫	一九	一三一
○田中朝子	一九	一一八
○簀戸勝子	一八	一七八
中西静世	一八	一四七
西森覚	一八	一四六
軽部孝子	一八	一四一
山口きわ	一八	一一一
町田 貴志	一八	九五
○持永勸治	一八	六三
青柳ます	一七	一五九
石橋テル子	一七	一四四
椎野トノニ	一七	一四四
×吉田幸太郎	一七	一四四

唐沢弘直	一〇	九〇
織田真弓	一一	六八
滴草ひろし	一一	七二
○土屋風春	一一	七三
×縄芋敏雄	一一	八四
○土屋ゆかり	一一	八五
○清谷勝馬	一一	九二
○植村かず	一一	九四
○森重扶美	一一	九八
宮崎多満江	一一	一〇四
○梶田きよ	一一	一〇七
×後藤薦子	一三	八七
○山室新太郎	一三	一〇七
吉武加野枝	一三	一三二
住谷頂雙	一四	五四
○松隈咲代	一四	七七
小野政子	一四	一二五
末吉美佐子	一四	一四八
○清水節子	一五	一一二
田中麻三業	一六	一二一
○笹波北陽	一六	一三一
大城 俊子	一六	一五七
○岩佐一步	一七	一一九
多菊ふみ	一七	一二四

川久保タミ	一〇	八八
古開俊枝	一〇	八七
田中恵美子	一〇	八四
岩淵史津	一〇	八一
大和田房子	一〇	七〇
大平綾子	一〇	六九
上田幸音	一〇	六九
佐藤貞一	一〇	六六

◇九回Ⅱ×新納潤魚・一〇八、○賀沢朋子・八八、○梅崎嘉明・八一、○藤田美砂子・七八、○北原しのぶ・七四、蓑毛正淳・六五、佐藤閑人・五六、柳沢津奈代・二四、

◇八回Ⅱ○森重羊鈴・八〇、○小川貴美枝・七九、○森田吉久・七二、土屋哲子・六四、×吹本菊子・六三、若生五十路・六二、○光南極・四〇、

◇七回Ⅱ○川原比露思・九九、○藤田朝日子・六九、古山孝子・六一、田植錦秋・四〇、徳永京千・三七、山田露人・三二

◇六回Ⅱ○瀬崎涛声・六〇、九山林子・四九石橋初穂・四六、山本たけ千・四五、○寺田雪恵・四四、国兼たつ子・三九、芳賀芳朗・二二

◇五回Ⅱ○佐藤博三・六八、○尾崎都貴子・四一、○矢野晶男・三三、○荒崎百合香・三二、○中江克巳・二五、

◇四回Ⅱ○森谷風男・四五、安達太良・三七、○佐藤一英・三六、佐藤義男・三五、花井信吉・三三、○八幡与三・二九、×笠

原くに・二八、○中川原美・二八、○玉木五男・二八、○川上千代三郎・二七、○西村佐太夫・二七、緒方新男・二五、○村上実義・一六、渡辺巖・一九、田口愛子・一五、橋浦静江・一〇、失明氏・二六、

◇三回Ⅱ×有田市治・三九、○望月喜恵子・三三、○知花清・二八、○江尻潤・二七、三原洋樹・二六、○小笠原正好・二四、○坂光男・二四、○佐野拓治・一八、○茅根哲子、一七、○坪田義雄・一四、尾崎貞良・一〇、佐々木繁治・九

◇二回Ⅱ○武本由夫・三五、青柳房治二七、高原ます子・七、八木伊都夫・一五、○井上ふじ・四、石橋美津雄・一三、○山岡滑子・一三、渡辺貞子・一一、本山美智子・一〇、山下隆・一〇、飯田義勝・八、しもん都・八、村上晶子・七、宮西津多・七、砂田竜峰・六

◇一回Ⅱ○秋永三郎・一五、○春名宏文・一四、○徳尾溪舟・一一、掘石凡生・一〇、後藤道子・一〇、山本和多留・一〇、徳永悦子・八、八卷汀石・八、○越村定雄・七、山田朴・七、○小原睦子・六、斎藤信愛・六、坂本美代子・六、須沢志げ千・六、高橋圭甫・六、内川愛季・六、山元治彦・六、○真木研一・五、野上とし子・五、簀郁子・五、西山陽都・四、管源一貴・四、砂田初枝・三、高野十念・三、佐々木竹雄・二。

題詠

題詠は、編集部の指名による単一選者によって、出題並びに選歌を毎号交替制とし、これを継続してきた。題詠欄の始まりは三

六号から五一号までを中山稠子選、五二号から六一号までを複数の選者が担当し、現在の形式において発表されるようになったのは、六二号からであってその歴史は古い。次に一〇一号から一五〇号までの総覧を別記する。上段から号数、題名、選者、作者数、歌数。

一〇一	雲	(徳尾)	2	4	4	7
一〇二、	ミニ・サイア	(安良田)	2	8	3	9
一〇三	陽光	(中江)	2	2	4	2
一〇四	道	(清谷)	2	8	4	3
一〇五	海	(西田)	2	3	4	1
一〇六	窓	(川原)	2	6	4	3
一〇七	旅	(弘中)	2	5	5	3
一〇八	雨	(徳尾)	3	2	5	1
一〇九	風	(中江)	2	5	3	7
一一〇	微塵	(川原)	3	0	4	1
一一一	女	(吉本)	2	4	4	1
一二二	草	(陣内)	2	8	6	8
一二三	愛憎	(開沼)	1	7	3	8
一二四	収穫	(西田)	2	2	4	2
一二五	願い	(川原)	2	1	4	6
一二六	肉親	(梅崎)	2	3	4	8
一二七	姿	(弘申)	2	2	5	1
一二八	火	(中江)	2	0	4	3

一一九	会い、逢い	(水本)	2	3	4	8
一二〇	残照	(開沼)	2	2	4	5
一二一	航跡	(川原)	1	5	3	8
一二二	渦	(高橋)	2	2	4	0
一二三	縁、えにし	(中江)	2	2	4	8
一二四	世相	(安良田)	2	3	3	9
一二五	拓く、開く	(徳尾)	2	6	4	4
一二六	想い、思い	(水本)	2	8	5	6
一二七	奔放、惨苦	(弘中)	2	5	5	2
一二八	謝肉祭	(西田)	1	6	4	1
一二九	朝、曙、暁	(安良田)	1	9	4	2
一三〇	旅	(高橋)	2	1	4	6
一三一	神	(木村)	1	8	4	7
一三二	雷	(清谷)	2	1	4	0
一三三	パイネイラ	(梅崎)	2	8	4	9
一三四	初冬	(本庄)	2	8	4	3
一三五	聖ジョン祭	(山室)	1	8	2	6
一三六	夏	(森谷)	2	0	4	4
一三七	訪日、帰郷	(弘中)	1	7	3	5
一三八	魚	(森重)	2	7	4	7
一三九	溝	(津谷)	1	9	3	4
一四〇	窓	(川原)	2	7	4	7
一四一	汗	(水本)	2	2	4	5
一四二	徒労	(大場)	1	5	3	5

一四三	宴	(徳尾)	2	0	3	9
一四四	過ぎ去り	(森重)	2	3	4	9
一四五	灯風船	(八巻)	2	4	5	7
一四六	夕暮れ	(開沼)	1	8	4	4
一四七	殻	(高橋)	2	1	4	5
一四八	友	(中井)	2	5	4	6
一四九	騒音	(水本)	3	1	4	9
一五〇	灯、ともしび	(植村)	2	7	4	6

特別選歌欄

特別選歌欄とは、以前初心者の勉強の場としてあつた入門欄に替るものとして一〇二号から設けられた新企画である。

この欄は、選者による添削指導欄でもあり、椰子樹会員のみにとどまらず、広く短歌愛好者に門戸を開放して注目を引いた。一〇二号から一二四号を米沢幹夫、一二五号から一四一号を大場時夫、一四二号から一五〇号を酒井繁一が担当し、名称も、米沢選歌欄、椰子樹選歌欄、選歌欄、「かなとこ」特別選歌欄と改り、現在に至っている。次にその実数をあげる。上段から、号、作者数、歌数、選者。

一〇二	一九	一五七	米沢幹夫
一〇三	三一	二八一	〃
一〇四	三〇	二六七	〃

全伯短歌大会

全伯短歌大会は、パウリスタ新開主催椰子樹後援で、一九四九年二月一〇日に第一回を開催した。椰子樹一〇〇号記念別冊にその一回から一九回までを記録している。大会については別項に詳述があるので、ここでは、二〇回以降に発表された作品の数字を挙げるのみとする。括弧内は歌数。

◇二〇回・一〇二号、代表選・森重扶美ほか(二三)、一般選・森重扶美、ほか(一九)、席題「椰子」・清水そとえ、ほか(一一)、詠み込みコンクール・木村重和・ほか(一〇)、アベック歌合せ(一〇)。

◇二一回・一〇六号、代表選・八巻耕土、ほか(三一)、一般選・八巻耕土、ほか(二二)、席題「旱魃」・米沢幹夫、ほか(六)、詠み込みコンクール・田上みづほ、ほか(五) 相聞歌・坂光男、ほか(一〇)、アベック歌合せ(五)。

◇二二回・一一二号、一般選・賀沢朋子、ほか(二八〇)、席題「イペー」・清水そとえ、ほか(一四)、詠み込みコンクール・小笠原富枝、ほか(二四)、アベック歌合せ(一〇)

◇二三回・一一八号、代表選・陣内しのぶ、ほか(四二)、一般選・吉本青夢、ほか(一一〇)、アベック歌合せ(二〇)

◇二四回・一二四号、代表選・小笠原富枝、ほか、(五四)、一般選・川原比露思、ほか(七七) 席題「独立、丘」・八巻耕土、ほか(一一)、アベック歌合せ(二〇)。

◇二五回・一二九号、代表選・弘中千賀子、ほか(二三)、一頃

選・梅崎嘉明、ほか(九五)、席題「みどり」・高橋よしみ、ほか(二七)、アベック歌合せ(二〇)。

◇二六回・一三五号、代表選・小笠原富枝、ほか(二九)、一般選・開沼貴代、ほか(八二)、席題「暁」・小笠原富枝、ほか(一〇)、アベック歌合せ(二〇)。

◇二七回・一四〇号、代表選・弘中千賀子、ほか(二六)、一般選・川原比露思、ほか(一〇一)、席題「干魘」・八巻耕土、ほか(二〇)、アベック歌合せ(二〇)。

◇二八回・一四六号、代表選・弘中千賀子、ほか(二二)、一般選・米沢幹夫、ほか(九四)、席題「空」・小笠原富枝、ほか(一一)、アベック歌合せ(二〇)。

全伯短歌地方大会

全伯短歌地方大会は、前記の全伯短歌大会が、開催地を聖市中心とするに引き替え、主催地を地方廻り持ちとし、主導権も開催地に置き、多く地方歌人との交流を意味するもので、一九七二年から試みられたものである。詳細は別項を参照されたい。括弧内は歌数。

◇一回「サントス地方大会」一二二号、代表選・陣内しのぶ、ほか(一一)、一般選・小笠原富枝、ほか(一二)、席題「磯」・土屋哲子、ほか(五)、アベック歌合せ(五)

◇二回「ロンドリーナ地方大会」一二七号、一般選・八巻汀石

ほか(一二八) 席題「残照」・遠藤浩、ほか(八)、アベック歌合せ(七)。

◇三回「スザノ地方大会」一三三号、代表選・小笠原富枝、ほか(九)、一般選・梅崎嘉明、ほか(一九)、席題「スザノ囁目」・大西阿哲、ほか(九)、アベック歌合せ(五)。

◇四回「グアイラ地方大会」十三八号、代表選・北谷まがた、ほか(一二)、一般選・本庄研一、ほか(三四)、席題「グアイラ囁目」・中川荒記、ほか(二〇)、アベック歌合せ(二〇)、リオ・グランド河畔吟詠・(二二)。

◇五回「ロンドリーナ地方大会」一四九号、一般選・中西静世、ほか(一四〇)、席題「希望」・高須きみ子、ほか(一〇)、アベック歌合せ(二八)。

岩波賞

一九五八年から始った椰子樹賞が、一九六七年を以って、一回に達したのを区切りとして、これに代るものとして新たに設定されたのが岩波賞である。これもダブらないように詳細は別項にゆずるが、その一回は椰子樹第一〇〇号に発表された。括弧内は歌数。

◇一回・一〇〇号、受賞者・木村正和(一八)、佳作・八巻耕土(二三)、岩淵静子(二四)、清水節子、穂島千代(各一二)。

◇二回・一〇五号、受賞者・岩淵静子(一五)、佳作・穂島千代(二七)、知花清(二四)、藤田美砂子(九)、八巻耕土(八)。

◇三回・一一一号、受賞者・内田笑子(一六)、佳作・戸崎清

作（一七）、北谷まがた（二五）、知花清、穂島千代（各一七）選外・中井益代、縄手敏夫、藤田朝日子、有田市治、安部栄子、八卷耕土、吉武かのえ、清谷勝馬、土屋風春、若生五十路（各五）。

◇四回・一一六号、佳作・篠田まさ（一二三）、遠藤浩（一四）、安部栄子（一一）、選外・石塚やす、森田吉久、清谷勝馬、関東忠吉、須田子徳、山崎益一、八卷耕土、若生五十路、穂島千代、岩佐一步（各五）

◇五回・一二二号、佳作・清谷勝馬、清水そとえ、遠藤浩（各一〇）、選外・篠田真佐子、北谷まがた、八卷耕土、並木野の人、安部栄子、山崎益一、山本和多留、穂島千代（各五）、佐藤閑人（四）、関東忠吉、須田子徳（各三首）滝夕起緒（二）

◇六回・一二八号、秀作・八卷耕土（七）、石橋テル子（六）、佳作・遠藤浩（六）、石塚やす、清水そとえ、大城俊子（各五）、八卷汀石（三）、選外・水田玉水（三）、上奏博彦、篠田真佐子、穂島千代、清谷勝馬、関東忠吉、森谷春男、藤田美砂子、吉川信子、小石茂行、楠木むらじ、須田子徳、滝夕起緒、藤田朝日子、山崎益一、田中恵美子、森田吉久、堀石凡生、田植錦秋、多菊ふみ、岩佐一步、片岡けい子、簀戸勝子、脇坂一、寺田雪恵（各一）

◇七回・一三四号、受賞者・森谷春男（一二）、佳作・賀沢朋子、吉武加野枝、八卷耕土、石塚やす、中西静世（各五）。

◇八回・一三九号、受賞者・小野寺郁子（一五）、佳作・小野政子（一一）、加藤操（一〇）、北谷まがた（九）、八卷耕土（八）。

◇九回・一四五号、佳作・八卷汀石（九）、大城俊子（一〇）、森田吉久（一一）、小野政子（一〇）、八卷耕土（九）。

代表選誌上コンクール

代表選誌上コンクールは、誌上短歌競詠を継承したものであるが、意外と支持が少く、わずか三回で取りやめとなった。

◇一回、応募詠草四七首（一〇八）で、代表三一名の選者により、森重扶美以下四名の入賞者を発表している。（二〇九）

◇二回、応募詠草二五首（一一一）で若生五十路以下九名の成績を発表している。（二一二）

◇三回、応募詠草一八首（一一四）で、代表二〇名の選者により、山崎益一以下五名の成績を発表している。

地方歌会記録

◇サンパウロ忘年歌会、弘中千賀子・ほか、三一首

◇スザノ忘年歌会、山本和多留・ほか、二二首

◇サントス忘年歌会、小笠原富枝・ほか一九首（以上二〇七）

◇サントス歌会、坂光男・ほか六首

◇ロンドリーナ歌会、戸崎清作・ほか二二首

◇スザノ歌会、八巻たけ子・ほか一八首

◇同スザノ歌会、八巻たけ子・ほか、一八首

◇オ・クルース歌会、土井はやし・ほか、七首（以上二〇八）。

◇スザノ歌会、大西阿哲・ほか、二〇首

◇サントス歌会、遠藤浩・ほか、六首

◇バストス歌会、信太千恵子・ほか、七首

◇ロンドリーナ歌会、森谷風男・ほか、二二首

◇サンパウロ歌会、高橋よしみ・ほか、一五首（以上一〇九）
◇入植五十周年記念スザノ短歌大会、八巻たけ子・ほか、三七首（一一八）

◇二百会記念カンポス歌会、安部栄子・ほか二六首（一二二）
◇第百会記念グワイラ歌会、弘中千賀子・ほか二六首、杉本千代追悼歌、水本すみ子・ほか、九首（一二五）

◇スザノ花祭り歌会、米沢幹夫・ほか、三一首（一三〇）

◇スザノ百回記念歌会、植村かず・ほか、二九首、（二四四）

紅白競詠と地方歌会選集

○夏雲・本庄研一 小竹清子、山室新太郎、高桶よしみ、各五首（一三二）

○晩夏・八巻耕土、植村かず、遠藤浩、開沼貴代、各五首（一三三）

○秋・森谷風男内田笑子、坂光男、清水そとえ、各五首（一三三）

○朝霧・八巻たけ子、中川荒記、篠田真佐子、北谷まがた、各五首、（一三四）

「緑蔭集」ロンドリーナ歌会選、大場時夫、森谷風男、久米光春、森谷春男、中西静世、各五首（一三七）

「涼風集」サントス歌会選、古川白穂、土屋哲子、楠木無良司、鈴木里子、山下隆、各五首（一三八）

「萌芽集」スザノ歌会選、小野政子、藤田朝日子、青柳ます、掘石凡生、西森覚、各五首、（一三九）

「晩歳集」グアイラ歌会選、末岡芳三、斉藤武雄、高野愛子、岡野でん、桜井よし、各五首（一四一）

詩、その他

詩は、佐野功訳による、ブラジル詩人の訳詩一二篇が紹介されている他に、椰子樹会員の作としては、▲海のある街Ⅱマキ・キヨシ、▲徒然Ⅱ良一郎（一〇三）▲失われた夢ⅡM・K、▲光りⅡS・M（一〇四）▲死Ⅱ有田市治（二一五）▲いもの一生Ⅱ芳賀芳朗（二一六）▲かげりⅡ森谷春男（二二七）▲曲者はⅡ大浦文雄（一四二）▲昨日今日Ⅱ浜田良一（一四五）▲釣りⅡ米沢幹夫（一四九）

佐野功訳による作者と題名は、▲芸術家Ⅱレオニ、（二〇一）▲利欲Ⅱネジャール（一〇二）▲アンナベル・リーⅡポー（二〇三）▲妬心Ⅱアルメイダ（一〇四）▲静寂Ⅱニッテル・フィリヨ（一〇五）▲衛星Ⅱバンデイラ（一〇七）▲蜘蛛Ⅱロドリゲス（一〇九）▲造営Ⅱロドリゲス（一一〇）▲詩篇Ⅱマルセーゴ（一一一）▲豹Ⅱベナツチ（一一二）▲憂き時の道の半ばにⅡロドリゲス（一一三）▲幽明の閼Ⅱネジャール（一一五）いずれも原詩と共に併記している。

短かい試みに終ってはいるが、一〇二、一〇三、一〇四と三号にわたり「交錯する詩と短歌」の表題の下に、詩一〇篇と短歌五一首の発表がある。

○空港Ⅱ詩・佐藤博三、短歌・弘中千賀子⑤、○空気に就て、気流Ⅱ詩・横田恭平、短歌・陣内しのぶ⑤、○地平Ⅱ詩・マキ・キ

ヨシ

短歌小笠原富枝⑤、○けっしてこころしずかでない、静心なく
||詩・横田恭平、短歌・川原比露思⑤、○壁、女||詩・藤田勇、短
歌・西田幸子⑥、○湖||詩・鹿毛至、短歌・加藤操⑤、○緑||詩・
小石茂行、短歌・八幡与三⑤、○暮章、暮れの中に||詩・米沢幹
夫、短歌・酒井繁一⑤、○クリスマス||詩・望月喜恵子、短歌・
開沼貴代⑤、○或る日の午後||詩・尾崎都貴子、短歌・並木ゆか
り。

以上、一〇一号から一五〇号まで、数字の面を追ってみたわけ
であるが、一五〇号が出るのを待ってのあわただしい整理なので、
甚だ杜撰なものになってしまつて申訳ない。この他にも、他紙か
らの転載詩歌など多くあるが、訳詩を除いて会員以外のものはす
べて割愛したことをお断りしておく。

尚、本集計は時間の都合で、中江氏と二人で分担した関係上、或
いは、意の通らない個所もあると思うが、大方のご寛容をお願い
したい。

米沢幹夫 記

誰が何を書いたか

一五〇号記念別冊刊行に当たり、この十年間にどんな記事が発表されたかを順次紹介する。先ず、記事の分類別、題目発表号、作者の順に依る。括弧内は号。

文法問題及び言葉の使い方に関して

此の分野に就いては戦後一九五〇年代はなかなか盛んであったが、一〇〇号以後は見るべきものが少ない。

「字」と「語」の小話 (一三三二) 田中麻三美

「さやり」について (一三四四) 酒井繁一

「閉ず」考 (一四三三) 前山隆

考証

阿部仲麻呂と李白 (二〇二) 岩佐一步

異色の歌人(一) 良寛と貞心尼の愛 (一一一九) 酒井繁一

異色の歌人(二) 武を捨てた西行 (一二二〇) 酒井繁一

異色の歌人(三) 和泉式部と与謝野晶子の恋歌 (一二二二) 酒

井繁一

異色の歌人(四) 金鈴の中の九条武子 (一二二二) 酒井繁一

異色の歌人(五) 運命の人石川啄木 (一二二三) 酒井 繁一

歌論、論説

一九五〇年代から六〇年代は多くの歌人が若く、研究心が旺盛であり、多くの論説によりお互いが啓発されたが、一〇〇号以降は昔日の論者が銚をおさめ余り見るべきものはない。それでも数人の人が登場して各自の見解を発表している。

短歌用語論 (一〇〇) 武本由夫

コロニア歌壇に於ける抒情の変質 (二〇一) 米沢幹夫

短歌の誌質Ⅱ大会上位作品に感ありⅡ (二〇二) 武本由夫

現代に生きる短歌 (二〇三) 大場時夫

難解短歌の解釈 (二〇三) 安良田済

同 (二二)(一〇四) 同

同 (三二)(一〇五) 同

「沈黙と無為の行間」その他 (一〇四) 清谷益次

曲り角に來た歌壇 (一〇四) 春名宏文

前向きの短歌 (一〇四) 奥野精一

選者にも申す (一〇四) 坪田義雄

椰子樹を中心としたコロニア短歌の在り方 (二〇五) 酒井繁

一

短歌に於けるロマンティズムとリアリズム (二〇七) 梅崎嘉

明

一語の所在 (二〇八) 井本惇

作品の相似性についてⅡ盗作と剽切Ⅱ (二一〇) 井本惇

短歌に背をそむけるもの (二一六) 細江仙子

用語への配慮(一二〇) 武本由来

作風と作歌理念の実際 (一二四) 新納潤魚

生活に戻れ「コロニア短歌の現状に触れて」(一二四) 瀬崎涛聲

椰子樹会議に出席して(一二四) 加藤操

短歌の言葉に就いて(一二五) 酒井繁一

私の志向するもの (二)(一二六) 川原比露思

同 (二)(一二七) 木村正和

同 (三)(一三〇) 安部栄子

「デッチ上げ」その他 (二二八) 清谷益次

絵画性について (二三三) 永田泰三

僕の立場から (二三三) 田中麻三美

局外者の弁 (二三七) 秋野愁

ある短歌についての私見 (二三四) 須田手徳

余白を借りて (二三八) 中川荒記

お互い短歌の仲間であるⅡ回答Ⅱ (二三九) 弘中千賀子

中川さんに「余白を借りて」(二三九) 水木すみ子

弘中さんにお答えする (二四〇) 米沢幹夫

みんな歌の仲間としてⅡ椰子樹に対する意見Ⅱ (二四二) 佐

藤一英

風土性への虚妄(二)〃そのマイナス性に就いてついで〃 (一

四四) 井本惇

同 (二)〃その設定について〃 (二四五) 井本惇

同 (三)〃そのパラドックスに就いて〃 (二四六) 井本惇

短歌に於ける口論と文語 (二五〇) 酒井繁一

鑑賞と批評

批判のない処に作歌は育たない、と言われる位い短歌に対する批判は古来盛んに行われて来た。我々の椰子樹も、創刊以来常に作品に対する厳正なる批判精神の上に研鑽を続け今日に至っている。その方法又は形式に於ては鑑賞、歌論、歌評、合評、感想と種々な発表形式は有るが、終局する所、コロニア歌壇の振興と成長を望む手段である。

編集者の新しい試みとして、一九六九年六月発行一〇四号に、小笠原富枝作品を批評者として大場時夫、鑑賞を梅崎嘉明、又佐藤博三作品を陣内しのぶが批評、西田幸徳が鑑賞している。

次いで一〇六号誌上に木村正和作品を水本すみ子が評し、鑑賞を藤田美砂子が行い、同時に八巻耕土作品一首を取り上げて川原比露思が批評し、鑑賞を久米光春が担当している。次いで更に意欲的に前会員、細江仙子の協力に依り日本の実作者との連絡が取れ一二一号に椰子樹会員の作品数名を取り上げて、日本の実作者に依る「ブラジル短歌の鑑賞」(一)として、大橋基久、小久保泉、中瀬洋喜、百登美子、早川桂、稲葉京子らが、コロニア歌壇を展望し各作品に触れている。

次いで、其の(二)を一三二号に、

井本短歌への私見 大橋基久

底に流れる人生への悲哀Ⅱ井本作品を読んで 稲葉京子

批評の視点(日本の実作者の評によせて)(以上一三二) 井本

惇

陣内しのぶ作品評 (一三三) 早川桂

生臭からぬⅡ小笠原作品（二二四） 斎藤みよ子

ブラジルの風土性と作品

ブラジルに生き抜いた根性の歌（二二五） 小瀬洋喜

内なる風土（二二五） 早川桂

伝統の形式の中で（二二五） 栗山繁

内面の風土と短歌との断層（二二五） 大橋基久

合評

一九六八年、九八号に「ラボラトリオ」と名を冠して合評形式の欄を設け、各回数名に依り批評、鑑賞が試みられ、小笠原富枝の司会に依る一〇〇号までの三回は一〇〇号記念号に報告されている。

その後を受けて「短歌研究室」（二〇二）が、弘中千賀子担当として新しい感覚を引出さんと試みられたが第一回のみで終わった。新しい企画を生かして行くと云う事のむずかしさと、編集部の苦心のほどがうかがえる。新企画への登場者は、評者を米沢幹夫、陣内しのぶ、小笠原富枝ら、作者は清水節子、望月喜恵子、穂島千代らであった。

次に地方短歌会に依る合評がある。

第一〇一号作品其の一（二〇三） アサイ短歌会

難解短歌の合評（二〇四） カンポス短歌会

生方たつえ研究（二〇六） サンパウロ短歌会

「移り来て」の世界 藤田美砂子歌集合評 (一一八) 水本すみ子、ほか六名

新泉集、第一三一号合評(一二三二) ロンドリーナ短歌会

新泉集、第一三六号及び「二〇首詠」

“ 齒に衣を着せないで ” (一二三七) 弘中千賀子、ほか五名

新泉集、第一三七号及び「二〇首詠」

“ 虚心に作品を読む ” (一二三八) 安良田済、ほか五名

実験的歌評(一作者に触れて)

一作者の作品を一評者が取りあげ、各々論評、批判を加えている。

小笠原さんの人と作品 (二〇二) 武本由夫

北谷まがたの作品について (二一三) 井本惇

魅力の点から 知花作品 〓 (二二三) 小笠原富枝

知花清作品 (二二三) 酒井繁一

清谷勝馬作品 (二二四) 酒井繁一

感覚の若さ 〓 遠藤浩 〓 (二二四) 小笠原富枝

或る面から 〓 大場作品 〓 (二二四) 井本惇

いま一步 〓 清水作品 〓 (二二五) 酒井繁一

添削的に 〓 青柳作品 〓 (二二五) 井本惇

瑞々しい感受性 〓 内田作品 〓 (二二六) 小笠原富枝

中川荒記作品について (二二六) 井本惇

その意欲と新鮮さ 〓 中井作品 〓 (二二六) 酒井繁一

簀戸作品によせる (二二七) 井本惇

- 田上作品への希望(同右) 小笠原富枝
素朴の中に重厚さを 森作品 〓 (一一八) 酒井繁一
気のついた事ども 志伊良作品 〓 (一一八) 小笠原富枝
心の深みより発するもの 水本作品 〓 (一一八) 井本 惇
一つの岐路 八巻たけ子 〓 (一一九) 井本惇
用語の事など 石塚やす 〓 (一一九) 酒井繁一
尾崎作品に期待する (一一〇) 酒井繁一
感性のよさ 尾崎作品 〓 (一一〇) 小笠原富枝
山崎益一作品によせる (一一〇) 井本惇
弘中作品とその周辺 (一一二) 井本惇
対象に向う眼 水田作品 〓 (一一二) 小笠原富枝
軽部作品の将来性 (一一二) 酒井繁一
育てゆく可きもの 佐藤いち作品 〓 (一一二) 井本惇
期待を抱かせる筑波作品 (一一三) 小笠原富枝
前進の若さ 西田作品 〓 (一一三) 酒井 繁一
芯の強さ 大城作品 〓 (一一三) 小笠原富枝
生の実体としての新納作品 (一一三) 井本惇
森谷春男作品の印象 (一一四) 井本惇
智性と感性の谷間 西田作品を見る 〓 (一一五) 安良田済

作品批評及び感想

椰子樹詠草に対して毎号選者が選後感を書き寸評を加え、その指導に当って来たが、ここに挙げるものは編集部から特定の評者を指名し、作者の意図を探しこれを探究する企画が早くから行わ

れ、時に、意余って論評外に及び物議を醸し論争に発展した事も
一再ならずあり、その都度「批評の態度」に就いての再認識等が
有識者に依って論じられて来た。

前号作品批評

其の一に就いて (二〇二) 陣内しのぶ

其の二に就いて (二〇二) 安良田済

作品欄から拾う

一〇二号作品 (二〇三) 川原比露思

一〇三号作品 (二〇四) 弘中千賀子

作品に対する所感 (同) 同

漢熟語使用と傾向 (二〇四) 武本由夫

22回全伯短歌大会 (一一三)

上位作品批評 川原比露思

同 西田孝子

同 中江克己

同 開沼貴代

会員の見た

前号作品 (二三〇) 遠藤浩

同 西日季子

作品批評（一三二）

一三〇号より 森谷風男

同 弘中千賀子

26回全伯短歌大会（一三六）

生の拠点として 井本惇

三首の歌を見る 武本由夫

生命の亀裂 安良田済

大会作品寸評 細江仙子

前号二十首詠（一三九）

「イグアツペにてを読む」 森谷風男

前号作品評

岫雲集に就いて（一三九） 本庄研一

前号作品鑑賞（一四三） 同

同（一四四） 川原比露思

同（一四五） 大場時夫

同（一四六） 水本すみ子

同（一四七） 木村正和

座談会、其の他

「詩と短歌の交流」(二〇一)

スザノ短歌会及びスザノ詩話会、出席者 横田恭平ほか、一九名。

バストス四十周年記念大会を語る(一〇二) 出席、宮武勝甫ほか、七名。

「短歌と女の暮し」(二〇八) 出席者、小笠原富枝ほか、六名。

「神代ものがたり」(二〇九) 出席者、富岡清治ほか、六名。

一九七三年 「コロニア短歌とその動向を探る」(二三二) 出席者、武本由夫ほか、六名。

椰子樹の指向するもの(二四二) 出席者、安良田済ほか、七名。

選をする立場から(二四八) 出席者、井本惇ほか、四名。

特集記事

椰子樹はその生い立ちから紙数の許す限り歌人に関し、地方に於ける特殊事項又は行事等に就いて特集号を発行して来たが、一〇〇号以降には余り見る程のものが無く、僅かに追悼に関する記番が大きく紙数を取っている事は、椰子樹の老令化を語る事であるろうか。

吹本さんを偲ぶ(一一〇) 森重扶美

吉本青夢追悼号(一一七)

赤裸々に青夢を語るⅡ座談会Ⅱ 出席者、河村哉太郎ほか、八名。

海辺唱と青夢 井本惇

青夢を偲んで 江尻潤

自叙略伝及び遺詠五〇首

日本荘と椰子樹（一二〇）

案山子翁を悼む 徳尾溪舟

新納潤魚とその死（一三四）

或る個性の終焉によせて 井本惇

新納潤魚の歌境 武本由夫

岩波賞受賞者競泳（一三七）

は行の鳩 木村正和

空耳 岩淵静子

鍾乳洞 内田笑子

水の匂い 森谷春男

歌誌、歌集紹介

少年少女歌人紹介（一〇三） 穂島千代

グアイラ年鑑歌集 Ⅱ感想Ⅱ（一〇六） 開沼貴代

研究「壑の灯」（一〇八）

自己の客体化 大場時夫

壑の灯を偲ぶ 八巻耕土

作者の人間味 高橋よしみ

歌集の中の移民像 弘中千賀子

「白き州道」研究（二〇九）

白き州道とその自然 井本惇

濤声の人と作品 (一) 武本由夫
白き州道の中の農人像 開沼貴代

「波の涯」回顧(二〇九) 富岡清治

岩霧草Ⅱ研究Ⅱ(一一〇)

風土性について 酒井繁一

岩霧草の周辺 森谷風男

大場時夫とその仲間 吉本青夢

白き州道Ⅱ研究Ⅱ(一一一)

濤声の人と作品 (二) 武本由夫

「生きの日は」

濤声の第二歌集(一一二) 清谷益次

「波の跡」小竹清子歌集(一一三)

一つの解説として 新納潤魚

小竹清子備忘録 吉本青夢

自選歌二〇首

「岩叢」大場時夫第二歌集

紹介 (一一四) 清谷益次

瀬崎濤声歌集(一一五)

「生きの日は」に触れて 井本惇
歌集「産土」酒井繁一著

故国につながる（二一五）清谷益次
「やまなみ」の出版（二一五）編集部

「移り来て」藤田美砂子著（二一六）
女、妻、母の濃い表出 清谷益次

歌集「岩叢（いわむら）」の風格（二一六）
大場君の視野に触れて 酒井繁一
歌集「黄土」に触れて

酒井繁一歌集（一一七） 森谷風男

「案山子の歌」（一二〇） 清谷益次

「朝日短歌」一〇〇号記念集に寄せて（一二六） 編集部

やまなみを見る（二二八） 高橋よしみ

歌集「つぶやき」（二三二）
桜井健三著について 水本すみ子

歌集「白房」杉本千代第二歌集（二三三） 水本すみ子

弘中千賀子歌集（一四八）

「小さき詩型」 陣内しのぶ

アンケート及び提案

椰子樹は会員に「どの様に受け取られているか」と云う事は、編集者にとって最大関心事であると思う。既に四一号（一九五五年）以来、アンケートの形式で一般の関心度を打診し、一つの羅針盤として常にその純粹性を探って来た。

歌を詠む必然性（二〇一） 清谷勝馬、弘中千賀子

作歌する事のプラス（二〇二） 植村かず、八巻たけ子

作歌する事のマイナス（二〇二） 矢島健作、川原比露思

僕の考え（二〇二） 笹波北陽、上妻博彦

私はこう思う（二〇二） 賀沢朋子

今日の短歌（二〇二） 藤田美砂子

明日の短歌（二〇二） 久米光春

短歌の思い出（二〇二） 森重扶美

私が短歌に求めるもの（二〇三） 簀戸勝子

うまい歌（二〇三） 有田市治

歌になるもの（二〇三） 北原しのぶ

歌の明と暗（二〇四） 清水そとえ

把握と表現の間

一首の首尾（二〇七） 新納潤魚

青くむ想い（二〇七） 西田季子

永い内部燃焼（二〇八） 川原比露思

自然に生れ出るもの (同) 森重扶美

混沌たる秩序 (一〇九) 木村正和

問いに外れて (一〇九) 陣内しのぶ

精神を衝いて来るもの (一一〇) 佐藤博三

己れの結実をみつめる (一一〇) 水本すみ子

移民でなければ作れない歌 (一一五) 北谷まがた、吉武かの

え

ブラジルでなければ生れない歌 (一一六) 上妻博彦、高橋よ

しみ

同 (一一七) 穂島千代、久米光春、遠藤治

私と短歌

我、晩学にして (一二二) 山崎益一

希いをこめて (一二二) 河井美津子

つかずはなれず (一二二) 富岡清治

振り返りつつ (一二三) 小野寺郁子

振り返りつつ (一二三) 加藤操

私の歌歴 (一二三) 大城俊子

ペンネーム由来記 (一二四) 玉木五男、徳尾溪舟

同 (一二四) 春名泉水、北谷まがた、穂島千代

同 (一二四) 光南極、土屋ゆかり

同 (一二五) 中江克己

同 (一二六) 岩佐一步、大西阿哲

同 (一二七) 水田玉水、町田貴志、藤田朝日子

試行錯誤 (一二四) 本庄研一

- 同 (二四五) 安部栄子
同 (二四六) 大場時夫
同 (二四七) 開沼貴代
よい言葉、悪い言葉 (二四八) 川原比露思
同 (一四九) 川原比露思
同 (一五〇) 川原比露思
満ちたりた一時 (二四九) 上妻博彦、植村かず
わが危機感 (二四九) 久米光春
同 (二五〇) 遠藤浩
想い出に残る作品 (二五〇) 石塚やす

随筆、紀行、外

一つの雑誌から受ける硬さを救うものに随筆がある。我が椰子樹も常に紙数の許す限り、多くの感銘深い作品を掲載し会員相互の認識、交流に努めて来た。

- 老婆心から一言 (二〇一) 徳尾溪舟
寄せて帰らぬ片男波 (同上) 持永老生
「あれやこれや」とほじくり談議 (二〇二) 吉本青夢
第20回全伯大会の感想 (二〇二)
岩淵静子、橋本元江
コルコバード登山記 (二〇三) 山室新太郎
釣の醍醐味 (二〇三) 田上みづほ
歌う生活 (二〇三) 森田吉久

山の秋 (二〇四) 高原万里

荒木さん (二〇四) 佐藤一英

思い出 (二〇四) 佐藤光子

歌う人生 (二〇六) 新納潤魚

ガイラ歌会参加記 (二〇六) 佐藤一英

同上、印象記 (二〇六) 山岡清子

二つの社会の中で (同右) 望月喜恵子

砂丘の墓 (二〇七) 真木研一

追憶記 (二〇八) 森重羊鈴

創るむずかしさ (二〇八) 星野忘勿草

秋の雲 (二〇九) 植村かず

濤声の歌碑に (二〇九) 吉本青夢

島崎藤村の故郷 (一一二) 本庄研一

能登の数日 (一一二) 清水そとえ

雨のレジストロからカベルナ・ド・ジャポまで (一一二) 大

場時夫

追善雑記 (一)(一一一) 吉本青夢

同 (二)(一一二) 吉本青夢

白秋の故郷、柳川を訪ねて (一一二) 清谷益次

北海道の旅 (一一二) 茅根哲子

万葉のふるさと(一) (一一三) 梅崎嘉明

同 (二) (一一四) 梅崎嘉明

同 (三) (一一五) 梅崎嘉明

ハワイ日記 (一一四) 水本すみ子

「岩叢」出版記念歌会に出席して (一一五) 佐藤一英
花と浪曲 (二一九) 清谷益次

コスモポリタンの死 (二二〇) 細江仙子

吉本さんの一周忌(一二二) しもん都

歌壇に若さを(一二六) 酒井繁一

選歌について(一二七) 酒井繁一

批評について(一二八) 酒井繁一

グワイラ短歌会Ⅱ第一〇〇回記念出席の記 (一二六) 開沼貴

代

添削について(一二九) 酒井繁一

発表と表現 (一三〇) 酒井繁一

第25回大会に出席して (一三〇) 徳永京子、山口すえ、織

田真弓

歌を作らざるの記 (一三一) 斉藤広志

「写真の道」だが理論に捕われない事 (一三二) 半田知雄

“その日私は” (一三二) 米沢幹夫

垣間見たコロニア短歌 (一三三) 尾関興之助

黒姫塚を訪ねて(一三三) 中江克己

ふる里を訪問 (一三四) 徳尾溪舟

暁風忌 (一三四) 岩佐一步

立待岬 (一三六) 清谷益次

嵐雪の一句 (一三八) 醍醐麻沙夫

雪に沈む街の灯 (一三八) 植村かず

第四回全伯短歌地方大会記(一三八)

グワイラ大会参加 弘中千賀子

言霊を手草に取るの記 (一三九) 鈴木順雄

「泰・大・太」 (一三九) 末吉美佐子

ニャンコの霊 (一四〇) 椎野トノエ

自覚と反省をこそ (一四一) 武本由夫

茄子の絵 (一四二) 富岡耕村

レモンの様に (一四二) 小野寺郁子

それでも今は (一四二) 末吉美佐子

写生の伝統”やわらかな心” (一四三) 吉野秀雄

”墓参” (一四五) 池田喜城

歴史的背景ある作品 (一四五) 弘中千賀子

同 (一四六) 高橋よしみ

同 (一四七) 梅崎嘉明

第28回大会に参加して (一四七) 川久保タミ

全伯大会に初参加して 山田 朴

凧と階段 (一四七) 小野寺郁子

末期の水と昭和一桁 (一四八) 川田幸子

私の夢 (一四八) 大城俊子

花とお茶 (一四九) 千葉美夜

萩の咲く季から (一四九) 西田季子

萩の咲く頃から (一五〇) 西田季千

コロニア短歌賞

一九六七年九月の「椰子樹運営会議」に於て、作歌力と云う点に重きをおき「一カ年間の実作活動」に対して設けた賞で、一七名の推薦委員に依って過去一カ年間に五〇首以上の力作、秀作発表者を挙げ、これを七名の選考委員に依り最終的審議授賞決定を見た。然し、賞の設定の何所かに無理があつたのか、余り長く続かず、第二回のみで終った。

第一回結果発表 (二〇一) 受賞者 小笠原富枝

第二回結果発表 (二〇五) 該当者なし

「椰子樹誌上に現れた重なる記事」を、発表順に整理してみたが、分類上、脱落したり、重複した個所があるとすればこれは当事者の不手際の致すところで、何卒大目に見ていただきたい。

中江克己記

「椰子樹」の相聞歌考

酒井繁一

一、序説

「相聞歌」というのは、万葉集における和歌分類の一つで、唱和、贈答歌をも含むのであるが、恋愛の歌が最も多いので、今では主に恋愛歌を意味するものになっている。

ところでコロニアにおける相聞歌は案外に少ないように見受けられる。ことに「軟肌の熱き血潮」を歌い上げた相聞歌が少いようである。

それにはそれだけの理由があると思われる。第一に邦人の移住者は多くが農業移住者であり、而も青春期を過ぎた既婚者を家長とする家族移住者が多かった。

移住すると、そこにあるものは楽園でなく、辛苦にみちた労働であった。つまり移住した人間の素質においても、環境においても「相聞歌」どころではなかった。ことに生活の範囲、交際の範囲の多くは、入植した耕地、またはその周囲に限られるという状態であったので、恋愛の生れる環境が少なく、相聞歌も生れにくかった。勿論こうした環境の中で全然相聞歌が作られなかったと言いきることは出来ない。移住者の中には短歌をたしなむ人もあっただろうし、また恋愛に落ちた人もあつていくらかの相聞歌は作られたであろう。そうした推測は出来る。

然しそれらはあまり世に出ていない。初期の移住者で鈴木南樹

はよく相聞歌を作ったようである。後に私も幾首かを見せられたことがある。然しその対象者は日本に居る遠い日の初恋の人で、ブラジルとは縁がうすかった。

やはり初期の移住者で香山公孫樹、翁長白水は情熱の歌人と言われたが、胸を衝くような相聞歌はあまり見られない。

ただ白水に「あゝ敏子汝が訃を聞きし土地にしもまた帰り来し汝を思ひ出づ」という一首があるのを池田重二が発表している。

「移り来て」が出版されたのは一九三七年七月で、これは聖州新報社が同新聞歌壇に三六年二月から三七年二月までの一カ年におたり発表された読者の投稿歌の中から、須貝さだめが選出して一本にまとめたものである。

「日本移民創って以来三十年を経ているが、歌集の出版としてはコロニアのトップを切ったものである」と記されている。

五十九名の作品集であるが、この中にも目だつほどの恋愛歌は少ない。

軒下のキントに水の溜る音雨の夜夫と玉葱を編む

神志那絹江

かつて汝が黒髪のを香を抱きしめて別れし径ぞ松葉牡丹照る

土屋為吉

亡き妻の色濃き着物陽に映えてなまめかしさの胸をつくなり

荒木八寒

帰へりつきて涙うかべてただじつと我が手を握る妻のいとしき

渡部南仙子

このような作品がいくらか目を引く。

「椰子樹」の発刊は一九三八年七月になっている。以来三十九年の年月をかさねて、一五〇号に達したが、この長い年月の間においても燃えるような相聞歌は案外少ない。それにはやはり、それだけの事情があると思われる。

「椰子樹」は一般に知られている通り時の総領事坂根準三（嵯峨）、横浜正金銀行のリオ支店長椎木文也の肝入りで、コロニアの名のある歌人たちが参加して刊行されたものであるが、坂根、椎木はもとより、それに参加した岩波、瀬崎、中山らは既に五十台の人たちであった。かつて若い日に胸を衝くような相聞歌があったとしても、それを「椰子樹」誌上で見ることは出来なかった。

一方、武本、徳尾、行方、中江という中堅どころは、いまだ独身だったと思うが、私の目に触れた範囲では、当時にもものした相聞歌を知らない。このことはやはり先に述べた環境が大いに関係しているのではないかと思われる。私なども相聞歌は随分作った方であるが、ブラジルに来ては余り作れなかった。

「椰子樹」をまとめて見て気のついたことは若々しい相聞歌は少ないが、失婦愛の歌が多いことである。これは恋愛というよりも、むしろいたわり合う歌と言えよう。そこには苦境の中のいたわり合い、そこから脱け出した平安の中のいたわり合いが惻々としてひびく。

ともあれ私は長い歴史をかさねた「椰子樹」の中から目星い相聞歌を選び出したが、それらのすべてを此処に取上げることが紙面が許さないから、その中の目立った作品を取上げることにする。それでも紹介の程度を超ゆることは、やはり紙面が許さない。

便宜上第一号から第五〇号までを初期とし、第五一号から第一〇〇号までを中期とし、第一〇一号から第一四九号までを後期とした。(なお初期の数冊が手元がないのでその分は見る事が出来なかった)(人名に尊称を省略させて戴いた)

二、初期の相聞歌

病みつきし我が枕辺に一束のクローバ給ひし人を忘れず

有北羽衣

静か夜を文読みつかれて思ふともなくに思へり別れし君を

重松純造

離れ住む乙女恋して吾嘗って三十五軒の道を歩みき

柳川竜二

組みし手を解きてネオンの灯の下に別れ来にけり何時ものよう

に
樋田玲子

痛きまで握られし手を振り解きて雨けむるタラップを下る

水原吟子

許可を待て今宵出でゆく我等二人ぎこちなく手を組みて歩めり

木条美津瑠

吾が病癒ゆるを信じ嫁ぐ日の来るをひそかに待つと言ふ君

恩村実記

これらは未婚者の作品と思われる。

北、恩村の作品には病者の痛ましきがあるが、樋田、水原、木

条の作品には満たされた健康がある。

恋を知らぬひとりのわれは長病みて恋人の日に血を吐きて居り

中田武男

このような悲痛な作品もある。この作者は間もなくその天才的な才能を閉じて死んで行った。

あふれ出る涙に吾をむせばせて振向きもせず去りし人はも

陣内しのぶ

心弱く黙せしままに別れ来し人の恋しきこの日頃かも

唐沢恵津子

このように情のたぎった作品もある。

肩並めて歩きつつ今はふるるときただの処女との触感ならず

安良田済

眼ざしにその愛情を知りをれど言には出さず婚約者われ

梅崎嘉明

ともに婚約期の作品である。むず痒いような愛情を感じる。

天地に一人の我をたより来る此れのをみなぞいたわらずやも

清谷益次

これは「椰子樹」ではなく「林泉」に発表された作品であるが、まさに相聞歌であり「ずやも」で問題を起した作品であるから取上げておく。

うつしよにまたも見む日のあるやなしや別れの言葉かりそめならず
池田喜域

作者が住居地アルゼンチンから寄せた「相聞」と題する九首の中の一首であるが 読みごなえのある相聞歌である。

自らの寂しきことは言はざれど心は妻にひびきゆくらし

川原比露思

愛情をかたみに示せしこともなく結ばれ合いし吾ら二人か

光田秀男

さきほどは我がひねくれを泣きながらなじりし妻と腕組みて行く
別府二郎

降り出でし夜の雨音静かにておのづから想ふは旅に在る夫

森重扶美

身を灼きし愛情も今は淡々と添ふ年もすでに二十幾とせ

開沼貴代

今日もまた想ひ浮かぶは新家に住まで逝きにし我が夫のこと

岩波とめ

かへりみてよき妻なりと言切れぬ思ひ切なく灯をともし

松島末乃

夫を待つ日はかさなりつ過ぐる夜はそねみ心を打ち消しにつつ
南崎雅子

音立てて降りつぐ雨に傘持たで出で行きし夫をしばし気づかふ
植村かず

一つ灯の下に寄りつつ老妻と静けき今宵文かきて居り
三浦義雄

妻病めばほとほと事も病む如し心重たく仕事も手つかず
森重羊鈴

これの世に相結ばれし幸を今宵も夫に頬寄せて言ふ
田中明子

湯上りの化粧を終へし我が妻は清く微笑す旅終へし我に
中津井紫路

この妻をついに死なしむべからずとはや愛恋の思ひにあらす
井本惇

日向くさき布団に心和みつひっそりと夫に身をよせて寝る
弘中千賀子

真摯なる恋にしあらば二つなき身をも魂をもかけましものを
葛西妙子

長病みの妻が日増しに甘ゆるをとがめることもなく看りをり
南条由喜夫

年を経て鎮もる胸ぬちに夫の影さやかにうつるを我が喜びとす
小竹清子

よそ行くと薄く化粧へる古妻が今日はいたくも若やぎて見ゆ
岩波菊治

おぼつかな足ふみしめて立つ我によりそう妻と顔を見あはす

滝沢正

公園の木かげの道を歩みつつ祈りより強き訴へなりき

酒井繁一

このように取上げてみると殆どが夫恋妻恋の歌である。このことは若い歌人が出ていないことをも意味すると思われる。

作品の多くは茨の道を超えて平安の中に歌われたものであるが、なかには病間の作品もある。「老い」を歌った作品が多いのも「椰子樹」会員の年令層を示し、故人を追慕する歌もやはりそのように受取れる。

岩波菊治と岩波とめ、森重羊鈴と森重扶美の夫婦詠には、それ自体に引かれるものがある。岩波菊治は一九四九年の第一回全伯短歌大会に「口汚く罵り合へる妻も吾も互みに老けて耐へ性のなき」の一首を発表しているが、口汚く罵り合うことも相愛の現象と言える。

葛西作品には血潮の訴えがある。与謝野晶子を想わせるものがある。相聞歌はどうしても血潮の訴えがないと湧きたたない。不二山南歩は「椰子樹」の第二五号において「相聞歌のない歌誌の味気なさを語りながらコロニアのアプレゲール論に及ぶ」という一首を発表している。

三、中期の相聞歌

「椰子樹」が刊行されて五〇号をかさねるまでに二十年を経ている。「椰子樹」の年令の半分を占めていることになるこの初期には比較的に新人が見られる。

然し中期になると、初期に顔を並べた作者たちが、そのままに伸びて活躍している趣きがある。従って相聞歌もこれらの作者たちのものが多く、家庭における夫婦愛の作品がいよいよ多くなってくる。その中から私はつとめて新しい顔の作品を取上げてみたい。

すこやかに老ひにし夫よ菜園に鋤打ちふりて今日も耕す

玉木梅

老妻のいたわりのごとてのひらに温り伝い来野良の朝餉は

安達太良

古希すぎしわれの愛情のしぐさとも老妻の肩の凝りを揉みほぐ

近昇

愛憎の起伏もいつか平らかに吾が三十年を妻と過ぎ来し

森元三山

三十年を添い来し妻に幸福薄く信じ合いつつ髪白くなる

田上みづほ

これらはすべて「老いの歌」であるが、その寂寥の中に澄んだ愛情がある。そして平安がある。

寡婦我の病に臥しみて終日を想ふは逝きし夫のこののみ

小林寂英

女々しとも我がありようを思えども唯ひたぶるに亡夫の恋しく
井川幸子

常に吾をみつめいる夫の目のあれば忠実に事を告げてゆくなり
森久子

遠くより呼びいるは誰蓮の座に焦れ焦れて待つ夫の声とも
吹本菊子

これらは亡き夫を恋う作品である。

狂はしく妻変ふ心如何にせむ永久に帰らぬものと知りつつ

奥村九

これは亡き妻を恋う作品である。全体を通じてみると、妻にさ
きだたれた人の作品よりも夫にさきだたれた人の作品の方が多い。

かたくなの吾性ゆえに夫も我も幾度冷たく背をむけあひし

清水節子

相逢ふて今また別れむ運命かと嘆き言ふ汝の頬にふれて居り

魔外二男

屋根重く曇れる日なり二人のみの時さえすでに燃ゆることなく

清谷勝馬

一言の悔も労はりも言はずして痴呆の如く夫はなりにし

田中八重

いらいらと物言ふ時よりたまたまに夫が優しきときはかなしく

西田季子

馬を率て夫としい行く月明の山路に長し吾等の影の

安部栄子

山の家に一人ひそかに夕餉して早寝してゐむ妻を思ふも

牛草茂

相寄りて互に体をぬくめ会ふ恋しと言ひしは遠き過去にて

西田孝徳

子の娶り運ばむとしてゆくわれに通いて妻のこころ愛しき

坂本清人

病ややよろしき妻が木洩陽の揺るる井戸辺に髪洗ひ居り

東野暁風

後世までもつづく縁の我が夫と石のきざはし並びて登る

中村たえ

美空ひばりの映画に連れだつ昼下り妻は軽やかな白き靴はく

中川原実

眠りいし妻の前髪なでる手にこぼるる如く愛語が交う

八幡与三

石道を独りゆきつつまみに顛つ君と肩並めし過ぎし日のこと

尾崎都貴子

このような作品を見ることが出来るが、いずれにも作者の翳が出ていし、夫婦の愛情の濃さもいろいろの象で出ている。西田幸徳、西田季子と夫婦揃つての作品があるのも見逃せない。

異なる人種間のある距りを想ひつつ妻の罵言に耐へをり

武田公平

かず少ない他民族との結婚を詠んだ作品であるが、ここにはやはり意志の疎通をかく悩みが歌われている。

相通ふ心は感じつさりげなく世間話をして別れたり

徳尾溪舟

帰り来し夜更けの床に病む妻が櫛の目掘りつつ黙して居たり

武本由夫

みづからを励まし氷くだきをり熱ある妻の氷囊かへるべく

米沢幹夫

幼等の寢息ととのふ夜くだちこの病む妻を死なしむべからず

行方正治郎

「椰子樹」の代表作者四人め作品であるが、徳尾作品のほかいずれも病妻を詠んでいる。

倅せも又さびしきと思ふ日よ吾がため妻は雑炊を煮る

吉本青夢

青夢の晩年の夫婦生活は悲痛であったがこの作品にはまだ妻の温かさが出ているし、青夢の倅せも出ている。

たまさかの生花講習に行くわれに鉛筆削ぎて夫は手伝う

笠原くに

妻の手をとり交叉路をよぎり来て旅遠く来し疲れ覚ゆる

宮武勝甫

言葉少なに語る妻なり争いもなく十年はゆめの間にすぐ

有田市治

草花を愛する夫のゆとりある姿にあたたかき思い湧きくる

井上ふじ

いずれも平安に過ぎゆく夫婦生活の中の作品であるが、このよ
うな作品もやはり相聞歌の部類に入るであろう。

四、後期の相聞歌

ここに後期というのは一九六六年から一九七七年に至る八年間
を指すことになるが、この期の相聞歌は殆ど夫婦愛を詠んだもの
である。その夫婦愛の作品もいよいよ年寄りじみた作品になって
いる。

亡妻亡夫を詠んだ作品も中期よりもはるかに多い。これは「椰
子樹」そのものの老化を示している。新しい顔振れがいくらあ
るが、その作風から推測すると多くは中年以後の人のようである。
ただ生活苦を詠んだ作品が少なくなっているのが見られるが、こ
れは生活が安定し、この国に定着したことをも意味していると思
われる。

亡き夫を慕う思いをかみしめて仰ぐ夜空の星は冷たく

関戸香代子

椰子樹一号に妻安産のわれの歌亡き妻しのぶ慰めとなる

富岡清治

ついの住所ここに定めて思い探し夫の遺骨移しまいらす

三浦久和子

冷えていく夫の体に幼らととりすがりし日より二十七年

茅根哲子

亡き妻の声聞く思い四十年の慣れが束の間現実をはなれ

吉田幸太郎

花莫蔭を樹下に敷きて語らいし在りし日の夫頭ちてくるなり

石塚やす

話さむと思えど夫はすでになくわがひとり言胸に冷えゆく

山口きわ

愛憎も夫なれば長く過ぎ来しを今はこの手にあふる喪の花

吉武加野枝

逝きたるが故に目にたつ部屋箆笥ありし日の妻幻ならず

山崎益一

仏壇に夫の好みしまんじゅうを供えてしのばむ今日の命日

岡野でん

夫逝きて食の進まぬ日の多し一人厨に漬菜をきざむ

清水さかえ

移り換ゆる位牌に言葉声にしてみととせぶりに亡夫と語らう

田中朝子

いずれも亡夫または亡妻に心を寄せての作品である。読んで迫るものがあるが、二、三を除いてはまず添いとげた人々のように見受けられるのは、せめてもの慰めである。

来し方のことには触れず古い夫といたわり合いて年令重ねゆく

古川信子

五十年記し来りし日誌をば妻と繰りつつ歳を迎うる

石橋初穂

老斑のふえし夫の顔見つつふと甘えたき心情のわく

古川孝子

吾よりも永らう命か老斑の夫の背あわれと思う夜もあり

古関俊枝

還暦の夫を祝いて温泉を子が奨むるに二人してゆく

桜井よし

これらは縁永く生くる夫婦の生活を讃える作品と言えよう。

六十年働きつづけし夫の寝顔病みやつれしが胸に迫り来

河井美津子

風邪の吾にレモンを獲るといでゆきし夫が鳴らす鋏の音す

宮崎多満江

カラテレビ購いて病夫と共に見るこの上の望みなきが如くに

小野政子

残生をいとしみ合える夫病めばわれに過剰の愛育つべし

藤田美砂子

幾日か吾をみとりて帰る妻面伏せにして言葉少なく

大和田忠信

病いを詠んだ作品であるから、悲哀はこもっているが、信頼の

こもった作品である。

並べおく白き枕の目に沁みて帰郷の夫の便り待たるる

篠田まき

幾日かを旅に過して家妻のやさしき事のみ浮かべる今宵

加藤操

雨垂れは耳につきつつ雨がちな旅路の妻を思う夜すがら

高島定三

旅に居る夫とすれちがい行く吾の旅をひそかに淋しみて居り

柴倉知余

旅終えし充足の裡のけだるさに妻が入れたるカフェーがうまし

佐藤義男

いつまでの倅せなるか夫とゆく旅路に心弾めと思う

高野愛子

これらは「旅」を取入れての作品であるが、それぞれの思念がこもっている。

かくて又始めの二人に戻る日の来むと思えば予習の如し

小野寺郁子

荒れ性のわが為夫の買いくれしゴム手袋が日向に匂う

梶田きよ

吾にやさし夫と家路を帰り来て温かき会話またくり返す

織田真弓

あざなわれ来し歳月の淡々と傍えに夫の寢息が深し

水本すみ子

靴音に女の思い寵めてゆく夫のかたえに歩を合せつつ

野上とし子

冷えし掌を摩りて配達する夫か肌に沁む湯を浴みつつ想う

青柳ます

触れず来し思惟かとおもい寂しかり仮睡の夫の洩らす言葉の

岩淵史津

吾が歌に南瓜の絵をば画きくれし夫との縁ふりかえりみる

八巻たけ子

抱きいし人の影像崩れゆき陽に透し見る玻璃器の水を

大城俊子

面白きこともいつかはあるべしと過ぎ来しを言う妻にうべなう

上妻博彦

此の日頃優しくなりし夫と居てそのよりどころ聞きたき時あり

川久保タミ

いずれもきめのこまかな夫婦愛のこもった歌である。

うとましき人と想いし夫なれど別れて住めば恋しさつのる

佐伯さと子

「別れ住む」ということが胸を突く。緑が切れているのではない。

固き手の掌なせて思い及ぶ汝は我が妻となりてくるるや

水田玉水

青春をかけた相聞歌の殆どない中に、このような作品のあることは頼もしい。

五、続び

述べて来たように「椰子樹」の四十年に近い歴史の中で、瑞々しい相聞歌は至って少ないが、夫婦愛を詠んだ作品は予想以上に多い。しかも四十年の歳月の中で、初期から今日に至るまでその心境に衰微がなく詠みつづけて居る人の多いのに心を引かれた。ただ万葉、古今、新古今、または与謝野晶子の作品に見るような強烈な愛欲の訴えが少ないから、恋愛歌というには物足らなさを感ずるけれども、作品の底には浄化された愛欲の血が流れている。作品そのものの価値には余り触れなかったが、大体において他の部類にぞくする作品に比べると、こちらの方に生彩があると感じられた。これはやはり愛欲という衝迫の強い素材のためだともいえよう。

「都子樹」を通読して大きく感じ取られることは、新顔が段々少なくなることである。作者が年々老化を示していることである。初期に集った人たちがそのまま中心になって今日に來ている。この人はと望みをかけた新顔が、わずかの期間に消えている。この

ままに行くと「椰子樹」の作品は「老人の道ゆき」となりかねない。相聞歌も「老人の愛の道ゆきの歌」に終るようである。

今後のブラジルの歌壇にどのように相聞歌が生れるであろうか。「相聞歌」と言えばまず恋愛がなくてはならない。移住者としての私たちは先に述べたように、生きる足場を固めることに専念したことと、年令的に相聞歌を生み出す境地に遠かった。

今のコロニアには若人が多い。生活も楽になった。今後もこのように発展して行くであろう。然し相聞歌が生れるには先ず歌人が生れなければならない。

コロニアは年と共に日本からの移住者よりも日系のブラジル人に変ってゆく。

その中の幾人が「短歌を作る人」になるであろうか。短歌を作るには相当の日本語を知り、それを使いこなさなければならぬ。国際的に日本語の必要がたかまって、二世、三世が日本語を相当に知り使いこなせたとしても、日本民族特有の短歌を作る人が幾人生れるであろうか。

大きな期待はかけられないと思う。新しい移住者も一応は考えられるが、これも戦前のような大量移住は再び実現しないと考えられるし、戦後の移住者の中に歌人が案外少ないことは、新移住者に希望的観潮も許さないものがある。

所詮ブラジルの短歌は、「何か―」がない限り「老いの道ゆき」で相聞歌も「老いの感傷」をつづけるのではないかと思われる。

附記 はじめ編集部からの注文では「コロニアの相聞歌考」と

いうのであったが、それは短日月で出来ることでないから、範囲を「椰子樹」に限ったが、編集部が注文したテーマは意義の深いテーマで、語かがこの方面の資料集めに努力して、移民生活の歴史と対照しながら考証して一本にまとめたならば、移民史の中の生きた血脈として尊い文献になり「移民文学」としてもその位置は高いものになると思われる。

物故歌人作品集

川原比露思記

池田重二

(日本)

一九六九年二月二十五日没

すこやかな一日とてもなきわが軀とぞあきらめにつつ働きにけり

おじさんと呼びてなずける友の子を我が児の如くいだく我かも
父母も妻子もなくこの国に住みわびにつつ七年を過ぐ
たたかいに疲れしものかこの日頃気力おとろえ我は病みゆく
才能のなきを認むれどなおもまだ筆すてかねて小説つづるかも

奥田葉吉

(モジ・ダス・クルーゼス)

一九六九年七月十二日没

植え替えし南天の鉢をまずは見き三日目毎に帰る吾が家に
妻の声も子らに混りてはしやぐを風呂にひたりて遠く聞きおり
湯あみつつ指にふれたる足裏のがさがさ固きは死皮の一部か
出勤の朝まだ暗き車内にて本読む指は寒さにこごゆ
朝霧はややに霽れつつ硝子窓に雫は跡を引きて伝わる

上野紅陽

(スザノ)

一九六九年九月五日投

浜木綿は長き渚にとどろきて潮よる真夏の浜辺に咲けり
クワレズマ咲く山深く登りきて定めなく降る霧にぬれ居り
倉庫の間のかそけき草も花持ちちて暑き真夏の陽のさしており
何をするあても無ければ店に居て客無き間を椅子に坐れり
病みあとの衰えしるく歩みゆくコンデの坂に動悸して居り

仲 眞 仲 磨

(サンパウロ)

一九七〇年一月五日没

四百余种ありという蘭をつぎつぎにただ珍らかに観つつ巡りぬ
ややに疲れ芝生の上に憩いしが園丁は怒らずかろく咎めき
芝の上に坐ればいとど冷えびえし冬はも未だ去りがてぬかな
カボクロの住みける跡か枇杷の木が幾本かあり林の中に
怠りし歌作らむと家を出でし今日の吟行はおろそかならず

村 上 証 二

(モジ・ダス・クルゼス)

一九七〇年五月一日没

桃畑を見廻り来れば香は立ちて青葉の蔭に熟実も見ゆる
青葉濃き桃に袋を着せながらいつしか頭痛も忘れていたり
走り桃小さけれどもふくいくと匂うを吸いこむなつかしみつつ
白き湯気ふきふき妻の沸かしたる薬湯飲むも日課の一つ
工内に廻転音はすさまじく唸りて労務者の動きたくまし

吹本 菊子

(サンパウロ)

一九七〇年五月四日没

空気少し伴い階をのぼらんと頼る手摺りを足の拒める
家家に秋はひそかに入りこみて落葉する木に働きかける
秋の声ききて急かるる花々か散らん覚悟はわれも出来てる
風が押す方に朶みて乾きしかこの従順にわれも生き来し
心深く堪うれば衰え露わなるわれの生きざま恋う人もいて

吉本 青夢

(モジ・ダス・クルゼース)

一九七一年六月二十八日没

白毫の朝の光にゆらぐ灯の虚しさゆえにわれは嘆かう
いつよりか岬に細く灯は見えて雨に濡れ行く浜添いの道
倅せもまたさびしきと思う日よ吾がため妻は雑炊を煮る
諦めば一人すがしと言いながら帰れば声なき夜があるのみ
海鳴りの高き末明に家出でて会わぬ妻かも五年経につつ

高田 蔦五郎

(カンポス・ド・ジョルドン)

一九七一年七月六日没

しとしとと桔梗を濡らす雨の朝ニグロ媪が鯛売り来る
沈む陽の赫きを見つつ通りゆく草の茂りにせばまりし道
ひとを待つよろこびもなく籠る夜街のとよみも遠く沁みいて
シヤボン玉商う人の声もして真昼静かに路地に風たつ
街に出て老いにやさしき人を見つ妻にと今日は目刺買いたり

三浦 朝江

(サンパウロ)

一九七一年七月九日没

生活は田舎にあれば困らねど砂糖欲しとの姉の文来ぬ
おりたちて庭掃き居れば梨の木の青葉がくれにベンテビー啼く
夕立の晴れてさやけき夕間暮庭の木立に啼く蝉の声
去年の冬植えしくちなし花もちてたかきかおりの庭に漂う
夏の陽の強き光りに紫陽花の花はま昼を萎えて居り

三好 案山子

(ボンスセツソ)

一九七二年一月二十日没

地平線の涯を伺いたる雲一つ吾が乗るオニブスと平行を保つ
貧しかるとも健康が身の倅とおもうばかりの日を過しおり
一代を趣味に生きたき願いのみに心足らいて老いつつぞ過ぐ
おぎたなき胸をひろげて児を抱ける乞食に誰か銭投げてやる
移り変り激しき思想の外に生く世評にかかわることも在りしが

西灘 攝津 夫

(クリチーバ)

一九七二年五月没

牧場のはての落日あかねして旅情ひしひしわが目にしみる
がまの秀の群落広がる湿原に西日うらうらたそがれせまる
わらび摘む手に匂いくるわらびの香遠き故郷の春を想いき
森の辺にサビアなくなり畑に立ち鋤をやすめて吾はききおり
静かなる森に茜の流れきてサビアの声もいつかとだえぬ

杉本千代

(グアイラ)

一九七二年七月三十一日没

湯浴みして安楽椅子に深々と身をゆだねつつ来しかた憶う
長命に秘訣などなし亡き夫の遺志を一途につぎて来しのみ
乳ばなれしたる仔牛が尾を振りて春の小川に水を飲む見ゆ
清掃夫の来ぬ日曜の銀行街昨夜の雨に汚れしままなり
素枯れたる葡萄の棚の傍に寅の尾茂り花は咲きみつ

有田市治

(ロンドリーナ)

一九七二年十一月九日没

病棟をまがれば長き廊下あり静かに厳し国立病院の夜
夜の底に咳き込みやまぬ病人の息ぐるしめるが身にひびき来る
吾が生命ようやくのびしと思ふとき涙こぼるる人間なりき
四十七才にて終ると思ふ苦しみと恐れが身近かに馳け巡りくる
来る処まで来たるかと思ふ妻の手を握りてそれより泣くだけなりし

伊波 みち

(サント・アマール)

一九七三年三月二十五日没

草原の青きを揺する風の中こころなごみつ我はゆくなり
ながながと西日厨に強くさし「明日も雨か」とうれいていたり
この孫の扁平足は祖母われの負目ともなり時に寂しむ
語るべき多くを残し義姉逝きぬ讚美歌きけばつきぬ想いに
浜に佇てどなおいやされぬ郷ごころ拾いし貝を掌にならしいて

新納 潤魚

(リオ)

一九七四年四月十二日没

裸木の溟き梢にちりばめる星を寂土の花と思わん
垂直に枝より降りし鳥影のひそめるあたりに茂る浜木綿
生の苦患きわまるごとくよる皺を刻みてヂヤコメツテイの貌写
る

固まりて白き犢が岩蔭に振る白き尾は円を描きつ
夾竹桃の花咲く塀の下をゆき肌光る鯖を購い戻る

田上みづほ

(ロンドリーナ)

一九七四年六月四日没

新らしき年の息吹きか亭々と繁るファイゲラは初日を弾じく
なだれのごと押し流されし年月よ心の支え持なざるままに
己が声忘れしならん流暢に人語喋りてあそぶオームは
年毎に無精深まる吾が心戒めながら机に向う
定年のなきブラジルに過ぎし来て老人問題を聞き流しおり

吉田孝太郎

(グアラ)

一九七四年七月二十五日没

鋤かれたる土塊赭く喝き居て生あるものの影を止めず
恃むもの何一つ無き農と云え赭土畑に裸木は立つ
火田民と違いもあらぬ農法を疑いもなく我が続けつつ
人よぎる戻り紙面に捉えつつ心うつろに反射光の中
吾娘独り残して帰る夜行バス時雨るる窓にわれ亦独り

笠原 くに

(カンピーナス)

一九七四年七月三十日没

捨てられし小さき芋の芽ぶけるを茶碗に活けて今日はよき母
唯一人終り行く命思う時世の物すべてかかわりのなき
おとなしと言われて胸にひびき来る今和解して来し席にして
色彩にとぼしき家の厨辺を補いくるる人参の赤
我が髪に白髪ふえしと夫は言いて早や忘れ居し父の眼をする

後 藤 蔦 子

(サンパウロ)

一九七四年八月二十三日没

不浄なるもの皆掃除機に吸わしめて清々として絨毯紅し
沁々と旅の装い解きいっつ我が安らぎをもつは家なり
病みこやる室の窓辺にゴムの葉の落ちしたまゆら渴きを覚ゆ
少女期の感傷またも還り来て師より賜いし水仙活ける
目に見えぬ程に揺れいる客室の芒にめぐりは秋頭つ気配す

工藤 勘一

(サンパウロ)

一九七四年九月二十五日没

鳴く虫のしげき夜露の径行けば稲穂の波に白く月射す
山の端に月の傾く暁方に湖面は鈍くなぎて静けき
湧く水の澄みしながれにさ緑の一きわ萌えし芹の一むれ
紅濃く咲きし花卉の散りしきし土に冷たく夜せまり来る
一日の終らんとして空びんの影が厨の壁に重なる

南崎 稚草

(クリチーバ)

一九七四年十二月十五日没

健康を喜び働く母の傍何を想える父亡き吾娘よ
価値のなき生を生き継ぐ哀れさかごみ箱あさる背の垢光りて
花も葉もありの姿を生かし活け座を保ちいて美しき調和
おずおずと耐え来し母の愚を云いて物鮮やかに処しゆく吾子ら
田舎の子街の子生徒は同じにて登校のわれめがけ駈け来る

繩手敏夫

(アモレイラ)

一九七五年七月三十日没

農薬に蝕はまれつつさりながら棉を播かねはならぬ宿命
風邪熱の目に冬雨の降り重くゴムの葉太き光りをこぼす
大いなる轍に噛まれゆく砂利の一つが跳ねし音闇にあり
落ちたまる枯葉の径ふかぶかと踏みつつゆきて逢う人もなし
髪摘みてささやかな春の風に逢う若くありたし生命のかぎり

岩波とめ

(モジ・ダス・クルーゼス)

一九七六年四月二十三日没

三十年ぶりにサントスの港にわが見たるああなつかしの日本の
船

我が亡夫の歌集を日本へ発つ友に託して遂に願かないぬ
幾まがり高山道を越え行きて大建築の前にバスは止りぬ
やや高き山に四方をかこまれてモダンな建物はしずもりて居り
山深くかかれる橋のほとりにて思い思いの位置に弁当開く

樋田陽莊

(サンパウロ)

一九七六年六月一日没

この里を建てしパイオニアの人格に畏敬の心深く起りぬ
この里の児等の魂にふさわしき額掛かりおり八紘一字と
いささかの我が癖なるを意識して気のとがむるは職業の故か
はずみ合い気易に言いしざれ言に心残りて憂鬱になれり
生くることにひがみし故かこじれたるひが言いて自己満足す

小田切劍

(サント・アンドレー)

一九七六年八月十六日没

霜の降りし朝は冷めたし珈琲ひきて子はかじかめる手を火にか
ぎす

とりわけて亡妻が好みしパイヤの一片は供えて予と食しにけ
り

子を抱きて牧原来れば宵早くかたむく月を子は指さしぬ
うつろなる心抱きて詣で来し墓原あかき朝暁の雲

墓原にたむろす雲の朝焼けて移りしずかに落ちゆかんとす

南 條 由 喜 夫

(プ・プルデンテ)

一九七七年一月十八日没

自らの過去の錯誤をみる如し墜道のひびより滲む滴り
風音のごとまた葉騒するようなちまたもまたの生活の音
湖に生れ湖に納まる風ならん重く垂れ居し雲がきれそむ
冬芽だつ珈琲幼樹うす赤き芽らはほろびを知らず伸びおり
幻のこえとし思う声のありよろいてきかん内のぞかれん

井 之 盛 一 翠

(ロンドリーナ)

一九七七年一月二十七日没

通り魔の如く萱野を焼け抜けし火は脂肪草原に渦巻きており
切り終えし防火道を越えゆく大野火に唯呆然と汗ふきてたつ
一部落総出で急ぐ防火道切り夜をどよもして野火は近づく
野火跡の唯黒々とはてしなくそくばくの木株しきりに火を吐く
迫られし決断吾に自信なく灰皿に煙草突込みてたつ

戸崎 清 作

(プ・デ・マイオ)

没年月日 不詳

藁を焼く低地の煙ひろがりて夕べは家のめぐりに匂う
臭き鯛さげて人なかわれ行けどこの屈托の癒ゆるにあらぬ
淋しみてわがいる時に降る雨は夏の草生に音なく沈む
殊更に励みてひと日棉を摘む何に動けるころともなく
風和ぎて夕しずまればとりとめなき思いは生死のことにも及ぶ

私に与えられたテーマは「物故歌人作品集」であった。一〇一
号以降一五〇号までの物故者は二八名を数える。作品は別に秀作
を選んだ訳ではなく、私のチェックしたものを再録した。

五〇号記念号までは岩波先生を始め二六名の物故者を記録し、
一〇〇号記念号では一七名、本記念号の二八名を合せて七一名に
達している。

ここに更めて全物故歌人の冥福を祈る次第である。

記念号によせる随想集

椰子樹と典に四〇年

— 思い出は夢幻の如く —

開沼貴代

今度、椰子樹一五〇号記念号が発刊されるという。創刊されたのが一九三八年であったから、人間ならばさしずめ四〇才の充実盛りでもあろうか。コロニアで始めて全伯的な歌誌を出すというので、後援の坂根、椎木氏の他、当事者として、産み、育ての親となつて育成に全力をそそがれた徳尾、武本両域をはじめ中央同人達は大いに張り切っていたと思う。しかし、その時点では、延々四〇年の長きにわたり続き、また今後もつづくだろうとは、当事者も考えられなかったのではないかと思う。

その頃いろいろな文芸誌が出ていたけれど、三号雑誌という言葉の如く、ほとんどは、たちまち消えてしまうのであった。

「椰子樹」が予想外に発展永続しているのは創立時のモットーであった「流派巧拙を問わず」という建て前にしたがい代々の編集者幹部が運営に心をくばってきたのが大きく貢献していると思われる。

私は、三五年頃よりブラジル時報歌壇に投稿していたので、創立同人に推されたのであったが、創刊号に作品を寄せたのは七十余名であった。当時は皆若く、中央同人の半ばは独身青年だった

と思う。その七十余名の中、秀れた歌人の岩波先生をはじめとし数え切れない程の大勢の歌人が亡くなった。健在でも椰子樹誌上より多数の歌友が消え去り、現在まで歌をつづけているのは、武本、富岡、西田諸氏と私とタツタの四名という変遷ぶりである。過去となれば四〇年も短いように思える時もあるが、それぞれの思い出をたぐる時には、やはりながーい道であったとつくづく想う。

当時の自分の歌を今読み返してみると、恥かしくなる程、幼稚な作が多い。開拓農家の主婦として、深夜に濯ぎ、日の出と共に乳児を背負い、重い弁当を両手にさげて幼子を連れ遠い畑に通う日常であった。事情にうとく買ったロッテは長さが3KMもあつた。

作歌勉強どころかその頃の奥地住いでは、歌書など入手出来る筈もなく、日本からの手持ちの歌書、歌集を繰り返し読むしかなかった。兄弟の多い私が只一人離れて、知己のない伯国に移ってきた寂しさをまぎらした、乙女の頃より作っていた短歌に、心を燃していったのだった。

畑に出る時、忙しさにまぎれノートを忘れた時は、児に乳を与えながら思いついた歌を忘れぬように、指で地面に幾度も書き、シツカリ頭に入れようとするのだが、記憶力の弱い私は、佳吟と思えるような歌に限って思い出すことができず惜しい思いをすることが度々であった。

当時、時報歌壇の選者は徳尾氏で、折々親切な批評と励ましの手紙を下さるのに感激して投稿をつづけていた。この歌壇に私より少しおくれて葛西妙子さんが明星派風の歌を、横地の姓で西田

季子さんが他の女流と共に歌を出していた。ある日この歌壇に彗星のように現れ、万葉調の秀吟一連を、葉山幸子の名で発表した人があった。誰だろうと歌人の関心を集めたのであったが、後日、それが中江克巳氏と解り再び驚いたのだった。

その頃のある日、折から棉摘み時期で日曜であったが子供達を引き連れパンヤ作業をやっていた。何気なく墾道を見ると、見知らぬ男が二人、乗馬でやってくる。何かの外交員かと思っていたら驚いたことにそれは、私も歌を出している『瞭原』の発行編集者である阿部青杜先生と、荒木八雲さんであった。隣り植民地で、帝大出の文学士が博士号の論文を書きながら日本語を教えているとの噂を聞いたその人で、短歌は牧水門下の名のある歌人なので、ヒヨツ子歌人の私はスツカリ恐縮しまた感激した。これがブラジルで歌人に出会った最初であった。

それから間もなく同氏は聖市に移転され教普会入りされたが八雲さんはその後も折々訪ねで来られ、歌を語り、得がたい万葉集をも貸して下さった。戦後間もなく河村哉太郎氏と来られた事もあった。このお二人は聖州新報歌壇で活躍し歌集『移り来て』に名を列ねておられた。

阿部先生が上聖された次の年当り椰子樹が創刊されたのであったが、第一号を出して間もなく突然日米戦争となり、皆が知る如く日本語印刷物は禁止されたのであった。その一寸前頃珍らしく岩波先生よりお手紙があり、旅の途中マリリアに寄るので同地の歌友達に会いたいとあったので、雨降りつづきの悪路を三時間もジャルジネイ口にゆられ、乳児を抱いてマリリア市に出た。小雨

の中を同行してくれた春洋さんと、先生が宿られそうな放館を尋ねて廻ったが、遂に探し当てられず空しく帰ったことがあった。後日の消息でバストス歌会の帰途夕刻着かれたのだそうで会えない道理である。

戦時中 青年会の有志が十人ばかり作歌をはじめ、渡辺春洋、護、井出弘、有田市治さん達が中心になり『春秋』と名付けた歌誌を作り、私が短評を附し回覧していた。

また、植民地の読書家の間で、手持図書をひそかに交換し合つて、活字への飢を充していたが、その中の一人に、後年農業と協同文学賞を受けられた小滝土香氏もおられ、「春秋」誌に協力歌を寄せられていた。スザノの歌人大西阿哲氏は義兄に当る。

ながい戦争がようやく終り日系人の行動が自由になった時、マリリア市で歯科医をしていた元中央同人の富吉氏の主唱で歌会が開かれ、歌誌刊行の話がまとまった。びんろう樹と名も定り、歌稿も集めたが、時局問題がからみ陽の目をみず流れてしまった。其後、八雲さんは、世紀の飛魚来たる！ とコロナを沸かせた古橋等水泳選手が、マリリア市で世界新記録をうち建てた日に、糖尿病のため入院中の同市の病院で急逝されてしまった。

その頃、奥地農の間に澎湃と起きた聖市近郊視察に旅立つ夫に随いて私も、まだ見ぬ歌友にあこがれて出聖した。タバチンゲラ街のお店で、徳尾氏に待望の面会をし、都南的洗練を身につけた若々しさに驚いた。その時後年ガイーラ歌人となった八幡氏が同席していたと同氏から伺ったが、私は全々記憶していない。何しろ山暮し十年初めて上聖したお上りさんである。

緊張していて周囲に眼を配る余裕はなかったらしい。

モジに行き、戦前マリリア市で逢いそこねた岩波先生に多年の熱望が叶えられ私の作歌生活中で最高の感激的な対面をすることが出来た。熱心にすすめて下さるままお宅に同行して一泊させて戴いた。想像していた以上の寡黙な方で、初対面の私も固くなっ
ていてなんとも手持ぶさたで困っていた。ところが晩酌をされる
と俄然人が変わったように雄弁になられ、日本歌壇の潮流、アララ
ギ歌人像、ブラジル歌界回旧談、展望など滔々として語られた。ど
のお話も私には貴重な話ばかりでお酌を上げてあげることも忘れて
熱心に聴き入っていた。チビリチビリと手酌でピングを飲みなが
ら愉しそうにお話がつづく。二番鶏の声を聞いても、陽焼けした
面は昂然と冴えてゆくばかり、まだまだ語り足りない、呑み足り
ないご様子だったが、ガラファはすでに空になっていたようであ
った。

「裏山ひとつ越えれば武本の家だから明日案内します」と言っ
て下さったので私も最非お会いしたいと思ったが、ご多忙中と思わ
れるので武本氏を訪ねることは次の機会にゆずりお暇した。サツ
ペ屋根の桃蔭山房と南天、白い百合も咲いていた。先生亡き後
度々訪れた山房は立沢な住宅に変わり、桃の木は老樹となって多く
は切られ、度々歌に詠まれた浅井も崩れて埋まりかけていた。先
生の遺志をつぐと言われて毎年大会に出席されていた夫人も亡く
なられて一年を過ぎた。

四九年に岩波先生五〇回誕生を祝ってパ社主催の第一回全伯大
会が開かれ、その時私はビリグイ奥からはるばる出席した。

そして、この前モジでお会い出来なかつた武本氏にお会いし、日本語の先生だけにとても生真面目な方だと思つた。この時は女流の出席は今とちがつて男性の五分の一位なものであつた。

近くの席だつた坪内女史はお仕事柄人の応対に慣れておられて親しく感じられたし、葛西さんは彫の深い顔立ちの上、お化粧が上手で才女型美人。西田さんは葛西さんとは対照的に、清楚で高雅な麗人であつた。

この二人の中にはさまつて、凡庸な農婦は上り気味で半分はボーツとなつていたものであつた。

この頃の古参女流を人々は葛西開沼西田と年齢順で書いていた。葛西女史亡き後、作歌活動を続けた古手三人となれば葛西さんに代り安部栄子さんが入るべきだろう。カンポス歌会の柱として永年歌会をつづけ、歌会集を十六、七号まで（ここはハッキリ記憶しないが）出されて来たのは、佐藤一英氏と共に大方の認める功績だと思ふ。その安部さんは椰子樹には私達より少し遅れて大会で出逢つたのは第四回の時で、ピネイロスの高木旅館の前夜懇談会であつた。女性は葛西さんに芳園女史もおられたと思ふ。遅れて藤色長袖のブルーズを着て颯爽と現れた明朗活発な女性がその栄子さんであつた。このひとがいると周囲に笑い声が絶えず場が明るくなる。

藤田美砂子さんも古い歌人の一人、今は昔「よみもの」誌に子生んで乳房がしなび夫に抱かれる時淋しいという意味の歌を發表し、選者であつた徳尾、清谷氏に画期的新鮮な歌と賞められたことに端を發し、否定肯定論がでて紙上で論争されたことがあつた。

肯定は男性側、非難は葛西、坪内、芳園女史等々、私にも意見を書くように云ってきた人もあった。私は非難する人達の見解のせまさ、古きを意外に思った。美砂子さんに同情しそしてこんなに騒がれて作歌意欲を失くされねばよいかと、ひそかに心配していたことがあった。一時沈黙されたこともあったが、現在佳詠を寄せられているのは嬉しいことである。

森重扶美さんも古い仲間である。去る四月のロンドリーナ大会作品「家族等の健康保持と自負すれど老いて疲るる厨仕事は」の歌、まるで私のことを歌っているみたいだと思った。上句の適切な表現がうまいと感じて頂いたのだけれど、これが扶美さんと判って意外であった。最近、椰子樹誌上には沈黙されているけれど。そのうち以前のように清新な作品を寄せられることをひそかに期待しているのは私ばかりではない。ビリグイ奥の新山に入つて間もなくの年であった。或る日真新しいジープが我家の道に入ってきた。誰かと思つたらそれが羊鈴、挟美夫婦であった。予福者でこの時も子供さん同伴であったが、地味ななかに洗練された感じで口数の寡ない清純なものを身につけているというのが私の第一印象であった。バストス歌会を長らく主宰されていて、招かれて幾度か私も出席した。

椰子樹四〇年の歩みの中で、もつとも重大な出来事は、五二年に岩波先生が逝去されたことである。九月の大会と十月中頃徳尾氏宅の坪内女史訪日壮行会でお会した次の月に亡くなられたのであった。報らせの電報を手にしたのは何日も過ぎてからであった。途中で帰られた先生の広い後姿の、何んともいえぬ寂寥感を不安

に思ったのであったが虫の知らせだったと思う。

落胆して何日も呆然としていた。他の歌友とて想いは同じことであつたろう。しかし、先生の遺志を継いだ中央同人達の献身的努力の継続によりて、先生亡き後も椰子樹は成長を続けてきた。

現女流選者の中では弘中さん（本当は選者に対する礼儀から女史と記したいのだが、叱られそうな気もするので）が早く歌界に出られ、小笠原、陣内さんの順だと思うが、みな優れた素質と才能に恵まれ、その上に熱を入れて精進されたので次々と椰子樹賞を射とめられたのであった。私の文協図書館時代はお会いする機会も多く親しくして頂いたものであった。ことに小笠原さんは家が文協側であつたのでよく会った。ある時、オニブスのラッシュにもまれて、花首の折れた花を仕事机の上に挿しているのを見て、自分の生け残りだと云って花をとどけて呉れた。その後毎週一回、何年もの長い間続けて呉れたのであった。その心の温さが今でも忘れられない。

長い間には葛西さんをはじめ、親しんだ歌人が次々と亡くなつた。この世の約束事とは云え寂しい限りである。また数え切れない程多くの歌人が、囁目されておりながら沈黙をつづけ、ついに姿を消していったことは惜しくてならない。時には、何故自分は十年一日の如くと云う諺があるが、その何倍もの年月を選者にベテランでありながらと叱られつつ歌を出し続けるのかと、自問してみることがある。答えは即座に返ってくる。

それは私が短歌そのものを真から好きだから——本当に好きだから山奥でも、一人ぼっちでも詠みつづけてきた。むずかしい歌人

関係に巻き込まれ、不当に疎外されたと思うこともあったが欠詠はしていない。会員である限りはたとえ作品の出来の良くない時でも、出詠すべきだと思っている。作品が集ってこそ歌誌を出せるのである。会員の義務の一つと思う。

短歌が真から好きだから歌人は皆親しい同志だと思う。「流派巧拙を問わず」の椰子樹創立の精神は今も生きている筈である。優秀な歌人は日本歌壇に進出して肩を並べてゆけばよいしそうでない者は、それなりに少しでもレベルを上げる努力をしながら、仲良くやってゆきたいと思う。

戦後間もなく歌会らしい歌会に出席したのは、プロミツソンの多羅間邸の歌会で、リンス及びカフェランジャの歌友と小田妙劍氏に初対面したのを皮切りに、その後数え切れない程方々の歌会に招じられ、多くの歌友と話し合う機会に恵れた。これらの有縁の歌友達のことを回想する時限りなく懐しい。

四〇年も歌いつづけて来たけれど、凡庸で野心などには縁のない私は、誇るなんの足跡も残せなかったが、私なりの努力は重ねてきたと思うし、今日の女流隆昌時代への道づくりの役くわりは果してきたとも思う。

とにかく、椰子樹と共に歩んだ道は長く、随分多くの心温い歌友に出会い、嬉しい思い出も多い。私もまた歌人は皆同志であると思うので、いつも誠意をもって応対してきた。あの人この人と記憶に残る歌友が多いのに、限りある紙数ではほんの僅かの歌友のことしか記せなかった。

この長い作歌年月の間、変らぬ人間的信頼をもち続けてきた幾

人かの歌友を持つことを私の大きな幸と思っている。その中の一
人である西田孝徳氏が、不幸にして今病床にあり、この記念号に
手記を寄せることが出来ないのが欺かれる。早く快方に向われる
ようにと心から祈っている。(七・一〇記)

海 鴨 の 声

—青夢のことども—

森 谷 風 男

イタニヤエンへ行つて見よう。という気持は私の執念のような
ものだったが、偶々今年の二月初め、娘達夫婦のお供をして十日
程をサントスで過ごした折、遂にその機会を得た。

左手の海岸線が、時に近ずいたり見えなくなったりする。殆ん
ど屈折のない舗装路を来て、イタニヤエンに着いたのはお午頃
だった。丈夫そうな手摺のある橋を渡るとそこが嘗て青夢が住ん
だ町、青夢がこよなく愛した町であった。

家々はいずれも規模が小さく、しかも色彩的なものに乏しい感
じだが、それはそれなりに一つの情緒をもっているようであった。
短い街路を幾曲がりかして、海に展けた通りに出る。私達は先ず
朝食を摂るために、手近かなレストランテに入った。

見渡す海浜と同じようにレストランテの中も裸形の男女でひし
めいていた。

私達が占めた入口に近いその席から湾の全貌が見渡たされた。

渚は町の平面よりやや低く、コンクリートの小岩壁が街と砂浜を画し、小岩壁は遠く岬のように海に突出て岩山までゆるやかな半円を描いてのびている。

右手には傾斜の急な雑木山が、雨あがりの濃い緑をたたえ、暑熱の中になりをひそめている。山裾の豪華なホテルは日系人の経営だとか。

食事を終えて、私はひとり雑木山の方へ歩いていった。ホテルの脇の空地に出てそこを山寄りに降ってゆくと、大小の石を置き並べたような渚に出る。汐に浸っている石の側面には半透明な海草がぬらぬらとゆれうごいている。山裾寄りの乾いた窪みや割れ目の砂の上には貝殻やその破片がうず高く寄り集まりキラキラと妖しい色に煌めいていた。私はそこにしゃがみ込んで、貝殻を掻き混ぜながら、何か珍らしいものがあるような気がして熱心に捜したりした。

青夢は朝早く誰もいない渚を歩いて貝を拾うのだと言った。

貝細工をする工房を造ったともいった。その貝細工を持って、パラナに私の家を訪ねてくれたのはその頃だった。暫らく振りで会った私達はその時どんな話をしたか、今ではきっぱり記憶に残っていない。ただその時私の家から二軒程のところにあるボテコまでピングを飲みに行き、完全に酩酊した二人は肩を組み、詩吟や朗詠をど鳴りながら、月に更けた野みちを、もつれ合って歩いていたことだけが想い出される。月が綺魔だったから秋の季節だったろうか。

私がイタニヤエンという地名に憧れに似た感情を持ち初めたの

はそのときからである。

疎らに生えた灌木や蔓にしがみついて、私は緒につづく山を登った。

山肌は足の裏にたよりなく崩れ、湿った枯葉と共に落ち零れる砂は意外にささくれた響をふりまいた。

しばらく登ったところに、露出した手頃な石を見つけて腰をおろす。

俯瞰するこの浜辺は小じんまりした眺めである。浜から程近く小さな緑の島がある。やや荒い汐が島の岸辺で白くくだけるのが時折り見える。あの島が青夢の詠んだ磯島だろうか。

磯島の高处にひそむ海鴨の声ききおれば高みくる潮

しかしその舞台にはいささか貧弱なような気がする。磯島とは案外今立って来た、この山ではなかるうか、しかも今坐っているこのあたりが恰好な場所のような気がしてくる。この石に腰を下ろした青夢が、例のフーモを念入りに削りながら海鴨の声を開きとめようと耳を傾むける姿を私は思い描く。

あたりはひっそりとして山裾から湧きあがってくる潮の音は官能にまつわりつくような、おさえた響がある。

私は若しやおもって海鴨の声を待った。しかし私にはその声の聞こえる筈がないような気がする。青夢だけが聞けばいいのではないかとおもう。

青夢の晩年は流浪そのものだった。然しその行きつくところ行

きつくところで海鳴のその声に耳を傾むけていたと私はおもいた
い。

一九七七年 六月廿五日

椰子樹を手がかりとして

人生の轉期は或一瞬に

西 田 季 子

椰子樹が創刊されて約四十年、六月号で百五十号に達するとい
う。

約半世紀、その間戦争のため一時中断された期間があつたとし
ても。

私個人の人生にとって見ても椰子樹を離して考える事が出来な
い晩年に立ち到つたと感慨を深くする。

昔、昔、四十年の音、ブラジル時報の歌壇に時々投稿していた
私は、椰子樹という歌誌が創刊されたという事を新聞紙上で知り
読みたいものだと思っていた。出聖する主人に、探して買い求め
る様にたのんだ。「椰子樹なんて植木屋で探せ」、といわれたと
いって「短歌も俳句も同じさ」と南十字星という俳誌を買ってく
れた。私は苦笑するばかり。

そして、椰子樹を手にする事もなく、一九四〇年頃サンロッケ
市に移った。ブラジル時報の選者は徳尾氏から武本氏にバトン

タッチされ、私は時々、心に溢れて来る感情を汲み出して短歌の型式に発表していた。

丁度その頃コチア組合の理事山下亀一氏がサンロッケ郊外に居られ、令嬢が短歌をなさるよしみから、サンパウロ歌人との顔つなぎに、山下氏方に催される歌会に出席しないか、との誘いの手紙を武本氏から頂いた。

「人生の転期は或一瞬にある」と云うが、その歌会の席上で徳尾氏、武本氏其の他の若々しい歌人の方々に紹介され椰子樹に入会したのである。

当時、移民達が激しい肉体労働に堪え得た唯一の目標は、錦を飾って帰国する事であった。

私達の未来は未知の国ブラジルであると心に決めて日本を去ったのは、主人が二十四才、私が十九才である。日本に未練はない。と心に固く誓った私が何故この日本の最も古い型式の短歌に深いかわりを持つ様になったのだろうか、と時に自問自答する。そしてそれは結局自分のなかに流れている日本人としての血であり心の叫びなのではなからうか。短歌の型式、この五七五七七の咏嘆が日本人にとって、私にとって最もふさわしいという事であるか。どこで生れても、死んでもうけついで血の中を脈々と巡る日本人の咏嘆・抒情とは何であろうか。

私はなお、自答を得ぬまま此の小詩型にかかわっている。

しかし私は椰子樹を手がかりとして、多くの知己を得、文学の片貌を知ることが出来た。虚無的にすら思える自分自身を疑視し、人生哲学を垣間見る術も学んだ。それ故に私の移住も渺茫とした

私の人生も無意味ではなかったと思うのである。

今私は百五十号発刊に当り椰子樹誌と共にした人生を省みて感慨無量である。

岩波菊治賞雑感

—選者としての感あり—

本庄 研一

どうした風のふきまわしか岩波菊治賞選考委員の一人に指命されて、毎年一回応募作品に真正面からとりくみ、玩味、評価し、それに順位をつける任務と機会をもつことになって数年経つ。この時ほど、各応募者の努力と希望をじかに感じ私自身も歌の勉強になることは、他にない。

岩波菊治賞に応募するには、粒の揃った短歌を二十首提出しなければならぬ。そのためには五十首、或いはそれ以上の短歌を作り、その中から作者自身でこれならと自信の持てる短歌を選びだすものと思われ、そうした意気込みが各作品に感じられる。

今年も二十四名の応募者があったが、その大部分が老令者であることが、短歌の素材の上に現われていた。老人といつてもいろいろあって、妻に先立たれた佗しい寡夫、或は夫の死後数人の子を育てあけるのに苦勞した未亡人、しかも一人前に学校も出した息子や娘が結婚して行く。その相手が日系人である場合と、他国系の伯人、所謂外人であるケースも今では珍らしくない。

そういう時、独りで苦勞してきた父又は母として、安堵と同時に秘かな嘆きや溜息が、つい作品の上に反映して表現される。

打ちあける相手は少く、あつたとしても一笑に附されるか安易な慰さめを得るだけで、胸底のわだかまりが解けつくすわけではない。

とにかく晩年というのは富の多寡にかかわらず寂しいのは事実で、輝かしい、或は平凡に過ぎた生涯の幕のおりるのは時間の問題となり、友人やその配偶者の死亡広告に驚いて弔文を書くことが頻繁になり、自分も遠からずと覚悟を強いられることになる。

「美しき晩年などなし——」と詠見切った歌が脳裏をはなれない。「孫の歌ばかり作るようになったら短歌を止めますよ」と云った歌人も居た。肉体の老衰はさけるわけにいかないが、精神までも衰退し愚痴や、慰安を他に求める老いの果ての心情を作品として残すことは耐えられな、という気持は肯定できるのである。己九の老醜を厭うことは、美意識を大切にしたい者にとって当然の感情だと思う。

岩波菊治賞応募者だけでなく、椰子樹誌会員のほぼ全部が総老老という現状でしかも後継者の養成は殆んど絶望に近い。これが体育競技や写真、絵画のような工芸で、言葉や文字の必要度の低いもの、万国共通のものなら比較的容易に後継者候補を集めることができるのだが、短歌のような日本語の字句に普通の生活用語以上の、鋭敏、潔癖な感覚と教養が要求される文芸になると、ブラジル語だけで国民として立派に生活して行ける三、四世たちに受けつがれることは、おそらく無い、と思つた方が早い。この絶

望情況の中で「全伯大会も今年が最後かも知れない」とか「椰子樹誌の発行もいつまで続けられるか」と悲観的な囁きが交されるこの頃で、とにかくこの第一五〇号記念号は発行できるものの、第二〇〇号になれば、椰子樹全会員の何割が残るだろうか、と心配されるほどぎりぎりの所まで年令的にきている。

会員の減少という内部的崩潰要素のほか、印刷事情の悪化という外部からの力が加わる。これは伯国歌壇のみの問題でなく日本字による一般文芸出版界が直面している宿命的事情と言えるだろう。そういう最悪条件下にありながら、短歌大会や岩波菊治賞の応募者数は毎年のこと、格別に低下はしていない。作歌老のうち毎年何%かが他界と、作歌中断によって減っていく筈なのに、それを補充するだけの新しい作歌者の参加がある。

というわけだが、それは若い層の台頭ではなく、家業の第一線から退いて、所謂隠居の身分になってから「歌でも作って見るか」と始める傾向のようで、年令的にみれば新陳代謝にはなっていない。

中味はともかくとして、椰子樹会員の数や短歌大会の出席者数、岩波菊治賞への応募者数などが急速な減少のない限り、やはり従来の行事や椰子樹誌の発行は、中央の幹部にとって負担ではあるうけれど、続けて行つて欲しいと願うものである。

移民一世社会の末期症状が随所に現れているが、他の文芸や娯楽や宗教では満足できない人たちにとって、歌壇の存続はやはり一種の逃避場であり、また救いでもある。こういう現状から云えば、作品の質の向上という第一義的な目的を振りかざしても到底

至難で、むしろ友好、親睦の場として大衆的な意味が重視されてよいのではないか。

椰子樹一〇〇号記念を発行した当時、すでに先きすばみが予想されていたが、今年一五〇号を出し得たのをみても、歌壇の潜在力は案外に強い、とみてよいようだ。今年の岩披菊治賞応募作者の車に若い歌人らしい優れた作品があったので、驚喜を覚え、現在の私は、伯国歌壇がいずれは消滅するとしても、まだ当分は現状程度に維持して行けるものと、樂觀しているのである。

椰子樹百五十号記念号に寄せて

――幾多の変遷はあったけれど――

安部 栄子

わが「椰子樹」も今年百五十回を重ね、一時短歌滅亡論だの危機だのと言われた暗い谷間を通り抜け、幾多の変遷を重ねて、今日この日を迎えた事は一同と共に第一の事びとするものである。百号迄は三十年もの永い歳月を要した。

「椰子樹」もあれからは近々満九年にして今度の百五十号を迎えたわけで、思えば全く、あつと言う間の九年間ではあったがその間逝かせて惜しい沢山の歌友たちの名がやっぱり一番先に胸に浮んで来る。

と言うこちらもそろそろ人生の終着駅に近づきつつあるので何時何うなるかは神様以外に判っては居ないのだが――。

創刊以来四十年もの永い永い歲月の間、中に戦争を挟んでの空白時代があったにしろ、「椰子樹」一すじに心を寄せて来た人々は、現在作歌をつづけて居ると否とに關らず心底から短歌をこよなく愛した人々であることを思う時、その中の小さな一細胞でしかない私もその間、短歌に依って得難い恩師先輩又肉親とてもない程の沢山の歌友を得た事は、何よりの喜びと声を大きくして言える事である。

私の亡母玉木梅も一九六三年七月にわがキャンパス歌会百回の記念歌会に西田御夫妻と一しよに、はるばると七十八歳の身体を運んで来て、みんなと賑やかに充実した記念歌会を楽しんだ後居残って九月の大会に私と一しよに出席しようと思しみにし待って居たのであったが、歌会のあと十数日にして膝の上に歌帳をひろげたまま忽然として逝って了ったのであった。何の苦しみもなく誰も知らない内にみんなが傍に居ったのに。死ぬ迄一つの短詩型を愛しつづけた最後の姿であった。

今病床にある西田季子さんの夫君孝徳氏は可なり重い御病気で寝た切りの現在、言語障害もあつて何にも話す事が出来ないのに、気が向けば雲の流れ、風の声に短歌らしいものを書いたといつて季子さんが送って下さる。あんな不自由な体になつてもかつての日、楽しんだ―或は苦しんだ短詩型が胸底にう篝火の様に温かく残っていて或る時に一つの言葉として、現われると言う事は何と短歌と言うものは不思議なものであろうか！ とまれ、少数ずつではあるにしても、新しい若い中堅の人たちが確かな地歩を占めて歩みをつづけて居る現在の「椰子樹」に私共は老兵と言えども

消ゆる事なく椰子樹へ注ぐ一滴の水となり一かけらの肥料ともなつて今後もつづけて行き度いものと願つていささかの祝詞とする次第です。一九七七年六月

回顧

—わが心の拠り処として—

中井益代

私達の短歌誌椰子樹がこの六月で百五十号を数えるという。

日本でならば何の不思議はないが、伝統短歌が育つには不毛と言つても過言ではない悪条件の異国で、酷しい風雨に堪えながら、長い年月を培われて今日の成長ぶりを示すに至つたという事自体、私には奇蹟の様に思えるのであるが、反面、又、異国であつたからこそ見事な開花、結実を遂げた、とも言えるのではあるまいか。

私が椰子樹に初めて投稿したのは再刊十四号からであつた。

それまで私は迂闊にも伯国に椰子樹という短歌誌のある事を全く知らなかつたのである。

一九三十年、私の着伯後間もなく父、中井小鴨の発案で、一家の和平を目的に毎土曜日の夜、短歌二首出詠、家庭内でささやかな歌会を開き、その結果を日伯新聞に投稿していたのである。当時同新聞では、岩波菊治先生が歌壇を担当して居られ、かつての

師、アララギの岡麓先生と同じ流れ、と言う親近感から私共一家は比較的熱心に投稿、指導して頂いたのであるが、今にして思えば、幼稚、の一語につきる作品でしかなかった。後日先生よりアララギへの入会を勧められたけれども、遂に実現を見なかった、と言うのは、幾許もなく事業の不振により、逼迫した境涯に転落、漂泊に近い生活の連続で、自然に、新開歌壇とも絶縁状態になり、時を同じうして発刊されたという椰子樹の事は知る由もなく、続いて太平洋戦争勃発、終戦後の混乱と、私の身边も多難な中に十年余りの歳月が流れた。

一九四七年半ば頃、思いがけなく岩波先生より父の許に再刊椰子樹十三号と、入会勧誘の書簡が届いた。この時初めて椰子樹を手にしたのであったが、粗末な体裁の歌誌でありながら投稿者諸氏の作品の真摯さ、詩魂の逞しさにいたく感動した当時の記憶が蘇って来る。私共は直ちに入会し、十四号から投稿を初めたのであるが、長い間の作歌中断による未熟な作品なので本名で発表するだけの勇氣はなく、日伯新聞時代の芙蓉という筆名を用いたのも杳い日の思い出の一つである。十七号で岩波、瀬崎、両先生により同人に推して頂いた事は、入会して日尚浅きに拘らず、破格の優遇と思われ、感激の極みであった。併し実作の面での私はいつまでも遅々とした覚束ない歩みを続けていたに過ぎず、その上環境にも恵まれず、遂に四十八号以降、休詠のままに過ぎて行つた。その間、椰子樹は堅実に伸び続け、やがて五十号記念号が刊行されたのであるが、その二年後の一九六〇年に私一家も聖市に移転し、歌友との交流を持つ様になったけれど、休詠は依然とし

て続き、十年近い歳月が徒らに経った。椰子樹は絢爛なる開花の期が続き一九六八年には百号記念特集号が発行されたのであるが、その数年前から健康を害していた私は漸く終着駅が目前に近づきつつある事を自覚し、長い貴重な、時の空費を悔む思いで慄然となった。

初心に還り再出発を決意して投稿を初めはしたものの、十年に及ぶ怠惰から立ち直る事は至難であり、臍を噛む思いであった。遅鈍な上に、老令、病軀と厚い壁が行手を阻んでいる。

今後 果して幾許の作品が成し得られるであろうか。この危惧感は再投稿を始めた時から十年経った今も私の心を離れないけれど、心の拠り処である椰子樹に復帰し、遇い難き多くの歌友に遇い得た残年の悦びを噛みしめながら、今の私は過去の何れの時よりも懸命である。それにしても初期は勿論であろうが、復刊されてから投稿を続けている歌友の十指にも満たない現状は淋しい限りである。仮令一時期にせよ椰子樹に拠った繁りを思い、この同じ空の下の何処かに今尚健在な歌友達の、再起を呼びかけ度き思いのやみ難く、更には、この拙い回想記も、今回が最初にして或は最後かも知れない、という思いが重なって「老いの繰り言」にも等しい私事のみを書きすぎた悔みがあり自責の念いを深くしているものであるが、しかし、微かではあるけれど、椰子樹と供に辿って来た自らの足跡を時には振り返って見る事も明日への前進につながるものではあるまいか。母国日本から見れば「さいはて」の伯国で誕生し、幾多の曲折を経て 遂に百五十号にまで達した椰子樹を心から祝福し、この繁栄をも見ずして他界された多くの

歌友の方々への追慕の念いを新たにすると共に、創刊当時の先進の恩恵に対する感謝の想い、わけても、真実にこの伯国に土着して、後進の指導、育成に当たられたコロニア短歌の父、亡き岩波先生をはじめ、その衣鉢を継いで今日に至るまでの長い年月、経営、編集、選その他あらゆる面に於て、椰子樹発展の為に、計り知れぬ心労を重ね、惜しみなき愛情を注いで来られた方々への感謝の念いは、到底言葉に尽くせるものではなく私は唯々頭を深く垂れ合掌するのみ、の念いである。そして後に続くであろう、若い歌友達の力を信じ、更に二百号、否その先々をも目指して羽ばたいてもらいたいし、この異国での椰子樹の生命が一日でも永かれ、と希う念いも亦切実である。それは、遥々日本から移住し来り、ブラジルの土に還る事を宿命と観じつつ尚短歌を愛してやまない老いたる私達の悲願に外ならない。

縁の糸は細く永く

―師との出会いなど―

水 本 す み 子

その日は少し曇り空だったように思う。少し前方をひとりの少女が道端の草の穂等を抜いてはそれを振りふり歩いてゆく。

その後からまだ若い彼と彼女が二人肩を組み合うでもなく、手をとりあうでもなく至極神妙、生真面目な顔つきで時折何か話し

ながら歩いている。

今から三十六年前、その頃のこの遊園地オルト・フロレスタールは日曜日というのに人影もまばらであった。奥深い自然林の中ではさまざまな小鳥がさえずり、蝶の群が飛び交い、池面には多くの水鳥が遊んでいた。それらを眼で追いながら二人は何かひどく散文的な会話を交していたようだった。ふたりは恋人同志と云うのでもなかった。といって全然知らない者同志と云うわけでもなかった。知人の紹介で結婚話が進み、近く挙式の予定のふたりだった。彼の方は仕事や身近の都合上結婚の必要に迫られていた。彼女の方は、来る日も来る日も単調な田舎暮らしに貴重な青春を埋没させることに或る焦燥感を感じ、何か自分自身の生き方というものをも切に求めていた時だった。両方の希求がはからずもどこかで合致したのか、事は案外順調に運ばれて行ったのだった。割れ鍋にとじ蓋というのでもないけれど何となくぎくしゃくと歩を進めている時、ふと左手の岡の方を見た彼が「あ、武本先生だ……」と云って立止った。つられて彼女、即ち私も岡の方を見ると何人かの日本人らしい人影が動いていて何かの会合でもあるらしかった。(ずっと後にわかった事だけれどそれは椰子樹短歌会の吟行の時だったそうである)「武本先生って、武本由夫先生ですか、あの短歌の……」「いや、暁星学園の先生……」そうそうこの人は暁星学園勤労部出身だったっけと思ひ、それにしても私のいつも愛読する新聞の文芸欄や「広野の星」などの紙上でしか知らない先生この彼が直接知っているということに素朴な驚きを感じたものだった。

当時ふたりは共に満二十一才、彼の方は二、三年前に出聖していたが、私などはほんとにポツと出の田舎娘、それでもいっぱし大人のつもりでいたのだから誠におかしなものだった。

その後無事に結婚生活に入り、次々と家事や子供に追われながら十年余りが経った。その頃暁星学園関係の先生方や知人達の無尽会があり、私どもも誘われて入れて頂いた。一夜私宅でその集りがあり、私はその時、まるで雲の上の存在のように思っていた武本先生の傍へ行き、おそるおそる「私も短歌を作ってみたいのですけれど……」と云ってみた。先生は喜んで下さるかと思いきや、意外にも「いやあ、短歌なんてあんなものは迂闊にやるものじゃないですよ。大して面白いものでもないですよ」とにべもなく云われると、もうそんなつまらない話は御免とでも云いたげに盛にビールのコップか何かを傾けられる。

出鼻をくじかれた格好でしゅんとなった私は、その後しばらく短歌の事は忘れたかのようにだった。が、しかしやっぱり年来底の方にくすぶっていたものがいつか芽を出して或る時、或る機会に何首かの歌を作って見た。これをどなたかに見て頂きたく、やはり近くに住んでいらっしやった武本先生の所へそれを持ってお伺いした。すると先生は、以前私におっしやった事などそぶりにも見せず、私の実に幼稚な短歌をまことに懇切に一首々々を分析批評して下さいました。そのみではなく作歌に際しての根本的態度をきびしく指摘して下さいました。眼からうろこが落ちたように私の短歌への姿勢は正されて行った。以来、約二十年椰子樹との永いご縁があるわけなのだけれど不肖の弟子は近来殊に雑務多忙で、

歌の方はまことに生彩に乏しく、教導下さった師の君へ対しても漸愧にたえない次第。これもまったく浅学無能のいたすところとせつにご寛容をお願いするの他ないと思う。

一方、「彼」の方は私以上に先生とは親しかった筈なのに短歌への糸口は全然開かれずじまいであった。代りに家庭に於ては亭主閑白の地位を着々と固め、三十数年後の今日はまさにわが家の揺ぎなき存在である。当今の若い人達が聞いたらさぞ呆れかえるような頼りない結び付きではあったけれど「椰子樹」誌の歴史ほどの永い年月もさしてガタビシすることもなく、年を経ると共にだんだん味わい深くなってくる夫婦間のことも、これは私には過ぎた彼の人柄によるところが多いのじゃないかと、この頃しきりに思う。

椰子樹百五十号を迎えて

―砂漠の中のオアシス―

植村かず

私達の椰子樹が四十年の永い歳月を擁して今回百五十号記念号を迎えるに当り、椰子樹との出会い、そのつながりに於ける諸々の想いが胸中に湧ききて、思わず臉が熱くなるのです。今から二十七年前、聖市に移転してから十年程経た、一九五〇年のお正月の或日、カンブシーの知人を訪ねるべくシダーデに出た際、ジョン・メンデスのカーザ・中矢に少々の買物にと入り、雑誌類を並

べてある棚の端にあった椰子樹（一九四九年二十一号）が眼につき、何気なく頁を繰って見てブラジルの日本人に依って発行されている短歌誌と知り、ブラジルにもこの様な本が出されていたのかしらと内心驚きながら早速買い求めて其の夜はむさぼる様に読んだのでした。

主人が仲買商で大きな失敗をして、五才を頭に四人の幼ない子連れ、全くの無一物で聖市に移ってからは、もう無我無中で働き、最底の費乏暮しの中でも子供だけはそれから六人もできて、自分を顧みるいとまもなかった其の頃の私でした。

コロナ事情と言えは勝組の騒動位しか頭に残っていない全くのカボクロ同然で勿論、椰子樹の存在さえ知らなかったのです。一カーザ中矢で椰子樹を発見した時は砂漠でオアシスに遇ったように、乾き切っていた心が清い水で次第に潤ってゆく思いでした。けれどその頃の私には椰子樹に入会などはとんでもない事で唯日記の端に書いていた短歌らしいものを思い切ってブラジル時報歌壇に無名で投稿するのが精一杯でした。それから四年後（一九五四年）子供の日語学校の先生として知り合っていた樋田氏の手引により、誌友に加えて頂き三十六号に初めて私の歌を隅に載せて頂いたのです。あれから早二十三年、遅々として進まぬ作歌振りの自分に嫌悪感を抱き乍らも、椰子樹との出会いに上って得た歌友諸氏の人間関係は、私の半生に取ってこの上もなく尊く、よくぞここまで椰子樹を育てて下さったと、創刊当初からの編集、選者会計等、其の他すべての運営に携わって来られた先輩諸氏に大きな感謝の念を抱くのです。

それについても百号発刊の折は御健在であった吉本青夢氏、新納潤魚氏、南条由喜夫氏等すぐれた方が忽然として逝かれて終った事を思う時大きな痛みを感じるのです。

日本語による私達の愛するコロナ短歌がこのブラジルにいつまで存続するであろうか、恐らく私達の世代だけで終るのではないかとの惧れを持ち乍らも、早高齢に達していられる瀬崎先生、酒井先生、そして富岡氏等、その年齢を感じさせない弛みない作歌への熱意を思います時、「コロナ短歌いまだ老いず」との力強いものを感じ、怠け勝な拙ない私の作意を揺振られるのです。そしてこの百五十号に続く二百号への期待がふつふつと心底に沸き上るのを覚えるのです。

創刊当初より四十年という永い歳月をこの椰子樹の為に並々ならぬ努力を重ねて、守り通して来られた先輩の方々に心からの敬意をささげると共に、北はアマゾン、南はアルゼンチンにと住んでいられる多くの歌友のひとりひとりの顔を眼に浮かばせながら、皆さんの御健康と御健詠を祈って止みません。

岩波菊治賞作品

その一回より一〇回まで

陣内しのぶ

一九六八年六月（椰子樹百号）に、第一回岩波菊治賞が発表されて以来、本年で第十回を迎えた。

新人発掘を目的として設けられたこの賞は作者に新人を期待したのと同時に、選考者も、それまでの特定選者を一応外して、当時椰子樹賞を受けて新進気鋭と見られた人達を主として構成されたのであった。しかしこの選考委員に対しては各方面より不満の抗議があつて、一九六九年の椰子樹会議に於て大幅に改められた。その後も多少の変更はあつたが大体その時の線で今日に及んでゐる。

第一回、岩波菊治賞選考は六八年四月七日、安良田濟氏司会の下に、同氏宅において行われた。選者は、開沼貴代・小笠原富枝・梅崎嘉明・陣内しのぶ・水本すみ子・高橋よしみ・佐藤博三の七名であつた。

集つた作品は十四篇、その中の一篇は応募規定に外れていて対象とならず、又応募首数三、四と云うのは、規定に副わず選考以前に外された。

選考は波瀾少なく、抜群の点を得た木村正和作品が一位となり、点数順により他四篇を佳作と決定した。次に任意に作品を上げてみる。

入選作品 下降音階

木村 正和

蟻走感酔をつながむ酒盃よりつたわりて身のいずこに沈む
被写体の蟻不意に翔も身のめぐりみな錯乱の光輪ばかり
頒つべかりし憂を傘の雫としふりこぼしつつ吾が持ち帰る
駆けていく少年工の長靴より油紋の虹が舗道に生るる
アラジンのランプ湖底に点らわば魚らは睫濡らすことなし

佳作 絶唱の嶺

八卷 耕土

山小屋の石壁に登山地図ありて姫石摘花にあふる谷風
交媒を拒みつづけて亡びゆくヴェロジアは緋に孤りさく花
幽谿にカトレアの香は漂いて逡巡もなく受精いとなむ
鬼羊歯の化石しずめし火口湖の低温に棲む原生の魚
禁猟に狎れて野生を失いし猜疑の瞳もたぬ狼

佳作 夏の彩り

岩淵 静子

雲を指す護模の巻き芽の先端より拡がりて奔放な夏の彩どり
水かさの低き運河に漂える芥の陰に稚魚ひそと群れ

雑踏の中に物売る少年の眸につながれて優し投陽が
すがれゆく茄子にたゆとう蝶一つ二月陽差しのかげろう午後を
浚われて行く刹那の愉悦も疚しさも抱きて疾風のバスに揺ら
る

佳作 風の朝夕

清水 そとえ

眼裏に燃えし虚像の音たてて崩れゆくごともろき夕映

融け会わぬ言葉つなぎてこもる日をアラポング鋭く高く啼きつ
ぐ

きれぎれの愛しみつづり生きつげばあとかたもなく吹き過ぎる
風

ひそかなるジェラシーありて風音を鋭どき耳に聞き分けている
夏の雨明るく透す丘と丘束の間つなぎて低き朝虹

佳作 晩夏

穂 島 千 代

思いこめて投げし礫に応えなく夕潮の深き広ごり
鯉跳ねて立ちし波紋はたちまちに池の偶まで陽の色湛う
古びたる雑布きしきし洗いおり明日への期待持たざる夜を
人間に従うものの素直さを青く匂わせ耕馬ゆきたり

夕あかねの色に淡々染まりつつ殺虫剤の粉煙漂う

第二回は、一九六九年五月七日、先年と同じ選者によって梅崎嘉明宅において選考された。応募作品十九篇の中、四篇ほどが甲乙をつけがたく、先年と違って選考は行き悩んだ。結果は前年にも優秀であった岩淵静子氏が第二回の賞を獲得した。

入選作品 錨音

岩淵静子

湾曲の背に噴く汗をはじきたり原ゴムひたと抱く港湾夫
方位なき船のまき揚ぐ錨音をこころ茫々となりて聴きいる
錆ふきし刃ものに修羅をせひそませて逡巡もなく割く鶏の腹あ
たたかし

おもい疲れて手にする吾子の人形と吾が演じいる。パントマイム
を

不意に湧く傷みとなりて焼原に戦乱の日の父の煙草が匂う

佳作 虹

穂島千代

磨き上げし窓のガラスを透す陽に吾が片頬は愛されている
青匂う唐黍畑の風を深く吸いふくらみてこの夏を生きたし

充なされぬままの安らぎもあるべしと凌える如き風に吹かるる
切れ切れに二重となりて立つ虹の滴りに似て躍える雨
目眩めきて光る葉がありもろこしの畑渡る風も一様ならず

佳作 呪術の火

知花 清

さく岩機わが裡にあり町あかるしニコヨンとして生きし日の過
去に逢う

蒼昏の潮鳴り耳朶に熱かりき夜つれだちき砂丘のねむり
汽車の笛あるかなきかにこだまして国境の町くれてジャズ鳴る
呪術の火を胸にもやして眠る夜を不意にうたれて冬の雷鳴る
胸にゆらぐ夢などなきかひたすらに陽の中ゆきぬ遠き人群

佳作 海と生活と

藤田 美沙 手

長き階登れば繞る海見えて佇つ聖像は陸を指さす
足下のゆらぐ思いにのぞきおり陥没の面の波の静けさ
昏れなずむ遠き海面ゆひきよする無傷のわれにつながるもの等
変貌に至りしかげり身に負いで藍ふかみゆく海より帰る
夏の陽の灼くるにおいがためらわず孕みし魚を割く手にたまる

佳作 南海叙情

八卷 耕 土

海峡を霧笛ならしてゆく船の余韻は晦く島に籠らう

守りきし殺生の戒犯すなく不漁の浜を月と帰り来

白亜紀の海底ふかく瞑想の怪魚は永久に醒めることなし

吾のみに兆す杞憂かパイネーラの棘の梢に孵る雛鳥

不死鳥の魂にてあらむ杜くらき幻聴の夜を裂きて啼きつぐ

第三回の岩波菊治賞は、始めに書いたように選者の変更があった。聖市在住者の中より、武本由夫・井本惇・川原比露思・小笠原富枝・弘中千賀子・陣内しのぶ、地方よりは、酒井繁一・新納潤魚・大場時夫・山室新太郎・西田季予・森重扶美、の計十二名が選に当たった。場所はコロナ文学会事務所。日時不明、この年も点が割れなかなか決着せず、始め対象となっていなかったが結局平均点の多かった内田笑子作品を入賞とすることに決まった。

入選作品 ポッソス・デ・カルダス

内 田 笑 子

せせらぎと羊歯のさやぎの青きなか愛の泉の像は濡れたつ

ガラス窓おしてくるがに雲迫り一と日の旅程の心に重し

断崖を吹き上げる風の高鳴りをききいて山上への憧れ止まず

焦点をあわすべくして廻らすにレンズに果てなき碧き連山

窓青き列車と行き交う屠牛のくらきに遮断機下りて長し

佳作 老いの歌

戸崎 清 作

かくのごと時は逝くなり夕光は鶏頭枯れし庭隅に射す
しづかなる眠りの覚めて暁の光に梨の返り花白し

佳作 商い

北谷 ま が た

崩れゆく襟度あやうく保ちつつ皺の紙幣を数え納める
新豆の一つ一つが光りさし秤るコンシヤに軽き音たつ

佳作 まぼろしの凧

知 花 清

まぼろしの凧を追いつつ帰らざる少年の日の思慕よみがえる
土の匂い限りなくたつ視野白し雨すぎてわれは種籾まかん
街灯は消えず町屋根ぬれている雨の朝けのものうき目覚め

佳作 彗星

穂 島 千 代

予測する何物もなき吾の目に初夏の野は朝より炎ゆる

輝ける明日を待みて合歡の葉は未練なく閉ず残照の中
自ら皮裂くことなき野葡萄の蜜糖すでに酸化し初むる
振り返えりし不様の頬に冷々と過ぎ去りし日の風が還るよ

第四回は一九七一年六月二十日、コロニア文学会事務所で開かれた。選者変更は武本・山室両氏の自発的引退、又郵送事情が悪く新納選者に作品が届かないことなどであった。応募作品十三篇、遅着二篇。

この年はついに入選作品を見るに至らず、佳作三篇に止どまつた。

佳作

アンデスの旅

篠田まさ

同胞と見紛うインカの若者の澱む眼に吾が目対き会う

羊追うインカ女を撮さむとシャッター切れば銭を欲り来る
いにしえのインカ凶案のブローチを声高高と売り急ぐあり
亡びたる民の遺品は暗くして現世のガラス戸のみが明るし
パンパスの視野つきるなく黒点のごと放牧の牛の群れ見ゆ

独木舟

遠藤浩

砂浜に朝光斜にながく射しプリズムの如く光れる魚鱗
カヌアにて一日の漁にゆく漁夫の充血の眼は光りていたり
砂浜に引き上げられし独木舟乾きし鱒光らせいたり
鈍き音たてて鳴りつぐ浮標あり近づき難く舟先かわす
吊橋を渡る車の音響く干潟を歩む吾が足もとに

湯宿断章

安部 栄子

道に沿う檜葉垣伐られ湯に行くとき傍へ通れば匂うはげしく
夫も子もすでに遙けき思いすれ見守られているこの安らぎか
身も魂も空になりたる心地して湯より帰れば呆け横とう
掘り返されし檜葉垣のあと今朝も通る雀二三羽あさる見ながら
時間をかけてひとりの食事終りたり今日は夫への便り書かなむ

第五回（一九七二年）応募者十五名

この年も授賞作品なし。佳作三名を選出。選者に開沼貴代氏が
加わっている。

この年は作品の良否以前に、応募者十五名という寡数は、賞に
対する意欲が薄れていたと言える。

佳作 石の本

清谷 勝馬

傾ける老樹に触れて音たつる程にも肌理の荒れし掌
石碑の由来に疎しただに來て木々と石との寂けさに立つ
崩潰の刻は昼夜となく過ぎて深沈と木々に翳る石碑
石碑の周囲の花も季期過ぎて温もり持たぬ冬の夕映
ふと被う虚しさありて石階を下ると冬の日を踏みて居き

佳作 能面の笑み

清水 そとえ

あえぎにも似たるかなしき昂ぶりをさりげなく秘めし能面の笑
み

午の陽の灼く砂原に透くがごと乾きて命果ているくらげ
傾ぎゆくところ否みて固き椅子ひけば乾きて韻きなき音
撃たれたる鳥のごとくに不意にして思いもかけぬ言葉落ち来る
疎まれし言葉に刺されいるあした裸木に野鳥の叫び鋭く

佳作 野火

遠藤 治



冷えこみの早き日暮れに枯草の温もり持ちて匂い漂う
枯草に野火脚早く移りゆく夕映の色変りゆくととき

重々と貨車を引きくる機関車はレールに白く砂おとしゆく

無蓋車に積まれし果きコークスするときおり光り夏の陽反す

残業をおわりて帰る夜更道貨車を押しくる機関車に会う

選外作品の幾首かに見る可きものがあるが紙数を越えるので割愛する。

第六回、一九七三年六月十六日、コロニア文学会事務所において例年の如く選考会を開いた。この年は応募者が倍加し三十三名。然し応募作品は勝れたものが少なく、選も難航を極めた。ついに受賞なしであったが、佳作上位の作品を秀作二篇とすることに決まり、他五篇を佳作とすることになった。

秀作 還れ山鈴の音

八卷 耕 土

魚眼めく眼鏡ふきつつ山鈴鳴らし樹海さまよう君が頭ちくる

幻の狐火のごと連らなりて登山列車は闇を縫いゆく

混迷の軒に救いの暗示とも渡るモルフオのあとを追いゆく

声からし君の名呼べど啄木鳥の枯木を叩く筈かえり来

秀作 愛憎の象

石 橋 テ ル 子

心おだしきひと日は向う編機より人形に似し編目うまるる
朝月の消ゆるばかりにはかなきをまなこにとめて編機に戻る
雨霧に灰ひといろとなりし街ビルはあまたの窓を閉ざして
わが頬を横から憎む人の眼も快よかりき烈しく充ちて

佳作 夕光

遠藤 浩

薄明の道より来たる黒き馬車舗石に赫き土落としゆく

佳作 山間旅情

石塚 やす

幼らの乗り捨てゆきしブランコの並び揺れおり朝の芝生に

佳作 推移

清水 そとえ

急停車の軋み鋭くひびくときひたすらなりし念いさめたり

佳作 旅の日々

大城 俊子

たんぽぽの絮飛ばす夢のあわいより孫がうつつに喚び戻す声

佳作 小観光

八卷 汀石

谿川の飛沫に濡れて岩跳べば大きやんまの耳を掠めぬ

第七回は一九七四年六月十六日、例年通りコロニア文学会事務所
所で選考会が開かれた。先立つ四月十二日、新納選者が思いがけ
ない事故で逝かれた。また、陣内は編集となったために、空席に
ベテランの米沢、本庄両氏を迎えた。

この年の応募者十七名、作品は相変わらず低調であったが、三年
も入賞なしであったため、全委員の希望で最高点を得た”崎型の
爪”森谷春男作品を入賞に決定。

入選作品 崎型の爪

森谷春男

ほし柿を盗み喰いせし記憶ふと甦り来て遠き汽車の音

黄ににごる標識燈がともりいてからの倉庫の続くこの街

執念のただそれだけに生きて来し崎型の爪を切るひそやかに

静けさは背後より来て夕映の渚の木立たたくきつつき

青みどろ薄く張りたる水槽の魚ひらめきて乾ける日射し

佳作 小さき手術室

賀 沢 朋 子

晒されて青き網膜に描きしは吾にも秘めし苦き過ぎ去り

佳作 般若心経

吉 武 加 野 枝

鉦ならし法名誦せばはや夫と吾をへだてて香たちゆらぐ

佳作 古都に頭つ虹

八 卷 耕 土

詩書を手にひとり思索に耽りいる帝の像に燃ゆる火焰樹

佳作 山菜の青

石 塚 や す

霧の冷え身に泌む日昏れの厨辺に眼の洗わるる山菜の青

佳作 椿

中 西 静 世

遠き日につながり匂う古しようが宵の厨にすりおろしいつ

第八回、一九七五年七月五日、コロニア文学会事務所にて、選者、井本、本庄・森重・小笠原・大場・酒井・米沢（ABC順）応募者十七名。

総評としては、賞として全体的に弱いと云う声が多かったが、多少キズがあっても、みずみずしいものが希ましい、ということとで検討の後、入賞に決まったのが小野寺作品の「河畔」であった。

入選作品 河畔

小野寺 郁子

暁け近き風が吹き分く霧の間紫深き地平が見ゆる

水浸の樹の幹の影蛇に似て岸边の吾に皆迫り来る

水清く樹の梢にわずかに残りいて夕べは祈る如く閉ずる葉

帰途につく車内に藁帽子匂いっつ日光（ひかげ）樹の河べりの

道

一方に枯れ伏す草を乱しっつ白を炎（ひ）の如冬つむじ風

佳作 躬の影

小野 政子

物の怪のごとく動ける影いくつ夜の鶏舎を見廻るに頭つ

佳作 齡

加藤 操

素足にて鍬を曳きたる日を躪たせパウデアアラが真冬を行ける

佳作 灸

北谷 まがた

ささくれし指にまつわりて妻がせのつぼにモグサのおさまりが
たし

佳作 失楽の島

八卷 耕 土

鬼羊歯の棘にまつわり灰白く陵霄葛（のうぜんかずら）はひそ
み咲きいつ

第九回、一九七六年七月二十五日、高木食堂で選考会を開く。米
沢選者と弘中氏入れ代り他は先年通りで七名の選者。

応募者十八名。この年は遂に入賞作なしと決定。五篇の佳作は
順位なし、到着順に発表となった。

佳作 落葉

八卷 汀 石

苗床の隅にすくめる墓がいて追えども澄める瞳を閉ずるのみ
母在りし日の儘に置く揺り椅子に午後の冬陽が溜りていたり

佳作 陽の片鱗

大 域 俊 子

柔軟に身をかわしつつ入海に餌を漁りて飛び交うかもめ
余生など子に恃まずと思いきて夕べ淡白な菜を食みおり

佳作 ダムの村落

森 田 吉 久

河べりにダム工事場の家並び朝飯時の煙吹き上ぐ

パラナ松立ち並びいる溪あいを押し寄せるごとダムの水増す

佳作 暦の画

小 野 政 子

仏桑華ながき花芯を陽にかかげ蜂鳥（ベイジャフロール）もこ
の夏は来ず

相つぎて友ら日本を訪う時に足なえの夫と雲を見ている

佳作 旅愁の嶺

八 卷 耕 土

幼らと乗りゆくマリア・フマツサに牧夫は角笛鳴らし帽振る
篠懸の房実を旅の想出に採れは胞子は弾せて舞い落つ

第十回（一九七七年七月十七日）高木食堂に於て選考。選者、大場・酒井・本庄・井本・弘中・小笠原・森重（欠席、書信選歌）陣内、（順不同）、オブザーバー中江、進行安良田、清谷。投稿二十五名。

岩波賞以前に設けられた椰子樹賞が、第十回で打切られたところから、岩波菊治賞も、一応十回で終る可能性がある故か、投稿者も多く選考も熱気を孕んだ。

然し作品そのものは全員一致で入賞に持ち込むまでにはなかなかで、決定を見るまでには長い時間がかかった。選ばれた小野作品は男性の選者三名が強く押し、奇しくも三名の女性選者が揃って押した河口作品は佳作となった。欠席の森重選者が小野作品を押し、酒井選者も不服なしということとで決定を見た。とまれ、十回目に入賞を見たことは欣快であった。

入賞作品 畏れ

小野 政子

わが裡に散り敷きやまぬ珈琲の白き花卉とその甘き香と

油絵のごとき浮雲つらなりて流るる空に夕月淡き

なか空に凧ははげしくゆれ泳ぎ果つるともなしわれの惑いも
悲しみの果つる日は何時鏡面に眉を広げてわが顔を見る
鈍色の空に圧されて静もるやユーカリの梢そよりともせぬ

佳作 無題

河口 吉 錨（坂光男）

秋の陽の輝けるもと赭土にペカンはまろき影なおとせり
つぶやきの口調に祈る妻を待ちいる目に冴えて赤きパウラ
うろくずら流るる方に向いつつ泳げり遠く発ち行く朝も

これの地を去り行く朝も赤錆びしCOSIPAの煙天に伸びつ

つ

自負もちて発ちゆく自（おの）がかたわらに妻娘が匂うみかん
をすする

佳作 風

加藤 操

棉雲の一つを写す湖の面を崩して真夏の風は過ぎゆく
河岸にひと本繁れるフィゲラに音柔かく風の寄り合う
下流より吹く雨風はなみがしら白くたてつつ遡りゆく
暮れ迫る舗道にあさる鶏の毛を逆立てにして吹く風のあり
人里を遠く隔てし牧中に風車ひとつが廻りて止まず

佳作 母の忌

清水 さかえ

納骨堂への高ききざはし上る時父の後姿老いましにけり
糸くずを膝よりはらい立上る音を見下して写しえの亡夫
動く雲動かぬ雲も夕焼けて番いの鳩かたとび立つが見ゆ
陽の在り処時に明るくまた暗く霧の流れる山を我が行く
霧白く流れる朝の石だたみ前行く人の靴音きこゆ

佳作 森の秋

多田 邦治

ゆたかなる陽光あつめて濃緑のいろにうるおう遠景の森
枯れ落葉踏むかなしみの感触をまたたしかめんと森に入りゆく
やわ土に足をとられてふと我にかえりたるとき落葉盛ん
輪郭はあわあわといまたそがれの森に素直なこころゆだねて
闇すでに森をのみこみその辺りいなづまおりおりつきささるか
な

以上、第一回より十回目までの作品を抽出したが、改めて書き返して感ずることは「賞」というものの選出のむずかしさである。と同じく運・不運という人間の力ではどうしようもないものごとである。十人内外の選者が各自の判断の下に意見を戦わせ、最後には誰かが妥協することに依って、選が終るのであるが、それ

が必ず至当であるということにはならない場合もあつて、賞を得又賞を逸することも、いわば宿命と言つても大げさではないと思ふ。この年この程度のが入賞ならあの年も当然入賞にする可きであつた。などとは、選考後よく話題となることであるが、その時はその年の選者達の討議の結果であつたのであつて、とやかく言つても始まらないのである。作品の良否とか、入賞がその人にとってプラスであつたか否かは、後日、識者の目に任せる外にないようである。大雑把な記録で内心忸怩たるものがあるが、これで責を果させて頂くことにする。

コロニア女流歌人の動向

—一九六八年〜一九七七年—

安良田 濟

私に与えられたテーマは、コロニアの「女性短歌」である。単に「女性短歌」というテーマを提出されても、ひろげれば間口も広くなり、どこに焦点を合わせればいいのか途方にくれないでもない。

いろいろ考えたあげく、椰子樹第一〇一号から第一五〇号までの女流歌人の動向を探ぐることであらう、という結論に至つたわけである。

作歌活動の動向を具体的に把握するには、どういう合理的で能率的な方法があるのか私はしらない。それに、時間的余裕もないために、思いついたままを、検討しているうちに、あるいは、女流短歌の片鱗、または概観がつかめるのではあるまいか、と、安易に考えた。それが大変な間違いであるのに気がついたのはいよいよ調査に手をつけた途端であった。

椰子樹のような五〇頁内外の歌誌でも、短期間に五〇冊に目を通し、要点をチエツクするという作業はたとえ、かけ足でするにしても、意外にも重労働であることに驚いた。と、同時に、かけ足で目をとおしたために、容易に核心がつかめず、極めて不安な情況に追いこまれたのを自覚するだけに終わったのであった。そういう呆然たる日々を重ねながら、とにかく、大雑把ながら、目についたものを取りあげ、収束してみたいと思う。そういうわけで、テーマの核心にふれるかどうか甚だおぼつかない、と、いわねばならない。

数字からみた面

近年は短歌の世界でも、女性上位時代といわれている。コロニア歌壇はどうなっているのだろうか。女流歌人の作歌活動を探ぐる場合、男性と比較して、果して量質ともに上位であるか、という点が問題の焦点となってくる。そこで、男性と女性の作品を比較し、その差異、比重を求めるのは、きわめて意義のあることと思われるのであるが、これは一夜づけの研究によって結論を得

られる性質のものではないので、残念ながら見送ることにした。

そこで、もつとも具体的な、数字の面に現われた比率はどうなっているか、という点を調べてみた。この調査は椰子樹一〇一号から一五〇号までの作品欄に限定して計算した。期間にして八年余になり、五〇冊からの集計であれば恐らく動向の一端は抽出されるものと思われる。

そこで、その調査によると女性投稿者の延員数は一三〇五人となっている。男性は二八九人である。女性が二六人ほど多く、これは五パーセント強を示している。尚、五〇回を通じて各号の投稿者の比率をみると、女性投稿者が多数を占めたのは三四回、男性が多数であったのは一三回であり、男性はかなり水をあけられており、この面からみれば女性上位は否定されないようである。

量の比率は必ずしも質の比率を示しているわけではない。しかし、ぜんぜん無関係ではない。

次に、男性上位が何時頃から後退し始め、逆に女性が前進してきたのか、何時頃から量質ともに女性上位時代に入ったのか、そして、その原因は何であるか、という点は興味ある問題ではあるが、それはずっと以前にさかのぼって調査しなければならず、本文のテーマとすこしはずれてくるので、ここではふれないことにする。

ついでに、この期間（一九六八年―一九七六年）に行われた九回の全伯短歌大会の出席者の男女の比率をみると、延員数男性三四五人に対し、女性は三二五人となっている。男性が僅かにリードしている。これは、家庭における女性の特殊な立場、特に地方

の女性の事情などを考慮すると、実質的には女性上位とみて差支えないようである。大会作品投稿者の男女の記録がないので比率のだしようもないが、女性が圧倒的に多数をしめているであろうと推測していいようである。

以上、数字の面に現われた女性と男性との作歌活動の一端を示しておいた。数字には具象的な面と抽象的な面がある。

むしろ、数字が示すところの実体は抽象的な面にある筈である。したがって、そういう意味から、もつと多面にわたって綿密しかも正確な調査をすべきであったが、今回は残念ながらできなかつた。そういうわけで結論的なものはさげたい。

尚、つけ加えておくと、椰子樹作品欄の投稿者の数は男女ともに、ここ十年間に僅かな減少はみたものの、予想されていたほどの減少はないようである。このことは、なお将来に希望をもたせるものと解したい。

短歌用語の傾向

次に、女流歌人が好んで使用する短歌用語について考察してみたい。

ラテン系（西洋の言語は皆そうだと思うが）の言語には詩にだけ使用する「詩語」というボカヴラリオがある。また、多くの場合、詩に使われる詩的用語がある。それらのことばは音感的に美しく、詩的情緒をなたえた特種なことばと考えられている。日本語に「詩語」があるのかどうか私はしらないが、詩にしか用いな

いという特定な「詩語」はないようである。もちろん詩的なことばはあるわけで、歌人が短歌用語として多く使用しているものは、一種の詩語とっていいのかもしれない。ただ、詩的素材や詩的情緒が時代の流れと共に変遷すると、表現用語も新しいものが創られるのも当然であろう。

ところで、高度な作歌とは「詩的ヒラメキ」はことばの発見であり、ことばの発見は詩的ヒラメキ」であることの行為であるといつていいであろう。ことばの発見とは斬新な表現のことでもあるが、日本語の文字のように、一字一字一語一語がいろいろの象的ひろがりをもっているものは、音読する場合と黙読する場合とでは、イメージの展開のしかたにかなり差異が生じる場合が少なくないようである。現代短歌のように、内在律に重点が傾むくと、人間心理の深層へ迫ろうとし表現はおのずから視覚的リズム、視覚的イメージに訴える文字に依存するということになる。

そういう点を考えながら、今回、椰子樹の作品を調べていると、かなり頻繁に使用されている詩的用語が目についた。

もちろん、用語に女性用男性用の区別はない。もしあるとすれば女性好み、男性好みという嗜好性の差があるかもしれない。しかし、それもきわめて稀薄なものだと考えられる。しかし、その稀薄なものによりかかって女流歌人が使用する詩的ことば、短歌用語に目を通してみるのも、女流短歌の側面を捉えることにもなるろうと考えるのである。

まず目についたものを順序不同に並べてみると、次のことばがあった。もちろん、まだ多くのものを見落しているはずである。

翳り（かげり）、寂しさ（さびしさ）揺らぎ（ゆらぎ）、蒼い（あおい）、杳い（くらい）、杳い（とおい）、生るる（あるる）、盈ちる（みちる）、還る（かえる）、膨らみ（ふくらみ）蘇みがえる（よみがえる）、ひろごり

名詞では次のなど顕著であった。

茜、貌、夕映、霧、光（かげ）、錯誤、静謐、姿勢、思惟、象（かたち）。

見落したものは各自が追加してみるのも興味あることと思う。とにかく、以上のことばは作品の中で音読するのと、黙読するのとでは、上下のことばの関係によって差異が生じ、イメージのひろがり具合が異なるのは明らかである。もっともそれは、詩的用語がその作品の中にぬきさしならぬ絶対的“場”をもったときのことである。こういう用語をごく自然な位置に据えるのは容易ではないのである。

椰子樹の女流ヴェテランは近年表現、技巧の点で進歩いちじるしいものがあると思う。ヴェテラン達が陰影のふかい用語を使用し、斬新な境地を拓くと、後進者がぞくぞくとその用語を借りて、作歌するという現象が起るのも当然で、そういうことが、詩的ことば、短歌用語の面に、女性の場合は特にいちじるしいのではないのかと思われるものがある。

ところで、詩的用語または短歌的用語といっても、当然おのこの好みがありことばに対する嗜好、選択にはそれぞれ差異があ

るのは興味ある点でもある。たとえば、小笠原富枝は「膨らみ」「生るる」「翳」「象」という用語を好んで使用している。

弘中千賀子は「蒼」「杳」「還」「静謐」「象」を多く使用している。

陣内しのぶは「擦る」「象」「錯誤」「脹」などを割合多く用いている。

尚、いま気づいたのは小笠原富枝が「ふくらむ」を「膨らむ」と書いているに対して、陣内しのぶは「脹らむ」という文字を用いている。これを単なる好みとして片づけられるものかどうか、とそれほど単純でもなさそうである。

それはともかく、例としてとりあげた三人三様の、ことばに対する選択、嗜好の差は、心理的、生理的なものからくるのは当然であるが、そのよってきたるものを究明すれば、ある意味では現在のコロナアの女流短歌の傾向と動向の一端を捉えることにもなるろう。しかし、私にはその力量もないので、他の機会に、他の人の研究を待つとして、ここでは一つの問題として提起しておくにとどめる。

尚、次にさきの詩的事実ことば、短歌用語と考えられるものの例歌として数人の作品をあげておく。もちろん、代表的秀歌という意味ではなく、女流短歌の詩的用语の変遷の歴史の中で、何等かの位置をしめしているという意味においてであり、スペースの関係で極く少数に限定しなければならなかったのは残念である。

小笠原富枝

わずかなる木の芽の緑膨むと爪立てばぎりぎりの吾が線崩る
ガラス戸を透すひとりの貌ありて蓼しき錯誤生るる夕べは

弘中千賀子

瞼の裏が乾きゆくがの邂逅もそれのみにしてはや杳き貌
純白のつつじ咲き満つめぐりなり多彩に言葉還らむとして

陣内しのぶ

開きたる掌よりこぼさむ何もなし揺らぎしものはわが翳りにて
不意に躰の置処を知らず垂直に墜ちいし夢につづく錯誤は

西田季子

愛垂るる錯誤自らうべなえば車窓に流るる雨限りなし

開沼貴代

杳き傷み湧くを拒みてかすかにも静夜のグラスに韻く氷片

中井益代

夕翳り室のくまよりひろごりて昏らぐらと剥製の獣らの影

安部栄子

わが裡の修羅に喘えぎし幾日か疲れはしるく炎ゆる足裏

森 重 扶 美

夕茜消えゆく空に過ぎ去りの秘めたる修羅が炎ゆるたまゆら

高 橋 よ し み

灯の街がふくれつづける後ろ側殺されている人・魚・貝等

女流短歌の傾向

次に、女流短歌の傾向と動向について一瞥してみたい。

前提として、短歌は短期間に急激な変化、あるいは飛躍する生理をもっていないのである。短歌は急角度の転換を求めようとすると、自壊作用を起す危険をつねにはらんでいるのである。だから、われわれが革新とか改革とかいつているものは、知歌の歴史の上ではきわめて緩慢にしか行われていないのである。

歌壇の動向、あるいは作歌の傾向について考える場合、コロナア歌壇のように新陳代謝がほとんどないところでは、常に日本歌壇の傾向や動向が無意識的にも影響を及ぼすものと考えていいようである。そのことは「乳房喪失」の中城ふみ子の出現の場合など好例である。中城ふみ子のような強烈な個性をもった歌人がたまたま現われると、当然、コロナア歌壇といえども感電しないわけにはいかない。特に感受性豊かな女流歌人の感度は強烈である筈である。ただ、コロナア歌壇のような特種な環境では、ごく少数の指導的立場にある人が、まず感電し、それを咀嚼しやくしたか

たちにおいて作品化し、作品によって後進者へと波及するものと考えられる。コロニア短歌はこういう外部からの強烈な刺戟がないと容易に飛躍や転換はできないのである。

ところで、十数年前、細江仙子が渡伯してきた当時、その異色な作風と傾向はコロニア歌壇に新風を吹きこむであろうと期待されるものがあつた。いま、当時をふりかえりながら、細江仙子の作歌観と作風が、その後のブラジル歌壇に、特に女流にどういう影響を与えたか、作歌傾向にどういう転換を強いたか、という点を考えてみるのも、本文のテーマと無関係ではないようである。細江仙子の作歌傾向や作歌論に同意しない人も、コロニア歌壇の動向に何等かのかたちでプラスしたことを否定する人はいないであろう。だが、どういうふうにと具体的な答を求められると、質問は空間をさまよつてしまふようである。この異質な作風が何等の影響を及ぼさないはずはない、と思えるのだが、コロニア短歌がどう消化したか、という点をはなはだ漠然としていて、容易にうかびあがつてくるものがない。ということとは、必ずしも消化しなかつたということにはならないが稀薄であつたのも否定できないようである。

それは、細江仙子の滞伯期間が短かつたという理由もあるであろう。また新奇なものに対する拒絶反応であつたかもしれない。とにかく、当時すでに、コロニア歌人の多くが新しい傾向を吸収する柔軟性を失つた年令に達していたということも、大きな理由のひとつにかぞえることができよう。

先きのべたごとく、短歌の体質は、傾向の動きにはきわめて

緩慢であり、外部から波紋を起こすような、異常なかかわりをもたないかぎり、大きな変化はありえない、ということであった。そしてこの八年間余りに何等特筆すべき変化が起らなかったということは、外部から強い刺戟がなかったわけであり、コロナ女流歌人も自家発電によって自給自足してきたということになるようである。

それでは、女流の作歌活動はどう展開してきたのであろうか、その点をも一瞥してみたい。作歌活動の面からみた場合この八年余の期間は短かったのか、それとも永かったのか、見当がつかない。

それは相対的に感じるよりほかはなさそうである。しかし、短かいと思えるこの期間の動きをみると、作歌技術の面ではヴェテランを始めとし、それぞれ相当に向上してきた跡を認めることができるようである。

そこで、作歌活動の面をみると、将来を期待されていたにもかかわらず、作歌を中止した女流も何人かある。いま、その理由を知るすべもないが、惜しいことである。しかし、その反対に、もう新人ではないにしても、最近ますます充実し意欲的に作歌している女流も少くない。

見落した人には失礼をお詫びするとして期待できるグループの中に次の人びとをあげることができる。

石塚やす、内田笑子、小野寺郁子、大城俊子、河井美津子、小野政子、青柳ます、篠田真佐子、岡本喜代子、多菊ふみ、穂島千代。

尚、作歌活動と関連して「岩波賞」で活動した女流歌人の動向にふれてみる。

この期間に「岩波賞」は八回行われている。八回のうち半数の四回は該当者なしであった。四回の受賞者のうち三人が女性であった。明細に記すと、第二回〓岩淵静子、第三回〓内田笑子、第八回〓小野寺郁子

該当者なし、佳作として推薦されたのは、篠田まさ、安部栄子、清水そとえ、石橋テル、大城俊子、小野政子。

であった。ここでも、男性と比較して上位を保っている。

以上が女流歌人の主な動向であったと思う。

女がいる風景

短歌は作者不在だといわれている。また、短歌のねちねちした抒情性は女性的だといわれている。そのことが「男歌」という作品が少いことの原因なのであろうか。次に書きぬいた作品が「男歌」に対する「女歌」といえるかどうかわからない。しかし、作者不在ながらも、女性の情感がそこはかとなく漂よっているように思われた作品であった。ただ、膨大な作品のなかから印象的なものを順序なくとりあげたので、例によって、見逃がした作品も少くないし、それと、この作品は抽出したものの一部分であったことも断っておきたい。

小笠原富枝

ぎっしりと幹立つあいを歩みつつどの樹に影を重ねむとする

弘中千賀子

待つというかたちもつとも易くして又夕翳る階のぼりゆく

陣内しのぶ

寄り合えば漂うに似て陽の下にわれと裸木と僅かに芽吹く

西田季子

魅人らるる湖の蒼さよ自らも他人にも責を持たぬかなしみ

森重扶美

寂光をあつめて点る灯のごとく白木蓮の蕾ほころぶ

安部栄子

語り合う可き言葉は裡にひそめつつ冷えし西瓜を黙し切り居る

中井益代

芯持たぬ八重のベゴニア咲きつぎて言い難きわが哀しみに触る

水本すみ子

虹淡くかかれる丘のやさしさに背徳の心幽かに痛し

末吉美佐子

忘れたき事あれば心にも目を閉じて眠らむとするてのひら熱し

大城俊子

潜み棲む魚介に愛の芽ばえいんうすむらさきに海夕昏るる

岩淵史津

うこん色の芥子が卓に匂いたつ寒風を来し躰はほてりつつ

植村かず

着替えたる浴衣の匂い遙き日に人を恋いしが不意に頭ちくる

内田笑子

まばらなる木の葉のゆれの危うさを支えようなき研がれたる空

小野寺郁子

数多く複写取られし原型に似てかすみゆく吾の若さか

藤田美砂子

年毎に可能の範囲はせばまれど購いて持つ菊は匂えず

川田幸子

燃え残る想いに佇てば沈む陽の未練か茜の雲は動かず

佐藤 いち

古壁の割れ目に萌えし雑草に心素直となりて帰り来

篠田 真佐子

鳥の巢を屋根まではがし取りし子が父とはなりて既に子を抱く

女性上位時代

「女性上位」という点について再び考察して本稿の結びとした
い。

椰子樹一〇八号に「短歌と女の暮し」というテーマで座談会が、
清谷益次司会のもとに行われている。出席者は小笠原富枝、陣内
しのぶ、弘中千賀子、水本すみ子、高橋よしみの五人の女流歌人
であった。ここで注目されることは、当時すでに「女性上位」が
認められていたようである。この座談会は、コロナ短歌も女性
上位時代にあり、何が女性をしてかくも短歌に向かわせたか、女
性と短歌のつながりにふれれば…… という意図のもとに行われ
たのであった。

女性と作歌生活について多角面にわたって語られているが、女
性と短歌の結びつき易い理由として、実作者から次のような発言
があった。

- ① 女性は短歌に心持を集中できる。
- ② 短歌というもののパターンが女の感情を表出し易い。
- ③ 女性には感情の発散の場がない。どうしても閉鎖的になりがち、そんなとき、自分の気持を捉え感情をこめ易い型だから。
- ④ 女性は自分の裡をみる能力にたけているから。
- ⑤ 生きているということに充足することがない。絶えず不充足感を持っているから、そこに充足を求める気持が起る。それを求める方法が短歌であった。

座談会の要点をつなぎ合わせると、女性は男性と比較して政治的、社会的、思想的なテーマの追求は不得手であるが、ものごと集中できる性質をもっている。

瞬間的な、微妙な感情、心理の動きを捉えることにすぐれている。その動きを表現定着するには短歌の形式がもつともふさわしい、生きていることの飢餓感を充足する方法が短歌形式であった、ということになるようである。

だが、それらのことを全面的に肯定しても、まだ何か重大な要素を見落しているのではないか、という疑問から容易に解放されないものがある。なぜなら、もし以上のことが重要理由のすべてであれば、万葉時代から、つまりうたが発生したときから常に女性上位でなければならなかった筈である。

私自身はいまその理由を発見することができない。しかし、理由は何であれ、現実には確かに「女性上位」であり、女流短歌を除外して近代短歌は語れなくなっている。ブラジル歌壇も女性不在

の状態は寒むぎむとして、想像することすらできないであろう。私は、本稿を終りながら、なお、「何故であろう？」と女性上位の理由を問いつづけることであろう。

コロニアの男性短歌

弘 中 千 賀 子

ブラジルの日系コロニア社会に、椰子樹という短歌専門誌が生まれて、四十年の歳月が経っている。第二次大戦中、一時中絶期間があったというが、それでも今次号で百五十号が発刊される。短い人間のいのちの中で、四十年という歳月はずつしりとまことに重い手触りを持つ。その永い日と月の中で、椰子樹という一本の樹のもとに寄り集まって、短歌を詠み継ぎ、育てつづけて来た、その一筋の心の流れを思うとき、それはやはり、おろそかならぬものだと思う。短歌というひとつの詩型に思いを託した仲間がみんな支え続けて来たり”椰子樹”である。いま百五十号の記念号に百一号から、百五十号までの中での男性短歌について書くように、(女歌という言い方はするが男歌とは言わないようであるが…)、男性でなければ詠み得ない歌を採り上げるようにとのこと、五十冊の椰子樹誌の男性歌人の歌を全部読み返してみた。そ

れは相当にシンドイ仕事だったが、男性作歌者の歌を読んでゆきながら、これはあきらかに男性の歌である、と言える歌が、非常に少ないという事実に変更して気づかされた。男性が詠った歌、というより、ひとしなみ、生きて生活している人間の歌である。生きて在ることの生活の中での悦びや哀しみ、その苦渋の思い。

そして諦観。それらもろもろの生活の歌である。それは特に男性でなければ詠めないという歌柄でもなく素材でもない。男性の視線で切り取ったもの、といえる歌よりも女の性が歌わせたもの、女の想いの溢れたものの方がより多いのは何故だろう。やんわりと陰徴に粘りつくような女の想い。三十一文字のこの詩型は、そうした女心を託すのに、より適した詩型なのだろうか。こうした中でやはり男性の歌だと思うのは多く生活に直結した素材。農作物に関するものとか、勤め先のこと、一家の生計を背負って立つ男の人の生活から詠まれた歌である。勢いそういう面での歌われ方をした作品を私はより多く抜き出している。もとより杜撰な私の眼が選りこぼした男性でなければ歌になし得なかった、という作もあつたと思う。それは私の眼の至らなさで御寛恕願ひ度い。

心奥にはげしき営みもちつづけ来れる日々か裸木芽ぶく
きおい来し命過ぎむか薄明をかすかに伝わる樹枝のひびきは

一〇一号 川原比露思

この二首の上句の迫ってくるような表現はやはり男性の歌である。歌の巧緻さは言うまでもないが、一首々々が持つ言葉の張り、

は男性的である。

決断の近事迫られ如何すべき生ぬるきビール取り上げて呑む
酔えばまた酔いの世界にて楽しけれ舌もつれ意識しつ我が饒舌
す

一〇一号 徳鳥溪舟

女性の酔の歌もあるけれど、こういう世界はやはり男性のもの
である。男の世界の厳しさと楽しさを見せてくれる歌である。

五衛門の如き貌せる若きらがミニの少女を抱き抱き通る

一〇一号 久米光春

農を捨て生きねばならぬ一念に街に不馴れの野菜商う

一〇一号 中川荒記

稼ぎ高夜毎に記しいる翳り硬き守銭奴の貌しておらむ

一〇二号 久米光春

農に賭けし幾度の夢灌水の霧に立ちたる虹のむらさき

一〇二号 安達太良

反古のうえ君が描きて示したる線も企画者のたしかさに

一〇二号 大場時夫

吾が服の牛糞臭きを言われつつ牛飼い牛乳に依りて生きゆく

一〇二号 志伊良二世

“五衛門の如き貌” ずばり云いえて妙である。その後の歌、生計を背負って立つ責任ある男の生活の歌。これはやはり男性でなければ詠めない生活に直結した歌である。

野の青につながりて遠き少年の心は奔放に麦踏みいたり

一〇二号 笹波北陽

真情の受け入れられぬ憤懣が夜の凧を真向に衝く

一〇二号 縄手敏夫

南半球へ遁れて来たるいきさつも類型ありて風化しはじむ

一〇二号 川原比露思

つくり声して金運より生命の永きさだめを肩叩き言う

一〇四号 南条由喜夫

富まざるは己れ因る象を見せ累々として土塊曝し

一〇四号 土屋風春

躊いてあれば墜つのみ黙々と決潰の土急ぎ繕う

一〇四号 若生五十路

旋盤の切屑青く燻りいて我が鈍重の裸に喰い入る

一〇四号 上妻博彦

帰結なき金にかかわる議題なれば眼の色互いに残忍となる

一〇四号 知花清

これらの歌、決して陰湿ではなく、生活の明暗を、ざくりと切り取る男性の眼がある。

原初の貌失うといえ暗緑の潮寄る磯の猛き海鳴り

一〇五号 武本由夫

岩礁に釣糸垂れて惜しみなく短日有為の余白をぬらす

(同)

可くありて黙契成就浜桐の実は落ちきたるわが手のひらに

(同)

危うかりしひと夜のことに触れてゆく興味におちるをためらいながら

一〇五号 大場時夫

岩狭にのぞける冬の碧深く墓室（ドルメン）は斯くしみらなぬくみ

一〇六号 森谷風男

水蝕の岩あい深く屈折の冬陽妖しき虹醸しつつ

(同)

遁れ着くあてなし午後の風防に迫りて山のささくれしみち

(同)

挫折せる吾と思わず繰返す波濤無限に飛沫上げつつ

一〇六号 梅崎嘉明

頼られし事の重さに耐えながら疎林の明暗顔にあびゆく

一〇六号 縄手敏夫

“原初の貌” “岩礁に” “可くありて”

まさに男性の骨格を具えた線の太い歌である。発想、表現、共に男性ならではの秀作だと思ふ。上掲三首程の骨格の大きさはないが、右に抽出した六首、明らかに女性には捉えられない視覚が表現されていて興味深い。

ガルソンが銀の器を配る間を君の化粧の香がしるくたつ

一〇六号 酒井繁一

或る時の男性の心の動きを逃さず捉えてあり、ふっと心ゆるむ思いで引き出した。

生存にひそめる意義を測るとき卓上に髑髏の歯並みが笑う

一〇八号 加藤操

便所の扉閉めざるままに用を足す独り住居の開放感に

一一〇号 富岡清治

袖に鼻汁を拭う幼き習性も残りて寒く冬のクサミス

一一一号 清谷勝馬

峠路もこれより降りか老い吾の尿朔風に吹き曲げらるる

一一一号 縄手敏夫

ふと触れしふぐりふたつの現身を思いつつしばし掌にもてあそ

ぶ

一一三号 上妻博彦

空き腹の脚踏みしむる夜の駅己れの街に着き安らぎし

一一三号 縄手敏夫

一日の農の衣を脱ぎ捨てて夜は団欒の首座におさまる

(同)

放埒に更けしちまたの匂い立ちむし暑き明け方の不意の夢精

一二二号 知花清

現象面でのこうした男性歌、やはり男性ならではの歌、といえよう。

次にまた生活面から捉えた男性の歌を号を追って抽き出してみよう。

真先に示さねばならぬ立場ゆえ泥沼に入り杭を打込む

一一四号 酒井繁一

人夫らと薙ぎゆく雑木惨虐を振舞うごときさまに倒るる

(同)

自らが斧打ち拓く山にして響くこだまも稔りのごとし

(同)

贗金師など潜ませて何時からかわがロンドリーナも都会めきい

つ

一二四号 大場時夫

嘲笑の声はどこかと振りかえる掌にあざらけき贗金一個

(同)

贗金の誤謬をひとつ指摘して取り戻している笑い小さし

(同)

朝疾く目覚めてながき欠伸など老いたる父の過ぎし日は顕つ

一三〇号 井本惇

僅かに老後を生きんねがいなど今宵は 事の思いいやしき

(同)

金をやらぬ吾よりいたく不逞にて黒くよこれし親と子は去る

(同)

団まりて白き犢が岩蔭に振る白き尾は円を描きつ

一三二号 新納潤魚

荒涼の浜に流木の横たわる如くに寝おり薄明に床に

(同)

このゆうべ五慾をいのちの源と書に説くを肯いふかく睡むとす

(同)

ようやくに老いて疎外の界に在りカンブリア紀の野にも還れむ

(同)

前生のことは視えねど今生の罪咎をみむ眼つむりて

(同)

こと更つての評釈はもはや不要ではないかと思う。生活と闘う
眼が切り取った歌男の心に淀む生きることの重い歎息も聴こえて
くるような歌である。

妻も子も他人の顔をして眠る暁の雨水匂いつつ

一三七号 森谷春男

逼塞の日々の無聊に編み上げし魚籠の底金多く曲れる

(同)

播種期の光りたる畑に収穫の目安は措きて雨に蒔きつぐ

一三八号 唐沢弘直

相次いで逝く先駆者の埋葬を囲みて老いの肩が重なる

(同)

あかときを北麻州路の空遠くサザンクロスを追うかに駆ける

(同)

予想せぬ霜のひどさにおどろきて吾れの畑に人影は殖ゆ

一四〇号 関東忠吉

心やや落ち着きたれば帳めぐり霜の日記に赤く線引く

(同)

嘆き止め巡れば右の頬あたり冷たく光りて落ちし汗あり

(同)

黒雲の迫り来たりて昏れ方を収穫機の音急に高まる

一四一号 森田吉久

降りつづくホテルの部屋にこもりいて商談なきを日記にしるす

(同)

いつの時代にも一家を背負って、妻子を養ってゆく、ということとは、やはり容易ならぬことであり、たとえようもなく煩瑣なことだと沁々思わせる。なにもそれは男性ばかりでなく、女性に於ても生きてゆく日々の煩しきはあるけれど、経済的な面、対人関係、そうした面での男性の社会の厳しさは、こうした歌の上でもまざまざと表出されている。大へん雑駁な抽出の仕方だが、以上、一〇一号から一四九号迄、私が引き出した椰子樹誌の男性歌人の歌である。

全伯短歌大会の歩み

パウリスタ新聞主催椰子樹社後援になる全伯短歌大会は、一九四九年二月一〇日、椰子樹創刊十周年と、岩波菊治の誕生五〇回を記念してその第一回が開催された。然し、パウリスタ新聞主催は第二〇回までで、第二一回からは椰子樹主催、パウリスタ新聞後援で今日に継承されている。第一九回までは一〇〇号記念別冊特集号に発表されている。

▽第二〇回

一九六八年九月一五日サンパウロ文化センター大会議室にて開催。応募歌数五三四首、出席一〇〇名。司会、高橋よしみ、佐藤博三。

代表選 森重扶美

かたちなきものの声々 頭たしめて 苦渋の襞のごとき 夜の潮

○ 小笠原富枝

ガラス戸を透すひとりの貌ありて 寂しき 錯誤生るる 夕べは

一般選 森重扶美

かたちなきものの声々 頭たしめて 苦渋の襞のごとき 夜の潮

○ 山室新太郎

割れ落ちし硝子の切れ目の青深くもはや触れ合う心にあらず

席題詠「椰子」 清水そとえ

帰結なき思いただよう夕昏れを椰子の梢に風立ち騒ぐ

○ 田上みづほ

果てしなき吾が妄想を崩しゆく枯れ牧原の椰子に吹く風

詠み込みコンクール「消極」「新芽」

○ 木村正和

寄生木の新芽多彩にほぐると云え帰化人の消極の声

○ 陣内しのぶ

消極の日々を淋しみ酔う夫に木の芽のぬたの皿を整う

アベック歌合わせ

乳色の蜜柑の花を手折りつつこのむなしさはいずこより来る

(田中・行方)

寒々と霧流れいる橋の上寄り添いて聞く旧き傷痕(大和田・中

川)

▽第二一回

一九六九年九月一四日エスツダンテ街こけし食堂サロンにて開催。応募歌数三四六首、出席九二名司会、徳尾溪舟。

代表選 八卷耕土

過誤ひとつ吾が責として堪える夜を浮標は孤り沖に灯りぬ

○ 佐藤博三

海よりの風にひそかに鳴りながらジツカの幹も実も乾きいる

一般選 八卷耕土

過誤ひとつ吾が責として堪える夜を浮標は孤り沖に灯りぬ

○ 水本すみ子

ことごとく自負崩さるる日の果てを遠いかずちの重きとどろき

席題詠「干魃」 米沢幹夫

井戸水の涸れしを嘆く話題とし今日も隣家の風呂をよばるる

○ 佐藤いち

鳳仙花のしおれ実はじかぬままにしてながきセツカの風吹きつ
ける

詠み込みコンクール「人」と「風」

○ 田上みづほ

吹き上ぐる風に青麦波打ちて人影もなき起伏統けり

○ 陣内しのぶ

還えるなき人を想っている窓にかそけき音に風鈴は鳴る

アベック歌合わせ

老いづきて束縛もなきあけくれに僅かに残るうずきも持てり

(笠原・川上)

温めし想いはついに言い出せず檜垣の角をまわりて帰る(清水

節子・清谷)

▽第二二回

一九七〇年九月六日リベルダーゲ通り蘇州飯店で開催。応募歌数三四一首、出席七六名。司会、徳尾溪舟。

一般選 賀沢朋子

身にこもる想いひとつに掬いたる掌よりこぼれて白き砂落つ

○ 森重扶美

寂光をあつめて点る灯のごとく白木蓮の蕾ほころぶ

席題詠「イペー」

○ 清水そとえ

告げざりし心そのままに移ろいし花イッペーに没り陽がにじむ

○ 吉本青夢

一弁のイペーの花を文に添え送らん日本へ帰りし兄に

アベック歌合わせ

断ち難き想い日に濃しスイナンの朱眼に沁みる朝光の道(篁・

川原)

この蕾開くは何時か木蓮の花を愛せし汝今は亡し(森重・吉本)

詠み込みコンクール「陽」「木」

○ 小笠原富枝

ユーカーのひと木を照らす陽のありて歩まんとする心ためらう

○ 藤田美砂子

木もれ陽の影まだらなる道ゆきつ君の傷みにふるることなし

▽第二三回

一九七一年九月二六日エスツダンテ街こけし食堂サロンで開催。
応募歌数三七〇首、出席八〇名。司会、弘中千賀子。

代表選 陣内しのぶ

平安に軋みて行けりわが知らぬ豊けきものを持つ乳母車

○ 久米光春

子の願いつたうる妻の口すでに妥協のひびきもちつつ動く

一般選 吉本青夢

手間どりてカフス・ボタンをはめおりき斯かる瑣事さえ侘し孤
独は

○ 清水そとえ

川床に冬陽透りて息づきのごとひそやかに小石のゆらぎ

席題詠「街路樹」

○ 大場時夫

街路樹の影に見送るきみのかげふりきる如くアクセルを踏む

○ 吉永流藻子

ささやかな商品並べ日系の媪は商う街路樹の蔭に

アベック歌合わせ

ユーカーリの小花を散らす風の中病後の軀いたわり歩む（小笠
麻・米沢）

豊穰の麦のうねりの続きつつ行く手はるかにパラナ山脈（水
本・金井）

△第二四回

一九七二年九月三日エスツダンテ街こけし食堂サロンで開催。
応募歌数三三六首、出席九二名

代表選 小笠原富枝

土に還る静かなるめぐりのひと所錯誤となりて夕光の照る

○ 川原比露思

心よぎるものの象を逐いいるに光りつつ海は膨みを増す

一般選 川原比露思

心よぎるものの象を逐いいるに光りつつ海は膨みを増す

○ 野中みや

残さるる者の哀しみ念う夜を風は冬木を軋ませてゆく

席題詠「独立」「丘」

○ 八巻耕土

雄叫びの丘のイベーを映しつつ独立祭の聖火燃え立つ

○ 川原比露思

独立の歌この丘に流れつつ新しき国の力をおもう

アベック歌合わせ

昂ぶりて言いしもいまは虚しくて反照するき部屋に猫抱く(森

重・森谷)

吾が裡も見すかされいん澄み徹る白水仙のかそかなる揺れ(高

原・清谷)

▽第二五回

一九七三年九月二日エスツダンテ街こけし食堂サロンで開催。

応募歌数三八六首、出席九二名。司会、弘中千賀子。

代表選 弘中千賀子

透明な幼な声が軀の裡に泌みゆく深き樹々をへだてて

○ 藤田美砂子

年毎に可能の範囲せばまれど購いて持つ菊は匂えり

一般選 梅崎嘉明

ひとところ酔わざる心氷片は人を容れざる形に尖る

○ 桜井ヨシ

平安と言うには遠し嫁さぬ娘に女老いゆく悲しみに触る

席題詠「みどり」

○ 高橋よしみ

川風に蝶いくたびか翔たしめてささやくごときみどりの葉群

○ 水本すみ子

眼の限り波うつ麦のさみどりが心弾まぬ旅を彩る

アベック歌合わせ

ゆるやかに浄化とげゆくながれにて君と許さるる日をば待ち居
る（高橋・渡辺）

声荒き夫の後に従いて残る未来を想いつつゆく（陣内・酒井）

▽第二六回

一九七四年九月一日エスツダンテ街こけし食堂サロンで開催。

応募歌数三三二首、出席八五名。司会、清谷益次。

代表選 小笠原富枝

ひと生るる仮象と想う黄の雲のひとひらひとひら湧き綴れるは

○ 同

暁闇の探き鎮もりまばたけば棄教者のごと星流れたり

一般選 開沼貴代

反駁の言葉たたみて移す眼に澄み鎮まりて白き山茶花

○ 大西阿哲

喪にこもる部費に一つの救いとも万両の実は朱く耀よう

席題詠「暁」

○ 小笠原富枝

啓示のごと真向かい居たり暁の遠き梢に光り動くは

○ 水本すみ子

いねがての夜をしらじらと暁の和める彩に溶かさるる思惟

アベック歌合わせ

ユーカーリの疎林を縫いて続く道君の背にふる淡き木もれ日(椎

野・佐藤)

うら畠の枇杷の新芽の伸びしるく射しくる朝の光りを返す(藤

田・蓑毛)

▽第二七回

一九七五年九月一四日エスツダンテ街こけし食堂サロンで開催。
応募歌数三二八首。出席八九名。司会、清谷益次。

代表選 弘中千賀子

待つというかたちもつとも易くして又夕翳る階のぼりゆく

○ 西森覚

身を証す術なく帰る雨の夜の道に油紋は黝く拡がる

一般選 川原比露思

鳴りながら岩越えてゆく水疾し一つの決意に迫られて佇つ

○ 三原洋樹

生みたての卵のぬくみ手にありて物言うごとし一つ一つが

席題詠「干魃・セツカ」

○ 八巻耕土

この業に終てん希みも崩れつつ早りに枯るる畑にたたずむ

○ 武本由夫

ひび割れのか黝き湿地見て戻り索莫と独り物食みて居り

アベック歌合せ

吾が頬のえくぼ昔の儘なりと耳に口よせ君はささやく（工藤・
武本）

感情のままに吐きたる言葉悔いかぎろい昏き西窓に佇つ（篠田・川上）

▽第二八回

一九七六年九月一九日エスツダンテ街こけし食堂サロンで開催。応募歌数三二八首。出席七九名。司会、水本すみ子。

代表選 弘中千賀子

会いたれば会いたるほどのかなしみを持ち帰りゆく陽ざしの中を

○ 岡本喜代子

眼を閉じし人みな寂しき貌もてり車窓は朝の白みそめゆく

一般選 米沢幹夫

拒否されし言葉にもろく傷つきて歩む背を押す虚しき風は

○ 川田幸子

燃え残る想いに佇てば沈む陽の未練か茜の雲は動かず

席題詠「空」

○ 小笠原富枝

一日の結実に似て夕空に動くともなき黄の雲叢は

○ 中江克己

スイナンの花きわまりて冬の空澄み透りゆく真陽のかぎりを

アベック歌合わせ

ほのかなる想い押さえてにぎる手に通い合うもの確とつたい来

(柴倉・八巻汀石)

やがて逢う君を思いつ春の陽の反す鏡に白髪染めおり(多菊・

米沢)

全伯地方短歌大会

梅崎嘉明

短歌の振興と、一層の相互親睦を深める意味で、全伯地方短歌大会を催することになり、その第一回は一九七二年四月九日、サン・ヴィセンテ市に於て開催された。出席者四八名。

代表選一位 六点

うす紅の貝掌の中に鳴らしつつ汝に過ぎたる日を吾は追う

陣内しのぶ

同

有縁なるものの虚し地の息と思うまで照る土のたいらは

小笠原富枝

二位 四点夜盗虫ひと日潰せば青染みし指は夕餉の卓に匂えり
西森 覚

同

擦れちがうものらゆかしめ木鳴りする裸木の傍身じろがずいる

高橋よしみ

同

惑い多き心吹かれつつ寄る磯に浮浪者がひそと死魚を焼きおり

大城俊子

同

つづくべき言葉失い居るわれに並木の花はおりおり散りしく

大場時夫

一般選一位 十三点

心深く得しものとなり樹々の影被うなかなる石は雫す

小笠原富枝

二位 十二点

挽歌のごと牛車の軋む音きこゆ移り来て杳き記憶の中に

川原比露思

席題「磯」

一位

干潮の水あとしるき磯岩を黒く彩る幼なマリスコ

土屋哲子

二位

月影の淡き磯浜遠くしてゆくてに白く波頭たつ

梅崎嘉明

アベック歌合せ

一位 高橋よしみ―坂光男

銀色にたゆたう海を見つめて外しかねたる弱さを思う

第二回全伯地方短歌大会は一九七三年三月十八日、ロンドリーナ市に於いて催された。

互選一位 二一点

吾が農を継ぐ子らもなく風のなか孤り歩めば粟の実落ち来る

八卷汀石

二位 二〇点

みずうみの水のしたたる魚籠みせてしたしも草の道ゆずり合う

大場時夫

題詠「残照」一位 十四点

昼の陽のぬくもり地より還るとき残照赫く雲を染めたり

遠藤治

二位 七点

交りの絶えし過程を思いつつ残照の丘にながき影ひく

植村かず

アベック歌合せ

一位 弘中千賀子―森谷風男

イグアツポの湖岸なだらな緑萌え会いを重ねる空しさにいき

一九七四年四月二一日、スザノ市に於て第三回地方大会を開催さる。この年は代表、一般選の外に特選が試みられた。

特選一位 六点

満員のバスの中にてふれ合いし工夫の弁当温かかりき

佐藤一英

二位 五点

この夜の闇より暗き彩をして幻想の階どこまで降る

徳永京子

代表選一位

とりとめなくとき過ぎてゆく身のうろに重々として夏の落暉は

小笠原富枝

二位

貝の声密かにきこゆ朝浜を奢り知らざる足裏に踏む

田中朝子

一般選一位 二三点

吾が思惟のなべて裏目となりし日の午後を寄り来し犬に物言う

梅崎嘉明

二位 二〇点

忘れいし疼み甦りく裡ふかく花芽を孕める茗荷裂きつつ
八巻たけ子

席題「スザノ囁目」 一位 二七点

哀歎を語るスザノの移住碑のほとりに山茶花ひそと咲きおり

大西阿哲

二位 二〇点

水源地の底いとならん傾斜地のよもぎは白き葉裏を反す

坂光男

アベック歌合せ

一位 植村かず―井本惇

さりげなき拒絶の言葉背に痛し風は夕べの街に吹きつつ

一九七五年四月二七日モジアナ線グアイラ市文協会館に於て第
四回全伯地方大会を催す。出席者五五名。

代表選一位

膝折りてセルカの外の草を食む牡牛の角の末だ幼なし

北谷まがた

二位

隣家のとうきびの葉先吾が病める窓ごしに今朝は見え初めたり

佐藤一英

一般選一位 二〇点

いくつかの挫折埋めてきし記憶灯る聖樹のかげにおもいぬ

本庄研一

二位 十九点

崩れゆく自負を糾せば直陽の中短かき影の吾に従う

大西阿哲

席題「グワイラ囁目」

一位 十七点

銀の陽をはじくサイロを遠景に広がりやまぬグワイラの町

中川荒記

二位 十三点

地平線曙色に染まりいてまだ覚めやらぬ街に降りたつ

岡本喜代子

アベック歌合せ(男性上句作)

一位 佐藤義男―弘中千賀子

仰ぎ見る山に懸れる夕霧に薄れし想いまた甦る

一九七六年度は都合で中止、第五回は七七年四月三日ロンド
リーナ市に於て開催さる。

互選一位 三〇点

結び上げし今日の終りの客の髪さしかける傘の中に匂えり

中西静代

二位 二一点

さりげなく聴きし言葉が澱みいて昏れゆく道の歩みが重し

開沼貴代

席題「希望」

一位 九点

積みゆきし大豆が残す香に立ちて希望あふるる目をかわしいる

高須きみ子

二位 五点

静かなる口調なれども固く組みし汝が手に切なる望みは知れり

小野寺郁子

アベック歌合せ

一位 中川原正子―久米光春

蓬かなる君を恋いつつ佇つ丘に激しく燃えし日のかえり来る

新聞歌壇が辿った跡（補遺）

清谷益次

百号記念別冊特集号に「新聞歌壇が辿った跡」を書いた時は戦前の邦字新聞の殆どが“全き形”では残っておらず、短歌の跡を辿る上でだけでなく、移民の歩いた姿を探し求めるのにも、大きな欠落を残しそうで非常に残念に思われたのであった。

そうした事情で、百号記念号では、新聞歌壇の跡は、歯が抜けたような状態で残っている日伯新聞とブラジル時報及び聖州新報が或る一年間の掲載作品を以て編んだ「移り来て」という小歌集を抛り処として辿る以外に方法はなかった。

この百五十号記念号で、私が補遺のようなものを綴ってみようと思ったのは、聖州新報の経営者で、笠戸丸移民の一人であった香山六郎氏が、太平洋戦争が始まった頃、新聞がブラジルの官憲の眼にとまって何らかの問題に巻き込まれることを慮り保存していたものを残らず焼き捨てたために今では“幻の新聞”と見られていたものが、凶らずも殆どそっくり今回出て来たからである。いま、移民七十年の一九七八年六月十八日での完成を期して「日本移民史料館」の建設が進められているが、その史料収集の呼びかけに応じて、“幻の新聞”の寄贈があった訳である。

寄贈された聖州新報は一九二三年の二月二三日号から一九四一年七月三〇日付終刊号までである。「聖報」の創刊は一九二一年九月七日といわれているから、創刊からほぼ一年半の間のものはこ

ここにはなく、またなお細かく見れば中間にも幾つかの欠号はあるのかも知れないが創刊以来の謄写版刷りが活字印刷になったのは一九二五年からであり、現存の謄写版刷りのもの二年分には短歌の発表は皆無だから、新聞短歌を辿る上では関係ないと見てよい。

聖州新報が活字印刷になるとそれに応えるようにして短歌を始め文芸作品が姿をみせ始めるのは面白い。一九二五年五月二十九日付第一八〇号に、リラという人が次の六首を発表しているが、これが今のところでは「聖報短歌事始め」である。

百頭の牛ひきて行くバイアノは水乞うひまも唄えり恋か

女あり抱く子の顔は捨て去りし故国の父に日々似るとよ

行きずりのルアの窓よりフト見えし浅黄のひとみもの思わする
つまらないつまらないとくちぐせの若人は今日もセルカの木を
伐りて居り

血をそめて恋の礼賛かきつくし書きつくしたる吾なりされど
かたくなる干ぞりし生のすき間よりほとばしるかなこの恋心

一九二五年の新聞は「日伯」も「時報」も喪われているのでこの年に関しては「聖報」は唯一のものといえる。続いてこの年の「聖報」に現われているのは、七月三十一日付号に「ソロカバナ線セルケイラ奥にて馬路資」の

あの白い棉畑中のサツペ葺に筑紫の人の娘は住めり

棉摘みて今日も暮れ行く冬の日を枯木によりて眺む人妻

棉畑に赤いレンソのホウかぶりチラと見かえりうた声やみぬ
犬も居眠り豚も夢みる午後三時ミネロの山の棉真白なり

センセンのないて飛び去るカンポ中にバルバチモンよ汝も淋し
き

今日的視点からすればなんとも幼いが若い移民とその生活を彷彿とさせるものがある。他に、八月七日号にフレゲジア・ド・オ

静雨の

あきらかに赤土出し山角に秋の日さして心淋しも

ほか三首、八月二八日号にプロミツソン 琉球男の

かにかくに子は片言をいいそめぬ誕生の日の近づきくれば

ほか四首がある。琉球男は仲間美登里で二四年頃から「時報」にも作品が出ているから、当時の活躍組の一人であったのだろう。一九二六年は聖報歌壇が一躍賑やかになった年である。一月一日号には紅楓生（ペンナ高橋）の

ブラジルに六とせは逝きぬさはあれど我がスザンナを得たるよ
ろこび

など五首、ほかに出利葉大三の二首、リンス森田美津子の五首、さらに号を追って、高信（百号記念号以下）百号」と記すことに

する——で触れた松本的信)五首、モンソン佐藤白山六首、山田
禅単七首、中島簾子八首、汀打浪六首、藤岡耕村十首などが発表
された後の八月六日号から鈴木南樹が「椰子の葉風」(一)九首を
以て登場する。南樹に就ては「百号」でもかなり詳しく触れたが、
二六年には日伯紙上に「白雲集」として十二回に亘る群作を発表
しているので、この時代が彼の短歌の上で最も油の乗っていた頃
なのであろう。「椰子の葉風」は(八)まで続いて実に七十一首に
及んでいる。続いて「北米に旅して」(一)〜(九)約八十首(二二)
が喪われているため)があつて、正にブラジルの新聞歌壇は「南
樹のためにある」ことを偲はせるものがある。恐らくブラジル時
報にも発表していたであろうことは「百号」に書いたように大内
田健三の南樹短歌評があることでも知られる。

青あらしコルコバードを吹き落ちてやがて小舟の白ほをはらむ
あかつきの砂糖塊山そのすそに白き波立つ夏の海かな

(砂糖塊山はポン・デ・アスーカルだろう。筆者註)などのほか
に

情せまり倒れふしたる汝が上に手をのせも得ぬ吾れ卑怯者
恨むればいよよなつかしのろうてはいやましにこそ憬るるなれ

といった情熱的なのも含まれていて、さらには

気にくわぬ時には物も云わざれば人に好かれぬ気まぐれ者ぞ

という自嘲的なものも混っている。

ここに現われた南樹の「情熱調」はずっと後の一九三六年七月二十一日号と二十八日号に発表された「久遠の初恋」に続くのであろうが、「久遠の初恋」は当時のコロニアではかなりな問題作であったようで、聖報編集部にはこれに応えるようにして二つの歌稿が寄せられた、とある。そしてその中の一つは「嘗つての夫南樹よ」というもので作者は「北樹」、十八首の作品である。

生れ出でし吾子は不幸ぞ一生に父を知らずに世を渡るなり

「久遠の初恋」見るにつけ齒のない「おやじ」怨めしき哉

というのがあるが、ここで「北樹」なる女性についてせんさくする必要はないだろう。移民史とかかわり深かった一人の男の一面の姿をかい間みる想いと、その頃からもう齒抜け男だったのかという微笑が湧くだけである。

筆をもとにかえして、年代順に聖報に作品を発表した名前を辿ってみると、一九二六年は既に記したもののほかに木村蜂鳥（口語短歌四首）、日出夫、古沢生、一九二七年〓竹窓散七、すみ子、ながわ・りか、友頼、聖報、前田露路、一九二八年〓舟人、中野鉄城、佐藤清、幕山人、汀生、正子、一雄生、一九二九年〓芙美子、琴汀、雲平、松子、塩月修一郎、水木潤一郎、佐藤一水、朝来生、のぼる生、などがあり、比較的多くの作品を発表しているのは、友頼、中野鉄城、暮山人などである。この中で、後年の

椰子樹と関係のあるのは古沢生（古沢猛、典穂）ぐらいのものであろう。いずれも作歌が長く続いたとは思えない。舟人は「百号」でも触れた野崎舟人で「春」十一首の中には

枝移りいしたたきなくよ朝明けの山のうねりのおのづからなる
夜もすがら音なく雨の降りつづき幼き声に蛙は鳴くも

といったアカ抜けした趣きの深いものがあるのは流石といえる。

一九三〇年代の前半はやや聖報短歌が沈滞していたようにみられる。新しい顔としては、潮月泣静、三郎生、若葉美登里、雨筑生、青磁、氷河、愛橘、春栄、藤波睦枝、大西残月、梧桐などがあるがいずれも歌数も回数も少くまた幼稚の域を出ていない。”主要歌人”は相変らず鉄城、朝来生、塩月脩一郎であるが、この間南樹が「鎌倉丸船上芭蕉の中に立ちて」八首（一九三一年一月一日号）、帰朝雑詠（二）〜（九）百五首（二二）（七）欠、一九三三年八月二十二日から一九三四年七月三日号まで）、また一九三四年七月十七日号から「ブラジルへの船路」（一）（二）（三）二十八首を發表しているが、どうしたことか、この頃には他の作者のものも殆どみられなくなっている。

このように、南樹の作品を除いて短歌の發表が少くなるのは一九三二年辺りからだ。この年から聖州新報は紙型が大きくなっている。紙面の大型化と歌壇の衰退とはどんな因果関係があったのだろうか。反対に短歌に代って瓢骨（上塚周平）の俳句と、公

孫樹（香山六郎）選の「植民地俚謡」が殆ど毎号掲載されるようになる。そして一九二五年に至っては短歌だけでなく佃の文芸作品も全くといっていいくらい発表されていない。

一九三六年になると、数年間沈滞していた聖報歌壇は“突然変異”のように賑やかになり、三月十日号から「聖報歌壇」と銘打たれて発表の形もまとまって来るのである。この号には南樹の五首を始め、抱春、痴糖、寸南、南仙子、さだめ（須貝）らが発表しているが、一週一度という意欲的な発表のし方になったのは須貝さだめ（富美子）が編集部に入ったためかも知れない。そしてこの辺りから後年「椰子樹」の常連となる作者が多く登場して来るのである。

三月二十四日号には、踏青、阿部太、荒木勇吉、佐藤花情、別府森水などが新しく現われている。阿部太の一首目は

すずなりのさんごなす実の珈琲のけさ美しく露にぬれたる

で、荒木勇吉はマリリアで歌誌「遼原」を主宰した八雲だろう。続いて三月三十一日号には、聖報歌壇の一特色をなした金子秀雄が五首の作品をもって初めて出て来る。彼の当時の作品がどう評価されるべきかは別として、農業移民の日々の哀歓を、つとめて短歌的になることを避け、普通の言葉で詠ったことで、多くの共感を得たことは否めない。また型も二行書きが多かったのは啄木や土岐哀果の影響を受けたものだったろうか。

高くないものであったら

蜂蜜を一本ほしいと

長く病む妻

といったぐあいである。

この頃から名前が出初め、聖報歌壇の有力作者になると共に、後の椰子樹につながって行くものを挙げてみると、絹江一木蘇花、渋川不二夫、隠岐田春陽、沖田宵星、波沫正夫、池田生、夏山、中村幽情、緑蔭、土屋紫晶、葉刀などがあるが、このうちの絹江は神志那絹江、夏山は中須夏山、緑蔭は木下緑蔭、池田生は池田重二である。

七月二十八日号で、現椰子樹の選者井本惇が初めて惇の名で四首を発表している。

朝じめりの森の中なる道ゆけばいちはつの花蕾もちおり

見上ぐればぬきんでて立てるイツペーの老樹あまた咲けり枝かさなりて

また八月四日号には後に椰子樹同人になった浅田今日志の一首が出ている。

葉は総て蟻に曳かれてユーカリ樹次第に枯れて立ち並びたり

神志那絹江、須貝さだめの作品を一首ずつ記すと

幼な子のものを云うにも息白し気づかぬほどの霜下りし朝
月の夜の枯野を騎馬の二つ行く幻の如物語りの如

八月二十七日号には、後に第四回坂根賞を授賞した河村哉太郎
が一首だけの発表ながら

人家なき此の山里に逝きし吾子箱ごと我は担ぎてぞ行けり

と詠い、欄担当者をして「現在日本人の日本内地での生活では
こうした歌は出来ぬと想う。悲哀を文字に見せず、朴訥に歌って
いるところ、万葉に出たる生活歌である。伯国植民生活にはこう
した歌が沢山出ると思うが、今迄は稀にみる無韻の咏歎歌で
ある」と評せしめている。この評言にもある通り、聖報歌壇の当
時の担当者がブラジルの短歌に求めていたのは「生活歌」であつ
た。「生活歌」ということは、浅いところで納得してしまうと目
も当てられない薄っぺらなものになってしまふが、聖報歌壇の場
合は素材と言葉の領域を広くし、短歌に心を向ける人を多く生ん
だとは言えるだろう。

日伯、時報の両歌壇とは一風異なる雰囲気をかもし出したことは
確かである。ただこの時点で、表現の厳しさということを自覚し
えなかつた作者はいつの間にか取り残され、ブラジルの短歌の流
れから姿を消さざるを得なかつたようである。聖報歌壇のお手柄
とばかりは言えないにしても、ここから出発してコロニア短歌の

上でユニークな足跡を印したものは少くはないのである。

三十六年度においてさらに現われて来るめぼしい作者に志津野華絵、遠山瑞水野の人（並木？）、高林明雄、上野紅陽などがある。この中、高林、上野は後に椰子樹で人の記憶に残る作品を発表するようになる。

当時のもの一首ずつを示すと、

低地にて蛙わめくを赤土の丘に住みいて夜な夜なにきく

もの云わぬ父もの云わぬ子が鍬を引く意見別れしその日の裏山

また短歌に関する文章も多くなる。九月十日号には渋川不二夫が「二世歌人に贈る」を書き……二世歌人の心強い存世は幽情君と時報歌壇で活躍している夢城君だ……「とっている。天津夢城こと秋永三郎はこの頃時報歌壇の主要作者の一人であった。

十二月八日号では古野菊生が「われら移民のうた（時報歌壇評をめぐり）」を發表しているが、これは吉野の時報に対する「縁切り状」であり、評者阿部太をこきおろし……阿部君の時報歌壇評における指導理論はブラジルの若い作歌者たちにとって非常に危険だ……「とっている。

越えて三七年一月一日号には木安卓司の「三つの歌壇」が載っており「……日伯紙上で（中略）当聖報歌壇を兎戯に類する低級歌壇の如く書いてあった。（中略）日伯の選者岩波菊治はアララギ派で既に一家をなす人とのことで、選された歌は皆堂々としているが、難をいえは一般に平易に流れ読者を感動せしめる力が少く、

ブラジルの特色を十分に表わしたものがない……」といい、続いて「時報の選者溪舟はブラジルで新聞、雑誌の歌壇で勉強した人らしく、洗練されたところはないが、日伯よりもっと活気と新鮮さがある……」とし、また「聖報は最もブラジルが濃厚に表われているのが特色ただしブラジルらしい、ということに重きを置きすぎて歌そのものの吟味に欠けている」といつている。木安卓司がいかなる人であったか今知るすべもないが、この頃短歌の発表も行っている。彼の三歌壇評は今から考えても必ずしも無稽であるとはいえないようだ。

なお「移り来て」の刊行計画は三六年九月三日号で発表されている。

一九三七年はコロニアの歌短にとって意味深い年ではなかったかと思う。それは——他の二新聞に関しては審かでないが——聖報歌壇では一月一日号に「一路」の主要同人で正金銀行リオ支店長だった椎大文也が「出船」九首、「鷗と波」八首、「病妻を守りつつ」五首、「ホノルル」十二首、「桑港」八首を一挙に発表し、当時日本の短歌の一つの水準といったようなものをコロニアの作者たちに窺わせたのであった。

船を追う五羽のかもめも二羽となり出で行く船は夕ぐれにけり
昼ながら燈台の灯はうごきつつあたりを飛べるかもめ鳴き居り

また、歌壇には、まだ歌を発表しないが一九三八年の一月十五

日号には坂根嵯峨の「神苑朝」一首が出ているから、坂根総額事の作品の発表もおそらく三七年頃からだったのではないかと思われる。

このような新しい刺戟と在来のコロニア短歌の当時の盛り上りとのつながりが一年後の三八年十月に「椰子樹」を誕生せしめる原動力になったのであった。

さて三七年の聖報歌壇で相変わらず多く発表しているのは金子秀雄でこの頃はもはや「別格」のボックス扱いを受けている。全く新しく顔を出して来るものの中で珍しいのは斎藤広志(社会学者)で二月二日号に一首の発表がある。

ほのぼのと夕べ井戸端に咲き出し紅薔薇はも葉々に露もつ

斎藤広志はその前年辺りから時報、日伯などにも発表して有力歌人と目されていたらしいが、聖報ではこれ以後は姿をみせない。

四月二十日号では清谷水声が初登場し

時の流れ水のごとくに音たたば世の人なべて狂い死ぬらむ

などを発表する。五月二十五日号では安部葉子の

秋雨の晴れてひそけき朝の庭に露しとどなる大輪の菊

が発表されているが、安部の今に続く自然観照の姿勢は既にこ

の頃からのものようである。その他では、谷垣光枝、郡山あや子、末藤千草 勝馬(清谷)、牛窪星●などが主な”新人”である。

板屋艇に繁き日暮の雨の音少し早目の風呂に居て聞く

勝馬

ぼつねんと取り残された淋しさで夕暮の街へひとり出て来た

星●

(118.jpg 印刷がにじんだ不明字●あり。右がシで左が四、のように見える。読みはたぶん「し」)

一九三八年は初頭から坂根嵯峨と椎本文也の発表が圧倒的に多くなる。もちろん”別格”扱いである。その他の顔ぶれはほぼ固定しているが、歌壇の担当者には新しく木村茅里がなり、二月一日号に十首発表した。

はすかいに雨降る日なりしみじみとみぞれ空にも似たりと思う

また水声、今日志 惇などの発表が多くなるが、住吉砂丘、天津夢城、長友安徳が聖報歌壇に顔をみせるのもこの年である。

隣人のマラリア熱に苦しめる四月の庭のパイネーラの花

夢城

豚の如我が食欲もあつたらとミイリヨやりつゝ見ていたりけり

安徳

一九三九年は聖報歌壇が衰微に入った年とみる事が出来る。前年には坂根嵯峨の「旅の歌帖より」二十一首（一月一日号）

邦人の往時斃れし儘と聞く泥いたましき大沼地かな　―グワタ
パラ付近―

を始め山本孤愁、哉太郎、神志那絹江、富岡耕村、金子秀雄、葉松雅雄、一木蘇花、井本惇、志津野華絵などの比較的活発な発表がみられるが、後半になると急に活気を失って来るのである。

苦しみてのたうちまわるあわれ我をみとりてくるる人ひとりな

く　　孤愁

夕立ちに打ちけむらえ窓の外をなべてかくせり大きビルをも

砂丘

この年の“新入”の主なもの玉木梅と現パウリスタ歌壇選者の米沢幹夫で

かたらいて朗らかに笑う嫁と息子の声聞くは嬉しほほえみ湧き

来　　梅

バルコンを往きつ戻りつ星の夜は一人祖国の母を想いぬ

幹夫

などがある。五月十六日号の井本の

人の子が若き日に知る悲しみの一つにふれぬふれて嘆きぬ
は現在の井本短歌の一つの姿を既に示しているものとみることが出来る。

また、開拓の生活の中で頼りの夫を失った志津野華絵の「夫逝きぬ」(六月四日号十二首)に始まる夫の死をめぐる作品群は、四十年までつづいていて表現細部のとやかくを超えて胸を打つて来るものがある。

悲しみが人ごとのごとうつろなる心にひびく棺つくる音

先の河村哉太郎の子をなくした折の歌と共に、開拓初期に多くの者が味わった悲愁そのものの作品である。

なお九月二十三日号で良一郎(浜田良一)が、外国語新聞への当局の干渉で文芸欄はどうなるのか、という担当者への質問を行っているのは、当時の情勢をうかがわせるものである。そうした事情によるものか或いは聖州新報の「お家の事情」によるものか分らないが、三九年の後半には、新聞は二頁だてになってしまふ。そして目にみえて文芸欄は小さくなり短歌の発表も微々たるものになって来る。日本でもコロニアでも「皇紀二千六百年」を明年に控えて華々しい前景気はあふられていたが、前年(三八年)暮には全日語学校の閉鎖などに象徴される移民にとつての「暗い時代」は徐々に忍び寄っていたのであった。日語新聞の微小な文芸欄にも、その影は投じられつつあったといふべきだろうか。

一九四〇年になると、急速にこれまでの“常連”さえも殆どが姿を消し、僅かに新登場の滝譲二、自由律の不二山南歩が散発的に群作を発表するが、比較的回数も作品数も多いのは金子秀雄、井本惇、水原夕美、一木蘇花、志津野華絵くらいのものである。

生活の魅力のなんであるかを独り反すうしている深夜

不二山南歩

このような状態のまま四十一年に入り七月末に聖州新聞は廃刊となるのだが、四十年から四十一年にかけては小田切剣の「身辺雑事」が発表される。一九三七年、日伯歌壇に発表された同人の「妻の死その前後」の連作は当時のコロニア短歌の圧巻というに足るものであったが、「身辺雑事」の、

叱られてくりやに皿を洗う子のすなおなるさえ亡き妻に似て

剣

には変らぬ妻への愛情と子への憐憫の想いが深く漂っていると
いえよう。

“百号”以後の新聞歌壇

パウリスタ新聞

一九七一年十月から行方正治郎に代って米沢幹夫が選者になった。充分でないスペースの中で、全作者の作品に少しでも触れようという選者の善意が窺える。

主な作者は、開沼貴代、小竹清子、川田幸子、八巻耕土、八巻たけ子、南条由喜夫（故）、森谷春男、桜井健三、壇政治、駒井泉、河口古錨、朝秀進、水本すみ子、高橋よしみ、松崎嘉明、関東忠吉、楠木むらじ、柴倉知余、本山美知子、佐藤いち、野上とし子、丸山林子（帰日）、滴草ひろし、高原ます子、石橋てる子、国兼まさ恵、志伊良二世、井唯澄子、山田露人、清水さかえ、関戸香代子、古関俊枝、加藤操、柳沢一枝、椎野トノエ、などである。

サンパウロ新聞

一九五八年七月から選者をやっていた井本惇は六八年に辞退した。

暫く空白が続いた後、編集局文芸部扱いでぼつぼつ発表が始まり、親切的な短評で投稿者をぼつぼつ増やしていったが、これは武本由夫の“かくれた”仕事であった。ほぼ投稿者の顔ぶれが固定した一九七五年度から、小笠原富枝、陣内しのぶの共選となった。

発表の形は文芸部扱いを踏襲して現在に至っている。女流共選になつてからこちら、この歌壇に名前が出ているのは、川原比露思、武本由夫、曾木常央（山室）、開沼貴代、内田笑子、光田寿男、桜井健三、須沢しげ子、大平綾子、入江美津、田菊ふみ、小野寺郁子、谷川光子、古山孝子、宮沢半次郎、水田玉水、千葉一美、安達梅野、小笠原政雄、秋山るり、沖山白兔、田所君子、掘善一、五十嵐末子、高橋忠次、根本ふみ子、佐藤三つ農、岡村優子、岩本秋月、南条由喜夫、土屋ゆかり、渡辺つま子、宮西つたの、米沢ちよ子、桂直七、沼島志朗、菅原あさ、牧田真青、横沢幸子、瀬川亘、清水才光、松田寒山、柳田れい子、佐々木繁治、大垣堯、古川自穂、片桐睦子、園田弥一、など。

日伯毎日新聞

現選者弘中千賀子は一九六七年からであるがここ数年は自然消滅の形になっていた。一九七七年に入ってから、前選者武本由夫の三度目の“奮起”で武本、弘中共選の形をとり、新旧作歌者たちに精力的に呼びかけている。これに応じて光田寿男、木村正和、杉田マリオ、梅崎嘉明、知花清、瀬崎涛声、川原比露思などの“旧人”の作品発表がみられるようになったが、“新人”を多く発掘し得るかどうかは今後に待たねばならない。

詩

現代風相聞歌

大浦文雄

電話は

——用件ある時のみ
かけよ——。

心に

貼紙して

三日

声を聞かず。

コロニア歌人歌集抄

同行 橋浦昌雄

作品二九八首、詩、二篇

一九六一年六月二三日

新評論社刊

稲の香のむれひろがれる夕暮を明日の刈り入れ語りつつ帰る

昌雄

ふくらみし蒲の穂絮に吹く風にうす雲のごとゆれて流るる

静江 一七才

七夕にささげし笹の色紙は夜露にぬれて色あせてをり

清江 一五才

斧の音ひとふりごとにこだまして風の冷たき朝の墾原

澄江 一六才

寝不足の腫れし瞼をこすりつつ薄月の下の井戸の水汲む

和江 一〇才

これ等の作品は、著者を中心とした家族七人の歌を収めたもので、序に、「この歌集は私の巡礼歌日記」と書いてあるように、素材範囲も広く、転々とした生活環境に即した卒直な詠み口で、ひとりひとりの作品が著者によって添削され、作歌年代順に編まれている。

緑葉

杉本千代

作品、九四二首、

一九六九年一月一日

まひる野社刊

序 酒井繁一

白房 杉本千代、第二歌集

作品、九二四首

一九七三年四月三十日

図書研究社刊

序 酒井繁一

跋 グアイラ短歌会

身につきし針を運びて布団縫う老眼鏡を拭いながらに
撒水車通りしあとの街路にはわびしく冬の埃りが匂う
帰り来し吾が家に映ゆる夕明り垣の木槿花凋みつつ
朝明けの霧の中よりあらわるるバナナ出荷の大きトラック
群がりて残照の森よぎりつつ渡る白鷺をこのごろ見らず

著者の第二歌集「白房」は、脳軟化症のため亡くなられた後に、
遺児、グアイラ短歌会、酒井繁一氏等によって刊行されたもので
ある。作品は、殊更の気負いもなく、自分の眼で捉え、身につい

た言葉で詠まれた中にしみじみとした温かさが漂っており、人柄を想わせる集である。

生きの日は

瀬疇涛声 第二歌集

作品、五九〇首

一九七〇年六月二五日

白日报社刊

序 前田透

詩歌叢書、第五四篇

生きの日はおそらく逢えぬ子と想ひさびしくなりて夕窓を鎖す
立ちこめし夜の白雲を眺めつつゆくへも知れぬ子を想い居り
つれだちて泳ぐ仔鯉の体ふれてすめれんの花たまゆら傾ぐ
すでに日は傾きをりて庭椰子のかげは垣根に折れ曲りたる
クリスマス明日にせまれる夜の庭に浮き上り見ゆ紫陽花の花は

この歌集は「白き州道」に次ぐ、著者の第二歌集である。

題名は失踪の子を想う数多くの作品の中より抽かれたもので「生きの日は」と言う諦念の言葉を得るまでの作者の心境が、全作品にうかがわれ、胸を締められるようなかなしみの残る歌集である。

産土 酒井繁一 第四歌集

作品、七三六首、

一九七〇年七月二五日

図書研究社刊

空港に降り立ちしとき地底より日本の温もり伝わりて来ぬ
堪へて来しながき帰心と思ひつつ蜆の中身取りて食ひをり
帰り来て国都の街をゆく我は蘇りくる痛き自画像
ひぐらしは青田の面を渡り来る風皺に乗り夕べ聞こゆる
芥を焼く匂ひ流るる町に来て濡れつつさがす一人の宿を

「産土」は、著者の第四歌集である。

「表題をうぶすなとしたのは、この集の短歌のすべて祖国の歌である処から名付けた」とあるように、いわば戦後の著しく変貌した日本の姿を、作者の肌、心を通して捉え、巧みな詠風によって浮彫りにしており、味読したい歌集である。

岩叢 大場時夫、第二歌集

作品、六九六首

一九七〇年十二月三日

文京社刊

序 木村捨録

林間叢書一二三篇

若草の下つたう道おのずから風化を遂（と）げし砂白かりき
この木々に風動くとも思わねど木雫のごと肌沁みきぬ
住みつける人らの歴史すがしくて岩伝う道踏処窪めり
候鳥のかげさえもなく霞たつき伏しにあがりいる土ほこり
崩れ折れ地に伏してゆく諸草のすがたは炎のなかにも見ゆる

「岩霧草」に次ぐ、著者の第二歌集である。

この集の名は、ビーラ・ベリヤを歌った中より取られたもので、
特殊性のある素材を、ユニークな作風で歌いあげている好感の持
てる作品集である。

移り来て 藤田美砂子

作品、二二五首

一九七一年三月二十日

明善印刷株式会社刊

憧れの如き想いも湛えてわがみごもれる一日を過ごす
抗心のうすれゆらめく哀しみの中一人の影遠ざかる
肩並めて歩めば還るやさしさに変わりし噴水の紫のいろ
しなやかに眠りを結ぶ夜もまれ含嗽（うがい）薬の苦き唾吐く
扁平に老いゆく胸に掌を置きて病めば漂う如き日の過ぎ

「移り来て」は、三七年振りの訪日を機会に、夫君と共に出版さ

れた珍らしいケースの句歌集である。

表現技法もさりながら、一首一首に作者のほのかな心が通っており、いかにも女らしいゆたかな感情がにあっていて、読後ころに残るものがある。

案山子の歌

三好綱一

作品、五九六首

一九七二年二月

パウリスタ美術印刷株式会社刊

序 酒井繁一

案山子庵の畳に流るる月かげをしとねと寝たり宵のしばしを

睡蓮の花によりゆく足音にひそみをりたる鯉はうごけり

ふくらみを見せて野鳥のとまる枝寒々として古葉の振ふ

落葉する樹木の色などよみ分けて鋏杖つけば吾が影に落つ

星澄める高原の小道に真向へば天に連らなるユーカリ林

著者は、日本荘の創立者で広く知られ自らを「案山子」と号して短歌と共に俳句、絵等にも造形が深かったと聞いている。

歌風はやや古風な面もあるが、見たもの、感じたものをそのまま言いきっていて作品の底に、作者の風貌を想わせるものが通っている。

つぶやき

桜井健三

作品

一九七三年一〇月

パウリスタ美術印刷株式会社刊

序歌 佐藤敦夫

序 坪内忠治

〃 武本由夫

かにかくに心定めておりつつも別れし妻を思うことあり

尿して吾は眺めきクルー ज्याの鳴く樹に低きオリオン星座

張りに張りし手に見入りつつ思うなり三十路過ぎにし日雇い吾
を

乾燥期の光ほのかに受けにつつ熟れたる枇杷をついばむ小鳥

窓のそばの机の上に日光ありて集える蠅はみな影をもつ

「つぶやき」と言う名に相応しい控目な穏やかな詠風で貫ぬかれ
ており、どの一首を抽いても、自分の生活に添って歌われている
ので、あたかも土のおいが漂っているような親しみの湧く作品
集である。

小さき詩型

弘中千賀子

作品、五〇〇首

一九七七年九月

メタ出版社刊

序 武本由夫

樹々探き下の流れをさかのぼる身に近々と蝶の添いつつ
手の中の残り確むる如き日の激し灼かるる雲のあかねは
銀泥のまなこ張りいる女面の葵の上の心重ね来
遠つ世の人の祈りの伝いつつ石組み重し堂の廢墟は
おおどかな回帰遂げつつにんげんゆ離れて堂は陽と風の中

著者の処女歌集「小さき詩型」は、三十年間の作品より選りぬかれた心の集積と言える。

これ等の歌は、私の好みに片寄ったようだが、どの一首を抽いても、感性の冴え、語のひびき、積み重ねて来た技を思わせる表現の中に、複雑な想いがこめられていて魅かれた作品集である。

朝日短歌 百号記念集、 アサイ短歌会

一九七三年一月十日

刊行者 山室新太郎

序 武本由夫

パウリスタ美術印刷株式会社刊

作品一、四六九首、作者、八三人

作品二、四九一首、作者、三一人

作品三、〇九〇首、作者、四五人

「朝日短歌」は、一九六四年に創られ、月刊歌誌として発行、第百号に至り其の記念として刊行されたものである。

「朝日短歌」の特徴は、指導者の山室新太郎氏を中心として少年少女の作歌者を多数交え、作歌に精進していることである。

若竹一四号、一五号、 合併

一九七六年一二月

若竹集、作品、九一首

作者、二二人

寄稿者、作品、一三首

作者、四人

編集者、穂島千代

歌誌「若竹」は、「朝日短歌」休刊後 穂島千代氏によって文芸誌として発行され、今日に至っている。

やまなみ カンポス短歌会

一九六九年、一二号

作者、一人

作品、三四六首

一九七〇年、一三号

作者、一〇人

作品、二八三首

一九七一年、一四号

作者、一三人

作品、四〇六首

一九七二年、一五号

作者、一一人

作品、三三二首

一九七三年、一六号

作者、一四人

作品、四六五首

一九七四年、一七号

作者、一二人

作品、三〇三首

一九七五年、一八号

作者、九人

作品、二六六首

「やまなみ」は、カンポス短歌会が一カ年の作品より自選した年刊歌集である。一八年間も続けられたことは、カンポス短歌会員の短歌に対する熱意会員同志の心の深い繁りの現われと言える。

バストス短歌会、

二〇周年記念号

一九七〇年八月

作者、九人
作品、四一〇首

カッポン・ボニート短歌、 創刊号

一九六九年八月
三六頁

作者、一八人

作品、二二五首

第二号一九七三年一月 五八頁

作者、二〇人

作品、四三八首

右に取り上げた歌集は、「椰子樹」一〇〇号記念特集号以後のものである。

小笠原富枝 記

地方歌会の動静

スザノ短歌会の過去と現状及び希望

八巻耕士 記

椰子樹百五十特集号に、スザノ短歌会の動静を書くとするれば過去の椰子樹五十号や百号特集にも書かなかつた、スザノ歌壇草創期のことに触れてみたいと思う。

既に椰子樹の発刊以前から少数の文学青年らが新聞投詠をしたり、殊に移民廿五周年を記念して発会された、福博村の廿五青年会の月刊機関紙「大地」上に文芸欄を持つ様になつてからは、上村登志行、滝秀一、滝夕起緒、児島勇、平川兄弟、大浦文雄、八巻培夫、梅夫兄弟などが、同誌上で覇を競い、殊に終戦後は川原比露思、長友安德らの転住して来たに加え、一時的には岩波先生も苺作りに在住されたり、武本由夫兄がモジに疎開して来たことに依りあたかも燎原の火の如く短歌や文芸に青年らの意気を燃やしたのであつた。

勿論あの時代には日本にも帰れぬことになつたし今の様に娯楽も豊富でなかつたので、文学愛好に若者が馳せたのだろう。

そして一九四七年十一月十六日には椰子樹第六回歌会を八巻居で催し出席十五名と欠席詠数名の大？歌会となり。岩波・瀬崎・武本・則近・川原・中江・大原・奥田・安良田・不二山・樋田夫妻、水野昌之や亡父百果と耕士・培夫・梅夫兄弟も出詠したものであつた。

その後一九五三年には酒井繁一師もスザノに入植以来鳴りをひそめていたが仲間に入り歌会を指導して呉れ、スザノ月例第廿一回歌会記念の歌集「若原」を発刊したのであった。だが良い事は長く続かず武本・川原・長友・培夫・梅夫の出聖や転住に続き、岩波先生の長逝となり、折角、上野紅陽、土屋風春らが新に移住して来たのに、酒井師は再度の訪日などで留守がちとなり、故小滝土香や則近、大島兄らが鞭撻してくれ、亦吉本青夢がモジに移住したが、歌会は中止のまま椰子樹の購読を続け、中央線短歌コンクールや全伯大会などや椰子樹誌上コンクールなどに出詠してでお茶を濁していたのであった。

それでも全伯大会などには三、四名位は出席して数年間は歌会一つ持つことなく過してる中、酒井師も帰伯後の短歌運動や歌会育成に実績を揚げつつあり、六六年の正月にはスザノ椰子樹会員に檄を飛ばし、瀬崎、米沢さんらが応援出席してくれ歌会を始めただが、亦これも続かず、中休みをして二年も経ったのだった。そして思案の揚句、俳句会の連中を誘って歌会をやるうという話になり、一九六八年正月十四日酒井宅で再々開の歌会を持ち、それが当たったと言うか続々と椰子樹誌友も殖え丁度百号特別歌集の編集中心だったので八名だかが記念詠草を出したのだし、その折スザノ歌会について書こうと思ったら、編集部から余白がないとか締切ったとかで断られたのだった。それで今度の百五十号には充分にスザノ歌壇のルーツや経歴を遺すつもりで幾々の資料を集め様としたが中々揃わぬ中に締切は迫り第一期歌会の草創期のことなどは的確でない部分もあるがそれは亦の機会にゆずるとしよう。

その後奇蹟的にも約十年間今月まで第百十二回月例歌会を欠かすことなく続けて来たが、その間酒井師の指導力を多とするものであるが、師が最初の檄文に書いた短歌の充実と歌友の親睦を計るためとあったが、親睦の方は何とか充実しつつあるが短歌の方はまだ充実とまではゆかない。椰子樹賞岩波賞なども参加するのに意義があるのではないが、十何年間連続して応募者数では全伯一と自負しているが、まだ賞を受けた者が一人もないと言うことは余り親睦の方に丈け重きを置いてる為かも知れない。その代りと言う訳でもないが明治神宮献歌や靖国神宮献詠などで可成りの成績を上げては祝賀会を催し愉しんでいるので、結構そんな事が短歌に対する繋ぎとなってる事は否めない。

それでもこの十年間には十数名の歌友が移転や物故したため会を去り、亦新しく加入される方があるので現在椰子樹会員が廿七名、それに夫婦会員もあるし椰子樹会員でない方も歓迎してるので卅数名と言うべきであるが、月例会にはその半数位しか出席しない、と言うのは会員の平均年令がとても高位にあるので各自の健康状態にも左右されるのである。唯一人多田邦治君が卅才余で残りは五十才から七十五才までで平均年令六十才あたりで、集れば血圧だ神経痛だ何だ彼だと丸で老人センターの寄合みたいな物である。之れでは文芸や短歌とは何ぞや、なんて砂上の空論を論じたって始まらない様な現況である。それでも椰子樹誌以外に「まひる野」十部と少数の林間、原始林などを取ってる熱心な人もある。殊に多田君などは数年前まで「個性」で加藤克巳に師事した丈けあるので新鮮な詠風で刺戟を与えてくれ、亦新加入の清水

さかえさんは去年事故死された小田切剣氏の未亡人で国民文学に拠つてた剣氏はかつて邦字新聞歌壇の選者もされたり、終戦後、酒井師が発刊した「新天地」の歌壇担当をされた方で、その影響もあり、詠風がとても堅実である。亦変つ奇人では昔鳴らした塩月脩氏夫人だった岩下松枝様も老令をおしてコチアから毎月出席されるのには地元歌友も励まされているし、こう言う人達が加入し易い椰子樹でありたい。

スザノ歌会再開当時から応援出席された吉本青夢兄や山藤伝氏も八十二才で亡くなられるまで聖市奥から通つて来てくれたし、再開の主流だった上村登志行兄月例二回出席で逝去、戦前から「あららぎ」で鳴らした上野紅陽兄も上村君の後を追う様に他界した。上村兄の追悼文と遺歌集は六八年の四月号に耕土が書いて故人を偲んだのであり、いずれもスザノ歌会としては忘れられない人達である。

また再開の初期には小竹清子様も度々出席指導され、佐藤いちさん野上とし子さんも折にふれては応援出席して下さった事に感謝したい。折角、再開運動に奔走してくれた則近兄故大島兄が一回も出席してくれなかった事は残念だった。その代りではないが則近兄の妹谷佐稚子さんはスザノ在住でもあり椰子樹に入会して自宅の砂像アトリエを歌会のために開放して下さり変つた会場を楽しめることも心強い極みである。前には耕土居で歌会をしてたが近頃は大方コチア産組の階上サロンを賀沢朋子さんに都合して貰つてるので場所としては便利が良いのでそれに甘えてる次第である。

月例歌会も十年近くなり百十二冊の月例歌会集が溜ったので歌集でも合同で出そうかの話もあるが中々実行に移らない。その点カンポス歌会は毎年「やまなみ」を刊行する努力に対し尊敬する訳である。

酒井先生は独自の歌集を一九五四年に「寒温」を出版され続いて七〇年には「産土」を刊行され日本歌壇でも高く評価されてるので、続いて新歌集を出したい出版社の乞に応じて、徐々に自選歌をまとめておられる様である。宿病の神経痛にもめげず些かも老令を感じさせない文芸的努力は、当歌会の牽引力となっているのである。

他地方歌会との交流の意味で成るべく多くの当会員を参加する様つとめ、サントス、グワイラ、カンポス、ロンドリーナ地方大会や中央歌会の催事などには出席し新風の吸収に勤めて来たのである。

勿論地元に於ても適当な時期に他歌会を招待し歌会交流につとめて来たが、再開以来約十年間に四回の記念歌会を催した。

その中特筆すべきはスザノ日系入植五十周年記念祭の一環として汎スザノ文協後援で催した祝賀歌会で出席卅数名の大会となり中央からも十名も参加して呉れたので地元の祭典委員方にも大いに面目を施したのであった。それは一九七一年十月十日の春暖の日で夕景まで余興やのど自慢を披露し賑ったのだった。

次いで一九七三年十月廿一日には当市第六回花卉展短歌大会を月例七十回と併催し、中央とサントスから十数名の参加を得地元歌友とも卅二名の盛会で、花卉展示会からの寄贈の花の鉢物を賞

や土産に進呈して欣んで貰ったのであった。

続いて第三回全伯短歌地方大会は一九七四年四月廿一日、文協会館で催したがこの会を催すには歌会歴の浅い吾々が引受けるには可成りの抵抗があったのだが、何とか印刷、発送などをすました時にやっと安堵をし、興を添えるためゲスト講演をサンパウロ大学日本語科の長尾勇教授の講演を依頼し、植物の「オバコ」に於ける文芸的考察を披講して下さり一同大いに感銘を受け出席六十四名と来賓六氏共に、日本から招聘されている碩学の士が吾々コロニアとは別な次元で日本文化を高揚されている事に対し敬意を表したものであった。講演後の教授と一行の原口教授を大浦文雄氏はスザノの名所旧跡など観光案内した。一行は始めてブラジルの風物に接し驚嘆されて会場に帰られ、賞品授与や余興にも参加しのど自慢もされたのだった。

その講演を斡旋して下さいしたのは鈴木悌一教授であった事に改めて感謝するものである。

最後にスザノ月例百回記念歌会は内輪の催しであったが、中央グワイラ、バストスの歌友など祝賀に出席してくれたのは一九七六年五日十六日で汎スザノ会館で出席廿九名であった。

席上百カ月も真剣に指導して下さいった酒井先生に、ちつとも実績の上らない不遜の弟子たちから些かの記念品を贈呈したり、幹事として無欠席だった耕土も表彰して頂いて恐縮したのであった。祝辞に中江克巳氏は当歌会の団結と親和を奨励され椰子樹側としても期待する所大なりと言われたり、米沢氏は再開当時から側面援助をした甲斐があったと述べられた。また前市長現文協会長の

宮平氏がポ語で、当会に対して他地方会員の出席に謝辞を述べられたことなど忘れ得ぬ想出である。

日本の訪伯歌人との交流や指導を仰ぐため一九七五年十二月廿一日、コチアサロンで「まひる野」歌誌中堅の若手、陳内直樹兄が折柄当国建設事業の技師として出張されて居られたので第九五回月例歌会に米沢氏も招いて催したが、折悪しく酒井師は重患中だったので欠席で残念であった。陳内氏の鋭い忌憚のない新感覚の歌評は、コロニア歌壇に安逸を貪って居る吾々には覚醒の思いであった。小宴の後余興に氏のロシア民謡を原語で聴くのも珍しく席上日本へのテープ録音を各自がし記念写真を撮り贈歌をした。帰朝の後各自にカラーコピーを送って来られたのでその律義さに感謝したのだった。帰日されてから氏が椰子樹一四六号に訪伯詠として十首寄せられた。またその前にまひる野賞五〇首詠に挑み、佳作賞を得られたのも宜なるかなである。再度の訪伯を伝えられていたが少し遅れるらしく、機会があれば今度は中央歌会にも紹介したく思う。

ここまで書いて既に指定された紙面はとうにオーバーしたのだがもう一件書かせて貰う事とする。それは「まひる野」同人北原弥生さん訪伯記念歌会をスザノ耕土居で一九七六年七月十八日に催したことで、弥生様（薬専出身）はご主人の文雄理学博士が石油公団や聖州大学の招聘で約一カ月半在伯されたので同伴され大方聖市に滞在された。訪伯直前に折良く「窪田空穂生誕百年逝去十年祭」を早稲田大学大隈会館に、全日本の短歌誌代表が参列して修された。その席上で窪田章一郎師が訪伯する弥生さんのお土

産にと「サイン色紙」を乞われ十数枚の色紙に何十名の有名歌人方にサインを乞い乍ら賑かな席の間を陣内氏と二人で手分けしてお願いして出来たもので、恐らく日本でも前代未聞の色紙であるのかなので、去年の大会席上で一枚宛各地方歌会や椰子樹会、コロニア文学会に謹呈したのである。

最近日本で書道展や色紙、短冊展が催されるが、有名人の短冊は三万円、色紙が五万円とかで、この度のサイン色紙などの値打は想像も出来ない位の価値があるものだとのことで、ブラジル歌壇には特別、近藤芳美、大岡博、千代国一、中野菊夫、島田修二、片山貞美氏などからは「元気で歌を作って下さる様に」と伝言があり、別に録音テープ五本や歌書などの寄贈書を携行されたのでその歌会席上で披露や一部は贈呈した。当日は八幡与三、森重扶美、米沢幹夫、福田夕月さんらも遠方から出席して廿二名の出詠で、歌評では弥生さんの語彙を豊富に駆使した有効適切な添削には驚嘆した。その指導について約一カ月も日参して歌と人形を弥生様に師事した河井美津子様からも聞いて裏づけられたのだった。その後気をつけて歌誌「短歌」などを繰ってみてまひる野誌上だけでなく活躍してられたのを改めて認識したのだった。最近の便りでは今年もご主人が学術交換に来られる様子だが弥生さんは残念乍ら次の機会に再渡伯してもっと広い短歌の交流をしたいと認めている。

まだ未定だが窪田章一郎師も国際文化交流基金から中南米に日本古典講演に派遣される公算があるとか、それが実現すればコロナの歌会と交流する機会もあるだろうと愉しみにしているので

ある。

一言スザノ歌会の短歌朗詠について述べて見たい。四年前の全伯大会に武本氏の提案で朗詠コンクールとあったので、これは当会歌友の趣味と一致するので早速歌唱を練習してる会員を中核として選手を出すことにし、新曲も二、三作曲して一同実に愉しみ乍ら練習して出場したのだった。その後も大会ではスザノだけ優位賞に入り他地方歌会からの参加が消極的なので今年から練習する暇も仲々大変であるし出場しない事にしたのである。然し短歌するものとして一応は朗詠なり、短冊色紙の書法位識ってる方が短歌に対する興味が沸くと思う。ややもすれば日本語の韻文詩は漢詩を原語で吟詠するよりもアクセントがないし欧米語の様に音韻学も文法さえも未完成の俛死語となりゆく日永の韻文短詩にはせめて音階抑揚を符して詠吟したら、文字で味う以上に短歌の鑑賞に益するのである。勿論どの歌も朗吟に向く訳ではないが、古代よりの名歌はいずれも抒情性に富み、声調の乗りが良い歌が朗詠されたので、現代歌の様にむずかしい語彙や熟語で舌を嚙む様な歌は向かない。例えばアカサタナ行の続く歌や語尾がイ行の多いのや撥音の続く歌などは発声上も面白くないし歌っても聴きにくいのである。勿論字余りのは同曲で続詠する時は困るのである。然しこの道で木俣修の弟子で朗詠で文学博士に迄なった平野健二や朗詠作曲家平井鍊三郎、八洲秀章の様な名作曲でなくとも、ブラジルの短歌をブラジルの韻律で作曲したいと念願して研究しているものである。率いスザノ歌友には小林白樺先生に歌唱法等を勉強してる人が数名あるので試唱して貰うには事欠かないので、

今後も現代調朗詠を研究作曲しようと思う。

短歌と俳句についてもスザノ歌会は同調してる様なもので、月例歌会の出席者の半数は俳人であり、句会の半分は歌人と言うことで、ある俳句の指導者はそれを厭うし、ある歌人も異端視する向もあるが、率い酒井師も吉川耕花師もそれを少しも蔑視する様な事はなく、耕花師などは曾て椰子樹七十六号に「コロニア短歌鑑賞」の一文を三頁も寄せられて、実に懇切な歌評をして呉れるのである。然し俳句の方は初心の中は入り易く中々深奥を極めるのは難しく、歳時記の季語や規約を体得するまでには一生がかりであり、その点短歌の方は初心者でも楽である。

とまれ以上続々と述べたことはスザノ短歌会の多様性や運営上の煩瑣性に対して諒解して貰いたかったために記したのであるが少し我田引水だったかも知れない。

以上の様な事情で一九六八年六月卅日当時スザノに発会した詩話会との交流を椰子樹編集部員や中央詩壇のメソバーの方々とは八名出席で「詩と短歌の交流座談会」を催したことがあり椰子樹一〇一号上に佐藤博三兄がその記録を発表したきりで、そんなに同一人が手を広げる暇もなく折角横田恭平先生や大浦文雄氏が居られるのに協調出来なくているが、文芸懇談会だけは温存してる次第である。

最近、スザノ歌会発祥の地福博村在の青柳夫妻が同地の婦人会員や有志の間で短歌志望熱が徐々に湧いてる様なので、勧誘キャンペーンを考慮する様との話があり、酒井師ともその方法を内々に練ってる処だ。近くには大浦文雄氏も居られる事であり、また

この度叙勲された勲五等の先輩歌友石橋初穂氏らの応援を得てスザノ歌会福博支部でも発足しようかと思っている所である。そうして結局スザノは質よりも量でこなす外ない様である。

とは言うものの曾て隆盛だったモジ短歌会やアサイ、バストス、オズワルド・クルースの様に、一度はスザノ歌会も経験した空白時代が再び来ないとは誰も予断が出来ないのである。それについても伯国歌壇の中心は椰子樹であるのだから、多少の文芸的犠牲は払っても「葭の髓から天井のぞく」様な歌評は慎しんで、会員を追放しない様に心懸け、歌評座談会記録発表も或る程度手加減して発表して貰いたいものである。選者方ももっと古典韻文、文法、音読、流派等も研究されて、魅力ある椰子樹の余命が一日も永からんことを念じつつ、衝に当られんことを希望懇願して筆を置くものである。

一九七七年七月七日 稿

その後のカンポス歌会

佐藤一英 記

△一九六九年

一月・「百四号をカンポス特集号」とするとして椰子樹社から春名は「曲り角に来たコロニア短歌」、坪田は「選者に物申す」、知

水は「青信号赤信号」、奥野は「前向きの歌」、佐藤は「難解歌五首の合評記」、安部は責任持ってそれらを送れとの達しがあり、その後「万里とみつ子にも文章を依頼してあった」との事に題はこちらで決めて書送る。

三月・佐藤抄塔、沼本幸枝入会。

四月・酒井先生と加藤氏を迎え「やまなみ」十二号出版祝賀歌会。

五月・安藤正人入会。

七月・今年から全伯短歌大会は椰子樹が主催する様になった事を喜び、二十クルゼイロス新を祝儀とする様決める。

△一九七〇年

1月・沼本退院。安藤逝去。

四月・「やまなみ」十二号出版記念歌会。

五月・山口きわ入会。

△一九七一年

四月・酒井先生を迎え「やまなみ」十三号出版記念歌会。先生の奥様入院。

五月・酒井先生の歌集「産土」をお祝いして歌会。惜しいかな安部旅行中。

七月・高田蔦五郎逝去。

八月・高田蔦五郎追悼歌会。

九月・酒井先生と山本和田留氏を迎う

十月・徳田恵久師始めて出席。

十一月・従来の一人五首では合評に時間をとられ題詠出来ぬとあつて三首とす。

十二月・酒井先生の古稀を祝つて忘年歌会。

△一九七二年

三月・酒井先生の奥様の退院を祝つて歌会。

四月・瀬崎先生御夫妻、酒井先生、西田御夫妻、米沢御夫妻、中江、森重、開沼、加藤氏らを迎え二百例会とやまなみ十四号を祝つて記念歌会。

△一九七三年

五月・やまなみ十五号出版記念歌会。

十二月・桜井健三入会。

△一九七四年

一月・酒井先生と山崎氏を迎え新年歌会

四月・川上千代三郎、土妻博彦氏ら例会に出席。全伯短歌スザノ地方大会に奥野、桜井、佐藤ら出席。

五月・酒井先生、井本先生、川上夫妻、若杉夫妻、上妻夫妻、山崎、渡辺氏らを迎え、やまなみ十六号出版と土妻泰子氏の退院を祝し二三四例会を開く。

八月・桜井出身県の招待で訪日。

九月・安部訪日。

十二月・安部、桜井帰伯。酒井先生と山崎氏を追え忘年歌会

△一九七五年

四月・山口きわの送別歌会。

五月・上原訪日。健康の都会で桜井憩の園へ移る。

八月・やまなみ十七号出版記念歌会。

△一九七六年

三月・酒井先生、山崎さん、森重さんらを迎え二四一例会。

六月・入院中の大和田氏出席。

七月・入院中の上田氏作品参加。

△一九七七年

二月・酒井先生、山崎さん、八幡さんらを迎えあすなる荘にて二四九例会。

二月・ひっそりとやまなみ十八号出版祝賀歌会。

六月・S・J・ドス・カンポスの町田貴志今月より作品参加

以上は合同歌集やまなみの歌会日記からの抜書きであって、こうして見た処、カンポス歌会は何かこう盛んな様に見えるが佐藤担当の歌会日記の中に「活気のない歌会であった」と云う事が見えたり、安部担当になってからでも「時間を守らない」と言う事を二、三歎じて居るのを見ても分る様に、その後のカンポス歌会は下り坂と云える様である。と云っても、それは決して歌に対す

る熱が冷めたのではなく、皆が元気になり結婚し家歴を持つと、社会人としての義務を課せられる。健康人ならば社会余人としての義務を果たしながらでも歌会を続けられようが、私達の場合はそれが出来ない。月の第三日曜は歌会、と決って居たものだが、今はその都度相談して決めねばならない。思い出すだけに残念でならないのは会場も見つけ、プログラムも酒井先生と米沢さんに見て頂くだけに作ってあったのに、佐藤夫妻が火傷と病にたおれ、春名は坂根主任が大手術のため急に忙しくなり高原万里、山口きわ、奥野夫人らがピッコ・デ・パガイオになって養生のために第四回全伯短歌地方大会がカンポスで出来なくなった事である。どうやら皆が又元気になって来た。

とは言っても、やまなみ十八号が二年がかりで漸く出来たと云うことが全てを語ってくれるであろう。

サントス短歌会の動静

遠藤浩 記

「はじめに」

サントスに短歌会を作ろうではないかと言う気運が高まったのは今から十年ほど前、一九六七年の初めである。坂光男（以下敬称略）、鈴木里子、岩淵静子、の三人が発起人となり特に坂光男の奔走で会員を集め第一回の歌会を岩淵静子宅で開きその時にサン

トス短歌会と命名して発足した。小生は仕事の都合で出席出来なかつたが六、七名は集つた様に聞いておる。その後岩淵宅を会場にして数回続いたが、会員も増えて来たので自宅でなく日伯食堂で数回開いている。又、初めの頃は夕食後集つて歌会を開いたが遠距離の人や婦人の方々が夜遅くなると色々と問題も出てくるので日曜日の午後を開く事にした。会場も岩淵宅から日伯食堂、坂宅、遠藤宅、と廻つて来て居る。一九六八年の会員名簿があるので記入しておく。坂光風、鈴木里子、岩淵静子、伊藤満智子、大城俊子、山下隆、土屋哲子、下田学、遠藤タミ子、となつておりこの頃から会も充実して来たので会費制にした。毎月男性は三クルゼイロス、女性は二クルゼイロスに定め会計は遠藤が係をしていた。

「その後」

毎月一回例会を開く事にしておるが色々の都合で辞める人や移転してゆく人も出てメンバーも變つて来た。一九七〇年には岩淵静子、伊藤満智子、下田学、が欠席しておる。しかしこの頃はサントス短歌会を他地方に大いにアピールする事にし合同歌会を開くこと数回。又暇を作つてはよく他地方に出掛けたものである。中央より武本先生をはじめ木村、女流歌人に出席を願つてよく勉強したものである。スザノからは酒井先生と歌友六、七名に来て頂き一日を楽しくすごした日もあった。又、モジより吉本青夢、小竹清子女史に来て頂いて昼は短歌に夜には一杯飲んでよく歌つて踊つたものである。一時休んでおつた下田学が出席する様になり新しく吉川白穂と坂梨文子が入会した。一九七二年三月に楠木村

治が入会し四月に第一回地方大会を開いておる。会場もいつとはなしに遠藤宅で開く様になりこれは今でも続いて居る。しかし会同歌会や忘年歌会の時は大城俊子宅を会場にして頂いて世話になって居る。坂梨文子が聖市に移転されその後江藤キヌエ、小林フジ子、白石信一、上田幸音、とそれぞれ入会されたが聖市や他地方に移転されてしまった。一九七三年の会員は十名となって居る。会費も男性は七クルゼイロス、女性は五クルゼイロスとなり会計係を下田学をお願いして現在に至って居る。坂光男が七四年九月頃より欠席する様になり出来るだけ出席する様連絡して知ったのだが最近耳にした話ではパラナ州の方に移転された様である。

「そして現在」

例年通り一月から三月までは暑さの為に休んでしまいが今年も同様であった。特に今年は山下隆が右足膝下骨折で二カ月ほど休み治療された事と古川白穂の主人が急死なされ一人でのアパート生活は目の悪い事もあって無理なのでプレシデンテ・プルデンテの方に移転された。鈴木里子の主人が脳溶血でたおれ奥様が一カ月ほど看病しておった。奥様の手厚い看病で今ではすっかりよくなっておる。色々の出来事があって三月まで休んだが四月、五月とは全員出席のもとに和やかにたのしく歌会を開く事が出来た。現会員は八名だが二、三名増える見通しもあるので今後は又盛り上がってくると思う。栄枯盛衰世の姿どこにでもあることながら坂光男、古川白穂の出席が見られなくなった事は残念な事である。次に現サントス短歌会の会員名を記してサントス短歌会の動静と

致します。鈴木里子、土屋哲子、大城俊子、遠藤タミ子、山下隆、楠木村治、下田学、遠藤浩。

一九七七年六月 記

グアイラ歌会の動静

加藤操 記

グアイラ短歌会の発足は、椰子樹百号に記した様に、六十四年六月だから、本年六月をもって十三年になる。酒井先生に師事して初めた当時は、持永勸治、斎藤武雄、中川荒記、末岡芳三、紺野幸水、加藤操の六名と、テラロシヤ在住の割鞘たけとその当時モーロ・アグードに住われて居った、故杉本千代の八名であった。その後二十数名を数えた頃もあった。会員で他界されたのが岡野卯三郎、生熊一志、吉田幸太郎、杉本千代の四名で、一時会員であったが一身上のため脱会したのが七名、移転の為めの脱会は、紺野幸水一名である。現在会員は、グアイラに斎藤、中川、末岡、西村、唐沢、松隈、鹿毛、加藤、の八名と、グアラに北谷、桜井、岡野、高野の四名と、サンパウロに持永、八幡、佐藤及び伊藤久夫の四名と、テラ・ロシヤに割鞘、コリーナに岩本、サ・ジョゼ・ド・リオプレットに紅月の各一名ずつ都合十九名である。

内、男性十三名、女性六名で、平均年齢は六十才近く、一寸お寒い感じ。でも、気分的にはあまり寒い様には思わない。

例会は、毎月第三日曜日になっており、会場は各会員の家を大体順番に廻る事にしておる。投稿歌は三首宛で、歌稿は前以って謄写刷りにして各会員に配られる。この毎月の面倒極州まる書き役から謄写版扱い全部が中川荒記の手を煩わしておる。

以前は紺野幸水の世話になり、次は持永勸治の世話になった。

選歌十首を持寄って、例会の席にては思い思いの評をする。大体酷評になる事が多い。その後酒井先生から毎月送って戴いておる歌評を読み上げて、歌会終りとする。偶には席題を出して苦吟する事もある。又喉の歌になる時もある。例会の出席者は大体、グアイラ六名、グアラ四名で他は地理的条件とかその他の理由で毎月の出席は不可能である。欠席の場合は選歌だけ送って来る。

グアイラ短歌会の特筆出来るのは、七十三年の岩波賞に、北谷まがた作品が、人選した事、然しこれは同じ作品が日本のまひる野誌に出たのがあった事が選後に分り、取消しとなった。

それと、故杉本千代の歌集がある。舞一歌集「緑葉」は日本の「まひる野会」より、一九六九年に発行され、第二歌集「白房」は、七三年に、図書研究社より発行された。以上は、グアイラ短歌会の大体の動静である。

百号以降のロンドリーナ歌会

森谷風男 記

母国歌壇で短歌の終末が唱えられて久しいように、椰子樹誌も一時は集会毎に継続か廃刊かの協議をしたものであったが、いよいよ百五十号にまで滑り込ませたということには、いわゆる虚心坦懐な気持で拍手を送りたい衝動にかられる。などと云うとえらい傍観者じみた讃辞になるが、これはしかし、地方会員の誰もが感じるいつわらない気持なのではなからうか。つまり椰子樹誌は会員みんなの責任でつくることになっているのだが、地方会員はその経営になんら積極的な協力が出来ないばかりか、ある場合にはむしろ反動的な動きをむき出しにすることがあったようにさえ思われる。

椰子樹誌は地方と、中央のそうした距離に於て運営されて来たのであり、極端に云つて中央のしかも極く少数の、善意と犠牲によつてのみ継続されたのが事実なのである。と同時に今後といえどもこの状態を続けるほかはないのであろうが、それだけにわれらが意のあるところを表明したのは、今後に依頼したいための魂胆ということにならうか。

百号記念別冊特集号の際にわれらは、「五〇号以降のロンドリーナ歌会」と題して報告を書いたものだったが、その当時のロンドリーナ歌会は全伯歌壇に於ける一応の新興勢力とみなされた集団であった様におもう。特に主宰者の大場時夫が、ある極地に迫る

うとする意欲をみせ、林間叢書として、第二歌集「岩叢」を上梓したのは一九七〇年の十二月である。

その頃の歌会は坂本清人、住吉豊、井ノ盛一翠、久米光春、有田市治、森田吉久等を主軸とした二十余人のメンバーを擁しロンドリーナ歌会始まって以来の盛況を呈し質的にも最も高揚された一期間だった。その後、坂本清人が離れ、住吉豊がサンパウロ方面に移り、しかも幹事をしていた有田市治が逝去して大きく動揺したが、間もなく森谷春男が出席する横になり、中西静世と小川貴美枝が加わり、日語の専門教師、土屋ゆかり、加藤喜代子、古賀みつかや、高原すみ子等が入会、七三年の第二回全伯地方歌会をロンドリーナに誘致する段階になるのである。

かくて七四年度にはその年の岩波賞で入選森谷春男、佳作中西静世を全伯歌壇にマークし気を吐いたことは特筆に価することだが、その頃アサイから移って来た田上みづほが入会、州境近くに住む戸崎清作が、歌会毎に顔を出す様になったりして、歌会は何回目かの盛りあがりをもせた。

ロンドリーナ歌会が木村捨録氏の三度目の来訪に接したのは一九七五年の八月十八日であった。観光を兼ねた一行は林間有数の歌人で木村苑美、野中圭、戸塚静馬、山本鳩世、杉本峰子、山本亜理子の諸氏であったが、女流の多い一行に接したロンドリーナの女流は強く刺戟されるものがあつたらしく最近に至って尚その熱量は降下をみせていない。その故かどうか現在の歌会は常に女流は過半数というより大多数をしめて居る状態である。

ふり返ってみるとロンドリーナ歌会はずい分変遷を遂げたし多

くの歌人の交替があつた。しかし主宰者の大場時夫だけは最初から一回の欠席もなく、自分の主張を押し進めながらロンドリーナ歌会を継続し、育てて来たその功績に因んでと肩張る意味のものではないが、一九七六年四月、大場時夫の還暦祝いを森谷風男農場で挙行、心からの記念品を贈った。

七七年にいたって第五回全伯地方大会を再びロンドリーナに誘致したが、その時出揃った会員の名を記すと森田吉久、高須きみ子、高原すみ子、小川喜美枝、加藤喜代子、古賀みつか、土屋ゆかり、大原はつみ、荒崎百合香、宮崎多満江、荒崎三郎、瀬古義信、久米光春、中川原実、大釜七蔵、古田不覚、山口宏、町田貴志、森谷風男、渡部南仙子、別所慧、桜井静枝、每熊百合、中川原正子、大場時夫、森谷春男等であつた。

平常この顔振れが全員揃うことはないが、俳句や川柳の集団と互して月々の第一日曜は特別な事情がない限り集会を行なっているのがロンドリーナ歌会の現状である。

サンパウロ短歌会の現在

高橋よしみ 記

此処、一、二年サンパウロ歌会は稍、活気不足だと言われながらも毎回二〇名内外の出席者をもって歌会をひらいて居るし地方歌会との交流にも心がけて居る。

百号記念号が出版された一九六八年から七一年迄の確かな資料が入手出来なかったので詳かではないが、当時も「曲り角」に來た、「過渡期」だのと言われ乍ら結構盛んだった。その以前、先輩諸氏の情熱若かりし隆昌時代があり、幾度か盛衰の危機を言われ乍ら尚連綿とサンパウロ歌会の今日がある。その当時は四十名余の歌人が忘年歌会に顔を揃えて居り、月例歌会の出席率も良く活発な批評が交されて研鑽にも身が人って居たり細江仙子氏も滞伯中で、新鮮な刺戟も多分にあつた様に思われる。

一九六九年頃ピネイロス短歌研究会をサンパウロ歌会へ発展的移譲した当初は活気に充ちて居た。何時となく研究会が廃止され隔月歌会に移行して、一九七二年あたりから、一九七四、五年頃は、マンネリズム化した雰囲気におち入りつつあつた様子が見られる。忘年歌会の出席率も低下して居るが、例会歌会も低調になつて居る。二年毎に刊行された「サンパウロ断章」も一九七〇年六月に第五号が出たのを最後に何年来か中絶されたままになつて居る。この十年間、会員の交代も著しいが、会員が減少したわけではない。栄枯盛衰、時代の流れの何時の日にか、サンパウロ歌会も亦例外ではないかも知れないが、なんと云つてもサンパウロ歌会には四十年来の歌歴所有者が群居健在である。いざと言う時の人材には事欠かない底力がある。

一九七五年から生氣挽回の提唱があつて、毎月歌会に切り換えられている。

一九七六年四月には久方ぶりにオールトフロレスタールへ吟行を試み、岡本喜代子、多菊ふみの二幹事が氣運促進を計っている。

亦十月にはサンロッケの丘の家学園主の茅ノ根哲子女史から招待され幾年ぶりかで数名の旧歌人も参加、多勢出席して賑わって居る。

旧、新、相交わり切磋琢磨する歌席には師弟関係の窮屈害はない。

一九七〇年以來、サンパウロ歌人間に訪日旅行が頻繁に行われ、日本の情況や話題を豊富にもたらした。時折、日本からの訪伯歌人や、文芸人との接触も、少なからず良き刺戟と示唆になつて居る。

最近、歌会の衰退と将来を懸念した一部の会員達の発起で短歌研究会を再発足する事になった。一九七六年半ば頃より温めて居た案が、漸くこの七七年七月より実現される。ともすれば消えなんとする最後の一灯を守る様な悲壮な念いからである。

例会歌会、研究会と、隔月毎にひらかれる。旧ピネイロス研究会とは性格をやや異にする予定で、主に作者自身の作歌力増進を計るを目的とする。会は中堅の男性歌人が推進する。希望者は地方歌人、会員外を問わず入会、または傍聴出来る。同好の士の協力と応援をお願いし度い。往年の活気を取り戻すべく全会員張切つて居る現状である。

次にサンパウロ歌会に出席或は詠草を残した歌人名を記して記念とする。

一九七二年から一九七七年五月現在迄順不同。

安良田、弘中、岩佐、石塚、井本、陣内、木村、開沼、川原、角藤、河井、清谷、川上、水本、葦毛、村上、光田、須田、中江、

柴倉、城田、白石、富岡、徳尾、樋田（故）、田中、武本、多菊、高橋、岡本、小笠原、小野寺、末吉、植村、梅崎、内田、内川、遠藤浩、遠藤成子、藤田、古山、古本、古川、後藤、星野、浜田夫妻、細江、林、石代、楠木、加沢、加藤、川田、佐藤義男、佐藤博三、清水、塩沢、椎名、下田、坂、渋田、鈴木、田所、玉木、土屋、滝井、辰巳、尾崎、大城、丸山、丸林、森前田、上田、中井、夏木、中山、若杉、山岡、八幡、山下、内田信吉、小竹、上妻、水田、金井。

明治記念総合歌会

—ブラジル歌人の入選作品集—

明治記念総合歌会は、毎年、明治神宮参集殿において、春と秋の大祭ごとに催される。ブラジルからは一九六七年、徳尾溪舟、大場時夫の両名が該歌会委員を拝命するに及び、以後、多くのコロニア歌人が献詠するようになった。委員の献詠歌は別として、年次順に、入選、佳作（一）、佳作（二）、を列記する。

一九六七年（春）

佳作（一）

長 島 多 喜

日本語の柿をKAKIとしこの国の言葉の中に永久の位置占む

佳作（二）

有 田 市 治

黍畑の起伏の果に浮く雲が消えて巷に暮色ただよふ

〃

開 沼 貴 代

裏庭に熟るるゴヤバの樹に集ひしきり啼き交ふ小鳥らの声

〃

瀬 古 義 信

欲云へばやや日の丸の小さきを言ひつつ同胞らYS機見つむ

〃

田 中 都 南

繙きし週間誌読み果ててなほ飛機は大アマゾンの河越しきれず

〃

藤 木 義 夫

のどかなる河面にねむる群れ鰐の姿は消えて嵐近づく

〃

井之盛道信

秋晴れにココ椰子の葉子乾きよし女工の唄ははずみ持ちたり

一九六七年（秋）

入選

上村唯市

スコールに吹きあふられてアマゾンの青色青光山蝶の群

佳作（一）

田中都南

果てしなき起伏につづくコーヒーの樹海は霞む地の平らに

佳作（二）

梅山悟

ブラジル語遂に覚えず御母の柩は降さる異国の地に

〃

久米光春

山焼の余燧くすぶりいる沢に開拓小屋の棟を上げたり

〃

坂光男

うづ高くバナナの房を積むはしけ亜国汽船にはべり揺れつつ

〃

内藤力三

釣り舟がしずかに下るチエテ河樹海のかげを水に砕きつ

〃

直木新皇

子も妃も幸ひあれよ常夏の日を浴び給ふわれらと共に

〃

林田ゆきはる

家もなく家族もたえし老移民鯛売り歩く世界の果に

〃

本木彦兵衛

金髪の碧き瞳の外嫁が葛餅を搗きて吾をもてなす

〃

吉田金太郎

妃殿下に御声かけられ手を取られ一千料を出で来し老婆

一九六八年（秋）

佳作（二）

安部 栄子

明治生れの我等携へ移り来て苦闘の歴史を重ね老いたり

〃

上村 唯市

海越えて緑りの使節はるばると祖国訪い祝ふ明治百年

長島 和夫

はるかなる思ひの明治あかあかと永久にかはらぬ朝日にむかふ

一九六九年（春）

佳作（一）

蒔田 禎蔵

渡伯して苦勞のしるしありたりとわが珈琲の樹海見わたす

佳作（二）

西村 貞子

クワレズマ花むらさきは濃きままに散りしみて匂ふ上にまた散
る

一九六九年（秋）

入選

蒔田 禎蔵

積年の励みむなしくひと朝の霜に枯れたるカフエ眺むる

佳作（二）

関東 忠吉

未曾有のひでりにあへばチエテ河の底を見せたる褐色の岩

〃

久米川 照明

霜害に枯れたるコーヒー切り払ひ何時く移民か夢捨てきれず

〃

滝口 わか

霜害にパストの草も枯れ果てて肋の高き牛の目哀し

〃

中林 武衛

老父母の金婚を祝し羽田より子らがおくりし緋牡丹の花

〃

長島 和夫

差別なき国に住み古り草を植ゑ木を植ゑ四季のけじめたつ今

〃

森田吉久

農を継ぐ意志とてもなき二世の子は嫁とりてより都市に移りぬ

〃

森谷信夫

イペの花こぼるる父の墓に来て転耕はなほ決め難くをり

〃

吉沢芳文

幼な等の植ゑし木の実のほの白き芽立へそつと囲ひしてやる

一九七〇年（春）

入選

久米光春

パイネーラ咲く校庭にふるさとを偲びつつ運動会の白線を引く

佳作（二）

久米川照明

河ぞひの森中急にざわめきて猿の大群移りゆく見ゆ

〃

桜井正巳

念願を持つにもあらずいつしかに家古りたれば塗り替へむとす

〃

佐藤閑人

遠山の青さ日増に濃くなりて復活祭もま近になりぬ

〃

滝口わか

一世の吾れはとまどふ伯国のミナス温泉個室に鍵か

〃

野村芳子

なつかしき日本より来し白樺つぼみのままにつひぞひらかず

〃

丸木清太

灸点にも似たる瘦地の棉殻に祈るがごとく火をつけてゆく

〃

三瀬日呂志

牧草をふみわけ向ふ我家にも馬のいななきまた心地良し

〃

森重羊鈴

三世の孫が日本の歌唄ふブラジル生れの母に習ひて

〃

森田吉久

入植の日付をきざむ木も古りて大学へゆく子供を祝ふ

〃

森谷風男

その中の火焰樹赭き花つけて暫く降らぬ庭のひそけさ

〃

山口宏

人間の住居小さく抱かるる原始林に雨降る前の騒ぎす

一九七〇年(秋)

入選

久米川照明

今日よりは吾が所有となる原始林の木肌撫でつつ境界に佇つ

佳作(二)

川原比露思

西日遠く射しわたるとき匂ひたり乾燥場に珈琲の実は乾きつつ

〃

清 谷 勝 馬

ゴムの葉を滑る陽射しの強くして常夏の国の夏は来むかふ

〃

野 村 幸 正

道添に続くリツシヤの花明り鞭音高く牛追はれ行く

佳作(二)

井 上 ま す

白びかり咲く珈琲の花の海今日の茜の空と照り合ふ

〃

牛 尼 陽 子

我が知れる人あらぬかと新聞の日本だよりを丹念に読む

一九七一年(秋)

佳作(一)

木 谷 広 次

アバカテの大樹の洞の蜜蜂は雨に出入りの羽音しづまる

〃

森谷春男

たわむれて子等が投げ合ふマモーナの青葉乾季の道にまろべる

佳作(二)

吉田要一

懸念せし霜うすうすと過ぎたればまんの花いづちも白し

〃

大釜七蔵

老いづきし己が姿を省みて若木に実るカフエを採れり

〃

立筋智充

日の陰の移るまにまに置きかへて育てし鉢の蘭の花咲く

〃

脇坂一

限の青き嫁に父よとかしづかれ夜ごとに歌ふ葡語の讚美歌

一九七二年(春)

入選

木谷広次

インジョ棲み居たりと言へる森の中吾が子とパラナ松の実拾ふ

佳作(二)

瀬古義信

さむらいと命名されし日本のYS機翔けるブラジルの空

〃

滝口和歌

アマゾンの処女林毒蛇と闘ひて説得困難原始人との和

〃

長島多喜

ちちははのすでにいまさぬ故里の山川のみがまぼろしに顕つ

〃

森谷春男

保護局になじめずにゐるインジョ等がかくれ棲むとふ峽靄探し

一九七二年(秋)

入選

八巻たけ子

故里を訪ふこともなくブラジルに日本南瓜の種子を蒔く夫

佳作（二）

瀬古義信

日本語でジャンケンポンと声合はし多人種の子ら遊ぶブラジル

〃

中川原正子

日本の水兵も来たり独立祭祝ふサンバをひととき踊る

〃

脇坂一

パラグアイよりアルゼンチンにかかる大き虹朝の厨に妻となが
むる

佳作（二）

赤穂武

日本人かとまがふばかりのインヂオが今朝から珈琲もぎに来て
居り

〃

飯田義勝

倒産の決意定まるわが土地に都市計画の確かと聞きて

〃

野村 幸正

アンデスの雪解そそぎてアマゾンの流れふくらみ雨季おとろえ
ず

〃

吉田 格三郎

鼻緒ある草履笑ひし伯人が今日すらすらと履きて街ゆく

〃

森谷 春男

霜後の落葉を終えし明るさにイペー★樹は香にたちて萌ゆ

(140.jpg かすれ不明字★あり)

〃

山下 隆義

州道の橋渡り来る牛の群角の長きは鈴鳴しつ

一九七三年(春)

佳作(二)

森田 吉久

埃たて試運転する脱穀機夜空に大豆の殻を吹き上げて

一九七三年（秋）

佳作（二）

重川晶

母よりのモンペ着きたりうきうきと久方にはき偲ぶ故里

〃

長島多喜

ありなしの如き永住日本種の茶の実はここに蕾ほころぶ

〃

藤田朝寿

故郷の雪の季節の偲ぼるる灰一色に山は焼けたり

〃

宮下寿賀子

五時打てば一万の鶏かまびすし早く起きよと人呼ぶ如し

一九七四年（春）

佳作（二）

中川原実

暮れがての日光やさしき村道を乙女は駿馬にゆられて帰る

佳作（二）

梅 木 ミ サ ホ

事を眺め皺の深さをおもひけりはや半世紀ブテジルに生く

〃

粥 川 行 雄

コーヒーのいろづく秋の日暮時番のペーリキット高く飛び行く

〃

重 川 晶

荒れ果てし掠奪農のその跡に山小屋の如き蟻塚の見ゆ

〃

中 川 原 実

太陽と樹木織りなすアマゾンの土地を開きて胡椒蒔きつぐ

〃

平 野 佳 代

我が倅たしかむる如珈琲の乾場作りの煉瓦並ぶる

〃

藤 田 朝 寿

昔日の珈琲樹海は影もなく見渡すかぎり大豆植ゑたり

〃
三原洋樹

野菜売るバンカを組み待つしばし火焰樹の花降りつぐ下に

〃
八巻たけ子

日本のうすれし記憶たぐりつつ紫蘇に染みゆく茗荷漬けをり

一九七四年(秋)

佳作(二)

立沢節子

留学の決まりし吉娘に日本を語るすべ無し二世の母我

〃
蒔田禎蔵

カフェ採りやうやく終へし日曜日子牛屠りてコロノ犒らふ

〃
森田吉久

霜害をまぬがれ得たる珈琲の実りは赤し等高線に

〃
八巻耕七

日航機降りし総理は深々とブラジル国旗に頭垂れをり

一九七五年（春）

佳作（一）

野村芳子

夕焼けて一望の牧千頭の牛皆白し散りて草食む

〃

森田吉久

住み慣れしコロニヤの屋根おろしをり湖底となる珈琲園の中

佳作（二）

船田万平

南十字星煌く夜更ジャスミンの花むせぶがに匂ふわが庭

〃

堀田栄

蚕飼して作りし繭は糸となり日本に行くと聞けば楽しい

〃

武藤敏広

ささやかなれど我が家に祝ふ明治節外人嫁も来たり額づき

〃

森 元 ミヨ

朝廷にやもめかずらの花群が時々風に紫こぼす

一九七五年(秋)

入選

小 川 貴 美 枝

州越えて続く霜害のあと厳し芽ぐむきざしなきコーヒー樹海

佳作(一)

掘 石 明 雄

アバカテの若芽萌えたつ春の朝五アルケールの畠に棉蒔き始む

佳作(二)

久 米 光 春

一望の黒き起伏となり果てし霜害珈琲の樹海に佇てり

〃

重 川 房 子

黄緑旗たかくかかげて日系児独立祭の先頭をゆく

〃

瀬 古 義 信

霜枯れし青葉の空気吸ひながらコーヒー園の被害視察す

〃

船田万平

春めきてアマゾン河の水清く大魚の群が走り過ぎ行く

〃

堀田栄

九月七日独立記念日の行進に胸張りてわが孫も並べる

〃

宮崎多満江

夫の汗娘の汗同じ匂ひある上衣を春の陽にさらしあつ

一九七六年（春）

佳作（二）

梅木袈裟雄

老インディオ昼は滝下の小屋守り観光みやげの弓矢をつくる

〃

小川貴美枝

六十路近くポ語の夜学に肩こりぬサイレンに息づきながら背伸びす

〃

勝谷多喜

初産を異国に迎えし人に贈る友等集り赤き乳母車選る

〃

関東忠吉

洪水期閉じてすがしきあけぼのの空にまたたくすい星を見る

〃

上妻博彦

窓の下に蓬萌ゆれど草餅もたぶることなし移住りて久し

〃

後藤静

濃緑もうすき緑もひと色に染めて夕陽は今牧に落つ

〃

中川原正子

名指しされいくらか上気せし吾か答辞の伯語詰りがちなる

〃

本宮美智子

日本語ではいと答へてかけて来る三世の孫を愛しくだく

〃

森田吉久

コンパイン夜を通し大豆獲りゆけば起伏のはての町の灯あかし

〃

八巻耕土

訪日も果たせず老いて身まかりし父母の墓守り吾も老いゆく

一九七六年（秋）

佳作（一）

中西静世

トラックに運ばれてゆくコーヒー苗乾季の風に葉裏かへせり

佳作（二）

立沢節子

屋根ひくき小屋を連ねて住む土人部落訪ねし我等に寄り来る

〃

中川原正子

テトロンの布団を着れど美しき夢は生れず移民のわれに

〃

野村 コウ ショウ

霜害に飢えし野鳥は人里を恋ひ集りて庭を賑はす

〃

藤田 朝 寿

玻璃戸より冷えしんしんと伝わりてラジオは寒波北上を告ぐ

一九七七年（春）

入選

中川 原 実

幾起伏今を盛りに珈琲の二番花咲きて遠白く見ゆ

佳作（二）

大釜 七 蔵

各国の移民が集ひ豊年の祭りに大豆採集競技

〃

大西 宰 三

打ち鳴らす櫓太鼓に踊る輪の気負ひ騒めく邦人祭

〃

川原 比 露 思

郷愁をみたすが如き香とおもひ花満開のコーヒー園をゆく

〃

久米光春

笠戸丸の歴史も知らぬ幼らが移民まつりの山車にのりゆく

〃

立花操

はるばると海越えて来し同胞は此のブラジルに根を張りて伸ぶ

〃

森元三山

一万のシンビジュームに農魂を注ぎて山の高きに住めり

〃

八巻耕土

訪日の友に賜びし今上が在位記念の貨幣をろがむ

明治記念総合歌会は今回で五六回目にあたる。毎回四名の有名歌人選者によって入選作品をえらび、入選者にはそれぞれ記念品が贈呈される。

大場時夫 記

椰子樹を動かした人人

|| 地方歌壇の推進群 ||

中 江 克 巳

椰子樹の創設者、坂根嵯峨、椎本文也、阿部青杜、岩波菊治等
は言わずもがな椰子樹を運営して来た人々と云えば当然歴代の編
集者会計担当者に詠草選者、同人、誌友、諸委員を挙げる可きで
あろうが既に五十号や百号記念号に於て先達が創刊当時の様子を
各自の立場から述べているのでここでは省略したい。

地方歌人が流れ集った沖積地帯とも云う可き椰子樹中央部とサ
ン・パウロ短歌会との判然区別も出来ず両者は時として一身であ
り団体である場合もあり重複、混同と云う体質関係があり中央歌
壇の展望だけで膨大なものとなるので他の適当な人又は別の機会
に譲り、一步地方歌壇の消長に焦点を合せて見たいと思う。

創刊に参加しその後の推進力となった徳尾、武本、富吉、池田、
秋野愁等の四十年前の（一九三八年十月）タンキストも既に神格
化された感があり池田は鬼籍に入り富吉は奥地に隠遁し秋野愁も
作歌断念、徳尾、武本が未だに第一線に君臨新思潮の中に自説を
建て居る事は同慶の至りであり我々として又心強い限りである。

編集者として初代武本に次いで則近、吉本、川原、梅崎、米沢、
井本、清谷、安良田、高橋、水本、佐藤、梅崎、陣内等が時に単
独で又は二人、三人のスタッフを作り又、同一人が二回三回と編
集を担当し今日に至り、経理面に於ては初代徳尾を次いで中江、

弘中、梅崎、水本に継がれて現在は中江が二度目を担当している。詠草選者の分野に於ては遠く岩波に始まり武本、瀬崎、酒井、井本、行方、川原、中山、吉本、小笠原、陣内、弘中と時代の流れを表している。

各担当分野とも此の四十年間に大きな異動が無いと云う事は伯国歌壇にその人材が少いと云う事か、椰子樹の内閣とも云う可き中央部は当国の特殊事情（印刷、通信、送金の外総べての文化施設等）に依り勢い聖市中心と云う条件に制約される関係上どうしても人的資源を市内に求めなければならなかった。地方に於ける人材は必然的に外様の存在となり地方短歌の開拓に指導、中央との連絡折衝、監視、代弁者的な立場に在り直接運営にタッチする機会もなく今日に至っている。

先ず伯国短歌の発祥地ノロエステ線アリアンサ地方の往時から現在を見よう。

アリアンサ移住地開拓数年を経た頃、一九三二年に岩波菊治、木村圭石、声部、中沢等日本直来の実戦組を主体に「おかぼ」が創刊され産業移民の開拓生活の中に文化の灯をともし植民文学に先鞭をつけ植民地に於ける精神面への布陣が行われた。そして後進の発掘と指導に当り同好を集めた中に故樋田美沙子、同陽荘、行方、武本、中江と後世伯国歌壇の推進力を生み出し少し降って脇坂、光田、小野寺等を世に送ったが何れもそれぞれ移住地の変遷と共に移り戦後に於けるアリアンサ短歌会には見る可きものなく完全不毛の地と化しその昔の「おかぼ」も枯れ果て再生の氣息すら見えない現状である。移民の消長は即ち文化の興亡に通ずる

様である。現在僅に橋本、砂田の二会員を止める現状はまさに「夏草や武士どもの夢の跡」である。

早くから日系植民地帯を形成し連日会、日語校、スポーツ関係に於けるノロエステ線の中心地とみられたリンス、カフェランジア方面に來たり短歌分野に的を絞るに日系政治の台所パウルーを含めて椰子樹創刊以前に残る可き活動も記録も無くカフェーランジアに中山稠子が椰子樹に関係つけた事に依り彼を中心に若手天津夢城、安良田に加えてその早逝を惜まれた武田公平、一時滞留していた光田、リンスの光南極等と呼応し多羅間末藤、中村等に依り一時作歌活動、歌論等に盛上りを見せたが中山の帰日、武田逝き安良田の再出聖、光田の帰村相續きリンスの光、カ市の天津間も疎遠となり遂に燎原の火と燃える事はなかった。

一九三七年頃パウルーに国民文学系の小田切劍が在り孤軍良く実作活動をし全伯にその存在を識られたが普及面に於て見る可きものなく初期椰子樹同人であつたが戦後は早くから椰子樹を離れて行つた。

其の昔アルト・カフェーザールと呼ばれカフェー、棉花の中心地マリリアを始めパウリスタ延長線は日系地図かち見ると各地に文化団体を有しながら割合に短歌の育たない地帯である。一九三七年阿部青杜を中心に「燎原」の発行に荒木、開沼、安部、河村等が心血を注ぎ青春の情熱を詠んだ時代もあつたが阿部の出聖について開拓地の常として移転が相次ぎ孤城を守る者なく今日に及んでいる。此の地方からはその後大原が出たが彼も出聖し一九五三年「木棉の花」の刊行に協力しこれを一つのピリオドとして歌

界から野球評論に将棋、ラジオに去り田辺も俳句、随筆に固定し言語芸術の厳しさを語っている。

神代時代とも云えるアルトカフェーザル当時に所謂聖報歌人として山本孤愁、今本義美、荒木八雲、今井白鷗、金子秀雄等何れも今は神域に在る先達が有った事は忘れる事の出来ない一つであるが惜むらくは後継者養成の念に欠けていた事と今にして恨むものである。

パウリスタ延長線の一産業都市オ・クルースに一時酒井の指導とバストスより宮武の出張に依り加藤春芳園の肝煎りでふじきよ、千鶴子、まりえ等に依る小結社を創った時代（一九六一年）もあつたが一応水準に達していた梶田の移転に続き「椰子樹二百号に至る頃には少しは世に知られた歌人を送り出す事有らん」との悲願もむなしく僅かに志伊良が現在孤墨を守って居る事も淋しき限りである。その他アダマンテーナに横山、ポンペイアに西村（丘ひろえ）が在ったが何れも随筆に転業した。

移民の古里、バストスには戦前開沼、西田と共に伯国女流三羽鳥と謳われた一人葛西妙子が特異な心境を新聞歌壇に発表していたが一九五五年聖市に去った。次いで開拓者東野暁風が奥ソロに去り後に残された森重羊鈴、扶美夫妻の維持、推進を授けて宮武加わり一時は華々しい時代を作ったが東野が去った後相次いで移動が起り森重の清教徒的な信念も世の移りには抗し切れないものがあつた。新進を期待された渡部がマ州に去り大御所的存在であつた吹本聖市に、次いで角藤又去り浅田、山本作歌を捨てやがて宮武も作歌放棄遂に生来の歌人土井、扶美につづいて信太を残

す現状である。歌会も一九六七年に全伯各地短歌会に魁て二百回を数えたがその後の動静は香しからず、只此の歌会の特徴として宮中詠進歌会の観があった。小松、山本信太と詠進歌人を記録に残す事が出来た事は「移民の古里」としての面子を物語る一つであろう。

文化植民地として中ソロ地方に一時栄えたパラグアスーに渡部南仙子を中心に「白日」の創刊を見たのが遠く一九三七年であり中須夏山、西山陽都等に依る文芸誌中心に若き日の情熱を棉花と共に咲かせた時代が有ったが短歌分野に於て記憶に残るものが無かった様だ。

奥ソロの雄都プレシデンテは一九四七年長島可山(後の南条由紀夫)の主導に依り別府、竹井、茅里、久和子、直木等に依り早くから地盤は造られていた様である。バストスから東野の転出に依り奥ソロ短歌大会を機として且つては椰子樹創刊の一員であった富吉好人、南仙子等と呼応し多くの歌人を集め又育てた。戦後一早く肉体短歌を発表した別府二郎に若手直木新等燃えた時代があった。東野は足で稼ぐ型、可山は内攻型として常に二人の思考は相反し乍ら共に実作者として奥ソロに短歌王国を造った功は椰子樹史上に記念されるものがある。早く三浦先ず聖市に去り富吉、茅里作歌より遠去かり一卷の歌集を残して惜くも暁風天界に去り可山も遂に鬼籍に入り残る者なく現在は僅に後藤静のドラセーナに去った後東野未亡人とサントスより何年振りかで帰り住む古川白穂の女流二人のみとは今昔の憾深きものあり、又一地方の短歌会の興亡に一人の歌人の働きが如何に影響あるかを夢の跡に佇ち

沁みじみと憶うものである。

何時の時代に於ても、開拓の斧鉞は地力を求めて移り行く事は植民の原理であるとすれば州境を越えて北パラナの原始林に挑む事も当然の理であろう。日系最大の植民地の一つアサイに文化の風が吹く事もこれ亦自然の事であろう。

戦前一九四一年真木研一、晶山充、波沫正夫、西灘撰津夫等に依りて「ユーカーリ」と云う小集団を創り短歌育生の下地を作っていた所に戦時中一時疎開の古野菊生、武本由夫に依って肥培が行われた。その後兩人は聖市に去り一九五二年真木夫妻南パラナに移り米沢、羽山相次いで聖市に去り残された晶山（後の山室新太郎）「荒れ果てたアサイ歌界に自信のない顔で……」と当時の心境を述懐し一粒の麦の蒔きなおしをしその育生に全力を傾けたがその彼もやがて南聖の故郷に去り新鋭を期待された北原も井上も作歌活動から脱け田上又口市に移り戦前組の波沫、西灘もやがて行き、残された笹波北陽を頼りに穂島、大野、若生らに依り在りし日の面目維持に努めている。

一九五三年「南回帰線」を、一九六七年に「パラナ松」の一卷を世に贈り且つての華やかさを永久に史上に止めた事はせめても鎮魂歌とも云えよう。

当歌会の異彩として全伯にその類を見ない「ゆりかご」後の「朝日短歌」があり少年短歌の培養に残生の情熱を傾けた晶山穂島のヴィゾンと信念には敬意を表す可き大きな事業とも云える。又米沢、小笠原の椰子樹選者級を生んだ事もこの白銀の里に於ける綿花と共に大きな収穫の一つであろう。

北パラナに於ける雄都、日系産業文化の中心地としてクローズアップして来たロンドリーナに短歌の芽がオーロ・ベルデの風にゆれる様になったのは何時頃からであろうか、大体アサイ歌会衰退期頃からはなかったか。やや遅れた感がある。その昔西山、渋川、小坂の古武士が居た事があるが短歌には余り熱が入らなかった様である。戦後、俳句から転向した大場時夫が此の都に着し持ち前の普及性を發揮し鎮台的地位を築き今日の北巴王国を創った。大場の提唱に和し来たるもの長谷川銀作調歌人といわれた坂本清人（現在は作歌放棄）に歌会の書記長格の井之盛も既に亡く新進を期待された有田市治も早く逝き住吉豊又去り大久保彦左衛門格の森谷風男を良き参謀役とし集る者神宮歌人の森田、中川原に既成歌人の域に達した久米、岩波受賞歌人の春男と文字通り新進鋭の歌人を擁する所全国唯一ではなからうか、又この歌会位多くの歌人を養成しては他に移出した所も稀れであろう。アサイと共に「北巴文芸懇話会」の木部的地位に在り今なお、正子、荒崎、土台に最近意慾的な中西等に加えて最近海浜から上りて来た坂光男の参加は大きな強味であろう。漸く多くの現役を持駒とする所に見当のつかない将来性を蔵しているのが当歌会である。

又ロンドリーナの変っている所は椰子樹会員以外の歌人多く日本「林間」誌との交流に努めている事である。

他に口市周辺に声崎清作ありたるも惜しく今は亡し。セルタネージャの藤田美砂子海浜に去り久米川又首都に移り僅にノーバ・エス・ペランサに並木野の人が健在、大会歌人の称未だ衰えず彼は又栄光花の名をもって全伯川柳振興に君臨するあたり異色の

一人である。その昔の島田普その後の消息を知らず。

西パラナ、アッシースにそのかみの脇坂がノロニステより移り住み近年は「歩道」に「アララギ」に精力を傾けどうした事か椰子樹には欠詠中である。好漢往年の力作と筆陣を以って椰子樹本丸への斬込みを乞う。

南パラナ、最近巴州に於ける日系中心地の観めるクリチーバ市は日系進出企業の設営と共に学生の都として大寫しに時代の脚光を浴びて来た。同地には北巴から定住の居を構え果樹研究に詩話会に生来の探究慾に精魂を傾け作歌に対する意欲喪失症に悩む本庄研一が居る（前の真木）。彼は実作と云うより歌評陣の人、又随筆紀行文に於ける健筆未だ衰えず筆を取っては第一の人か。

オ・クルースから移った梶田きよの作品も永く見ずその健在も不明、港に降りては藤田美砂子定着今尚実作衰えず、本庄と共に南巴に於ける貴重な存在である。

先年の降霜に依りそれまでカフェー主体であった北巴産業革命以来首都周辺の活発化に依り一大日系集団地帯を形成しつつある昨今移住者の集る所日本固有の言語芸術の浸透も近く南パラナに三十一文字の金字塔の建つ日を希うものである。

中央線に目を転ずると先ず山上の町、カンボス・ド・ジヨルドを一瞥の要がある。伯国歌壇の姉御安部栄子が彼の山腹に定住し療養短歌と謳れたサナトリオを中心に酒井繁一の指導に依り多くの新進歌人を養成した。作歌に依る人間再発見を説き病苦と人生的な悩みを制作と云う精神に依る克服を教えたが惜しく多くの天逝歌人を出した。正木、中田、奥村、本田、高田等何れも同

人級大会高点歌作者の生命の総べてを制作に燃焼したかの感があつた。これら多くの先歿歌人の霊に対して現存者は襟を正し自己再認識に努めよう。これと前後して一九五三年酒井の主導に依り「静芽」と伝う小集団があつたが療養者が主体である関係上常に移動が激しかった。佐藤一英、みつ子、上原知水、高原万里、奥野精一、春名宏文の歌友が永い闘病に勝ちぬき山上に定住辛苦二十年「やまなみ」の結晶に全員協力今日に至っている事も珍らしいケースの一つである。又このグループの中には病衣を捨て山を下った同志もある、細川、戸崎、村手、加藤、原田、古荘等の健在を祝すと共に山上に短歌の灯を点し後進を育てた酒井の功を忘れる事は出来ない。安部、佐藤を中心にこの灯何時までもと念ずるのである。一時参加して気を吐いたピンダの坪田は最近沈黙を守り又老練桜井健三その後憩の園に去り今尚秀作発表は頼母しき限りである。

このグループの特色の一つに交歓歌会の先鞭をつけた事も伯国歌壇に取り一つの収穫とも云えよう。又歌会回数二百四十数回と云う記録も全国随一ではなからうか。

リオ方面に転ずると椰子樹生みの親の一人である椎木文也(当時正金銀行支店長)の地盤であるが第二次世界大戦に依り日本に引揚げて以来遂に後続者を見なかつた。唯一人簀戸勝子の孤軍精進は何時頃からであつたか、やがてモジから片岡けい子の移転、ピンダから伶俐な理論の展開については他の追従を許さなかつた新納潤魚が移り住み石橋てる子の参加で単なる観光都市リオに日本古来の短詩文芸の開花、詩話会の開設と云つた矢先きに新納の

不慮の死に依って総べては頓座した事は返えすがえすも情しき事であった。リオは現在聖市同様戦後日本商社の進出激しくこれらの駐在員間への普及浸透は出来ないものか糸口を見つける事が先決ではなからうか。

中央線と云うよりもお膝元スザノには古くから福博植民地を中心に上村登志行、長友安徳が有り中央と呼応し農村歌人として識られていた。不幸兩人共早逝したが一九五三年「若原」と云うスザノ短歌会第二十一回記念誌を発行しその業績を永く記念している。実作面に於て未だ衰えを見せず伯国歌壇のトップにある老練川原比露思もこの歌会出身であるが、何んと云つてもスザノ短歌会を今日にあらしめたのは酒井のバックアップにも依る事ながら八巻の出現である。その名前の示す如く野地に芽生えたタンカの耕作を忘れなかった一人である。一匹狼の彼の号令下に三十名に近い歌人を糾合し毎月例会を司会する執念と云うか熱意は伯国歌壇に於ける異彩である。正に活火山の感あり、彼を援けて大西、山崎、滝、賀沢、小野、青柳夫妻、藤田、堀石、西森、篠田、汀石、たけ子の実作者を揃え天王山を望むあたり優雅を誇る歌のイメージは何所にもない。只激しい闘志を感じる計りである。

これに反して伯国歌の始祖岩波菊治を迎えたモジには戦中の空白を埋めた「林泉」を中心に吉野菊生、則近正義、武本等の実戦派に依り一時は短歌のメッカの地と謳われたエポカが有ったが星移り昨今は栄枯盛衰の理の如くお株を隣のスザノに奪われた格好である。此の里には古くから田辺あり歌壇の重鎮瀬峰涛声の来植、新鋭を期待された伊藤次郎早く逝き、後を追うがに大会歌人

大島進も斃れ、巧緻な作風で一派をなした上野紅葉も又逝き古野、武本相前後して聖市に去り若手編集者として新規を画した則近もやがて歌を捨て後を受けてメツカの地モジ歌会を支えた海の歌人吉本青夢もイタペチの山を望み同地に永眠、残された小竹清子の双肩は重かった。同地には古くから竹林葛原等が居たが実作面に於ける活動がなかった。実作者片岡けい子リオに移り平松霞も作歌断念、マリリアから移り来た聖報歌人河村哉太郎も隠退を決め中村たえ又詩神から見放された昨今僅かに椎野、小竹、内川が古城を守って居る現状である。

歌界探訪も南聖に至れば海の歌人として一代を短歌の鬼として伯国短歌の水準引上げに全精力を傾けた吉本青夢が末だ青年歌人時代に奥地よりイタニヤエンに居を構え折からカタンズーバより短歌一族と云われた中井小鴨が鉄夫、芙蓉を携えて移り来たり古くから南聖に在った越村定雄父娘に二世歌人の称あつた阿部パウロ外坂光男兄弟井出ひろむ等と相語らい南聖短歌を設けたがその中に青夢モジに移り越村聖市に、中井一族も亦、斯くて海浜歌会も自然消滅残された坂光男が移転先のサントスに歌会を設けた。当地には古くから鈴木里子在り移民上陸の地を守っていたが商銀マンの遠藤夫妻の赴任と同じく大城俊子の出現は(何れも戦後移住者)サントス歌会に機運到来奥ソロから移転して来た古参古川白穂の参加、地元に於ける練達の土屋哲子等馳せ集り奥地事情と異り海浜歌壇としての特異な現地の開拓に当り二人の新泉集歌人を送り出した事は大きな収穫であつたが坂光男やがて奥地に去り古川又故郷の地奥ソロに戻るも楠木、山下等と共に遠藤、大城の

コンビネーションに依り名門サントス歌会を育てる両者の責任も大きいし、またこの歌会の若手下田学に期待する所大きいと思う。この若きエネルギーを如何に導いて行くか歌会に課せられた懸案の一つであろう。此の歌会の特徴と云えることに聖市中央部との交流がある。

同じく戦後の人で岩淵史津も歌境進展を見せたが積極的なアポイもないまま聖市に去り最近では作歌のジレンマか戦後移住者のスツキリしたスタイルを発表しなくなって久しい。

移民の発祥地モジアナ地方には短歌は育たない不毛の地であると言ふジंकスを破ったのがグワイーラに加藤操である。同地方には古くからカタンズーバに田中八重、中井一族があり戦中から戦後にかけて椰子樹創立同人秋野愁が疎開していた時機もあり早くから横山耕人、紅月伯舟、高林明雄等歌壇のベテラン級が群雄割拠の型であったが連絡不十分からか記録に残るものなかつた。不毛の地も灌漑と云う近代農法により緑地と化す如く山から降りて来た加藤が酒井のバックアップに依り歌会結成に情熱を傾けた。集る者、かつてサンパウロ歌人との交流あつた八幡与三を始め中川荒記の書記長的協力を得て緑地帯造成に成功した。早くからスザノ、カンポス等との流交歌会を開き唐沢弘直、佐藤義夫、斎藤武雄等の実戦組に依る一丸短歌前進は奥地文化キャンペンの一翼の観あり。

移民と云う蒼茫の民の移り変りは植民社会の常、移民宿命の谷間に在って近隣の北谷まがた夫妻、岡野でん、高野愛子らと緊密なる連絡交流のもとに創立一九六四年以来今日の王道楽土を築い

た労は多とす可きであろう。

当歌会を語るに故杉本千代を忘れる事は出来ない。枯れんとする移民草の中に六十の手習いとして初めた短歌に生命をかけ生きる喜びを識り歌集二冊を残して逝った一事はそのまま移民小説の一頁である。「碁敵や憎さも憎し懐しや」的ムードをこの歌会に感ずるのは矢張り集る人々の人柄に依るものであろうか或は土地柄か。

一度は捨て去りた移民共の苦難の地モジアナに時移り星変り新産業の波に乗り再定着が始まり短詩型文化の苗を持ち来り育てるのが現在のグワイーラである。

其他の地域に特異な歌材を持って孤り精進に飽く事なく歩んでいる歌人も多く散在しているが一応この辺りでピリオドをつけたい。

ここに挙げた大半は遠い記憶を頼りに綴ったもので或いは事実との相違が相当にあると思うが、それらは機会を得て訂正したいと念ずる次第である。当事者又は関係者に依つて是正頂ければ幸いと思う。今から四十年前の創刊当時、同人費二ミルC R \$ 誌友費一ミルC R \$ に加えて毎号、坂根、嗟峨と椎本文也の百ミルC R \$ 宛の補助が無かったら我が椰子樹も三号雑誌で終っていたであらう……。と池田重二が述懐していた事も思い合せて今日のインフレーション攻勢の如何に怖る可きかを案ずる計りである。

椰子樹会員地方分布図

―一九七七年七月現在―

◇サンパウロ州

- バストス― 三
- カンピーナス 二
- カ・ポニート 三
- カフェーランジア 二
- カンポス 五
- ジアデーマ 二
- ドラセーナ 二
- フェラース 四
- ダワイーラ 九
- グワラー 三
- グワル―リヨス 二
- リンス 五
- モジ 八
- ミランドポリス 二
- マイリンケ 二
- プルデンテ 二
- サン・ミグール 三
- サンロツケ 四

サン・ベルナルド 三

サンジョゼ・カンポス 二

サントス 七

スザノ 二六

ヴ・グランデ 二

聖市 七一

其他散在会員 一五

◇パラ州 ベレン 三

◇パラナ州

アサイ 四

バンデイランテス 二

ロンドリーナ 九

其他散在会員 一二

◇リオ州 四

◇南大河州 二

◇ミナス州 一

◇マツト・グロツソ州 一

◇アルゼンチーナ 二

◇日本 二

あとがき

一五〇号記念特集別冊号をみなさんの手許にお届けします。別冊記念号は、さきの五〇号、及び一〇〇号と共にこれで三冊目を数えます。

編集部としては、多く支援を戴いたみなさんの厚意にお応えするためにも、特集号にふさわしい内容にしたいと、公平な立場から資料の蒐集に努めたのでありますが、企画決定から発行までの期日が短く、万全を期したつもりでも、調査もれ、または、執筆依頼などについての片手おちの点があったと思います。お互いに本業をもつかたわらの事として、平にご寛容を願います。

最初のプランは費用の都合上、内容を一〇〇ページから一二〇ページに組んでいたのですが、予想外に多くの方々の賛同協力を得たことから、途中で予定変更となり、ごらんのような大冊になりました。

記念別冊号のもつ使命は、一〇一号から一五〇号までの、歴史的展望と、その記録性に重点をおきました。執筆陣はコロナ歌壇のトップクラスであり、完璧にちかいものと言えましょう。大方の味読に堪え、また、机辺の友として役立つものと信じます。

最近のコロナ歌壇は、かつての喧騒な胎動期も過ぎ、一つのマイノリティの時期にさしかかっているように思われます。それぞれの差異はあるとしても、歌壇の充実、レベルの向上、毎号の椰子樹をかざる数多い秀歌の展開や、相次ぐ個人歌集の出版など

に、その例をあげることができます。

後続部隊のつづかないコロニア歌壇はいずれジリ貧に陥ると言われてから久しい。しかし、こうした杞憂をよ所に現在ほど短歌を求める声を聞いたことがあったでしょうか。理由はともあれ、お互いに本質的な立場から内在する可能性を探り明日の歌壇への糧としたいものです。

ポインセチアやスイナンのどぎつい朱色の傍で、去年カンポスの佐藤一英兄から分けてもらったユスラウメが、今を盛りに咲いている。その美しい淡紅色を見ると、東洋的な、ワビ、サビ、の心に触れる思いが、ノスタルジアのように湧いてくる今日この頃です。

米沢幹夫

註Ⅱ編集後、若干の歌稿を受け取りましたが、いずれも印刷に間に合わず、掲載できなかつたことをお詫びします。

一九七七年一〇月 印刷発行

椰子樹一五〇号記念

別冊 特集号

発行所 椰子樹社

聖市セナドール・フェジヨ街

三〇番九階Ⅱ九〇五号室

電話 三二・四七一九

印刷所

パウリスタ美術印刷株式会社

聖市オスカール・シントラ・ゴルジンニヨ街四六番